
涼宮ハルヒの再構成

月夜 海人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの再構成

【Nコード】

N4787L

【作者名】

月夜 海人

【あらすじ】

ハルヒの力でキョンは一年前に飛ばされてしまう。
しかし、時間が戻っただけじゃなかった。

憂鬱編終了しました。
退屈編終了しました。
溜息編終了しました。
消失編終了しました。

プロローグ（前書き）

初めまして、海人《かいと》と言います。大学生です。
ネームの由来はアルバムで見た名前候補の中にあった一つを借りました。

初めての投稿なので読み辛い点や、おかしい表現が有ると思いますが
ご了承ください。

感想もらえると嬉しいです。

では、涼宮ハルヒの再構成。お楽しみください

プロローグ

サンタクロースをいつまで信じていたかなんてことは・・・
と言うのは俺が北高の入学式の時に考えていたことだ。

何故再び俺がこんな事を考えているのかと言うと、
どうしてだか知らんが（まあハルヒのせいだろうが）世界が
一年前の春、つまり入学式の日に戻っているからである。

おそらく原因は昨日SOS団の部室でハルヒとこんな話をしたか
らだろう。

・
・
・
・
・

「ねえ、キヨン」

部室に入るといきなりハルヒが話しかけてきた。
いつも通りのことだ。

「一年前のこと憶えてる？」

あたし達の入学式のこと」

どうしてそんなこと聞くんだ？

「ほら、今日新一年生の入学式があったでしょ。
それを見てふと思ったのよ。で、どうなの？」

「・・・あまり憶えてないな。
そう言うお前はどうかんだ」

「あたしもたいして憶えてないのよね〜。
これってなんだか損してると思わない？」

そう言っただけでもう過ぎたことだ。

今更遅い。

「そうなのよね〜」

ハルヒは口をアヒルのようにしている。

と思ったら今度はいきなり何かを閃いた様な顔をして

「面白いこと思いついた！」

と言った。

こいつの面白いこととは大抵碌なことではないのだが、
一様聞いておこう。

「何を思いついたんだ？」

「最近読んだ二次創作に再構成って物があったのよ。
それみたいにみんなの性格と立場が変わった状態でまた
去年の入学式からやり直すってどお！」

・・・確かにそれは面白そうなのだが、お前が思ったら現実の物
に成るからな。

そんなこと本当にやってくれるなよ。

俺は上機嫌なハルヒを見ながらそんなことをまだ見ぬ神に祈った。

・

・
・

・
・
・
・
・
・

だが、そんな俺の祈り虚しく
ハルヒの願望は実現してしまった。
少なくとも一年前に戻るって事はな。

よって俺は人生二度目となる北高の入学式に出席するため
この長い上り坂を上っている。

プロローグ（後書き）

この小説を読んでくれてありがとうございます。
作者は大学生なので投稿のペースは遅いと思います。

次回は本格的にキョンが動き始めます。
長門はもう少し待ってください。

憂鬱編 第一章 前編（前書き）

ハルと出るよゝ

では、どうぞ

憂鬱編 第一章 前編

これから俺はどう動けばいいのか考えているうちに入学式が終了し、

また顔を合わせることに成ったクラスメイト達と教室に入った。

後は去年経験した通りに担任教師岡部が自己紹介した後、個人の自己紹介をする事になった。

俺の番が終わった後、次のハルヒがした自己紹介で忘れていたこの世界の前提を思い出した。

ハルヒが願ったのは世界の再構成、つまり性格や立場が変わるって事だ。

そしてこいつも例外ではなかった。

「ひ、東中出身の・・・えと、す、涼宮ハルヒです。
好きなことは、あの・・・不思議な事、です。
よ、よろしく、お願い、しま、す・・・」

この自己紹介を聞いたとき思わず後ろを振り返ってしまった。

あのハルヒがこんなにオドオドしているなんて信じられなかったかな。

後ろにるのは涼宮ハルヒで間違いないだろう。

一年前と12月に見た長い髪型をしていたからだ。

しかし性格が変わっているらしくすごく内気だ。

正直言うとかかなり可愛い。これがあのハルヒだとはとても思えない。

話し終わったら顔を赤くし俯いて座ってしまった。

ハルヒがこれだけ変わってるんだ、他のSOS団員も変わっているだろう。

とりあえずここは再構成の世界だからな、記憶にあるようにやってくか。

そしてゴールデンウィークが明け一日目が来た。

うちの妹や谷口、国木田などは変わったところが無いから、影響を受けたのはおそらく団員だけだろう。他にもいるかもしれないが。

ちなみに朝倉がいた。

あいつがヒューマノイドインターフェイスかどうかは後で長門に聞こう。

とりあえず今日から元の世界に戻るために動こうかと思う。
ひとまずは去年と同じ事をすることにした。

「よう、おはようさん」

朝、席にいたハルヒに声をかける。

「ふえ！えっと、あの、お、おはよう／＼／」

動揺しすぎだ。

こいつは前みたいに不機嫌な表情をしてはいないのだが、

かなり人見知りをするらしくあまり人と話しているところを見ない。ハルヒから話しかけようとしてはいるのだが、結局あきらめている。

さて、どんな話題で話しかけようか。
などと悩んでいると、

「あ、あのー

あなたと、ど、どこかで会いましたか？えと、ずっと前にですけど」

なんて聞いてきた。

おそらくジョン・スミスのことだろうな。まあ、それも俺だが。

「ああ、多分そうかもな」

「え！そ、それって・・・」

ここで担任岡部が入ってきた。

これでこいつと話す切っ掛けは出来たな。
頑張ってみるか。

憂鬱編 第一章 前編（後書き）

どうも海人です。

とりあえずハルヒはあんな風になりました。

そしてキヨンも本人が気づかない程度に性格が変わっています。

次も見てくださいると嬉しいです。

第一章 後編（前書き）

後編です

第一章 後編

あの会話から前回同様、朝にハルヒと会話することが日課になった。

話の内容は去年とあまり変えていないんだがな。

ハルヒには俺が無理言って『キヨン』と呼ばせている。こいつにはこう呼んでもらわないと違和感があるからな。

俺も『涼宮』と呼んでいたのを『ハルヒ』に変えた。やっぱりこっちの方が呼びやすい。

そういえば、そんな時は面白かったな。

・
・
・
・
・

「なあ、涼宮」

「なに？」

「俺のこと『キヨン』で良いぞ」

「ふえ！・・・えっと、いい、の？」

「ああ、かまわない。」

その代わり俺はお前のこと『ハルヒ』って呼ぶからな」

「ふえええ！／＼／いや、あの、その、ううう／＼／」

「・・・そんなに嫌だったか」

結構傷つくな。

「いやっ、えっと、そ、そうじゃなくて、その・・・
す、少し驚いただけと言うか、何というか／＼／」

「少しじゃなくて、かなりじゃないのか？」

「ううう／＼／・・・わ、わかった、それじゃあ・・・
き、キョン、君？／＼／」

うわ・・・すげえ破壊力。

もうこっちのハルヒで良いような気がしてきた。

「キョン君？」

「い、いや、何でもない。

まあそんな感じで頼むハルヒ」

「／＼／う、うん！／＼／」

・
・
・
・
・
・
・
・

俺この世界にずっと居ようかな。
ハルヒ可愛いし。

「お前って髪型変えないのか？」

ある日の朝俺はハルヒにこう言った。
髪型を七変化させろとは言わないが、見るたびロングだからな。
俺としてはポニーテールにして欲しいが。

「・・・・・・・・ポニーかぁ」

次の日、ハルヒは髪型をポニーテールにしていた。
もしかして俺の呟きが聞こえてたのか？

「ど、どうかな、キョン君／＼／」

「ああ、かなり似合ってるぞ。
やっぱりハルヒは元が良いからな」

「／／／あ、ありがとう／／／」

この世界のハルヒはこの髪型を基準にさせよう。
これは元の世界と区別するためであって決して俺の私欲じゃないぞ。
ああ、きつとそうに違いない。

そろそろあの話題を出すか。

「なあ、部活はどこに入るんだ」

「えっと、まだ決めてないかな。
キョン君は決めたの？」

「いや、俺もまだだな。
面白そうなどこ無かったし」

このハルヒは俺が切っ掛けを作ってもSOS団を立ち上げる事は無いだろう。

だから俺がSOS団の団長になる。この世界での立ち位置はおそらくそれだから。
もしかして俺も性格が変わったのかもな。こんな事をするなんて。

「でさ、俺はこう考えたんだ
無いなら自ら作れば良いってな」

「え、新しいクラブを作るの？」

「ああそうだ。
だからハルヒ、お前も協力してくれないか」

「きよ、協力って何をするの？」

「とりあえず、俺が作る部活の部員になってくれ」

「えっと、それくらいだったら。
わたしもキョン君の作るクラブに入りたいし／／／」

「本当か！ありがとう。」

が。

じゃあ、ついでに昼休みにでも良いから書類書いて欲しいんだ

頼めるか？」

「うん、いいよ。」

あれ？キヨン君はその間何するの？」

もちろんそんなこと決まってるだろ。

部活を作る上で重要なことをしに行く。

何をするのかと言うと、

「部室に使えるそうな部屋を探してくる」

ってことだ。

「それじゃハルヒ、よろしく頼むぜ」

「ま、まかえて！」

よし、やるか。

第一章 後編（後書き）

キョン（以後キ）「やっと一章が終わったな。」

「しかし端折りすぎだろ、いろいろと」

ハルヒ（以後ハ）「き、キョン君。後書きに出てきたんだから挨拶しないと」

キ「そうだな。」

「今回もこの小説を読んでもらいありがとうございます」

ハ「えっと、か、感想を貰えるとても嬉しいです。あの、お、お願いします」

キ「ところで次はどうなるんだ」

海人（以後海）「ん？ああ、次はなすごく出したかったキャラが出てくる」

ハ「へーそうなんだ」

海「ああ、このキャラは話を考え始めた時に真っ先に頭に浮かんだ。だから楽しみにしているキョン」

キ「・・・まあ、そうしよう」

海「と言う訳でこれからも」

海・キ・ハ「」「よろしくお願いします！」「」

第二章 前篇（前書き）

海「ついにあの人が出てきます」

キ「あいつか」

海・キ「では、どうぞ」

第二章 前篇

俺は今文芸部の部室前にいる。

しかし中に入れないでいた。その理由は、

「長門になんて言えば良いんだ」

まあ、あいつは案外巻き込まれていないかもしれない。
とりあえず中に入ってみるか。

「邪魔するぞ」

扉を開けたらそこにはまだSOS団の物がない、
殺風景な部室だった。

そしてパイプ椅子に座って、読んでいた本を閉じ、
驚いた表情でこちらを見ている、眼鏡を掛けた長門の姿があった。

「よ、よう。ちょっといいか？」

浮かべている表情がハッキリと解るから
こいつも性格が変わっているんだろう。おそらく。

なら、やはり俺だけで頑張らないといけないかもな。
いや、いっそのこと長門に事情を話して協力してもらうか？
だが俺はこっちの世界も結構気に入ってる。つまり、今はまだ決め
られないな。
とりあえず今はこれだ。

「俺が新しく作る部活の部室としてこの部屋を貸してくれないか？」

・・・自分で言っというてなんだがこんな頼み方で貸してくれる奴なんて、

「良いよ☆」

いた!?

長門は笑顔で返事してくれた。
やばい、ハルヒに続きこっちの長門もすげえ可愛い。

「つて、そうじゃなくて!

本当にここを貸してもらって良いのか?」

「いいって言ってるじゃん☆!

あつ、その代り君の作る部活に入れてよ。ダメ?」

あ、いやっ、むしろこれから部員になってくれないか頼むところだったから

こちらとしては嬉しいんだが。

「よし!なら、こゝしよゝせいりつだね!

あっそうだそうだ、わたしは一年六組の長門有希!通称ユキリン!!

気軽にユキリンって呼んでね♪」

ユキリンは遠慮しておこう。

「おれは一年五組の・・・」

クラスの時もそうだったが自分の知っている相手に改めて自己紹介するってのも変な感じがするな。

「そっかぁ。それじゃ、わたしも『キヨン君』って呼ぶよ〜♪」

・・・長門、お前まで『キヨン』を使うのか。

「・・・ダメだった？／＼／＼」

う、その上目づかいをやめてくれ。理性が持ちそうにない。

「はぁ、わかった。『キヨン』で良いぞ」

「っ！ホント！？やった〜！！」

そんなに喜ぶことか？

まあ可愛いから良いのだが。

「ねえねえキヨン君、部員って後誰がいるの？」

「ああ、俺と、お前と、あと一人同じクラスの涼宮ハルヒって奴だ」

「・・・涼宮ハルヒ」

長門がすごく真面目な顔で何か考え込んでいる。
やはりハルヒはこの世界でも自立進化の可能性なんだろうか。

「放課後ここにハルヒを連れてくるから待っててくれ」

「・・・うん。わかったよ☆
なるべく早く来てね！」

「ああ」

それじゃ教室に戻るか。

っと、その前に。

「なあ長門、お前っていつも眼鏡掛けてるのか？」

「ん？いや、いつも掛けてる訳じゃないよ
本を読むときだけ☆ わたし遠視なんだ」

・・・こっちの長門って遠視なのか。

そして放課後。

俺はハルヒを連れて部室に向かった。

「あれ、ここって文芸部じゃ？」

「今年の文芸部って一人しかいなくなてな。そいつに頼んで
部室を貸してもらったんだ。ついでに部員になってくれるとき」

「へえ、すごいねキョン君」

そして俺たちは中に入った。

「いやゝ待ってたよキョン君!!
ん? その人が『涼宮ハルヒ』?」

「ひゃ、ひゃい!」

噛みすぎだハルヒ。

もつと落ち着け。これから一緒に部活をしていくんだから。

「う、うん。そうだね。」

わたしは、一年五組の、す、涼宮ハルヒ、です。

えと、よ、よろしくお願いします」

「わたしは一年六組の長門有希! ユキリンって呼んでね☆
こちらこそよろしくうゝ♪」

「ゆ、ユキリン?」

「まあ、こんな奴だ。」

って訳で放課後ここに集合な。来なかったら死刑だ」

「「え、えーーーーー!?!」」

「文句は聞かない」

「ちよっ、ちよっそれは・・・」

「おゝぼゝだ! おゝぼゝ!」

「そ、そうだよ」

冗談に決まってるだろ。

さすがに死刑はないぞ。私刑なら有るかもしれないが。

「それでもひどいよ!!」
「」

第二章 前篇（後書き）

キ「これはもう俺じゃねえな」

海「いや、ほら、再構成だし」

キ「俺は逆行だろ!!」

海「・・・気にするな」

キ「はぁ・・・やれやれだ」

海「そんなことより次はもしかすると長くなるかも」

ハ「え? どうして」

海「四人目が出てくるからな」

キ「あのお方か」

海「ああ、と言う訳で

次回もよろしくお願いします」

第二章 後編（前書き）

キ「やっとおのお方が登場か」

海「そうだねえ」結構かったな」

キ・海「では、後編どうぞ！」

第二章 後編

「ハルヒ、悪いが先に部室行ってくれ。」

俺は部員に成ってくれそうな人を探してくるから」

そう言い残し俺は次のSOS団員のもとへ向かった。

あの人はハルヒに連れてこられる前は確か書道部だったはず。

・・・さて、どう声を掛ける？

いつも通りの挨拶はダメだ。この世界ではまだ会ったことが無いかな。

などと考えていると、

「あの、どうかしましたか？」

と、話し掛けられた。

声のした方に顔を向けるとそこに探していた朝比奈さんがいた。向こうから話し掛けてもらったのは今の俺にはとてもありがたい。

「あ、はい。実は部活を作ろうとしているんですがまだ人数が足りなくて。」

あと二人いれば良いんですけど」

「そうですか、それは困りましたね。」

わたしが誰か部活動に入ってくれそうな人を紹介できれば良いのですけど」

話してみた感じだが、この朝比奈さんはしっかりしている。

たとえばなら、朝比奈さん（大）の身長を縮めた感じだ。

「うゝん。

なら、わたしが入部しようか？」

「え！それはありがたいのですが、何か部活に入っていないんですか？」

「書道部に在籍していますが、困った人の助けになりたいので」

立派すぎます朝比奈さん！

「あ、忘れていましたが、わたしは二年生の朝比奈みくるです」

「ああ、すみません。俺は一年の・・・」

もはや恒例と成った知り合いへの自己紹介だ。

あと何人こんな事をするんだろうな。

「では、よろしく願います。キョン君」

・・・まあ、朝比奈さんにはもとから『キョン君』と呼ばれてたな。

はあ、元の世界とこんがらがってきたな。

「悪い、待ったか？」

「あ！きよ、キョンくゝん。

た、助かったよおゝ」

部室に入ったらハルヒが俺を見るなり泣きついてきた。

抱きつかれるのは嬉しいのだが、涙目でこっちを見上げるな！
り、理性が持たん！理性が！！

「な、何があった」

「長門さんが、ながとさんがあゝ」

「長門！お前ハルヒに何をした！！」

俺は長門に聞く。いや、叫ぶ。

「わ、わたしは何もしてないよ。」

ただ、涼宮さんが何も話さないからわたしから話し掛けていた
だけだよ☆」

「・・・そうか。よく解った」

「えっとおゝ、そのおゝ、・・・・・・・・・・・・・・・・ごめ
んなさい」

「俺に謝るな。ハルヒに謝れ」

「うん。」

「ごねんねゝ涼宮さんっ☆」

謝ってるように見えないし聞こえない。

だがまあ、本人はこれでいてちゃんと反省しているんだろう。
俺に謝った時声のトーンがいつもより低かったし、真面目だったし。

「あれ？キヨン君。」

後ろにいる人は誰なの？」

「ああ、今から紹介する。」

そしてハルヒ、そろそろ離してくれないか？」

「ふえ？・・・・・・・・っ！！／／／／／」

俺が言った意味を理解したであろう瞬間、ハルヒはものすごい速度で離れた。

すげえ、人間ってここまで速く動けるんだな。・・・じゃなくて、

「それじゃ、早速紹介する。」

二年生の朝比奈みくるさんだ」

「朝比奈みくるです。どうぞよろしくお願いします」

「話しましたがこの二人も部員です。」

静かなのがハルヒ、軽いのが長門です」

「なに、その適当な紹介の仕方」

「ああ、『よく当てはまる』って意味での『適当』だな」

「ひどいよー！！」

長門は紹介の仕方に不満があるようだ。

ハルヒは顔を赤くして俯いたまま何も喋らない。

お、ハルヒが復活した。

「あの、あ、改めまして、わたしの名前は涼宮ハルヒです。き、キョン君と同じクラスです」

「じゃあ、わたしもちゃんと自己紹介!!
一年六組の長門有希です☆」

通称の所は言わないんだな。

「はい、涼宮さんに長門さんですね」

みんなの自己紹介が終わったところで、朝比奈さんが俺に質問してきた。

「ところでこの部活動の名称は決まっているんですか？」

「ええ、一応は」

「そうなんだ。わたし知らないな
涼宮さんは知ってる？」

「ううん、わたしも知らない。
ねえキョン君、どんな名前なの？」

名称なんてもちろんあれしかない。

「いいか、部活の名称は…… SOS団!」

俺が名称を宣言した瞬間、部室内の時間が止まった。

ハルヒ、長門、朝比奈さんの三人は見事に固まってしまっている。よって、遠くで練習している吹奏楽部の演奏が聞こえてくるぐらいに静かだ。

まあ、仕方がないだろう。突っ込むところが多いからな。俺だって一年前は同じ事になっていた。

「正式名称は『世界の面白い事を探す団』略して『SOS団』だ」

流石に元の正式な名称は使えないからな。

ここは変えさせてもらう。

「・・・なんで『団』なの？」

最初に意識が戻ったのは長門のようだな。なんか今のお前俺のよく知る長門みたいだぞ。

「まだ『部』って感じじゃないし、人も少ないしな。で、賛成か反対か言ってくれ」

「えっと、い、良いんじゃないかな」

「わたしも賛成だね♪」

ハルヒと長門は賛成してくれるようだ。

朝比奈さんはどうですか？

「はい、良いと思いますよ。」

素敵な名前ですね」

朝比奈さんにも賛成してもらい、この部活の名称は正式に『S
O
団』に決定だ。

第二章 後編（後書き）

海「・・・思ったより長くなかったな」

キ「そうか？俺は長いと思うが」

ハ「えっと、次回予告しなきゃ」

海「そうだな。」

じゃあ、ハルヒ。頼む」

ハ「え！わ、わたし！？」

あ、あの、つ、次はコンピューターです！」

キ「ざっくりしすぎだろー！！」

海「では、また次回」

第三章 前編（前書き）

海「ついに第三章」

ハ「い、一生懸命頑張っています」

海「そして今回はキヨンにサプライズがある」

キ「嫌な予感しかしないんだが」

海「では、本編をどうぞ」

第三章 前編

俺は今SOS団の部室に何があったかを思い出しながら
持っている範囲で物を持ち込んでいる。

「やっぱりパソコンは有った方が良いよな。
色々と便利だし」

「うん、そうだよな。
でもどうやって用意するの？」

そうなんだよな。SOS団にあったパソコンはコンピ研から強奪
してきた物だったし。

実際に買うとするとかなり金がかかるだろうし・・・

「ねえねえ、何話してるの？」

「ん？ああ、長門か。

パソコンは有った方が良いよな、って話した。ただ、高いだろ
うからな・・・」

「だったらわたしが用意するよ！！
家に使っていないの有るしね☆」

「良いのか？無理しなくて良いんだぞ」

「無理なんてしてないよ
わたしも何かキョン君の役に立ちたいし♪／／／」

そう言って長門はこちらに満面の笑みを向けた。
・・・こいつの笑顔はすごい破壊力だな。

「むう」

「ハルヒ？何唸ってんだ？」

「にゃ！！にゃんでもないよ。にゃんでも／＼／」

もの凄く噛んでるな。

「じゃあ長門、悪いが頼めるか？」

「まかせてよ☆」

「もってきたよ」

翌日、部室のドアを開けると先に来ていた長門が話しかけてきた。

「ああ、パソコンか」

「うん！大変だったよ☆」

朝早くに来たんだけどみんなこっち見てたな
他にもさあ・・・」

長門が朝、学校に登校した時の出来事を聞いたら、

「すまん、長門！」

俺は謝らずにはいられなかった。

本当にすまなかった長門!! そんな辛い思いをさせてしまつて。

「こんにちは。って、き、キョン君!？」

な、なんで泣いてるの!？まさか、な、長門さんが!？」

「わ、わたしじゃないよ!! キョン君がいきなり・・・」

「少し遅れました。」

・・・キョン君どうかしたんですか？」

「えっと、たぶん長門さんが」

「だから違うってー!!」

「ハルヒ・・・」

「キョン君? どうしたの」

「あのな・・・」

俺はハルヒと朝比奈さんに泣いてしまった訳を話した。

「うう・・・ながとさん」

「辛かったですね。よく頑張りました」

「え、な、何? 二人もどうしたの?」

「「「・・・」」」

「な、何でそんな目でこっちを見るのー!？」

さて、長門がパソコンを持ってきてくれたから何かやるか。
そういえばネットは繋がってるのか？

「もっちゃん!!ぬかりないよ♪」

流石だな長門。

じゃあ、早速ホームページでも作ってみるか。
ハルヒ少し手伝ってくれ。

「良いよ。でも、キョン君ホームページ作ったこと有るの?」

ああ、お前の命令でな。

「どうしたの?」

「・・・いや、何でもない」

さて、やりますか。

「・・・こんなもんだろ。

ハルヒ、長門、何か書きたいことないか?」

「わたしは何もないかな。長門さんは?」

「今のところは特にないよ」

あ、でも、後で活動記録とか書いてみたいな」

そうだな、そのときはみんなで書くか。まあ後一人必要なんだがな。

「どうぞ、お茶です」

「ありがとうございます」

朝比奈さんは見慣れたメイド服を着ている。

これは誰かが提案したのではなく朝比奈さんが、

「給仕をするならこの服です！」

と言って着ていらっしゃるのだ。

まさかこの世界の朝比奈さんはコスプレイヤーなのか？

朝比奈さんに限ってそんなことはないと思いたいのだが・・・

「♪」

かなり楽しそうにしている。

いや、あれはお茶をいれることを楽しんでいるだけだ。

きつとそうに違いない！ そう思いたい！！

「あと必要な物は何だと思う？」

「えっと・・・何だろう？」

「謎の転校生とかどうだ」

「な、謎？」

「まあ別に謎じゃなくても良いけどな。

ほとんどの生徒はもう何かの部活に入ってるだろ」

「うん。確かにそうだね」

「だから転校生ぐらいしか誘えないんだよ」

「あ！なるほど。頭良いねキョン君」

「成績はお前の方が上だけだな」

「来たぞハルヒ」

「え！何が？」

「転校生だ。七組に来たらしい」

おそらく古泉だろうな。

これでSOS団員がみんなそろろう。

「一限が終わったら見に行くつもりだ。お前はどっする？」

「ん・・・わたしは残ってるよ」

「そうか、解った」

さて、もう少しだ。

ハルヒに言った通り、俺は古泉が居るであろう七組の教室に向かっている。

教室の前についたのだが、かなり人が多い。
まあ、この時期に転校生なんて珍しいからな。少し癪だが顔も良いし。

ん？あいつか・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？

「おかえり。いい人だった？」

「さあな、見た目だけじゃ解らん」

「そ、そうだよね。じ、じゃあ、性別は？」

その質問の答えこそが古泉に声を掛けられなかった理由だ。
そう、つまり、この世界の古泉は、

「女だ」

ハルヒ、変えるのは性格で性別じゃないだろ！！
でも再構成だからありなのか？

いや、もしかしたらこっちのハルヒが男より女の方が話しやすいからって

力で性別を変えたのかもしれないな。

まあ何にせよ、放課後に古泉に話しかけてみよう。

なんだかんだで居ないとダメだからな、あいつは。

第三章 前編（後書き）

キ「作者！最後のなんだ！！」

海「ああした方が面白そうだったから」

キ「書き切れるか？」

海「・・・まあ、頑張ります」

キ「おい！！」

ハ「き、キヨン君、海人さん、喧嘩はだめだよお。

・・・あ！あ、あの、次回もどうぞよろしくお願いします」

第三章 後編（前書き）

ハ「こ、後編です。」

でも何でキョン君は驚いていたのかな」

海「君は知らなくて良いよ・・・」

キ「このハルヒは男の古泉を知らないからな」

ハ「？えっと、と、とりあえず、どうぞ」

第三章 後編

授業が終わり、俺は七組へ向かっている。

理由は言わなくてもわかると思うが、古泉を勧誘するためだ。

しかし、こっちの古泉？は女になっている。

いつものように声を掛けるとナンパにしか成らない。

仕方ないからハルヒの名前でも出してみるか。

多分機関とかこっちにも有りそうだしな。

今の古泉の姿は、にやけ面をそのままに

栗色でウェーブがかった髪、身長はハルヒぐらい。

胸は平均以上だと思う。多分。

端から見れば美少女に分類されるだろう。

・・・ん？あいつ一人か。ちょうど良い。

「なあ、少し良いか？」

「はい、何でしょうか」

やっぱりこいつは古泉だ。間違いない。

そのにやけ面が今回ばかりはとてもありがたい。

「部活を作ろうかと思ってるんだが人数が足りなくてな。

入ってくれないか？」

「すみません。わたしは部活に入る気は無いんですよ」

「頼む!! 後一人なんだよ。」

ちなみにメンバーは、長門と朝比奈さんと」

「あ、いや、ですから・・・」

「後、ハルヒだ」

「!」

よし! 成功だ。

この反応を見ると、こいつはハルヒの監視が仕事で来たんだろう。

「・・・わかりました。」

興味が出てきたので入らせていただきます」

「サンキュ。」

ああ、そういえば俺は五組の・・・」

SOS団員への自己紹介はこいつで最後だな。

「これは、ご丁寧にもありがとうございます。」

わたしは今日から七組に転校してきた古泉一姫です」

名前の読みは変わらないんだな。

「これからよろしくお願いします。 団長様」

「あゝ・・・団長は辞めてくれ」

「では『キョンさん』と」

ついに古泉にまで『キヨン』と呼ばれたな。

これでSOS団の全員から『キヨン』って呼ばれる事になった。ハァ

「それじゃ、こっちだ。ついてきてくれ」

「五人目連れてきたぞ」

「キヨン君、その人が今日転校してきた人？」

「ああ、古泉だ。」

これでやっと規定人数になったな」

「五人集めるのってこんなに大変だったんだね」

「そうだな。」

そういえば、古泉。お前校舎のどこに何があるか解ってるか？」

「いえ、まだ見て回っていませんでした」

「んじゃあハルヒ、古泉に校舎案内してやってくれ」

「うん、良いよ。」

よ、よろしくお願いします、えっと、こ、古泉さん？」

「はい、こちらこそお願いします。涼宮さん」

「終わったら帰って良いぞ。」

今日はもう特にする事無いからな」

「うん。」

そ、それじゃあ、こっちです」

行っただな。

任せたみたが、あいつ大丈夫かな？

長門も朝比奈さんも今日はもう良いですよ。

「そうですか、ではわたしは用事があるので。
ではまた明日」

そう言っでメイド服のまま出で行ってしまった。
もしかしてこっちの朝比奈さんも天然なのか？

「じゃあ、わたしも帰ろっかな☆
って、そうだそうだ。ねえ、キョン君」

「ん？どうした、長門」

「これ貸してあげる♪
面白いから絶対読んでね！」

と言われ長門がラノベを差し出してきた。
ハードカバーじゃ無いのかよ！！

「あゝ・・・わたしハードカバー読めないんだよねゝ
なんて言うか、読み切れない」

こんな所まで変わってるんだな。

「・・・あの、えっと、その
ハードカバーの方が良かったのかな・・・」

「ああ、いや、すまん。別にこれでも良いぞ。
それじゃ帰ったら早速読ませてもらうな」

「うん!!」

前は葉を見つけるのが一日遅れたから、
今回は家に帰ったらすぐに本を開いた。

「・・・あれ？葉がない。」

まさか純粋に本を貸してくれたのか？」

本当にどうしたんだ長門。

まあせっかく貸してくれたんだ、読んでみるか。

第三章 後編（後書き）

海「次は長門が主役」

長門（以後長）「ん？なにになに？」

キ「この長門であのシーン大丈夫か？」

海「まあ、頑張ってみるさ」

長「？よく分かんないけどまあ良いや☆

えっと、まだまだ感想待ってまあ〜す♪

では、次回もよろしく！！」

第四章 前編（前書き）

長「第四章くやった〜♪
わたしが主役だ〜♪」

海「暴走気味だな。

まあ、今回の長門は少し違うぞ」

キ「そうなのか？」

海「ああ。

では、どうぞ」

第四章 前編

翌日

SOS団部室は何事もなく穏やかな時間が流れている。

ハルヒがおとなしいだけでこうもゆったりするとはな。

長門も普段は騒がしいのだが、本を読む時は真面目に読んでいる。

しかし、俺が団長なのと、古泉が女だからなのか、
何時もしているようなゲームに誘いづらい。

結構団長ってのも暇なんだな。

ああ、そうだ。

「なあ、みんな。明日暇か？」

「え？う、うん。わたしは暇だよ」

「わたしも暇だね」

「予定は無いです」

「わたしも大丈夫ですが、何かするのですか？」

「暇だしみんなで町に出ようと思ってな。」

じゃあ、全員何もないようだし明日町に行くぞ」

「えっと、ど、どこに集まるの？」

「そうだな、じゃあ九時に駅前集合でどうだ？」

都合悪い奴は・・・居ないようだから決定な。
ちなみに遅れたら私刑な」

「「それまだ引っ張るのー！！」」

「「どうしたんですか？」」

こいつら面白いな。

そんなこんなで解散する時間になった。
今部屋にいるのは俺と長門だけだ。

「ごめーん、キョン君」

「いきなりどうした？」

「貸そうと思っていた本こっちだったよー」

そう言ってやはりラノベを差し出してきた。
そうか、間違えたから栞が無かったんだな。

「じゃあ、こっちも借りとくな」

「で、出来ればこっちを先に見て欲しいかなーって」

怪しいぞ長門。こっちの目を見ていえ。目を。

うちに帰って本を開くとやはりと言うべきか、栞が挟まっていた。
栞には前回同様、

『午後七時、光陽園駅前公園にて待つ。』

と、大体こんな事が書いてあった。なぜ大体かと言うと、

『午後の七時に光陽園駅前公園で待ってるよ〜♪』

こう書いてあったからだ。

これから大事な話をするって時にこれはないだろ、長門。

とりあえず駅前公園に向かっている。

時間もこの感じだと大丈夫だろ。

お、長門が居るな。

「悪い、待ったか？」

「・・・え？あつ、えっと、

お、おっそ〜い！ずっと待ってたんだよ！」

ん？なんかいつもと違うな。

何というかおとなしいし、調子狂うな。

ってか、もしかして昨日も待ってたのか？

「そ、そ〜だよ〜！」

まさか渡す本を間違えると思わなかったし・・・」

「で？何か俺に用事があるのか？」

呼び出したって事は学校じゃ都合が悪いことなんだろう？」

「う、うん。」

く、詳しく話したいから、そのく、う、家に来てよ／＼／＼」

そう言ってマンションの方へぎこちなく歩き出す長門。

端から見ても緊張していることがよく解る。

どうしてこんなになってんだ？

その後、駅前公園から長門が何度か転びそうになりながらも、何とか長門の部屋に来た。

俺は部屋の中を見渡す。

こっちの長門は性格が違うからか、部屋の中もかなり違う。

ちゃんとカーテンがあり、部屋の至る所にぬいぐるみが置いてあり、凝ったデザインの家具やテーブルもある。

こっちの長門の部屋はちゃんと生活感があるな。よかった。

「そ、そんなにじろじろ見ないでよ」

は、恥ずかしいし／＼／＼」

「ああ、すまん」

流石に部屋の中をじつと見るのは失礼だったな。

「ど、どうぞ」

「悪い」

そして前回同様俺の前に置かれるお茶。
まあ、出されたからには飲むけどな。

お茶を飲み干して湯飲みを置くと、
長門が急須を手にもたお茶を入れようとした。
また何杯もお茶を飲むのは気まずい。

「お茶は良いから、そろそろ要件を言ってくれ」

「ん？・・・あ！ああ、そうだね～
忘れてたよ☆」

しっかりしてくれ長門。

「だ、だからごめんって☆」

そう言うと、長門は姿勢を正し言った。

「すう～はあく。よしっ！

キョン君に聞いて欲しいことがあって。

涼宮ハルヒとわたしの事なんだけど」

「まずわたしと涼宮さんは普通の人間じゃないんだ。
涼宮さんには自分の願望を実現する力があって、
わたしはそれを側で観察するために作られたの。
わたしは人間じゃなくて、ヒューマノイドインターフェイスっ

て言うんだ」

「なんでわたしが涼宮さんを監視しているのかって言うと、それは涼宮さんが自立進化の可能性だから」

「わたしを生み出したのは情報統合思念体って言って、簡単に言えば宇宙人かな？」

で、その情報統合思念対はもう進化が止まっちゃったんだ。だから涼宮さんに自立進化の可能性を見いだして監視している」

「簡単に言ったけどこれがキョン君に聞いて欲しかった事だよ」

こっちの長門の話はわかりやすいな。

だが、それにしても簡略しすぎだろ。

話し終えると長門は俺の機嫌を伺う時の妹の様な表情をした。

「えっと」

な、何か言ってくれない、かな・・・」

「・・・お前の言いたい事は理解した。
正直信じられない話だと思う」

「そっか、そうだよね。」

信じられないよね、こんな事・・・」

ああ、信じられなかったさ。一年前の俺だったら。

「だが、俺は信じるぞ」

「え？し、信じてくれるの？」

当たり前だ。俺はもう色々と経験しちまってるからな。
そして何より、

「俺は、長門を信じる。」

お前が言ったから信じるんだ。他の奴だったら信じない」

「ど、どうして、わたしなの」

「そりゃあ俺は団長だからな。団員の事は信じるさ。
それにな・・・」

少し恥ずかしいが、これは本音だからちゃんと言っところ。

「俺は何があってもお前の味方で居たいからな」

「え？・・・・・・・・・・・・・・・・ええ！？／／／」

い、いきなりどうした？

「こ、これって告白！？いや、キョン君って平気でこんな事言う
人なのかも。」

で、でも、それだけ大切に思ってくれているって事？・・・」

「どうした？長門。」

何一人で喋ってるんだ？」

「な、なんでもないよ!!」

「さて、そろそろ帰らせてもらうな」

「え〜!

もうちょっと喋ってようよ」

「いや、流石に怒られる」

「そっか〜残念だな〜」

「また遊びに来るからよ」

「ホントに!？」

必ずだよ〜絶対だよ〜」

「ああ、約束だ」

「やったあ♪」

と、こんなやりとりの後長門のマンションを出た。
長門の話を聞いたから、明日は朝比奈さんだな。

あ! 朝倉の事聞くの忘れてた。

第四章 前編（後書き）

長「・・・・・・・・キョン君〴〵〵〵」

海「フラグたったか？」

ハ「むう〜」

海「・・・・強く生きろキョン。

まあ、次も長門に力を入れるけどな」

長「ホントに!？」

ハ「わたしは!？」

海「ハルヒはほとんどが主役だろ。

タイトルにも成ってるし」

ハ「そ、それはそうだけど」

みくる（以後み）「次回はわたしがキョン君とお話します」

海「半分みくるで半分長門だな」

キ「では、まだ次回もよろしく願いします。

・・・・古泉、そろそろ後書きに出てこいよ」

第四章 中編（前書き）

キ「なんだ、中編って」

海「予想以上に長くなったから中編にした」

ハ「だ、だったら、前回のを単独にして、

今回のを前編にすれば良かったんじゃないやあ・・・」

海「うっ・・・」

ハ「海人さん!？」

あ、あの、中編どうぞ!!・・・だ、大丈夫ですか!?!海人さん!？」

第四章 中編

今日は記念すべき新SOS団第一回目の市内探索だ。

今回は団長だから早めに行こうと思い三十分前に着くように家を出た。

このぐらい早ければ一番に着くだろう。

しかし、予想に反し待ち合わせ場所に着くとハルヒが居た。こっちの世界でも早いなこいつ。家を何時に出てるんだろ。

「よ、早いなハルヒ」

「んゝ・・・あ！

お、おはよう、キョン君」

「眠そうだな」

「じ、じつは、今日が楽しみで、あんまり寝れなかったりして・・・

それで、き、気がついたら朝で、する事無かったから早めに来たりして・・・」

楽しみで眠れなかったとか、遠足前の小学生かお前は。

「そ、そうか。

いったい何時ぐらいにここに着いたんだ？」

「えっとゝ・・・・・・・・八時・・・・・・・・」

一時間前!?

どんだけ早く来てるんだよ。

それから、ハルヒと二人で他のメンバーを待っている。
ふと時計を見ると、待ち合わせ時間二十分前になっていた。
そろそろ誰か来るだろ。

お、古泉が来たな。

外見が変わってるからまだ遠目じゃ解らないな。

「おはようさん、古泉」

「おはようございます。

お二人とも早いんですね」

「まあ、俺はお前より少し早いぐらいだ。
ハルヒなんて八時に来たらしいぞ」

「きよ、キヨン君!

い、言わないでよ／＼／＼」

「ふふ、仲が良いんですね」

「あうう／＼／＼」

「おはようございます。
少し遅れたようですね」

話している内に朝比奈さんが来ていたようだ。

「おはようございます、朝比奈さん。
まだ時間に成ってませんから大丈夫ですよ」

「そうですか、良かったです。
ですが次はもう少し早く来ますね」

「いえ、時間に間に合えば良いんですからこのぐらいの時間で良いですよ。」

今回は俺たちが少し早かっただけですし」

「そうなんですか？

でも、皆さんを待たせるのは悪いですから」

「そう思っていたただけで十分ですよ朝比奈さん」

「そろそろ時間だな」

時計を見ると集合時間五分钟前だ。

来ていないのは長門だけだが、あいつが一番最後だなんてな。
イメージとしては、こっちでも一番最初に着いていそうだったんだが。

「ごつめくん！！遅れたー！！」

来たな。

「おはよう、長門。」

まだ時間前だから良いぞ」

「いやゝホントにごめんねゝ
昨日楽しみでなかなか眠れなくて☆」

ここにも居たか。

「それで結局眠れたみたいなんだけど、
今度は起きる時間を寝過ぎしちゃってさゝ
次はちゃんと起きるよゝ♪」

ハア・・・まあ、とりあえず全員そろったな。
じゃあ、駅前の喫茶店で今日の予定を立てるぞ。

「「おゝ!!」」

・・・長門、ハルヒ、お前ら本当に小学生かってんだ。

いつもの喫茶店で俺たちはくじ引きをしようとしている。

これは俺が発案した事だ。

このやり方が一番簡単に決まるからな。

ちなみにクジは俺が昨日紙で作った。

このくじ引きの結果は去年と同じになるのか？それとも違くなるのか？

俺としては午後は誰でも良いが、午前は朝比奈さんと一緒に回りたい。

朝比奈さんから話を聞かなきゃならんしな。

まあ、純粹に一緒に回りたいってのも有るんだが。

「・・・で、みんないい加減どれにするか決めてくれ。
腕が痺れてきたぞ」

俺が色々と考えている時間があつたろ。

「で、でも、その・・・／＼／＼」

「みんなキョン君と回りたいんだよ。
もちろんわたしもね☆／＼／」

古泉と朝比奈さんは俺に話しをするためだろうな。
まあ、ハルヒと長門の理由は嬉しいが。

「「「・・・」」」

「早くしないなら俺の独断と偏見で勝手に決めるぞ」

「「「っ!?!、いま引きます!!」」」

結果を言うと朝比奈さんとペアになった。

やっぱりクジの結果は去年と同じになるのか？

「では、よろしく願いしますね、キョン君」

「ええ、こちらこそ、朝比奈さん」

「「ううゝ・・・」」

「・・・ダメでしたか・・・午後こそは」

「じゃあ、十二時にまたここ集合な」

俺たちは前回同様、河原に来ていた。

結構人が居るな。みんな俺たちみたいに暇人なのか？

「あの、お話があるので聞いてくれませんか」

なんて俺がくだらない事を考えていると、朝比奈さんが話しかけてきた。

とうとうこの時が来たか。

もう、ベンチに座り朝比奈さんの話を聞く準備は出来ている。どうぞお話しください。おそらく俺はもう知っている事でしょいうけど。

「では、まず最初に、わたしはこの時代の人間ではありません」

ここから先は去年聞いた事とほぼ同じだ。

ただ、この朝比奈さんはとてもわかりやすく話してくれる。

しっかりとした性格だから聞き取りやすいし。

何より、ちゃんと俺が理解しているか確認しながら話をしている。

「・・・と、言う訳で、わたしは涼宮さんの近くに居るんです。

なのでSOS団に入れてくれてありがとうございますキョン君」

「いえ、お礼を言われるようなことじゃないです。」

それに、毎日おいしいお茶を煎れてもらっているのでお礼をするのはこちらですよ」

「ふふ、そう言って貰えると嬉しいです。

・・・あつ、そろそろ集合時間ですね」

「もうそんな時間ですか。

じゃあ、戻りましょう朝比奈さん」

宇宙人と未来人の話は聞いたから、後は超能力者である古泉か。

今日の午後に一緒になれば手っ取り早いんだが。

ああ、そうだ。朝比奈さんにあれ聞いとくか。

「そうだ、朝比奈さん」

「はい？何でしょう」

ずっと気になってるしな。

「朝比奈さんって・・・・・・・・コスプレ好きなんですか」

って、違うだろ俺！！

何聞いてるんだ！？確かに気になってたけど！！

「禁則事項です」

その笑顔は傷心している俺には、直視出来なかった。

第四章 中編（後書き）

海「本当にすいません。

今回の後半に長門を入れようとしたんですが、
予想外に長くなって」

キ「ちゃんと考えてから書けよ」

長「まったくだよ」

おかげでわたしがキョン君と回るの次になったじゃん」

海「まあ、長門以外になるかもしれんが」

長「!?!? ご、ごめんなさい!?!」

謝るからキョン君と一緒にして」

海「次回の話しはちゃんと長門で考えているから」

長「ホントだよね!?!」

キ「・・・とりあえずまた次回も見てください」

長「次はわたしが出るんだから絶対だよ♪」

第四章 後編（前書き）

海「話別のアクセス数を見たら、ハルヒが登場した話と
長門が登場した話が一番多かった」

キ「人気だな」

海「そうだね。ってことで、長門とデートしてこい。・・・本編で・
・・」

キ「で、デートって・・・まあ、強く反論できんな」

海「では、後編をどうぞ」

第四章 後編

俺達が集合時間に着くと、他のメンバーはすでに揃っていた。だが三人とも落ち着きがないように見えるな。

ハルヒはいつもの事だから良いとしても、あの軽い感じになっている長門や、

いつも余裕を持った笑みをしているはずの古泉までもがそわそわしている。

三人で行動している時に何があったんだ？

「ううう・・・あ！き、キョン君！！」

「すまん、待ったか？」

「わ、私たちも今来たばかりだよ☆」

「え、ええ、その通りです」

なんか怪しいぞお前ら。

何か俺に隠してないか？

「い、いえ！キョンさんに隠し事なんて有りませんよ」

・・・まあ、いいか。

「とりあえず、何か食うか。」

あ、流石に昼飯おごる金はないから各自払えよ」

「わかってるよ☆」

お前が一番食いそうだから言ったんだ、長門。

「さて、昼飯も食ったし、午後のペア決めやるか」

(((. . . 今度こそ . . .)))

(. . . 二回目有るかな . . .)

な、何だ！？空気が重い！！

思わず目を反らしてしまった。

「と、とりあえず、引いてくれ」

俺はみんなと目を合わせないように言うと、

クジを握った手の上を風が通りすぎた。

いや、俺を除く全員がもの凄い勢いでクジを引いたのか。

おそろおそろ俺は手に残ったクジを見た。

印は . . . 有る。この時点で誰かと二人のペアと言う事が決まった。

ペアになる相手を知るために俺はみんなの方へ視線を移した。

そこには今まで見た事の無いような斬新なSOS団の姿が有った。

まず解る事は長門が俺の相手だって事だ。

なぜなら、長門がテーブルに片足をのせ、その目に涙を浮かべ、手を掲げていた。

そして長門とは対称にテーブルに突っ伏すハルヒと古泉。

朝比奈さんは少し残念そうな表情をして紅茶を飲んでいる。

そして、店にいた客は全員俺達の方を何事かと見ている。
その視線が語っている事はよく解った。

「で、長門。どこか行きたいとこ有るか？」

あれからハルヒと古泉が復活し、長門が正気に戻ったので店を出た。

あとは集合時間を決めた後、行動を開始した

「うんゝ・・・あ！一つだけ行きたい所有るんだよねゝ♪」

「じゃあ、行く所を決めてないしそこに行くか。
場所は解るのか？」

「えつとゝたしかゝ・・・こっちだよ！！」

長門が行きたい所なんてどこなんだろうな。
やっぱり図書館とか本屋かな。

・・・まあ、この長門は性格が違うんだ。
かなり人間っぽくなってるからな、こんな所にも興味を持つか。

「キョン君ゝどうしたのゝ？
・・・も、もしかして、ここダメだった？」

「ああ、いや、大丈夫だ。ここならたまに来る。

ただ少し俺が予想してた場所と違かったからついな」

「いいじゃん。」

わたし初めてなんだからちゃんと案内してよ」

じゃ、レッツゴ〜♪／／／」

俺は長門に腕を引かれながらそこに入った。ゲームセンターに。

「音声のみでお楽しみください」

「き、キョン君！あれ何！？」

「あれは、上のクレーンを動かして下のぬいぐるみや何やらをとるゲームだ」

「じゃあ、あれは！！」

「迫ってくる敵を銃型のコントローラーを使って打ち抜くゲームだ」

「これは！？」

「ああ、それはインベー・・・って長門！！それで遊んじゃダメだ！！」

「な、なんで！？」

「同胞殺しになるぞ・・・」

「楽しかった☆」

「ああ、そうだな。」

結局景品は何も取れなかったが」

「あはは・・・」

まあ、俺はゲーセンで得をするなんて滅多にないからな。
しかし手ぶらってのもな・・・。

お、あれならカードの代わりになるか。

「なあ、長門。」

最後にプリクラ撮っていかないか？」

「プリクラって何？」

「俺もよく知らんが、写真みたいなもんだ。
今は色々と出来るらしいが、俺はやり方を知らないしな。
で？どうする？」

「と、撮ってみたい！！／／／」

／再び音声のみでお楽しみください／

「これをこうして・・・こうか？」

「えーこうじゃない？」

「お、撮るみたいだぞ。

ほら、これ見ながら笑え笑え」

「にぱ☆」

「な、長門!？」

「ん?なに」

「今すごい笑顔だったな・・・」

「き、キョン君が笑えっていったんじゃん!!」

「次で最後だぞ」

「じゃあ、キョン君も笑顔で☆」

「うっ、仕方がない」

「にぱ☆」

「に、にぱー」

機体から出てきたプリクラを長門と一緒に見るとそこには、とても楽しそうな笑顔で笑う長門とアルバムでも見た事がないぐらい笑顔の俺が居た。

「す、少し、恥ずかしいね／＼／」

「あ、ああ、そうだな／＼／＼」

そんな風に言われると余計意識してしまう。

「でも、折角だしケータイに貼ろ〜♪」

「お前携帯有ったんだな。じゃなくて、頼むからやめてくれ!!」

「え〜・・・じゃあ、電池カバーの裏に貼るよ」

「・・・まあ、そのくらいなら」

「じゃあ、キョン君も貼ってね〜☆」

「善処しよう」

なんて言ったが、もうすでにカバー裏に貼ってある。
気恥ずかしいから黙っておくが。

「〜♪」

「って!!い、今何時だ長門!?!」

「え!・・・ま、待ち合わせ時間に残り、じ、十分」

「急いで行くぞ長門!!」

「うん!!」

間に合うかどうかはぎりぎりの所だが、必ず時間通りに着く！
ここまで走るのは久しぶりだな。

結果を言えば俺と長門は後一分のところで間に合った。
危なかった。具体的に言えば、ハルヒがあと少しで泣きそうだった。
俺と長門が何か事件に巻き込まれたと思っていたらしい。

「・・・ともかく、今日はこれで解散な。お疲れさん」

「うん、ばいばいキョン君」

「じゃあねーキョン君☆」

「それではまた来週」

ハルヒ、長門、朝比奈さんの姿が見えなくなってから、
隣にたっている古泉に話しかけた。

「で？お前も何か俺に話があるのか？」

「よく解りましたね」

「まあ、勘って奴だ。」

「それで、今ここで話すのか」

「いえ、今日はもう日が暮れるので明日にしようかと思っている
のですが。」

「いかがでしょうか」

「明日か。」

少し早いような気がするがまあ良い。

「ああ、良いぞ。」

明日は暇だったからな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・やったあ・・・・」

「ん？どうした古泉」

「い、いえ！？何でもありません。
では、ま、また明日」

どうやら明日も休めないようだな。

第四章 後編（後書き）

古泉（以後古） 「やっとわたしの番です」

キ「そして後書き初登場か」

古「・・・まあ、わたしも色々あったんですよ」

キ「（目が虚ろだ）そ、そんな事より、次回はどうなるんだ？」

海「考えでは前編に古泉の話、
後編に誰かと遊ぶってことを考えている」

古「では、次はやっとわたしが主役なので、
是非とも見て頂けると幸いです。
では、また次回」

第五章 前編（前書き）

海「すみませんでした！！」

大学と閉鎖空間の構成で遅れてしまいました」

キ「まあ、投稿しただけ良いんじゃないか？」

海「では本編どうぞ」

第五章 前編

「キヨン君、朝だよ！」

・・・妹の声がする。今日は日曜なんだからもう少し寝かせてくれ。

「今日は誰かと会うんでしょ？」

あ、古泉達の話しを聞く日だったな。

前回と日にちが違うからすっかり忘れていた。

「・・・って今何時だ!？」

「八時半だよ」

確か待ち合わせ時間は九時だったな・・・

「やばい!遅れる!!」

くっ、朝飯を食ってる時間がねえ。

途中でパンかなんか買ってくしかねえか。

「それじゃ、行ってくる！」

「いってらっしゃい

お土産よろしくね」キヨン君

「出来たらな!!」

急いだ甲斐あって何とか遅刻せずにすんだ。

いくら古泉が相手でも約束した事は守らなきゃならんからな。

しかし、あれは何だ？

いや、誰なのかは解る。あそこにいるのは間違いなく古泉だ。

だが、様子が少し（いや凄くだな）おかしい。

いつもにやけ面をしているが、今のこいつは普段以上だ。

目は虚ろだし、視線は空に向いている。口元もいつもより口角が上
がっている。

顔も赤いし、熱でもあんのか？

「おい、古泉。

そろそろこっちに戻ってこい」

「・・・っは！！す、すみません、気がつきませんでした」

「体調悪いんだったら無理しなくて良いんだぞ」

「い、いえ！大丈夫です！！」

「なら良いが、本当に無理するなよ。

それで、お前の話を聞きたいんだが？」

「はい。

ですが、もう少し待ってください。機関の者が来ますので」

このパターンは、新川さんが来るのか。

それとも森さんかもしれないな。

その後、やはり新川さんが車で来た。

それに乗り込み、行き先も告げられぬまま車が走り出した。
おそらく閉鎖空間の発生場所に行くんだろう。

俺と古泉はあのとりのように後部座席に並んで座っている。

しかし、こいつは今女だからか凄く緊張すな。

古泉も俺と同じ考えのようで、俯いたままだ。

なのでとても気まずい空気になってしまってる。

・・・つか、古泉が近い。肩がぶつかりそうな距離だ。

男の時は気にしなかったのだが、今はもの凄く気になってしまう。

結局、新川さんから到着を告げられるまで何も話していなかった。

「／／・・・で、では、これから閉鎖空間に侵入します」

・・・古泉。

こっちの世界ではまだ何も聞かされてないんだが。

「少し落ち着きなさい古泉。

先ほど車内で何も説明していないでしょう」

流石は新川さんだ。しっかりしている。

「そ、そうでした」

落ち込んだ古泉もなかなか・・・って、何考えた俺！？

その後、とりあえず今から何をするかの説明が有り、

「あの、わたしの、て、手を握ってください」

と、言われた。

そして俺達は閉鎖空間の中に入った。

「・・・白い・・・」

俺が目を開けるとそこは灰色の世界などではなく、雪のように真っ白な空と白光に満ちあふれる町並みだった。

こちらの閉鎖空間も人は居ないし音も無い。

「ここが涼宮さんの心の中。閉鎖空間です」

ああ、知ってるさ。

こんな綺麗なとは思ってなかったけどな。

だが、なんだか違和感がある。

なにか足りないような気がするんだが。

・・・ああ！神人だ！！

あいつらはでかいから見えないなんて事は無いだろうし。

「なあ古泉。

この空間はどうしたら消えるんだ？」

「少し時間がたてば自然消滅します」

こっちのハルヒは破壊衝動じゃなく、一人で抱え込んで心を落
着かせるんだろう。

だから破壊活動をする神人が居ないってことか。
いや、もしかしたら居るのかもしれないが俺が知っている神人とは
違うんだろう。

「それで、お前らはいったい何なんだ？」

「ああ、そうでした。

わたし達は涼宮さんの言葉を借りるのなら、『超能力者』です
ね」

「・・・大体お前らの事は解った。

世界崩壊を防ぐ事を主な目的として動く組織ってことだな」

「ええ、大まかに合っています」

「しかし、この世界を見る限りは危機はなさそうだな。
それにお前らが押さえるんだろう？」

「はい、そのための『機関』です」

「・・・なあ」

「・・・い、言ってみただけです／＼／＼」

そ、そんな事よりそろそろ時間です」

そう言って古泉は上を指さした。

俺が見上げると、空に亀裂が入った。

「ふふ、ちよつとしたスペクタクルですよ」

俺がこの光景に見とれている内に閉鎖空間は砕け散った。

そうして、世界に人と音が戻った。

「では、ちようどお昼ですので何か食べに行きませんか？」

あれから俺達は新川さんタクシー（仮）に乗り、

朝、合流した場所に戻ってきた。

帰りは行きと違って色々と話した。

この世界が昨日出来たのかもしれないとか、ハルヒは神に近い存在だ、じゃなく

昨日やってたドラマとか、趣味の話とか普通の話した。

そして、こいつが話している内にどんどん顔を近づけるのは癖らしい。

ただでさえ近くに座っているのに、気がついたらほぼゼロ距離になっている。

正直言う嬉しいけどな。

そのあと古泉が気づき、急いで顔を離すってことが何回もあった。やっぱり恥ずかしいのか顔を赤くして。

で、なんだかんだで車を降りたら飯に誘われたって訳だ。

「流石に昼飯をおごってもらうのは悪い」

「大丈夫です、経費で落とせますから」

「おいおい」

「・・・・・・・・やっぱりダメだね・・・・・・・・」

「行かせていただきます!!」

涙目になるな！お前のキャラじゃないだろ!!

・・・・俺って泣き落としに弱いのかな？

ってか、こっちの古泉ってたまに普通の口調になるからな。
心臓に悪い。いろんな意味で。

第五章 前編（後書き）

古「・・・・・・・・・・・・・・・・／／／」

長「古泉さんどうしたの」

海「まあ、キヨンの相手したからあんなったんじゃないか？」

み「もしかして古泉さんって」

海「キヨンに一目惚れ」

み「やっぱりですか」

長「えっと・・・・・・・・」

次回後編でっす♪また見てね☆

第五章 後編（前書き）

海「お久しぶりです」

キ「まったくだな。

間を開けすぎだ」

海「すみません。中間テストとか色々あったので。
では遅くなりましたが第五章 後編です」

第五章 後編

「なんか悪いな、マジで昼飯おごってもらって」

古泉と入った店はスポンサーに『機関』が付いているらしく、俺の頼んだ分が無料になった。ちなみに古泉は割引してもらったらしい。

「いえ、この程度は気にしなくても良いですよ。
こちらが勝手にした事ですから」

「それでもだ。

後でお礼したいんだが。

・・・何か欲しい物とかしたい事あるか？」

「・・・そ、そこまで仰るのなら。

あ、あの、何でも良いんですか？・・・」

「ああ、何でも良いぞ。

俺が出来る範囲だったらな」

「で、では、その、こ、これからお暇ですか？／／／」

「ん？・・・何にもないな」

「それではこれから、わ、わたしと遊びに行きませんか？／／／」

「そんなんで良いのか？」

別に普通の時でも良いだろそんなの？
わざわざ『お礼』を使うもんじゃねえだろ。

「あの、じ、実は、あまり同年代の人と遊びに行った事無いんです・・・」

もしかして北高来る前から『機関』の仕事で忙しかったのか？
それにしても、友達と遊んだ事があまり無いか・・・

「・・・よし、行くぞ古泉。

それと、次はちゃんと何して欲しいか考えとけ」

「・・・え？」

「友達と遊び行くのは『お礼』にならん。
当たり前的事だろ？」

「・・・友達・・・」

「嫌だったか？」

「い、いえ！そんな事は！！」

「なら、さっさと行こうぜ？」

「・・・はい！！／／／」

とりあえず、商店街まで来たんだが・・・

「どこか行きたい所あるか？」

「い、いえ、考えてませんでした・・・」

そう言う俺も特に行きたい所もないしな。
なんで商店街に来たんだ？長門の陰謀か？

まあ、まずは本屋行くか。

「・・・あ、最新刊出てる」

「あゝ、それ途中まで集めてたな。
結局金が無くて買うのやめたんだ」

「それでしたら貸しましょうか」

「んじゃ、悪いが五巻から良いか？」

「フフッ。」

「ええ、良いですよ」

「すまん。」

「・・・お、あんな所で帽子売ってんのか」

「どこですか」

「向かいの服屋の前。行ってみるか？」

「ええ、行きましようか」

「その帽子気に入ったのか？」

「っ!!」

ええ、ええ、この模様が良いと思いましたが」

「だな。」

きつと古泉に似合うと思うぞ」

「・・・・・・・・あう／＼／＼」

こ、古泉？

どうしたんだ、急に黙り込んで。

ハア、しょうがない。

「・・・・・・・・あれ？」

キョンさん、どこですか？」

「ん？どうした」

「どうしたじゃありませんよ。どこ行ってたんですか」

「これの会計にな。ほらよ」

「え？あの、この帽子・・・」

「折角だし買つといた。」

これも『お礼』のほんの一部って事にしとけ」

「あ、ありがとうございます。大切にします／＼／」

不覚にも古泉の笑顔にドキッとしてしまった。

なんだかんだでもう七時近いな。少し遊びすぎたか。
古泉、お前の家まで送ってくか？

「い、いえ、迎えが来るみたいなので大丈夫です」

「もしかして『機関』の人か？」

多分、てか絶対に新川さんだろう。

「ええ、先ほど連絡がありました」

「じゃあせめてその人が来るまでここにいる。」

・・・で、古泉。今日はとうだった？」

「・・・はい。ここまで楽しかったのは初めてかもしれません」

「そっか、そいつは良かった。俺も今日は楽しかったしな」

つと、新川さんタクシー（仮）が来たな。

「では、今日はこれまでですね。

キョンさんの方こそ送っていきましようか？」

「いや、今日はチャリで来たからな」

「そうですか。

・・・・・・あの、良かったら、その・・・」

「どうした？」

「・・・・また、一緒に遊びに行きましょう／＼／」

「ああ、もちろんだ。

俺達は・・・・その、友達だしな、いつでも良いぞ」

「・・・・ありがとう／＼／」

第五章 後編（後書き）

キ・古「・・・・・・・・・・／／／」

海「二人とも客観的に見たから、
また恥ずかしくなってきたんだろうな」

ハ「こ、これって・・・」

長「間違いなくデートだよねえ
しかも次の約束までしてるし
わたしもキョン君とデートしたいな☆」

ハ「な、長門さんは前の話にあったでしょ」

長「えゝ別に良いじゃん♪」

ハ「だめだよ
わたしはまだなんだから」

海「しかも次は朝倉だしな」

ハ「そ、そうなんだよね。わたしの出番が」

海「・・・ちゃんとハルヒメインも書くから」

ハ「お、お願いします!!」

海・ハ・長「「では、また次回お会いしましょう」」

並行世界 その一（前書き）

再構成の平行世界

キヨン↓突っ込みスキルUP

ハルヒ↓あまり変わらず

長門 ↓若干（？）のオタク化

みくる↓コスプレイヤー

古泉 ↓キヨンへの好感度MAX

時期 ↓色々

以上を踏まえてお読みください。

並行世界 その一

「ひ、東中出身の・・・えと、す、涼宮ハルヒです。
涼宮ハルヒの再構成のファンが居たら、あの、
こ、これを読んでください」

「お前は空に向かって何喋ってんだ」

「はうつ!!」

「涼宮ハルヒちゃんの再構成」

「と、とりあえず、自己紹介と宣伝を同時にやってみただけど、
キョン君、どうだった？変じゃなかった？」

「空に語りかける人は流石に変だろ」

「うう・・・」

「と、とりあえず団員を紹介します！」

「団長は俺だ!!」

「えっと、まずはSOS団専属明るいキャラ、長門さん」

「よろしくね♪」

「いや〜最近後書きしか出てなかったからさ〜嬉しいな〜☆」

「お、同じく、SOS団専属、頼りになるお姉さん、朝比奈さん」

「よろしくお願いします。」

ところで今日はどんなお茶が良いですか？」

「こ、紅茶が飲みたいです」

「キョン君はどうしますか？」

「ハルヒと同じでお願いします」

「つ、続けるよ。」

SOS団専属謎の美少女、古泉さん」

「美少女とは・・・光栄です、涼宮さん。」

ですが、出来ればキョンさんから聞きたかったですね」

「こ、古泉!？」

「むう」

「……………そしてSOS団の団長、キョン君」

「えっと、どこに向かって挨拶するんだ？」

「それは、えっと、この画面の向こうにむかってじゃないかな」

「画面？」

「……こっちか？えっと、よろしく頼む」

「最後にわたしがSOS団専属・・・何だろ？」

「SOS団専属の内気キャラ、涼宮ハルヒだ」

「き、きょんくん」

「こんな感じでSOS団は今日も絶賛活動中♪キラッ☆」

「長門、俺達活動してるか？」

「キョン君♡パゥス」

「ん？ああ、はいよ・・・」

フツ パァン！！

「ギャハッ！！」

「やった」

一撃必中！！☆」

「ぬおーい！！」

風船が至近距離で爆発する恐怖を知らんのかお前は！！」

「うわぁー！！き、キョン君、主人公がしちゃいけない顔になってるよー！！」

ほ、ほら、キョン君もやってみたら！当たると意外に面白いよ・・・」

フツ ゴスツ!!

「じ、人中に! 人中に当たった!!」

「悪い長門。手元が狂った」ニヤリ

「・・・い、いいよ」

受けて立つよ」全宇宙を敵に回したよ」

「ハッハッハ、やれるんだったらやってみろ」

「全力全壊!!」

フツ!

「なんの〜!!」

サツ!

「お、遅れました」

ペチン!!

「へう!？」

「「あ・・・」」

しばらくお待ちください」

「わたし涼宮さんの墓前に誓うよ。

もうこれを人に向かって撃たない事を・・・」

「わ、わたし生きてるよ」

「ああ、ハルヒは俺達にそんな当たり前の事を教えてくれたんだな」

「だ、だから生きてるって」

「「ありがとうハルヒ（涼宮さん）」」

「あの、うん、わたし生きてるからね」

「でもそうになると、わたし達のデュエルはどう決着つけようかな」

「あるのは大量の風船だけだな」

「なら、バルーンアートで決着をつけよう！

そして涼宮さんの墓前を彩ろう！！」

「ああ、望む所だ！！」

「わたしって・・・」

「突如開催された『涼宮杯バルーンアート選手権』

判定員はこのわたし、

『レットバルーン』の異名を持つ古泉一姫が務めさせてもらいます。

ちなみに、わたしはキョンさんを応援します」

「キョン君・・・

いつかこんな日が来る事を常々、特に思ってたよ!!」

「長門・・・

俺もいつかこうなる事を、特に思ってたぜ!!」

「バルーンファイト、レディー、ゴー!!」

くしばらくお待ちください

「・・・長門、それ何だ」

「えっとソーセージ?

・・・そう言うキョン君こそ、それ何」

「えっとあれだ、レンコン?」

「「・・・作り方わかんね!!」」

「と、とりあえず、飾っておこつかな」

（そのまま首に掛けるのかよ。てか、それで十点入るんだ）

「しばらくお待ちください」

「……ハアハア」

「うう……」

「わたし達頑張ったよね」

「ああ、途中から得点とかどうでも良くなってたしな」

「「!?!」」

「なあ、この後ゲーセン行かないか？」

「あ、良いねー！行こう！！」

「じゃあ、今日の活動は終わり」

キィー バタン

「……………」

「……ほどきましようか？涼宮さん」

「・・・お、お願いします」

「しかし今日は散々でしたねわたし達・・・」

「そうですね・・・」

「お二人はまだ良いです！

わたしなんて碌に出てませんよ！！」

「「あ、朝比奈さん！？」

）終（

「お、終わるんですか！？」

・・・続？（

「『？』 って何ですか！？ 『？』 って！？」

並行世界 その一（後書き）

色々とすみませんでした。

またネタに行き詰まったら憶えている範囲でやるかもしれません。

ではまた。

第六章 前編（前書き）

海「お久しぶりです。海人です」

キ「ずいぶんと久しぶりのような気がするな」

ハ「気がするんじゃないくて、

本当に久しぶりなんだよ」

海「大変長らくお待たせいたしました。

『第六章 前編』です。どうぞ」

第六章 前編

何かを忘れているような気がしていた。
自分にとってとても大切な事を。

日曜日に古泉の話を聞いているから今日は何もないはず。
なんて考えて登校した俺は、下駄箱に入っている一通の手紙を発見した。

「・・・これは、アレだよな。
俺の記憶が正しければだが」

こんな事をするのは俺が知る限り、
朝比奈さん（大）と朝倉しかないない。

そして、順番的には朝倉が先だったと思う。

「とりあえず放課後にでも長門に相談するか」

「授業中の描写は割愛させてもらうぞ。
特に変わった所もない普通の授業風景だからな」

「き、キョン君？」

「でも、その普通って事が大切なんだよな」

「あ、あの〜」

「いつから俺は非日常に入り込んじゃったんだ。
やっぱりハルヒと関わってからか？」

いや、佐々木と知り合ってからかもしれないな」

「さ、佐々木さんって誰？」

「だが、佐々木は確かに変わった奴だったけど
非日常って程でもなかったな。

じゃあ、やっぱりハルヒが原因だな」

「わ、わたしが何かしたの!？」

「その二人!授業中に私語をするな!！」

「「す、すみませんでした!！」」

放課後になった。

「長門、少し話したい事が有るんだがいいか」

今、部室には俺と長門しか居ない。

ハルヒは今週の掃除当番らしく、遅れてくるらしい。

朝比奈さんと古泉が居ない理由は知らない。そのうち来るだろ。

「ん〜? な〜に〜?」

「……………はっ! も、もしかして今度こそ告白!？」

ま、待って、まだ心の準備が！！／／／
でも、き、キョン君が良いのなら、全然オツケ〜だよっ♪／／

「・・・？」

まあ、話したのは朝倉に関しての事なんだが」

「あ、朝倉さん！？

なんで！どうして！！朝倉さん！？

・・・うう、そうだよ、家事全般がダメダメなわたしなんか
より

何でも出来る朝倉さんの方が良いよね・・・」

「何の話した。

ってか、お前家事全般ダメなのか。

情報操作使えば良いんじゃないのか？」

「試したよ！試したんだよ！！それで上手くいったよ！！！！
で、でも、おと〜さんがそんなくだらない事で情報操作するな
ってえ〜」

「試した事有るのか。

んで？お父さんってのはもしかして・・・」

「うん。情報統合思念体の主流派。
そう呼んでくれて言われた〜」

「・・・ハア」

何やらせてんだあいつら。

「話を戻すぞ。」

朝倉に関して聞きたい事と相談したい事があるんだが、いいか？」

「むーライバルなのかもしれないけど・・・
よし！！わたしの知ってる事だったら良いよっ☆」

矛盾しないように朝倉の事を確認した後、
今朝、発見した手紙について相談した。

「そうだな」

朝倉さんは急進派って言うのに所属してるから、
現状を変化させるために動いているのかも。
たとえば、涼宮さんに関わりのある人に危害を加えるとか」

「つまり、俺を手紙で呼び出して怪我をさせようって事か？」

「うん、そうだと思う。」

もしかしたら、キョン君を殺す気なのかも」

「・・・そうか」

やっぱりこの世界でも、朝倉は急進派のインターフェイスだし
停滞している現状を打破しようとして俺を殺そうとしているんだな。

しかし、今回は最初から長門に協力して貰えば
前回のよう俺も長門も危ない目に遭わなくてすむと思う。

少なくとも、勝率は増すな。

だから・・・

「長門、協力してくれないか。

俺だってこんな所で死にたくないからな」

「もっちろんだよ!!」

わたしだってキョン君が死んじゃったらとっても悲しいんだよ！
だから全力で協力するよ☆」

「ありがとうな、長門。

じゃあ早速、俺が考えた作戦なんだが・・・」

今回は上手くやってみるか。

第六章 前編（後書き）

海「今回で朝倉の襲撃まで行こうとしましたがけど、それは次回です」

長「もうちょっと待っててね☆」

海「しかし、長門とキョンだけだったな」

ハ「わ、わたしも、ちょっと出てたよー」

海「ほんの少しな」

ハ「うう、わたし一応ヒロインなのに・・・」

海「・・・まあ、あれだ、スマン」

長「次はわたしが大活躍☆
それじゃっ！まったねー！！」

ハ「わたしなんて・・・わたしなんてえ・・・」

海「く、暗い。暗すぎる」

第六章 後編（前書き）

海「・・・・・・・・・・・・・・・・」

長「返事がない。ただの作者のようだ」

キ「おいっ!!」

海「長々と更新出来なくてすみませんでした!!」

キ「まったくだ」

朝倉「とりあえず、本編よ」

第六章 後編

「あのさあ」

朝倉さんって結構バカだね、バカなんですよ！バカだね！
」

「そ、そこまで言われるほど！？

長門さんだって何時でも軽いじゃない！ふっわふわじゃない！
」

「「ううゝ！！」」

・・・何だこの状況。

今回は最初から長門に同行してもらったのだが、
どこで間違った？

あれか？朝倉が俺に声を掛けようとしたら長門が突撃した所か？

「『遅いよ』 朝倉さん、かくごゝ！！』 『ええゝ！？』」

それとも、突撃された朝倉があの光る腕で反撃した所か？

「『朝倉さんそれずるゝ』 『い、いきなり何するの！？』」

そしてそれが俺の方にも伸びてきたからか？

「『あっ』 『うおっ！！危ねえ』 『ああゝ！！』」

しかも、てっきりまた教室がとんでも空間に成ると思ったが、
何の変哲のない普段通りの教室だし。

てか俺達が入ってきたドア開けっ放しだし。

全然閉鎖されてないし。

「あの攻撃もうちょつとでキョン君に当たってたよ！
あんなの当たったら死んじゃうよ！！」

「だから！わたしは彼を殺そうとしてるんだって！！
あれはアレで正しいの！！」

あつさり俺を呼んだ目的を話したな。
やっぱり俺を殺してハルヒの出方を見るってやつだったな。
長門と一緒に来て正解だったな。

「いくら朝倉さんでもキョン君を殺そうとするのは許せないよ！
キョン君と一緒にしたい事沢山有るんだから！！」

あれ？

「この際だから言いたい事言いますけど、
長門さんいつも学校から帰ってくるたびわたしの部屋に来て
彼の事ばかり話してくのやめてくれないかしら！！」

「こっ、こんな時にそんな事言わないでよ！
しかもキョン君が居る前で！！」

「だって、事実じゃない！！」

「それでもだよ！！」

なんか話しがおかしな方向に！？
そして、何でそこで俺の名前が出てくる！？

「いや、そんな事より教室で暴れるな!!
お前ら自分の周り見てみる!!」

そして、こんなに騒がしいのに何故誰も来ない!!

「大丈夫よ。」

この空間はわたしの制御下にあるから。

・・・まあ、長門さんの奇襲で構成が遅れたけど・・・」

気がつかなかった・・・

だが前回みたいに訳のわからない空間ではなく、
見た目は教室のままだ。

もつとも、机や椅子の大半は二人のせいで粉々になってはいるが。

「そもそも長門さんは・・・」

「そ、それを言うなら朝倉さんだって・・・」

今って、真面目な場面じゃなかったか？

「・・・ふう」

やっと終わったよ」

「終わったって、何のこと？」

不毛な争いが？

「まだわたしも、長門さんも、彼も居るじゃない。」

何が終わったって言うの？」

「ふっふん

それはもちろん！！

『情報連結解除、開始』

これだよ☆」

いきなり、教室の物すべてがキラキラした粒子になって崩れていく。

去年も見えた光景ではあるが、やっぱり壮観だな。

「そんな・・・」

「朝倉さんって凄いからさ」

この空間にプログラムを割り込ませるのに今までかかったんだくでももう終わりっ♪」

だが、何時・・・・・・崩壊因子？だったかを仕込んだんだよ。

朝倉に飛びかかる前か？

「あーあ、残念。しょせんわたしはバックアップだったかあ。

膠着状態をどうにかするいいチャンスだと思ったのにな」

そう言えば、今回は朝倉の目的ちゃんと聞いてなかったな。

「なあ朝倉、お前みたいな奴がまた俺の前に現れるのか？」

「たぶんね。統合思念体は、この通り、一枚岩じゃない。」

いつか、わたしみたいな急進派が来るかもしれない。
もしかしたら、長門さんの操り主が意見を変えるかもしれない。
それまで、涼宮さんとお幸せに。もちろん、長門さんともね。
じゃあね」

そして朝倉は消えていった。

「・・・さて、帰るぞ長門」

「うん!!」

「ういーす。

W A W A W A 忘れ物ー・・・・・・・・ぬお!!」

「あつ、机一つだけ元に戻すの忘れてた」

「・・・まあ、別に良いだろ。そんなくらい」

「俺の机があー!!」

どんどはれ？

第六章 後編（後書き）

海「今回の話しは難しかった。

軽く行くか、原作みたいに真面目に行くか迷った」

キ「この小説で真面目には無理だろ」

長「だよね」

そんな事したらわたしの出番が少なくなるし」

海「次は、未来だな」

キ「あの人か」

長「性格どうするの？」

海「・・・何とか変えてみる」

キ・長（大丈夫かな？）

海「そ、そう言う訳で

なるべく早く次話を完成させます」

キ・長（逃げた）

海「では、また次回もよろしく願います」

第七章 前編（前書き）

海「と言う訳で、朝比奈さん（大）の性格は変更しません」

キ「ただ単に思い付かなかったただけだろ」

海「・・・・・・・・すまん」

キ「・・・・・・・・とりあえず本編だ」

第七章 前編

翌日。

朝のホームルームで朝倉がカナダに転校したと伝えられた。本当は消滅しているんだけどな。

こっちのハルヒは朝倉転校の話題にあまり興味がないようだ。他の生徒と同じようなリアクションだからな。

前回みたいに連れ回される事もないだろう。

もっとも、このハルヒではそんな事無理だろうけどな。

そう言えば、俺の下駄箱に昨日同様手紙が入っていた。

手紙の宛先を見ると

『朝比奈みくる』

と、書いていたから十中八九未来の朝比奈さんからだろうな。

とりあえず、男子トイレの個室で内容を確認すると、

『昼休み、部室で待っています みくる』

書いてある内容は変わっていなかった。

しかし、此処にいる朝比奈さんがしっかりした人になったからか普段から朝比奈さん（大）に会ってるような感じだしな。

せいぜい背が高くなったぐらいの違和感しか無いかもしれん。

昼休みになった。

後ろのハルヒに一声掛けて、詰め寄ってくる谷口を無視し、弁当と一緒に食べようと誘ってきた国木田に謝ってから、教室を出る。

三分とかからず、俺は文芸部の部室前に立つ。
とりあえずノック。

「あ、どうぞ」

・・・なんか部屋の中からも凄く落ち着いた声が聞こえたな・・・
もしかして、しっかりとした朝比奈さんの未来だからなのか？

「・・・入ってみるか」

いい加減、朝比奈さん（大）に悪いからな。

「お久しぶりです。キョン君」

部室の中にいたのは予測した通りの人だった。

だが、服装が違う。

俺の見慣れた朝比奈さん（大）はいつも教師風の格好をしていた。しかし、今この場にいる朝比奈さん（大）？はスーツを着ている。さらに上だけフレームが付いている眼鏡を掛けている。

「えっと・・・朝比奈さんですか？」

「ええ、そうですよ。」

キョン君の知っているわたしより未来なのですが」

やはりこの人は朝比奈さんのようだ。

「あまり驚かないんですね」

「え？ああ、これでも驚いてますよ」

「そうですか。」

では、手短に用件を話しますね」

「用件ですか？」

閉鎖空間の事か？

確か白雪姫だったな。

「では・・・」

これはとある方からの伝言で、

『あなたは解放された存在』

との事でした」

「えっ!？」

変わってる!？

どう言うことだ。

しかもとある方からの伝言って。

いったい誰なんだ？

「キョン君」

色々と考えていたら声を掛けられた。

顔を上げると朝比奈さんは俺に向かって心配そうな表情をしていた。

「なんですか？」

「わたしにとっての『キョン君』はあなたですからね」

「どういう意味です？」

「禁則事項です」

やっぱりか。

「・・・もう少しすれば解ります。

そのときはわたしが伝言を預かった人も来るらしいです。

やっぱりあの人もあなたの事が心配なようなので」

俺の事が心配なんて、本当に誰だ？

「では、時間のようなのでわたしはこれで。

また会いましょう」

「え、ええ」

朝比奈さんは部室から出て行った。
もう、未来に帰ったんだろうな。

考えなきやいけない事が増えたな。

朝比奈さん（大）の伝言や、それを預けた奴。
そして、

「俺自身の事、か・・・」

やれやれだ。

第七章 前編（後書き）

キ「原作と少しずれたな」

海「まあな。」

そして、キヨンに衝撃の事実が！！」

ハ「き、キヨン君、大丈夫なの！？」

キ「ハア・・・冗談に気まってるだろ」

ハ「そ、そっかあ。そうだよね」

海「いや、マジ」

キ・ハ「・・・え？」

海「ではこの辺で。」

また次回もお願いします」

キ「ま、待て。」

さっきのは・・・」

海「感想を書いて貰えると
とっても嬉しいです」

ハ「き、キヨン君・・・」

第七章 後編（前書き）

海「皆様お久しぶりです」

キ・ハ「「ジト」」

海「うっ!!」

毎度毎度すみません」

キ「とにかく」

ハ「ほ、本編ですっ!!」

第七章 後編

「なんか疲れたな・・・」

まだ午前中だったか。

もう一日が終わったような感じだぜ。

とにかく今はさつき有ったことを深く考えるよりも、早く教室に戻って弁当を食いたい・・・

で、特に何事もなく放課後。

「き、キョン君？」

誰に話しかけてるの？

・・・・・・そう言えば、本編で喋るの久しぶりかも」

・・・・・・部室に行こう。

「みんな用事有るんだね・・・」

「・・・・・・みたいだな」

ハルヒを引き連れ部室までやってきたのだが、

団長の机―今は俺が使っている―の上に三人分の置手紙があった。

どうやら長門は本の発売日だから、朝比奈さんはお茶の葉を買うため、

古泉はバイトの会合があるから今日は参加できないとのことだった。

・・・お前ら、本当か？

「別にする事なかったから良いんだが。

じゃあ、俺らも帰るか？」

「う、うん。

・・・ね、ねえ、キョン君」

「どうした？」

「えっとお・・・」

と、途中まで、その、い、一緒に帰らにゃい!？」

「・・・見事に噛んだな」

「・・・あう」

まあ、断る理由はないけどな。

と言う訳でハルヒと下校中だ。

「・・・」

お互い無言で。

しかし、この状況はなんだ？

少なくともハルヒは、俺や他のSOS団員とは普通に話せるのに。
俺も今のこいつには話しかけづらいし。

そんな中、

「・・・変な事を聞くけど、良い？」

ハルヒが話しかけてきた。

「なんだ」

「キョン君って、自分がこの地球でどれだけ小さいのか、
そんなことを自覚したことある？」

そういやあ、こんな話聞かされたな。

あの時は何も言えなかったが。

「……………それで気が付いたら高校生になっていた。
少しは何かが変わるんじゃないかって思ってた」

何度聞いても重いな。

しかも今回は前以上に暗い。

「ここは、俺も言いたいこと言っとくか。」

「俺だって、自分がちっぽけな存在だって思ってる」

「ううん、違うよ。」

キョン君は小さな存在じゃない。

わたしにとってはとても大きな存在だよ」

「そんなことねえよ。」

俺は何の変哲もない一般人だからな」

長門や、朝比奈さんや、古泉みたいに特殊な能力なんてない。
だから、何も出来なかったこともよくあった。

「それに、俺から見ればお前のほうが大きな存在だ。
お前はお前なりに努力し続けてるんだろ？
どうにか自分を変えたいって」

「で、でも、全然ダメだし・・・」

「これはお前が変われたかどうかよりも、
変わろうとしていることが重要だと思うぞ。
俺なんて周りに合わせようとして
変わろうとすることを諦めたからな」

「あ、ありがとう、キョン君／＼／」

「ぐっ！／＼／」

・・・ほ、ほら、行くぞ！！」

「うん!!」

「……うん。

やっぱりわたし、キョン君のこと……」

「なにぶつぶつ言ってた?」

「にやあああ〜!!」
／／／
「

第七章 後編（後書き）

海「話自体はあまり進んでないんだよな」

キ「まあな。ハルヒの独白だし」

海「次はとうとう原作で言えば最終章」

キ「もうここまで来たか」

海「この小説はまだまだ続けます!!」

キ「まあ、たしかに憂鬱が終わっても
まだ続きがあるからな」

海「あの人も出してないし。
ほら、あそこ歩いてる人」

キ「誰だ？」

？「早く出番を希望する」

キ「ほんとに誰だー!？」

？「……にょろん……」

キ「お、おい！
あの人って!!」

海「ブラッディ様リクエストです。

面白そうだったので使わせてもらいます。
登場そのものはもう少し後ですが」

キ「り、リクエストって」

海「SOS団員と佐々木以外決まっていなかったからな。

なのでこれから登場する

キャラクターの性格のリクエストがあったらください。

作者が可能な範囲で書きます。

無理だったら作者が自分で考えます」

キ「ハア・・・

では、あとがきが長くなったが

感想が有ったら書いてくれ。

こいつもやる気が出るだろうし」

海・キ「「また次回もよろしく願います」」

第八章（前書き）

海「激動の第八章！」

キ「激動？」

「どう言う事だ？」

海「とりあえず本編をどうぞ」

第八章

俺は夢を見ているようだ

思った通りに体が動かないし、声も出ないからな。

場所は教室のようだが、

見慣れた一年五組の教室とは少し違う。

窓からは満開の桜が見える。

と言う事は季節は春なのだろう。

教室には俺の他にも数人居る。

顔を見ると、他のクラスだった奴も居た。

「あら、キョン。

今日は随分と早いじゃない。

団員として有償な事ね。褒めてあげるわ」

誰だ？

って、ハルヒは元々こっちの性格だったな。

内気な性格の方に慣れてるからな、解らなかった。

「何故か早く目が覚めたんでな。

家で特にする事もないし学校に来ただけだ」

「へ」

まあ、そんな事はどうでも良いわ。

そんな事よりキョン、今日の放課後に勧誘行くわよ」

勧誘？

また誰かを拉致するのか？

「勧誘？

また誰かを拉致するのか？」

おお、思った事と口から出た事が一緒になった。

「拉致なんてしたことないわよ。失礼ね」

朝比奈さんの件はどうなんだ？

ん？

目が覚めるみたいだな。

だんだんと霞んできた。

音も聞き取りづらくなってきた。

「とに・く、勧誘す・・よ」

「だか・・れは・この誰・・」

「そ・なの・・年生・決・・てるじゃ・・!!」

何だって？

肝心の所が聞こえなかった。

・・・・・・・・・・やっぱり夢だったか。

にしても何だってあんな夢を？

何かが起こる前兆だって言うのか？

「キョンくん」

起きてー朝だよー」

「起きてるよ」

「えーホントだ。」

わたしが起こしたかったのに」

「悪かったな」

夢の事は後で考えるか。

例によって授業中はカットな。

そして放課後。

今日はSOS団員が全員揃っている。

「まあ、揃ったからって何かする訳でもないんだが」

「そうだよね」

あっそうだ、また本貸そうか？」

「今読んでる本か？」

「うん。」

これ結構面白いんだよ」

そう言って長門は俺に向かって表紙を見せてきた。

ソコには、赤い髪をした小学生に見える女の子が書かれていた。

「どんな話しなんだ？」

「そだね」

生徒会の五人が駄弁る話し」

「・・・なんだそれ？」

「わたしのオススメは無言の話し☆」

「駄弁るのに無言!？」

「明日一巻貸そうか？」

「ああ、面白そうだから頼む。

そう言えばそれって何巻なんだ？」

「これは六巻だよ」

だから六花って書いてるじゃんっ☆」

「数字が巻数を表してるのか。
じゃあ一卷はなんて言うんだ？」

「ひみつ♪」

「なんで？」

「キョン君、お茶どうぞ」

「あ！ありがとうございます朝比奈さん」

「いえ、昨日良い茶葉を買えたので」

用事って本当だったんだな。

「キョンさん」

「ん？どうした古泉」

「オセロを見つけたのですが、
一人では流石に出来ないの」

ちなみに、オセロ等々は俺が持ってきた。

「良いぞ俺も暇だったしな。
ハルヒ、席変わってくれ」

「う、うん」

「悪い」

「よ、横で、見ていて良い？」

「つまんないと思うけどな。

さ、やるか古泉」

「はい、お手柔らかに」

今日もSOS団は平和だ。

古泉はこっちでも弱かった。

そんな放課後を過ごした後、
普通に帰宅して、普通に家で過ごし、
普段通り眠りについたはずだった。

そう、はずだった。

しかし、俺は今自分の部屋ではなく学校にいる。
しかも閉鎖空間の中だ。

色は白。

こっちの閉鎖空間だって事ぐらいしか解らない。
幸いなのは神人が出ないって事だな。

そして、さっきからハルヒを捜して校舎歩いているのだが
どこにもハルヒが居ない。

この頃で閉鎖空間、学校と来たらアレしか無かったはずだが。

「どう言う事だ？」

とりあえず部室に行くか。

・・・本当にどう言う事だよ。

何でお前が此処に居るんだよ。

「長門!!」

部室には俺よりも先に長門が居た。

無表情でこちらを見る長門が。

第八章（後書き）

長「やっと出られた。」

今回は後書きは特にならない。

感想を書いてくれると嬉しい。

では、また次の話の時に」

第九章（前書き）

海「今回は長くなったな」

キ「区切れば良かったんじゃないの？」

海「区切り所が解らなかった」

第九章

「長門、だよな。」

SOS団専属無口キャラの。
何でこんな所に居るんだ？」

「あなたに伝える事がある」

伝えること？

なおさら解らんど、そんなの。

いや、もしかすると・・・

「未来の朝比奈さんに伝言を託したのはお前か」

「そう」

やっぱりか。

「正直、あの伝言の意味はさっぱり解らなかったがな」

「だからこちらに来た。」

あなたとこの世界について教えなければならぬから」

俺と世界の事ね・・・

だが、俺は俺だ。

世界だって、ハルヒの望んだ通りになってるんだろ？」

「その考えは少し違う」

どう言う事だ？

「この世界は涼宮ハルヒによって作られたもの。

しかし、この世界は完成した瞬間に

元の世界とのつながりが断たれた。原因は不明」

つながりが断たれた？

よく意味が解らんのだが。

「つまり、この世界は平行世界。

あなたが過ごしてきた世界とは違う世界」

あゝ・・・

ってことは、俺は時間を遡ったんじゃない、

世界そのものを移動しちまったってことか？

「先ほどよりは近くなった」

「近くってことは、まだ当たりじゃないのか」

全く訳が解らない

「スマンが長門、答えを教えてください」

「・・・・・・後悔しない？」

「・・・・・・ああ。もちろん」

結構真面目な話なんだな。

「あなたは・・・」

長門は表情こそ変えていないが、
少しうつむき加減になっている。

それほどまでに言い出しづらいことなのか？

「あなたは、こちらの世界のあなた。
この世界と一緒に作られた存在」

・・・何だって？
俺が作られた？ ハルヒに？

「じゃあ何でこんなハッキリした記憶が有るんだよ！？」

「それはわたし達の世界のあなたを元に作られているから。
決してあなたが偽物という訳じゃない。

あなたは元になっているあなたから分岐した存在」

分岐した存在ね・・・

ゲームで言うところのコピーデータみたいなもんか。
だから途中までは同じ。

コピーしてからでは違うってな。

「大丈夫？」

「ん？」

ああ、大丈夫だ」

結構衝撃的だったけどな。

「それで、

アノ伝言はどう言う事なんだ？」

「この世界の涼宮ハルヒは

わたし達の世界の涼宮ハルヒより力が弱い。
せいぜい強運程度になっている」

「それは、この世界ではとんでもない事態に
巻き込まれないって事で良いのか？」

「こちらの彼女の力が強くなれなければ」

「なるほど、ハルヒの機嫌を取るために
走り回る必要が無くなった、ってことで良いのか？」

「彼女の機嫌を取るのは、わたし達の世界のあなたがする事。
あなたはもう関係ない」

そうか・・・

なんか少し寂しい気もするが。

「なら、こちらでも似たようなことをすれば良い」

「ハハッ

それもそうだな」

そうだ、俺にはこの先一年の記憶が有るんだもんな、それに、こっちのSOS団は『世界の面白いことを探す団』って事にしてるしな。

「それじゃあ、力のことをハルヒに話して良いのか？」

「あまり推奨出来ない。

予測出来ない事態が起こるかもしれないから」

「そこは同じなんだな」

それにしても、

「今回はホントにありがとう長門」

「わたしはわたしの役割を果たしただけ」

「それでもだ」

「・・・構わない」

この反応は照れてるのか？
よく解らん。

「そう言えば、どうやって長門はこっちに来たんだ？」

「まだ世界どうしはそこまで離れていない。
けど、わたしでもこちらに来られるのはこれで最後。
それでも、世界がまた近づいたら来られるかもしれない」

「そうか・・・」

また来られたら会いに来てくれよ。

歓迎するぜ」

「ありがとう」

・・・おっ。

空に亀裂が入ったな。

そろそろお別れの時間ってか。

「時間切れ

この空間が崩れる」

「ああ、解ってる。

じゃあな長門。そっちでも頑張れよ」

「あなたもこの世界で頑張って」

「お前ほど大変じゃねえけどな」

光が強くなってきた。
限界みたいだな。

「また会おう、長門」

長門は頷いてくれた。

……俺の部屋の天井だ。
さっきまでのことは夢じゃねえんだろ？

だがまあ。

これからの方針が決まったけど。

『SOS団で思いっきり楽しむ』

やっぱりこれしか無い。

今日は早めに学校に行くか……

第九章（後書き）

海「憂鬱編も後はエピログだけだな」

キ「ついに来たって感じだな」

海「まあね、長かったな。

次にやるのは暴走の野球大会だな」

キ「その前にエピログを書け」

海「解ってるよ。

それでは、感想などが有ればください。

励みになります」

海・キ「それではまた次回もよろしくお願いします」

憂鬱編エピローグ& a m p; 退屈編プロローグ（前書き）

海「今回も大変遅くなりました。ごめんなさい。

これを登校したらすぐに退屈編第一章に取り掛かります。
では、短いですがどうぞ」

憂鬱編エピソード& a m p; 退屈編プロログ

その後のことを少しだけ語ろう。

ハルヒはいつも通りだった。

まあ、今回は何も関係ないからな。

古泉とは休み時間に会った。

昨夜の閉鎖空間は『機関』で確認出来なかったらしい。

流石は長門（別世界）だな。

昼休みに顔を出した部屋には長門が居た。

こっちでも昼休みは本を読んで過ごしているようだ。
読んでいるのはラノベだが。

放課後。

ハルヒが掃除当番のため、先に部屋に着くと朝比奈さんが居た。
今日は珍しくメイド服ではなく、セーラー服だった。

理由を聞くと、

「上司からの命令です」

なんて事を言っていた。………どんな命令だったんだ？

後は何事もなく活動し、何事もなく終了した。

次の日には何時ものように町に出た。

・・・激戦（ペア決めのくじ引き）がまた有った。

たしか午前は古泉、午後はハルヒとペアだったな。

そして今、俺はとあるポスターを見ている。

商店街を歩いていたら偶然発見した物だが、
このポスターに書かれている物は見覚えがある。

そこには、

『第九回市内アマチュア野球大会参加募集のお知らせ』

と、書いてある。

そう、SOS団＋αで参加した大会だ。

今回も参加してみるか。

こっちでは、SOS団でたいした活動をしてないからな。

明日みんなに提案してみるか。

退屈編 第一章 前編（前書き）

海「野球大会導入編！」

キ「ついに退屈編だな」

海「そして、あの人達登場！！」

キ「ん？『達』？」

退屈編 第一章 前編

「野球大会に出るぞ！」

商店街でポスターを見た次の日、俺はSOS団部室でこう言った。

部室にはもちろん他の四人も居るのだが、ハルヒは口を大きく開けこちらを見て、長門は読んでいた本を落とし、朝比奈さんは惚けた表情をしていて、古泉は準備中だったオセロの駒をばらまいた。

・・・そんなに驚くことか？

「あ、あの、ほ、ホントにキョン君？」

「それはどう言う意味だハルヒ・・・」

「だ、だって、キョン君がそんな事を言い出すなんてとおくっても以外でさ・・・」

「長門・・・」

「キョン君は面倒くさがりですから・・・」

「まあ、強く否定は出来ませんが」

「それで、どうしてそんな事を？」

「まず落ちた駒を拾え、古泉。

・・・とりあえずこれを見てくれ」

俺は貰ってきたチラシを見せた。

「・・・なるほど。

役所が主催の野球大会ですか。

面白そうですね。

わたしは出てみたいと思いますが」

古泉の反応は良いな。

男の古泉は懐かしいなんて言ってたが、こいつはどうなんだ？

「はいっ！はっい！！

わたしも出たいっ！！」

長門も賛成か。

やり過ぎないように言っとなきゃな。

「わたしも構いませんよ」

朝比奈さんも大丈夫。

・・・大丈夫か？

「ハルヒはどうだ？」

「えっと、う、動くの苦手だけど、
頑張ってみる！」

こっちのハルヒは運動神経無いからな・・・

期待出来るのが二人、不安なのが二人か。
俺は、別に普通だろ。

「で、でも、あと四人足りないよ」

「そこは誰かに頼んでみる。
とりあえず谷口と国木田あたりだな」

「でしたら、わたしのお友達に声を掛けてみましょうか？」

「そうして貰えるとありがたいです」

朝比奈さんの友達と言ったら『鶴屋さん』だろうな。
あの人とこっちでは会ってなかったな。

「人数は多くても良いから俺も知り合いに声を掛ける。
お前らは三人は人集めしなくても良いぞ」

「そうですか。」

では、よろしくお願いします」

人数の都合はこれで良いだろ。

「それじゃ、練習に行くぞ」

「どこ行くの？」

「今日は野球部が休みらしいからな、校庭を借りようかと思ってる」

「ど、道具は、どうするの？」

「そこにあるだろ」

一応のために置いてあって良かったぜ。

「では、行きましようか」

のりが良いな古泉。

やはり野球部は休みだったようで、校庭で練習したが・・・

「予想通りだな・・・」

「あうう・・・」

長門と古泉は動きが良かった。

もちろん長門には情報操作を使うなと言った。それでも運動能力がかなり高かった。

古泉は少し前までソフトボールをしていたらしい。しかも、キャプテンだったと言っていた

反対に、ハルヒと朝比奈さんは全然ダメだった。

朝比奈さんは前回通り、飛んでくる球を避けてしまう。本人は捕ろうとしているみたいだが。

ハルヒは球を避ける事に加え、走ったら転ぶ。焦りが原因だと思うが。

軽いパニックになってるんだろうな。多分。

「ハルヒと朝比奈さん、試合大丈夫か？」

なんて思ってしまうのも仕方ないよな・・・

まあ、出るからには勝ってみせるさ。

たとえ相手が優勝候補でもな。

二日後、日曜日。

俺は市営グラウンドに居る。

他のメンバーはまだ来てない。

突然だが、実は少し不味いことになっている。

谷口と国木田は参加してくれる事になったのだが、前回メンバーの妹が昨日から熱を出して寝込んでいる。

急だったため、他に声を掛けている奴が居ない。

つまり、メンバーが一人足りない。

朝比奈さんが鶴屋さんともう一人連れて来たら良いんだが。

・・・誰か来たな。

「おはようございます」

「・・・・・・・・・・」

「おはようございます、朝比奈さん。

えっと、その人が・・・」

「はい、わたしのお友達です」

「・・・鶴屋・・・」

・・・・・・・・っは!?

「・・・・・・・・・・にほんブログ村・・・」

・・・鶴屋さん、なのか？

確かに表情が無い以外は外見が同じだし。

聞き間違いでなければ『にほんブログ村』って言ってたし・・・

「よ、よろしくお願いします、鶴屋さん？」

「よろしく・・・によろ」

長門みたいだな・・・

「みくる・・・あっち見てくる・・・よろ」

『よろ』って語尾なのか。

「分かりました。

あまり遠くに行かないでくださいね」

朝比奈さんが保護者のようだ。

「・・・・・・よろゝん・・・・・・」

・・・あれは性格の問題なのか？

疑問に思いながらも、人混みに紛れていく鶴屋さんを見ていた。

衝撃の再会から少し後、メンバーが集結したが、結局八人になってしまった。

「あ、あと一人、足りないよ？」

「ってかキョン。

お前、妹連れてくんじゃ無かったのかよ」

「・・・昨日の夜に熱出してな。
今日はこれない」

「じゃあ、どうするの？」

本当にどうしようか。

・・・・あいつならもしかして・・・

「みんな、

運動神経は微妙だが此処に来る確率が高い奴を知ってる。
そいつを呼んで良いか？」

「この際仕方ないです。

人数を揃えることの方が大切ですから」

「・・・分かった。

今から電話してみる」

こっちのあいつは変わってるのか？

・・・・繋がった。

「・・・よう、久しぶり」

『・・・本当に久しぶりだね。

僕はてつきり君に忘れられたと思っていたよ』

「そんなわけねえだろ」

『くくっ、たとえその言葉が嘘でも嬉しいよ。

それで？僕に何の用だい？』

「実は・・・・・・・・」

（説明中）

「・・・・・・・・って事で電話したんだが」

『はぁ・・・君は僕が四六時中暇だとも思っているのかい？
今日はたまたま暇だったわけだが・・・』

「うっ！わ、悪い」

『・・・・・・・・久しぶりに連絡してきたと思ったら・・・全く。
それで、僕はどこに行けばいい？』

「あ、ああ。」

市営のグラウンドだ」

『結構近いじゃないか。
分かった、すぐ向かう』

「すまん」

『・・・気にする事じゃないさ。
君と僕の仲だろ？

それじゃあ、そろそろ切るよ・・・・・・・・』

九人目も何とかなったな。

「・・・どうでした？」

「大丈夫だった。

今から来るらしい」

それじゃ、あいつが来るまで待ってるか。

退屈編 第一章 前編（後書き）

海「後編へ続く」

キ「待てー!!」

最後の電話の相手はもしかして・・・」

海「では次回もよろしくお願いします」

キ「おぉーい!!」

第一章 後編（前書き）

海「後編です。」

どうぞご覧ください」

第一章 後編

「すまない。」

随分と待たせてしまったようだね」

「いや、いきなり電話をかけたのは俺の方だからな。
お前が気にする事じゃない」

「くっくっく、相変わらずだね」

「おい。それはどう言う意味だ」

「おっと。気を悪くしたのだったら謝るよ。」

僕としては、君を褒めたつもりだったんだけどね」

「ああ、そうかい」

「くっくっく、やはり変わってないよ」

俺の主観だと、こいつと一年も会っていないんだよな。
向こうは三ヶ月ぶりぐらいなんだろうな。

「あ、あの、キョン君？」

「ああ、こいつは佐々木。」

俺の「親友」・・・だ」

「し、親友なの？」

「ええ。」

わたしと彼の関係を表す言葉は親友が最適だと思うわ」

「あ、あれ？話し方？」

「こいつは男女でしゃべり方を変えるんだ。
女には女口調。

男には俺の時みたいに変な口調」

「そう言う事よ、えっと・・・」

「す、涼宮、ハルヒ、です」

「涼宮さんね。」

何時もキョンがお世話になってるわ」

「い、いえ、わたしの方がキョン君にお世話になってます」

「佐々木、他の奴も紹介した方が良いか？」

「ああ、出来ればそうしてくれ。」

国木田君以外初めて見る顔だからね」

「了解」

～紹介中～

「・・・三人は確實。怪しいのが一人か・・・」

「何ぶつくさ言ってんだ？」

「!？」

い、いや、何でもない!!」

相変わらず変な奴だな。

「あ、あの、そろそろ受付に行かなくていいのですか？」

「ああ!! すっかり忘れてた。

古泉、終了まであと何分有る？」

「・・・五分切りました」

「やばっ!!」

急いで行ってくる!!」

「全く。要領の悪い所も変わってないね」

「うるせえ!!」

って、言い合ってる時間も無い。
走らんと間に合わないな。

「はあ。」

君の言葉を借りるなら『やれやれ』と言う所か」

エントリーには何とか間に合った。
本当にぎりぎりだったが。

そして、対戦相手は前回と同じ『上ヶ原パイレーツ』だ。
前回は勝ったが、長門の力で勝ったような物だからな。
今回はちゃんと俺達の力で勝とう。

こっちのハルヒは試合に負けたぐらいのことで
世界を終わらせようとしないうし。

「じゃあ、試合の前に出る順番を決めるぞ」

「なんだよキョン。」

そんなくらいもつと前から決めとけよ」

「半分が助っ人なんだから仕方ねえだろ。
特に佐々木なんて完全に予想外だったし」

「悪かったね、予想外で!!」

「痛っ!!」

す、すまん。言い方が悪かった。

「……と、とにかく、今から順番を決める」

「でもどうやって決めるの？」

「もしかしてくじ引きじゃないよね？」

「……当たりだ、国木田。」

「このアミダクジで決めようと思ってる」

「き、キョン君それはちよつと……」

「適當すぎない？」

「ああ、『よく当てはまる』って意味での『適當』だな」

「二回目!？」

「二回目なのですか？」

「確かわたしが入部した時でしたね」

「そんなことはどうでもいいから、早く順番を決めないのかい？」

「そうだね☆」

「それじゃあ、全員好きな番号を選んでくれ」

アミダクジ神の託宣によって決定した順番は、

一番	ピッチャー	長門有希
二番	ライト	朝比奈みくる
三番	センター	佐々木
四番	セカンド	俺
五番	レフト	涼宮ハルヒ
六番	キャッチャー	谷口
七番	ファースト	国木田
八番	サード	古泉一姫
九番	ショート	鶴屋さん

となった。

前回とは少し異なっている。

佐々木が入ってる時点で全く違うのだが。

そして、また俺が四番。

犯人はお前か？ハルヒ。

第一章 後編（後書き）

キ「順番違うんだな」

海「変わってる所が色々と有るからね」

佐々木（以後 佐）「僕が一番大きいだろうね」

キ「お前もここに来たか」

佐「作者が僕のファンらしいからね。

僕としても君と話したかったからね」

キ「そ、そうか」

佐「しかし、作者は僕の口調に苦戦しているようだが」

キ「まあ、変わってるからな」

海「では、次回はいよいよ試合」

佐「僕の活躍を見逃さないでくれたまえ」

キ「おまえ、体育の成績は微妙だったろ」

佐「・・・・・・・・」ガツッ！！

キ「痛っ！！」

海「そのカップルはほっというて」

キ・佐「「カップルじゃない!!」」

海「・・・感想が有ればください。

執筆の励みになります。

では、次回もよろしく願いします」

第二章 前編（前書き）

海 「大会本番!!」

キ 「まあ、やるだけやってみるさ」

第二章 前編

ついに上ヶ原パイレーツとの試合になった。

まずバッターボックスに長門が入って行った。

長門だったらまず打てるだろう。

「バッタービビってる♪」

・・・どこかで聞いたこと有るな。

「虎と竜の話ではないでしょうか」

「それか。」

「って、人の心を読むな」

「声に出でいましたよ」

コキン。

なんて、古泉と話しているうちに

長門があっさりと一球目を打っていた。

しかもツーベースヒット。

「さすがは長門さんですね。」

では、わたしも行ってきます」

「頑張ってください朝比奈さん」

正直、あまり期待はしていませんが。

そして予想通り三振で朝比奈さんは帰ってきた。
バットを振ったのがせめてもの救いだな。

「それじゃあ行ってくるよキャプテン」

「誰がキャプテンだ」

「くくっ」

三番、佐々木。

見逃し三振でアウト。

こいつに関しても予想通りってとこだ。
ずば抜けて運動ができるってわけじゃないしな。

「くっくっく、すまないね」

「いや、あの球が速いだけだ。
次は俺の番だな」

「が、頑張ってね、キョン君」

と、ハルヒに応援されたが、
全然打てる気がしない。

ビュン

カンッ

当たった!?

バットを振った自分でも驚きだ。

がしかし、ピッチャーゴロ。

俺がつく前に一塁に送球されアウト。

スリーアウト、チェンジだ。

「悪い、飛ばなかった」

「あ、当てただけでもすごいよ」

「その通りだ。」

君はもっと自分に自信を持ったほうが良い」

「そりゃどうも。」

じゃ、守備いくぞ。

相手に一点も取らせない。良いか」

「「「「「おーー!」」」」」

「・・・おー・・・」

鶴屋さん・・・やる気ありますか？

などと言った物の、やはり不安が強い。
前回同様外野が問題だ。

ライト 朝比奈みくる
レフト 涼宮ハルヒ

この二人だからな。

センターの佐々木は多分大丈夫だろう。
他の二人に比べれば。

なので、今回もライトに飛んだ球を俺が、
レフトに飛んだ球を鶴屋さんが捕球することにした。

鶴屋さんは大丈夫なのか？

そして問題はもう一つ。
それはキャッチャーの谷口だ。

別に谷口の問題が問題なのでは無い。
ただ単に長門の投げる球が問題なのだ。

おそらく長門は物凄い球を投げるだろう。
すごくやる気を出していたからな。

そんな長門の投げる球を谷口が捕れるのか心配だ。
最悪、骨が折れるかもな。

「よし！ いくよー！！」

「ちょ、ちょっと待ってくれ」

「どーん！！」

バアアアン！！

「ぬおおお！！！！！！！！」

あれは球を捕った音じゃないぞ。

ストライツ

「やったね☆」

「手があー！ 手があー！！」

・・・・・・谷口すまん。

あの様子じゃ最後まで持たないかもな。
長門に加減するように言っとくか。

そして、主に長門の活躍で0点でチェンジとなった。
外野までボールは届いていない。
相手は打ててピッチャーゴロまでだ。

現在のスコア0・0

しかし、谷口のダメージは甚大。
次の守備までに回復するか？

「う、ううゝ、キヨン君ゝ
わたしの無事を祈っててね・・・」

「何も死ぬわけじゃないだろ。
一応祈っててやるから行ってこい」

なんて言ってハルヒを送り出した。

結局、見逃し三振。

ただバットを持って立っていただけ。
球に全く反応出来ていなかった。

「・・・で、行けるか谷口？」

「正直しんどいが人が居ねえから行くしかないだろ」

六番、満身創痍の谷口。

二、三回バットにかすったが三振でバッターアウト。
あの状態にしてはよくやったな。

「やっぱりダメだったね。」

あの状態じゃ仕方ないっか。

それじゃあ、僕も行ってくるよ」

「ああ。頑張れよ国木田」

で、あっさり三振。

「あはは、僕もダメだったよ」

「あまり気にするな。」

さ、守備行くぞ」

「俺、次こそ死ぬかもな」

・・・ファイトだ谷口。

第二章 前編（後書き）

海「後編へ続く」

キ「・・・俺たち勝てるのか？」

海「さあ？」

第二章 後編 退屈編終了（前書き）

海「試合終了！」

キ「短いな」

海「あまり書くことないだろう？」

キ「まあ、確かに・・・」

第二章 後編 退屈編終了

二回裏をまたも無失点で抑え三回表になった。
なかなか良いペースだ。

そして、代償として谷口はまたも満身創痍だ。

「では、行ってまいります団長様」

「期待してるぞ」

「えっ、あ、はっ、はい！！／／／」

「・・・キョン・・・君って奴は・・・」

「どうした？佐々木」

「君はもうちょっと女心って物を理解したほうが良い」

「あ、ああ？」

「どう言うことだ？」

コキン

「あ、古泉さんが打ったみたいだね」

「マジか!?!」

あの球を打った!?!?
凄いな古泉。

「やりましたよ、キョンさん!?!」

「よくやったな!?!」

「はい!?!／／／」

「キョン・・・」ガツツ

「痛っ

俺が何をした?」

「自分の胸に手を当てて聞くんだね。
ところで、次は誰だい?」

「確か鶴屋さんじゃなかったか?」

さつきから姿が見えないが。

「・・・・・・・・・・」

いつの間にかバッターボックスにいた!

ビュン

コキン

・・・スペックは変わってないようだ。

がしかし、残念なことにキャッチャーフライに終わった。
打てただけでも凄いのだが。

「・・・よろこん・・・」

あっ、落ち込んでる。

「それじゃあ、鶴屋さんの敵討ち行ってくるよ☆
見てろよー!!」

「ある程度力抑えておけよ」

「わかってるって☆」

コキン

ヒットか。

これでワンアウトで一塁に長門、二塁に古泉。
しかし、次に続くのは朝比奈さん・佐々木・俺。
・・・ダメだな。

その後は朝比奈さん・佐々木でスリーアウトチェンジ。
残念だったな。

現在九回の裏。

時間制限は今回もあったが、回転が速いためまだまだ時間はある。

以前点数はお互い0点のまま。

「勝つためには1失点も許されない状況だ。
絶対守り切るぞ!!」

「」「」「おーー!!」「」「」

「・・・おー・・・」

「ははは、サヨナラこの世界」

・・・もう少し頑張ってくれ谷口。

ツーアウト、フルカウント、ランナーは無し。

長門は輝いていて、谷口は白くなっている。

長門が振りかぶった。

相手のバッターに緊張が走る。

そして、長門が投げようとしたその時、

ぐう

妙な音が響いた。

「あっ」

あ？

へな

コキン

長門――！！

長門の力がこもっていないボールは見事に打たれ、きれいな放物線を描きフェンスの向こうへ消えていった。

『チームSOS団』vs『上ヶ原パイレーツ』
長門のワールドピッチ(?)により1・0で1回戦敗退。

「ホントーにごめんね」

「別にいいさ。」

優勝候補相手にここまでやれたんだしな。
だが何であんな風になったんだ？」

「じ、実は」

遅く起きちゃって、朝ごはん食べ忘れちゃったんだよね／＼

／

「・・・はあ」

「うう」

朝飯食い忘れたって。

逆に食ってないのにあそこまで出来たのは凄いよな。

「まあ、今回は負けたけど楽しかったよな。

お前らはどうだった？長門は聞くまでもないが」

「わ、わたしは楽しかったよ」

「わたしもですね。」

何かの大会に出ることも久しぶりでしたし」

「わたしも楽しめましたよ。全然打てませんでしたけど」

「・・・楽しかった・・・」

鶴屋さんにも好評だったようだ。

「僕も面白いと思ったよ。」

谷口はどうだかわからないけどね」

「H A H A H A・・・」

谷口はもう駄目だな。

「で、お前はどうかだった？」

「僕だって楽しかったさ。」

久しぶりに君とも会えたしね」

「そうか・・・」

この後喫茶店で打ち上げするか？」

「さんせー☆」

声を上げた長門以外（谷口を除く）も賛成みたいだな。

「じゃあ行くか」

「「「「「おー!」」」」」

3回目か？

「・・・よろこん・・・」

鶴屋さん、もうちょっと語彙増やしましょうよ。

「w a w a w a」

お前はいい加減戻ってこい。

第二章 後編 退屈編終了（後書き）

海「って事で、さっさと退屈編終了」

キ「野球大会だけな」

海「次は笹の葉だな」

キ「あれか・・・」

海「でもその前に幕間とか外伝とか入れようかなと」

キ「どう言うことだ？」

海「原作に無いお前らの日常とか、他の作品と合わせてみたり・・・」

キ「合わせるってなんだ!？」

海「クロスオーバーとかじゃなくて、立ち位置的な意味で」

キ「結局よくわからんが。」

えーと、では、感想が有ればくださると嬉しいです。それによって俺たちの行動が変わるので・・・」

海「では、また次回も」

海・キ「「よろしくお願いします」」

並行世界 その二(前書き)

並行世界って言うか、他作品のキャラを再構成SOS団でやってみよう！

って事です。

今回は『生徒会の一存』です。

会長↓長門

知弦↓みくる

深夏↓古泉

真冬↓ハルヒ

杉崎↓キョン

となっていますが、

あくまでこれは立ち位置です。

並行世界 その二

長「長門有希のオールナイト全時空・エバーグリーンR!」

キ「な、何だ!？」

♪ オープニングBGM ♪

長「『こんぼっぽー!』皆、元気〜!？」

メンバーには抜き打ちで始まりました、

『長門有希のオールナイト全時・エバーグリーンR』!

今回はなんと、放課後、生でお送りしていきます!

喜緑さん、聴いてる?」

キ「喜緑さんって誰! いきなり私物化するな!
て言うかこれはなんだ!

いつの間にか目の前にマイクが置かれてるし!」

長「何って、タイトルちゃんと言ったじゃん☆

おおまかに言うラジオだよ」

キ「誰が聞くんだよ・・・」

長「情報統合思念体」

キ「マジか!？」

長「マジだよ☆」

ハ「思念体？」

み「凄いですね」

古「は、ははっ」

長「よし、これでオープニングはガッチリつかんだね♪」

キ「つかんだのか？」

長「それでは早速一曲聞いていただきますしよう」

キ「曲流すのか・・・」

長「キョン君。『もってけセー〇ーふく』いける？」

キ「いけるか!!」

長「しょうがないな」

じゃあこれかけよお☆」

キ「曲あるんじゃないか!!」

長「ウィン〇ウズの起動音」

♪ 起動音 ♪

キ「もつと何か有ったろ!!」

長「じゃあ、早速コーナー行くよっ♪」

キ「コーナーまであるのか」

長「古泉さんと涼宮さんは耳栓しててね♪」

古「はい。わかりました」

ハ「な、なんだか嫌な予感が・・・」

長「よし、耳栓したね。

・・・じゃあ・・・

『定められた一言』コーナー!」

キ「なんだそりゃ」

長「つまり、キョン君と朝比奈さんの二人は

リスナーが決めた一言だけしか喋っちゃいけない!
ってコーナーだよ☆」

キ「まあ、やってみるさ」

み「思考の必要がないので、楽と言えば楽ですよね」

長「今回の一言は・・・。

キョン君が『むしろ古泉だろう』。

朝比奈さんが『このSOS団だけに、ですね』ですっ！」

キ・み「汎用性低っ！」

長「と言う訳で、行ってみよう♪」

キ・み「行くの!？」

長「二人とももう良いよ」ツンツン

古「あ、もう良いのですか」

ハ「な、何なんだろう？」

長「それじゃあ、わたし以外の四人でフリートークしてね」

古「で、では、何か提供できる話題はないですか？」

キ「むしろ古泉だろう」

古「は、はあ。それは確かにわたしの役割ですが。

それでは、何か好きなものはありますか？

以前聞いたときは、ポニーテールが好きと言っていましたか——」

キ「むしろ古泉だろう」

古「っ!!! えっ!?! あ、あの!?!? はう／／／」

ハ「こ、古泉さん!？」

起きて! わたしを一人にしないでえ!!」

古「っは!!」

危なかったです。色々と。

そ、そういえばそろそろ梅雨ですね」

ハ「う、うん、そうだね。

朝比奈さんっていつも天気をチェックしてましたよね?
今日は雨が降るんですか?」

み「このSOS団だけに、ですね

ハ「こ、ここだけにですか!？」

どう言う異常気象ですか!?
室内に雨が降るんですか!？」

キ「むしろ古泉だろう」

古「むしろわたしが降るんですか!？」

み「このSOS団だけに、ですね」

古「SOS団だけでも嫌ですよ!？」

長「3・2・1・はい、終了☆

四人ともお疲れ様♪

横で見てて面白かったよ」

キ・ハ・み・古「」「やつと終わった・・・」

長「もうお別れの時間が来ちゃいました。

残念だな」

では、次回の放送もお楽しみに☆」

キ・ハ・み・古「」「またやるの!？」
「」「」

長「それじゃあ、まったね」

並行世界 その二（後書き）

・
・
・うん。
なんかごめん。

日常編 その一（前書き）

キ「これは何だ？」

海「お前らの日常を短編集みたく書いた物だ」

キ「つまんないと思うぜ？」

海「まあ、キョン視点以外もあるからな」

キ「マジでか？」

海「マジで」

日常編 その一

1―とある日、教室、英語の授業にて。

こ、こんにちはっ。

す、涼宮ハルヒ、です。

今は英語の授業中なんですが・・・

前の席でキョン君が眠っています。熟睡です。

・・・先生に注意されるんじゃないかな？

「そこ、退屈だからって寝るなよ」

やっぱり。

「はっ！！す、すみません」

「じゃあついでにこの問題の答え言ってみろ」

そうやって先生が示したのは、

『不規則に変化する過去・過去分詞形』

の欄にあるdoの過去形です。

「えっと、didですか？」

「当たり前だ。」

おまけでこっちもやってみろ」

今度はd oの過去分詞形です。
答えは確かdoneだっけ？

「え、えっとー・・・」

頑張れキョン君！！

「あ、d oの過去分詞は

『ドゥーン』

です」

教室の時間が止まった様な気がしました。

「あれ？違いましたっけ？」

・・・キョンくん

2―とある日、放課後、部室にて。

やつほ

みんなのアイドルユキリンだよ☆

今は部室に走って向かってる途中
絶対一番になってみせるよ♪

扉を開けて誰も居なかったら金メダルだよ!!
凄いよ!!

ガチャ

「って、ああ〜!!」

「入って来るなり何を騒いでんだ？」

あれ? もうキョン君が居る!?

そんな、これじゃ、銀メダルだよ・・・

「ううう」

恨むよ〜キョン君〜」

「何をだよ」

まあ、そんなのど〜でも良いんだけど☆
キョン君と色々な話しをする方が大事だしね〜♪

「そう言えば、キョン君一人〜？」

涼宮さんは〜」

「あいつは今週の掃除当番だ。
教室担当だから結構掛かるんじゃないか？」

「そ〜なんだ〜」

じゃあ、もうちょっとキョン君と二人っきりか〜／／／

何を話そうかな〜やっぱ「おや、二人ともお早いですね」……り

「お前が少し遅かったんじゃないかねえのか？」

「そうかもしれませんがね。」

では、オセロでもしませんか？」

「たまには将棋でもしないか？」

「ええ、良いですよ」

「まっ、お前相手に負ける気はしないが。

……どうした長門？」

「こゝいゝずゝみゝさゝんゝ」

「な、何でしょうか？」

何でしょうかじゃないよ！？

キョン君との二人っきりの時間を邪魔したんだよ！？

この恨みは恐ろしいよゝ

だから、

「パーソナルネーム古泉一姫を適正と判定。

当該対象の「ちよつと待て。それは洒落にならん！！」……
ぶゝ」

「あ、あの、長門さんは今何を？」

「……お前を消滅させようとしてた」

「・・・え？」

「冗談に決まってるじゃん・・・」

「さっきも言ったが洒落にならないぞ」

確かに半分本気だったけどさゝ

3―とある休日、午前中、喫茶店にて。

またこの時間がやってきたな。

毎度恒例の『ペア決めくじ引き』。

毎回こいつらの目が血走って見えるんだよな。
何でなんだ？

「それじゃ、好きなのを引いてくれ」

「「「「・・・」」」」

む、無言が怖いんだが。

視線反らしところ。

あれ？デジャヴ？

って事は、もしかして。

・・・やっぱりな。もうすでにクジは一つしかない。

しかも印付き。

そして、あまり上げたくないが顔を上げると
前回同様、随分と斬新な事になっていた。

今回のペアは古泉だな。

何で泣いてるのは知らんが。

他の三人はテーブルどころか、
座っている長いすに突っ伏している。
つまり、倒れてる。

「それじゃ、行きましょっ!!」

「古泉・・・キャラ変わってないか？」

妙にハイテンションだな。

それに比べ三人は・・・

「「「・・・・・・・・」」」

「返事がないのでただの屍のようですね」

「古泉!？」

「特に長門さんは放っというて早く行きましょっ」

「お前この前のことまだ根に持ってるのか・・・
三人とも、会計は済ましとくからな」

「「・・・・・・・・」」コクン

返事はするのか。

「それじゃ行くか、古泉」

「はいっ!!」

あいつら置いていって大丈夫か？

日常編 その一（後書き）

海「山無し、落ち無しの短編集」

キ「ぐだぐだだな」

海「でも実際普通に暮らしていて
そうそうに変なことに巻き込まれないだろ」

キ「まあ、確かにな」

海「次は笹の葉編を書きます」

キ「アレか・・・」

海「では、感想が有ればください。
執筆の励みになります」

海・キ「では、次回もよろしくお願いします」

日常編 その二（前書き）

海「日常編です」

日常編 その二

1―とある休日、親友と、商店街にて。

やあ。

今回は僕が語りをさせてもらう事になった。
キョンのように出来るか不安だがよろしく頼むよ。

さて、今日は日曜日。

一般的には学校が休校となる日だ。
それは僕たちの学校も例外ではない。

宿題も予習も昨日のうちに済ませてある。

ああいう面倒なのは早めに済ましておくべきだと僕は思っている。
キョンは最後までため込むタイプだったけどね。

よって今日という日は一日中暇と言う訳だ。

そんな僕は今、商店街に居る。

しかし、商店街に来たのは良いがする事がない。

欲しい物がある訳でも、したいことがある訳でもない。
本当に何もすることが無いんだ。

こんな時こそキョンから電話が掛かってくれば良いんだが。
そうすれば大変有意義な時間を過ごせるというのに。
もっとも、僕が思ってる以上に彼も忙しいのかもしれない。

「はあ」

「溜息をつくると幸せが逃げてくぞ」

「誰のせいだと思っているんだい」

「俺が何かしたか？」

「別に君は悪くないさ。

僕の勝手な思い込みが悪いのさ」

「なんだそりゃ」

待て、今僕は誰と話している？

いや、大体の見当は付いている。

しかしそんなはずはない。

そう、きっと僕の脳が勝手に作り出した幻聴さ。

後ろを向けば誰も居ない・・・

「どうした？俺の顔に何か付いてるのか？」

「・・・やっぱりキョン！？」

「それはどう言う意味だ佐々木」

幻聴じゃない！？

本物のキョンだよ！？

な、なな、なんでこんな所に！？

「い、いきなり話しかけないでよ」

「そうか、それは悪かったな。

そこまで動揺するとは思ってなかったし」

「わ、わたしは動揺なんてしてないわ」

「話し方が違うだろ」

しまったー！！

落ち着きなさいわたし。じゃなくて僕。

キョンの前では親友としての僕でなきゃいけないんだ。

「す、すまない、取り乱してしまったようだね」

「別に良いけどさ。」

それで、お前は何で此処に居るんだ？」

「暇だったからね。」

町中を歩いていたら此処に着いただけさ」

まさか君と会うとは思ってなかったけどね。

「そう言う君はどうして此処へ？」

「ほら、そろそろ七夕だろ。」

そのときにSOS団で何かしようと思ってな」

「何か良い物はないか探しに来たって事かい？
それだったら僕も手伝うよ」

「そいつは嬉しいが。」

お前は何かしたいこと無かったのか？」

「さっきも言った通り、

たまたまここに来ただけで特に用事はないのさ」

「そうか。」

じゃあ、行こうぜ」

「ああ」

七夕か。

すっかり忘れていたよ。

最近は学校と塾で忙しかったからね。

そんな事を気にする暇が無かったと言う訳か。

しかし、七夕と言えば・・・

「君は去年の七夕を憶えているかい？」

「あ、ああ。（去年なんて知らねえよ）」

「・・・じゃあ、最後に僕が言った言葉は聞こえた？」

「す、すまん、分からない。（最初から知らないが・・・）」

「そうか・・・なら良い。」

確かに君は最後に眠ってしまったからね」

「・・・何か悪いな。」

その時お前はなんて言ったんだ？」

「くく、秘密さ」

「そうかい」

聞こえていなかったか。

なんだか安心したような悲しいような気持ちだね。
僕だってあれはかなり勇気が必要だったのに。

今一度此処で言うのは無理だ。

だってさ、君たちは聞かれてなかったからって
もう一度する事が出来るかい・・・

『告白』なんて。

「さあ、まずはどこに行くんだい？」

だから、聞こえなかった以上はこのままで良い。

「そうだな、雑貨屋で竹の代わりになる物を探すか」

君の『親友』でね。

「そうか」

だけど、もし、願いが叶うなら。

何時までも君の隣に居たい。

『彼女』として。

こんなちっぽけな僕の

いや

わたしの願いを叶えてください。

お願いします織り姫様。彦星様。

日常編 その二（後書き）

佐「す、少しばかり恥ずかしいね。

所詮僕も女って事か」

海「次こそは笹の葉編です」

佐「また当分僕の出番は無しか」

海「だから今回出したんだけどね」

佐「そう言うことだったのか。

では、感想があれば送ってくれたまえ。

作者の更新スピードが上がるかもしれない」

海・佐「ではまた次回もよろしくお願いします。」

佐「僕の出番は無いけどね・・・」

笹の葉編 第一章 前編（前書き）

海「笹の葉ラプソディー！！」

キ「ついに入ったな」

笹の葉編 第一章 前編

七月七日。

そう今日は世間一般的に七夕と呼ばれる日だ。

「と、言うことで、七夕をするぞ」

「最近キョン君がおかしいような気がするよお・・・」

それは違うぞハルヒ。

ただ単に色々と吹っ切れたただけだ。

「此処に竹（偽）と短冊があるから、各自願い事を書いて吊してくれ」

「はーい！！」

・・・あれ？何で短冊が二つ有るの？」

「織り姫と彦星はそれぞれ、ベガとアルタイルと言う。

ベガは約二十五光年、アルタイルは約十六光年距離がある。

つまり、願い事が叶うのは

書いてから二十五年後と十六年後だ。

だから二つ用意しておいた」

「つまり、二つの短冊にはそれぞれ

二十五年後と十六年後に叶う願いを書けば良いのですね」

「そう言うことだ。」

説明ありがとう古泉。

それじゃあ、早速書くぞ」

「」「おー!!」「」「」

なんだかんだでのりは良いよな。

・・・さて、こんなもんだろ。

竹が小さいが全員の短冊を吊すとちょうど良いな。

ちなみに、俺は前回書いたのと違うことを書いたぞ。
一年もたてば考え方も変わるのさ。

俺が書いたのは、

『何時までもSOS団が続きますように』

『妙なことに巻き込まれませんように』

の二つだ。

他の奴らのでも見てみるか。

まずはハルヒのだな。

流石に前回は前回みたいなことは書いてないだろ。

えっと一つ目は、

『人見知りが治っていますように』

・・・何かそれは違くないか。
で、もう一つは、

『大好きな人と何時までも一緒に居られますように』

『大好きな人』か。

ハルヒにもそんな奴が居たんだな。

「・・・あうう／＼／＼」

次は長門のを見てみるか。

・・・あれか？ 凄い達筆だし。

『何時までも此処に居られますように♪』

『鈍感なあの人が振り向いてくれますように☆』

一つ目は何となく分かるが、二つ目は何だ？

「そういう所が鈍感なんだよ・・・」

あれは・・・朝比奈さんだな。

『お料理が上手になりますように』

去年もこんな事書いてたな。
料理出来ないのか？

それで、二つ目は、

『早く恋愛解禁にしてください』

・・・なんだあれ。

しかも『早く』って今叶えて欲しいことじゃないですか。

「他に思いつきませんでしたので」

で、最後に古泉だ。

こいつも以外と字が汚いな。

『世界平和』

『家内安全』

前回と変わらない。

なぜだか分からんが拍子抜けだな。

「そ、それしか書く物が無かったんですよ」

「なんだかさ」

「ん？」

「すっごく七夕って感じるね♪」

「そうだな」

竹を飾ったあと、

装飾品が余ったため部室内全域に飾り付けた。

その飾り付けられた部室を見て長門が言った一言には
俺も大いに賛成する。

「あ！そうだ〜そうだ〜

これあげるね☆」

「・・・短冊？」

やっぱり今回も三年前へGO!!か・・・
できれば勘弁して欲しかったが。

「それなくしちゃダメだよ〜
呪われるからねっ☆」

「何の呪いだよ・・・」

「冗談だよ〜じょうだん♪」

「はあ。

・・・じゃあ、今日はこれで解散にするか」

「うん。

それじゃあね、キョン君」

「じゃあね〜キョン君っ!! ☆」

「では、また明日会いましょうキョンさん」

ボタン

ハルヒ・長門・古泉は出て行ったが、
朝比奈さんは部屋に残ったままだ。

これは決定だな。

「あの、朝比奈さんは帰らないんですか？」

「あ、はい。」

少しキョン君に用事があるの」

「用事ですか」

「ええ。」

あの、すごく言い辛いけど。

わたしと一緒に三年前へ行ってくれませんか？」

やっぱりか。

こうして俺が朝比奈さんと共に、

三年前へタイムスリップする事が正式に決定した訳だ。

やれやれ。

笹の葉編 第一章 前編（後書き）

海「今回もキヨンは三年前にタイムスリップ」

キ「またか・・・」

海「いや、しないと話し進まないでしょ。

これは結構重要な回だし」

キ「まあな」

海「では、次回『第一章 後編』

舞台が三年前になります」

キ「お楽しみに」

第一章 後編 笹の葉編終了（前書き）

海「後編！」

キ「中学生のハルヒが出るぞ」

第一章 後編 笹の葉編終了

目を開けるとそこは三年前だった。

なんて『雪国』みたいなモノログだが、
実際そうなのだから仕方がない。

今俺が居るのは何時も通り光陽園駅前公園だ。
なぜ毎回朝比奈さんがらみは此処なのだろう。

そして、俺を三年前に連れてきた張本人である朝比奈さんは
俺を膝枕したまま眠っていらっしやる。
役得だなこれは。

「・・・こほん。」

そろそろ良いですか？」

「あ！朝比奈さん（大）！？」

「やっと気がつきましたね。
さっきから見えていたのに」

「す、すみません」

「まあ良いです。」

では、早速キョン君を呼んだ理由を話しますね」

「お願いします」

前回と同じだとは思うが。

「今からキョン君に向かって欲しいところが有ります」

「どこでしょうか」

「東中学校です」

やっぱりな。

「そこで『とある人』を助けて欲しいの」

「・・・・・・・・分かりました。やってみます」

「ありがとう、キョン君」

なんでか朝比奈さんの頼み事は断れないんだよな。

何時もお世話になってるからかもしれないが。

「それで、この眠っている朝比奈さんはどうすれば・・・・」

「背負って行ってね☆」

・・・行き成り『☆』使ったなこの人。

「はあ・・・了解です」

「それじゃあ、頑張ってねキョン君」

そう言い残して朝比奈さん（大）は立ち去った。

「東中学校・・・此処だな」

朝比奈さん（大）と別れてから数分後、
俺は朝比奈さん（小）を背負い目的地にたどり着いた。

「さて、ハルヒはいるか？」

今のところそれらしい影は見えないが・・・

ガサッ

何だ今の音？

こっちの方からしたよな。
行ってみるか。

音の出た方に足を向けると、
校門の近くで丸くなっているハルヒが居た。

「何やってるんだ？」

「ひゃう！！」

「・・・つまり、

教室に忘れ物をしたからこんな時間に取りに来たと」

「うう・・・はい・・・」

とりあえずハルヒと一緒に校内へ不法侵入したあと、
なんで学校に来たのか聞いたが・・・

「まあ、このハルヒはあの地上絵を書くことは無いか」

「？」

「何でもない。

っと、教室は此処じゃないか？」

「は、はい、此処です。

あ、あの・・・」

「ああ、待っててやるから」

「ありがとうございます！！」

うん。

こっちのハルヒはこの頃から素直で良い子だな。

無事に忘れ物を持ってきたハルヒと合流し、
校門へ戻る最中、

「お、お兄さんは宇宙人がいると思いますか」

と、ハルヒが聞いてきた。

お兄さんか・・・良い響きだ。

ミヨキチぐらいしかそう呼ばないからな。

おっと、質問に答えるか。

「いるんじゃないのか」

しかも、凄くハイテンションの・・・

「じゃあ、未来人はどうですか？」

「まあ、いてもおかしくはないな」

俺は三人ほど知っている。

「超能力者なら？」

「配り歩くほどいるのかもな」

こっちではどの位いるんだろうな。
後で古泉に聞いてみよう。

「異世界人は？」

「いるぞ。案外近くに」

俺は異世界人に近いだろうな。

「そうですか・・・」

そう言えばこんなやりとりもしたな。
凄く懐かしい気分だ。

「そ、その制服って北高校のすよね」

「ああ、そうだ」

「・・・お兄さんの名前は？」

もちろん名乗る名前は決まっている。

「ジョン・スミスだ」

「・・・・・・・・ぎ、偽名ですよね」

「匿名希望って事だ」

「そ、そうですか。」

と、所で、背負っている人は・・・」

「俺の姉ちゃんだ。」

途中で眠っちまってな」

「そうなんですか。」

あ、あの、色々と変なことを聞いてしまっでごめんなさい」

「別に良いさ。」

俺は気にしてない」

なんて話してるうちに校門まで来ていたようだ。
そろそろお別れだな。

「それじゃあ、気をつけて帰れよ」

「はい、お兄さんも気をつけて帰ってくださいね」

「ああ、ありがとう」

うん・・・やっぱり良い子だな。

ハルヒと別れた後は前回同様

長門に頼んでコールドスリープさせて貰った。

ん？端折るなって？

別に良いだろ、特筆することも無かったんだし。

強いて言うなら、長門の性格は三年前から変わっていない。
って事ぐらいだぞ。

とりあえずこれで今回の朝比奈さん（大）の依頼は終了か。

さて、俺は後何回三年前に戻るんだろうね。
出来ることならもうしたくないが。

そんな事を考えながら俺は部室に向かった。

第一章 後編 笹の葉編終了（後書き）

海「って事で笹の葉編終わっちゃったよ」

キ「まあ、原作でもそんな長くないしな」

海「次は何だっけ？」

キ「VS. カマドウマだろ？」

海「ああ、そうだったな」

キ「ではまた次回もお楽しみに」

海「・・・日常編挟むかも」

キ「・・・マジで？」

質問の様な物

海「どうも、海人です。

『涼宮ハルヒの再構成』を読んでいただきありがとうございます」

キ「それで？何で此処にお前が居るんだ？」

海「まあ、読者の皆様にちょっとした質問があつてな・・・」

キ「なんだ？」

佐「それは、僕を出すのが今の時間軸だと難しいから、
中学校編を書いても良いかって事だよ」

キ「うお！！佐々木！？」

海「と、まあ、佐々木が言った通り、
お前らの中学校時代の話しを読みたいですか？
って読者様に聞きたいんだよ」

キ「そう言うことか」

佐「くくっ、僕のファンが居たら是非ともお願いしたいね」

海「えー、では、中学校編を書いても良いんじゃない。
と言う人が多かったら書きたいと思いますので
是非一言ください。期限はありません」

前回の結果

海「どうも、海人です。」

前回中学生編を書いても良いか質問したのですが・・・」

キ「どうだった？」

海「『読んでみたい』と言う読者様が多いので、
やってみようかと思っています」

キ「やるのか・・・」

海「駄文になるとはいますがよろしくお願いします」

佐「さて、これで僕も安泰だね。

原作の話に出られなくても、

中学校時代の話しだったら主役な訳だし」

キ「まあ、俺達が中心になるからな」

海「では、完成したら載せます」

海・キ・佐「」「どうぞよろしくお願いします」「」

中学生編 その一(前書き)

海「とりあえず中学生編書いてみました」

キ「まあ、つまらないと思うが読んでくれ」

中学生編 その一

1 一夏、二人、帰り道にて。SIDE…K

「くく、毎回すまないね。

途中まで送って貰って」

「気にするな。

俺も話し相手が居て丁度良いからな」

今、俺は佐々木を荷台に乗せて二人乗り中だ。

確かこれって違反だったような・・・

まあ、そんな事どうでも良いな。

こいつと二人乗りをして帰るのは、もはや習慣になっている。

春先にバス停まで乗せていったことが切っ掛けだ。

以来、そのバス停まで二人乗りで行くようになった。

「そう言って貰えると僕としても気が楽だよ。

もしかしたら君にとって迷惑だったかもしれないと思ってたからね。

君は人が良いから大概のことは断らないだろう」

「そんな事ねえぞ。

俺だって嫌な事だったら断るさ」

「くく、その嫌な事が少ないだろ。君の場合」

「まあ、否定はできん」

言われてみればあまり嫌な事はないな。
大概はどっちでもいい事ばかりだし。
結局はやっかいごとを引き受けちまうんだよな。
やれやれ。

「と、所で、そろそろ夏祭りがあるね」

「あの神社のやつか。
もうそんな時期なんだな」

すっかり頭から抜け落ちていた。

「そ、それでだね、もし良かったら、
僕と一緒にいかないかい？ 夏祭りに」

「そうだな・・・
いいぞ、その日予定もないし」

「ほ、本当かい！？
その約束、破らないでくれよ」

「ああ、わかってる」

夏祭りか・・・

去年は妹に連れられて行ったな。
今年は佐々木か。

それにしても、凄い喜びようだな。佐々木。
そんなに夏祭りに行きたかったのか？

まあ、俺としても一緒に行くのは楽しみだ。
こいつだって一応美少女ってやつだからな。
男として嬉しくない訳無いさ。

楽しみだな、夏祭り。

2 夏、二人、帰り道にて。 S I D E ∴ S

「くく、毎回すまないね。
途中まで送って貰って」

「気にするな。
俺も話し相手が居て丁度良いからな」

僕は今、キョンの運転する自転車の荷台に座っている。
肌にあたる夏の夜風が心地よい。

・・・ちなみに、二人乗りは違反だからね。真似しないでくれよ。

こうして二人乗りを始めたのは、

僕が少しふざけて彼に、

『僕の利用しているバス停まで結構な距離があるんだが、其処まで君の自転車に乗せて貰えないかい?』

なんて言ったのが切っ掛けとなった。

それ以来こうして塾の帰りに二人乗りする事が習慣となった。あまり褒められた習慣では無いのだけれども。それでもキヨンと話しをする時間が増えるから目を瞑ってくれ。

「そう言って貰えると僕としても気が楽だよ。

もしかしたら君にとって迷惑だったかもしれないと思ってたからね。

君は人が良いから大概のことは断らないだろう」

「そんな事ねえぞ。

俺だって嫌な事だったら断るさ」

「くく、その嫌な事が少ないだろ。君の場合」

「まあ、否定はできん」

そんな事を言っているが、

僕が知る限り彼が人の頼み事を断った所を見た事がない。まあ、数ヶ月しか見ていないが。

なんだかんだ言いながらも最後には引き受ける。

めんどくさそうにしながらも頼まれことはちゃんとやる。

君はそう言う人間なんだよ。キヨン。

そう言えば、近々夏祭りがあるみたいだね。
塾に行く途中も準備しているのを見かけたし。

だが、僕には関係ない。

夏祭りに行くなら家でゆっくりとしていたい。
どうせ一緒に行く人もいないしね。

・・・いや、正確には、一緒に行きたい人はいる。

それはもちろん、キョンの事だが。

彼の都合はどうなんだろうな。

お、思い切って誘ってみようかな。

今だったら自然な流れで話せそうだし・・・

「と、所で、そろそろ夏祭りがあるね」

「あの神社のやつか。

もうそんな時期なんだな」

「そ、それでだね、もし良かったら、

僕と一緒に行かないかい？夏祭りに」

よし！言えた！！

さあ、返事をしてくれキヨン。

「そうだな・・・

いいぞ、その日予定もないし」

っ!!

「ほ、本当かい!?

その約束、破らないでくれよ」

破ったら承知しないよ!

具体的には、もう君に勉強を教えないよ!

「ああ、わかってる」

はあ、断られなくて良かった。

君は気づいていないようだけど、

僕は今までで一番緊張したんだよ。

ただ君を夏祭りに誘うだけなのに・・・

いや、『君だから』が正しいか。

僕にとっての君は其処まで大きな存在なんだよ。キョン。

早速帰ったら準備をしなきゃ。

やっぱり浴衣が良いのかな?

でも、着方がわからないし・・・

お母さんに聞いてみよつと。

中学生編 その一（後書き）

佐「夏祭り本番はどうしたんだい？」

海「それはまた別の機会に・・・」

キ「ただ単に思いつかなかったただけだろ」

海「・・・まあな」

佐「はぁ・・・出来るだけ早く仕上げてくれたまえ」

海「頑張ります」

キ「では、感想があれば送ってください」

海・キ・佐「」「それでは次回もよろしく願いします」「」

佐「くくく、本当に早く書き上げてくれよ・・・」

海「わ、わかったから、その手に持ったハサミを置いてくれ」

キ「何やってるんだあいつら」

ミステリックサイン編 第一章 前編（前書き）

海「ミステリックサインだな」

キ「ハルヒはロゴを書いてないぞ」

ハ「キョン君、ロゴって？」

キ「い、いや、何でもないぞ」

海「では、ミステリックサイン編どうぞ」

ミステリックサイン編 第一章 前編

・・・やっと、やっと終わったぜ。

ついに終わったんだな。悪夢のような五日間が。

そう、一学期末テストが！！

一年前と同じ問題だから大丈夫だろうと思うかもしれないが、そんなに細かい所まで憶えちゃいない。元より成績が悪い事も要因だが。

後は赤点で無い事を祈るだけだな。

ちなみに、前回よりは手応えがあるぞ。

さて、ハルヒを引き連れてSOS団部室に向かうか。

「つーことで、さっさと行くぞ」

「ち、ちょっと待って」

こいつはこっちの世界でも頭が良い。

すべて二十分まえに解き終わっていた。

さらに、終了時間まで見直しまでしているようだ。

「お待たせ。もう良いよ」

「んじゃ、行くか」

早く朝比奈さんの煎れたお茶を飲みたい。

「そうだ、キョン君。

最近流行ってる都市伝説が有るみたいなんだけど知ってる？」

「・・・いや、知らないな。

そう言うのはあまり興味が無くてな」

少し嫌な予感がするんだが・・・

「そっか。

わたしも人が話しているのを聞いちゃっただけだし」

「どんな都市伝説なんだ？」

「えーと、確か、『神隠しサイト』だったかな？」

「なんだそりゃ？」

「詳しくは知らないんだけど、

深夜にパソコンを使っていると行き成りURLが出てくるんだって。

それで、それをクリックしちゃうと

『神隠しサイト』って所に飛んじやうんだって。

で、そのサイトを見た人が神隠しに遭っちゃうって言う話しだよ」

「・・・とんでもない話しだな」

「とっても怖いよね・・・」

「どう言う事だ？」

長門（別世界）がこっちではハルヒの力が強くない限り
とんでもない事態に巻き込まれないって言っていたが・・・

「こっちの長門に相談してみるか。
頼りになる所は変わってないからな。」

「・・・って事らしいんだが、
お前はと思う」

活動終了後、長門を呼び止めて都市伝説の事を相談した。
「こっちでもハルヒに聞かれちゃいけないらしいし。」

「うーん、わからないな
もうちょっと詳しい情報は無いの？」

「最近流行ってる話みたいだから
クラスの奴に聞けばもうちょっと色々引き出せるかもな」

「そっかあ」

わたしも調べてみるよ☆」

「ああ、頼む。

一応聞いておくが、ハルヒの力が影響してるって事は・・・」

「多分無いよ。

観測を開始してから今まで力の強さは変わってないから」

「そうか・・・」

やっぱりハルヒじゃ無かったか。

だとしたら、原因は何なんだ？

こんな事になっちまってる原因は・・・

可能性としては宇宙人サイドの干渉だな。

しかし、何のために？

「・・・とにかく出来る事からやっていくか。

長門にばかり負担を掛けたくないしな」

次から朝比奈さんと古泉にも混じってもらおう。

何か知ってるかもしれないし。

とりあえずは情報収集から始めるか・・・

ミステリックサイン編 第一章 前編（後書き）

海「変えました」

キ「変えたんだな」

海「まあ、良いんじゃない？

・・・ってこんな所で話し込んでる場合じゃない。
俺は逃げるから後よろしく!!」

キ「あ！おい!! 待てって!!

いったい何から逃げてるんだ？

・・・あー、感想があつたら送ってくれ。

今後の励みになる。

では、作者が居ないがこのへんでさよならだ。

また次回もよろしくな」

佐「くっくっく、やっと見つけたよ。

観念した方が良い。

どうせ君はもう逃げられないんだから」

海「ま、待て、話せばわかる。

だからその右手に持ってるハサミを置いてくれ」

佐「夏祭り本番の話しを早く書き上げてくれと言ったのに、これは本編じゃないか。

僕は早くと言ったんだよ。聞こえなかったのかい？」

海「いや、こっちも書かなきゃダメだし。

それに次もミステリックサイン編だぞ・・・」

佐「・・・・・・・・・・」ブオン！！

海「ぎゃあああああああああ！！！」

キ「佐々木・・・」

第一章 後編（前書き）

海「はあ、はあ、はあ、

こ、後編、です、はあ、はあ・・・」

キ「おっ、佐々木を巻いたのか。

・・・大丈夫か、作者？」

第一章 後編

長門に相談してから一週間が過ぎた。
未だ有力な情報は得られていない。

「お前らの方はどうだった？」

「『機関』も全力を挙げて調べていますが・・・」

「ダメか」

「はい」

ちなみに今、俺と古泉は何時もの喫茶店で話している。
これはデートなどではなく、他のSOS団員を待っているだけだ。
試験休みだから金曜日でも探索が出来るからな。

「まさか本当に都市伝説なのかもな・・・」

「だったら嬉しいのですが。
しかし・・・」

「ああ。」

コンピ研の部長さんが神隠しに遭ってるからな・・・」

今回もコンピ研部長さんが失踪している。

こっちの世界の部長さんとは良い関係を築けていた。
解らない事を聞きに行くと丁寧に教えてくれる。

あの人は凄くいい人だぞ。

「長門が確認したらしいが、
情報統合思念体でもないらしい」

「そうですか・・・」

「とにかく、探索の時にも人に聞いて回るぞ」

「ええ、その方が良いでしょうね」

「・・・・・・・・後、古泉」

「なんでしょう？」

「・・・・・・・・顔が近い／＼／」

「・・・・・・・・ごめんなさい／＼／」

「・・・・・・・・／＼／」

・・・・・・・・・・早く誰か来い！！

十分後、全員集合したので毎度恒例のくじ引きをした結果、
長門と古泉が一緒となった。

こっちの世界では三人組に入るのは初めてだな。

「じゃ、人の多い所で情報収集するか」

「どこに行くの」

「そうですね・・・

公園、桜並木、商店街、ゲームセンターといった所でしょうか」

「まずは公園に行ってみようぜ」

「はい☆」

「ええ」

あの公園は非日常のメッカだからな。
何か有るかもしれん。

とりあえず光陽園駅前公園に来てみたのだが・・・

「・・・少しおかしくないか？」

「そうでしょうか？」

「いくら平日だからって、
誰一人居ないのは流石におかしいだろ」

「・・・確かに誰も居ないね」

「長門、この公園が今どうなってるか解るか？」

「ちょっと待っててね」

そう言って長門は目を閉じて何かを呟き始めた。

この状況で一番頼りになるのはやっぱりこいつだな。
俺達じゃどうにもならん。

「涼宮さん達は大丈夫でしょうか」

「『機関』でも監視してるんだろ？」

「ええ、一応は。」

ですが仲間としては心配になりますよ」

「まあな」

「・・・よし！！解ったよ☆」

「どうなってるんだ？」

「誰かが作り出した空間で公園が覆われてるね」
しかも、異世界になってるみたいだよ」

「い、異世界ですか」

「うん、平行世界って言った方が適切だけど☆」

ん？平行世界？

って事はもしかして・・・

「おそらくだが、作り出した奴に心当たりがある」

「誰ですか？」

「・・・お前だろ、長門」

「わ、わたし!？」

「お前じゃない長門だ。

多分そこら辺に隠れて見てる。そうだろう？」

「・・・・・・・・正解」

「「えっ!？・・・・・・・・・・・・・・・・」」

やっぱりな。

「久しぶりだな。

どうやって来たんだ？」

「また世界が近づいたから」

「そうか。」

・・・もしかしてまた何かあったのか？」

「世界同士が近づいた事により
こちらの世界に影響が出てしまった」

「もしかして『神隠しサイト』の事か？」

「そう」

「・・・だが、なんでそんな影響が出るんだ？」

「それは、世界の修正力が原因」

「修正力？」

「同じ歴史にしようとする力」

「つまり、世界は同じ歴史を歩もうとして、
こっちでは書かれていないSOS団ロゴマークの
代わりに『神隠しサイト』を出現させたって事か」

「そう」

・・・まったく、迷惑な話だな。
何も起きないのが一番だってのに。

「あ、あの、すみません、こちらの方は・・・」

どうやら長門と古泉が復活したようだ。

「わたしは平行世界の長門有希」

「えっと」

あなたはわたしで良いの？」

「そう。」

性格以外は同じ存在」

まあ、性格は180°違うからな。

「そっかあ」

でも何で平行世界のわたしがキョン君と知り合いなの？」

こ、これはごまかした方が良いのか？

だが別に隠し通すほどの事でもないような・・・

「一度偶然こちらの世界に来てしまった時知り合った」

これは、隠せて事か？長門。

「もしかしてキョンさんが閉鎖空間の事を聞いてきた時ですか？」

「あ、ああ、その時だ」

「そうですか。道理で・・・」

「そ、そんな事より、長門。

俺達はこれからどう対処すれば良い？」

「倒す」

・・・前回と同じって事か。

「何を倒すの？」

「情報生命体の亜種」

「あっ！！なるほどね☆」

「えっと、どう言う事ですか？」

「ようは、『神隠しサイト』を作った奴の所に行って
そいつを倒すって事だ」

「なるほど。ご説明ありがとうございます」

「で？」

「そいつはどこにいるんだ？」

「一番最近の被害者の所」

「部長さんの家か・・・」

「こんな所も前回と同じだな。
これも修正力って奴か。」

「じゃあ、明日にでも朝比奈さんを入れて
部長さんの家に行くか」

「その方がよろしいかと」

教えてくれた長門には感謝だな。

「そろそろ行く」

「そうか。」

「今回も助かった。ありがとう」

「・・・どういたしまして」

そう言って長門は消えていった。
本当にありがたいな長門。

「さて、朝比奈さんに連絡するか」

明日で終わらせよう。

第一章 後編（後書き）

長「こっちも久しぶり」

キ「うお！！まだ帰ってなかったのか」

海「これに出てから帰るって言ってたからな」

キ「じゃあ、ついでに予告もしていけ」

長「今回は情報生命体との戦闘。

しかし、上手く書けるかわからないと作者は言っていた」

キ「まあ、戦闘シーンなんてそうそう無いからな」

長「しかも相手はカマドウマでは無い・・・・・・・・かも」

キ「どっちだ!？」

海「今のところカマドウマの予定」

キ「そ、そうか」

長「今回の感想を待っている。送って貰えると嬉しい」

キ「毎回言ってるよな。これ」

海・キ・長「「では、次回もよろしくお願いします」」

長「次にわたしが出られるのは何時？」

海「普通に考えたら『消失編』ぐらい？」

長「・・・・・・まだ随分先」

第二章 前編（前書き）

キ「部長さん大丈夫か？」

海「さあな。

では、本編です」

第二章 前編

「と、言う訳で」

コンピ研の部長さん家にやって来ました♪」

「誰に向かって話してるんだ？」

土曜日の昼頃。

長門が先に言った通り

俺達はコンピ研部長さんが住んでいるマンションの前に居た。

「部長さんの部屋は何号室なんですか？」

「それは・・・」

古泉、『機関』で調べたって言ったよな？」

「ええ、わたしが案内します」

「助かる」

「それじゃーレッツゴー☆」

もっと緊張感を持て、長門。

「此処のようですね」

「・・・鍵が掛かってるな」

まあ当然か。

だが、問題ない。

こんな時こそ長門の出番だ。

「鍵を開けれるか？」

「よゆうだよ☆

・・・こゝして、はい終わり♪」

ガチャ

よくやった長門。

「へへへん!!」

そゝでしょ／＼／＼」

「こ、これって一種のピッキング行為ですよね」

「今は緊急事態なので仕方ないでしょう」

「そうですか・・・」

朝比奈さんはやり方に不満があるようだが、とりあえず部屋の中に侵入は成功した。

「それで、この後はどのようにすれば良いのでしょうか」

「この部屋に位相がずれた空間があるからそこに侵入するの☆」

「・・・キョン君」

「俺もよく解りませんよ、朝比奈さん。」

「・・・とにかく、その位相空間だかに連れてってくれ」

「うん♪」

「今からやるね☆」

そう言って長門は片手で目の前の空間を撫でるような仕草をし呪文のようなものを唱える、途端、俺達は見知らぬ場所に立っていた。

前は砂漠だったが、今回は荒野みたいな所だ。

地表がむき出しで岩があちこちに転がっている。

そして、何故か木が一本だけ生えていた。

しかし、その木が常識なぐらい馬鹿デカイ。

俺達は木から離れた所に居るが全体を見る事が出来ない。

上の方は雲が掛かってる程だ。

「・・・何なんですかあの大きな木は」

「・・・凄いですね。」

さながら『世界樹』と言ったところでしょうね」

「『世界樹』か、なかなか良い表現だな古泉」

「わー！！ホントにすごいね〜♪」

やっぱりお前らもあの木は興味有るか。

「・・・ん？」

何か来るみたいだよ〜」

っと、木のインパクトが凄すぎて忘れてたが
『神隠しサイト』の元凶を倒しに来たんだったな。

目の前では、光が集まって何かの形になろうとしている。
前回はカマドウマだったが今回は何だ？

そして、それは現れた。

シャアアアアアアアアア！！

「へ、蛇ですか!？」

「おいおい!! デカ過ぎだろ!？」

「こ、これは・・・」

「うわ・・・」

現れたのは引くほどデカイ蛇だった。

おおよそだが、神人三人分ぐらいの大きさを有るんじゃないか？

「・・・古泉、いけるか？」

「あ、あの、非常に言いづらいのですか・・・」

「どうした？」

「・・・わたし戦闘をした事ありません・・・」

「・・・」

「し、仕方ないじゃないですか！

超能力を使って戦う機会なんて無いんですから!!

喧嘩だってした事ありませんし!!」

そうだった。

こっちの閉鎖空間には神人が居ないんだったな。
だから古泉戦えないと・・・

「ごめんなさい・・・」

「いや、そう言う事だったら仕方ないだろ。
・・・朝比奈さんは・・・」

「無理です!!」

「ですよね・・・

頑張れ長門。

俺達はここから応援している」

「ひ、一人なの!？」

ううう、何とかやってみるよ・・・」

「ああ、頼む。

代わりに今度どっか連れてってやるから」

「ほんと!？それ約束だよ!!」

よし、すぐに終わらせちゃうよ!!」

何か一気にやる気出したな。

「・・・わたしも参加したら約束を貰えるのでしょうか・・・」

「・・・古泉さんは超能力有るから良いですね。

わたしは今回なにも力になれませんから参加出来ません・・・」

お前らは何の話した？

第二章 前編（後書き）

キ「俺達をとんでもない所に連れてくなくー!!」

海「良いじゃん別に。」

えー、アイディアを送ってくださった、“龍”様
誠にありがとうございました。

では、また次回もよろしくお願いします」

キ「今回の後書きは随分と短いな・・・」

海「まあ、後編もあるし」

キ「ああ、そうか」

第二章 後編（前書き）

海「後編です・・・」

キ「どうした？テンション低いが」

海「いや、ちょっとね・・・」

本編見れば解るよ・・・」

キ「？まあ、とりあえずどうぞ」

第二章 後編

俺達の目の前で『長門VS. 巨大蛇』の戦いが繰り広げられている。

体格の差がかなり開いているが、今のところ互角に戦っている。とんでもない奴だ。

「はあ!!」

ドゴン!!

長門の見事な踵落としが
巨大蛇の頭にヒットした。

『踵落とし』とは言ったが、
正確には踵を先端に真上からの落下攻撃だ。

「シャアアアアアアアアア!!」

どうやら効いてるみたいだな。

ブオン!!

今度は蛇が長門に向かって尻尾を振り下ろした。
押し潰そうとしているのだろう。

パシッ

「うわっ!!」

危ないなもう!!」

・・・は!?

「素手で止めましたね・・・」

「ええ・・・」

「凄いですね長門さん・・・」

無茶苦茶だな。

あんなのを受け止めるなんて・・・

「まだまだく!!」

「シャアアアアアアアア!!」

古泉が参加しなくても相手を押してる。

このくらいはあいつ一人だけで十分なんだな。

「あんあ巨大蛇と戦えるのあいつだけじゃね?」

「そうかもしれませんね」

「・・・・・・・・『巨大蛇』って語呂が悪いな」

「そうですね。確かに言いづらいです」

「では、何か名称をつけましょうか。」

その方が『機関』へ提出する報告書を書くのが楽になります」

「報告書なんて物を書いてたのか・・・
で、何か良い案はあるか？」

「・・・・・・・・『スーちゃん』」

「却下です」

朝比奈さん、それは無いですよ。

『SNAKE』が元になっている事は解りますが・・・

「何で？可愛いでしょう？」

「あれが可愛いですか？」

そう言って長門と巨大蛇（仮）の方を指差す。

「シャアアアアアアアアアア！！」

「てやあああ！！」

まだお互いに決定打は無いみたいだな。

「・・・・・・・・ごめんなさい。」

『スーちゃん』は無いですね・・・」

「では、北欧神話からとって

『ヨルムンガンド』はいかがでしょう」

「何で北欧神話なんだ？」

「あの木が『世界樹』みたいだったので」

そう言えば北欧神話に『世界樹』ってのがあったな。
別称に『ユグドラシル』や『宇宙樹』だったか？

「博識ですね」

「佐々木に教えて貰ったんだがな」

「・・・そうですか」

「じゃ、あいつの名称は『ヨルムンガンド』にするか」

「キョン君、後で北欧神話？って言うのを詳しく教えてください」

「ええ、良いですよ。」

俺が知っている範囲なら」

つと、あっちも終わりそうだな。

「そろそろ決めるよ〜」

少し疲れたように長門が言った。

「シュウウウ」

ヨルムンガンドの方も疲れている様に見える。

「行くよ!!」

突然長門がどこからか槍のような物を取り出した。
棒の部分がピンク色で先端に赤い玉があり、
その玉を囲うように金色の刃みたいな物がついている。

あれ？

あれはどっかで見た事あるような・・・

「なあ古泉、あれどこかで見覚え無いか？」

「ええ、わたしもそう思っていた所です」

「・・・あ！思い出した!!」

確かあれはこの時代のアニメに出てましたよ」

「本当ですか朝比奈さん!？」

この時代のアニメか。

範囲が広すぎるな・・・

「おや、長門さんが動くようですよ」

古泉の言葉を受けて長門の方を見ると、
先ほどの槍?にピンク色の翼が生えていた。

さらに、足下に魔方陣まで出現している。
もちろん色はピンクだ。

やっぱりこの光景に見覚えがあるぞ・・・
ハルヒに無理矢理勧められて見たアニメで。

「受けてみて、これがわたしの全力全開！」

スターライトブレイカー！！」

そしてピンク色の巨大なレーザー？が放たれた。

・・・って、おおおおおい！！

ドガアアアアン！！

「シャアアアアアアアア・・・」

ズシン！！

まともに食らったな。

もう起き上がる様子がない。

そして地に倒れたヨルムンガンドが光の粒子になって消えていった。

「勝ったよ☆！！」

長門が嬉しそうにVサインをしている。

ってか、伏せ字要るんじゃないのあの技。

いや、そもそも何で長門はあの技を？

アニメ見てはまったのか？

だが、これだけは言わせてくれ・・・

「やれやれ」

第二章 後編（後書き）

海「・・・・・・・・・・・・・・・・」

キ「・・・・・・・・・・・・・・・・おい」

海「・・・うん、ごめん。

倒す方法が思いつかなかったからネタに走るしかなかった」

キ「だからってあれはないだろ・・・」

海「反省してる・・・」

キ「しかも戦闘って言うより

俺達の雑談がほとんどだったし・・・」

海「戦闘シーンなんて俺には無理だ」

長「わたしは楽しかったよ♪」

キ「まあ、お前はな。

次回はどうなるんだ？」

海「ミステリックサイン編の後日談」

キ「別名『後始末』だな」

海「まあな、

えーと、それではまた次回もよろしくお願いします」

キ・長 「お願いします!!」

長 「次はいつ使えるかな☆」

キ 「また使う気か・・・」

後日談 ミステリックサイン編終了（前書き）

海 「後日談です」

キ 「特に内容は無いな」

後日談 ミステリックサイン編終了

テスト休みが明けた。

後は夏休みまで一直線である。

テスト結果が返されたが、

以前よりほんの少し得点が上がっていた。

結構嬉しい。

赤点も取っていないため追試も無しだ。

さて、個人的な事はこのくらいにしておいて。

肝心の都市伝説はどうなったのか話そう。

長門がスターライトブレイカーでヨルムンガンドを

倒した事により（何か凄い事を言ってるな・・・）

『神隠しサイト』の被害者が無事帰還した。

失踪期間中の事は軽い記憶喪失と捉えられている。

長門によると失踪している間は一種の睡眠状態だったらしい。

だから誰も憶えていないと。

だが、コンピ研部長さんは俺達が助けたと言う結果を憶えていた。

どうしてなのかは解らない。

予想としては、一番最後だったから睡眠状態が浅く

夢を見たような感覚になっていて、

覚醒した時に過程は忘れたが結果は憶えているのかもしれないって事だ。

なので、結果を憶えてる部長さんは俺達にお返しがしたいと言い
なんとノートパソコンを四台も譲ってくれた。

流石に悪いと思い断ろうとしたが、

「君たちは命の恩人だからね。
このぐらいいは安い物さ」

と言われ結局押し切られてしまった。
やっぱりいい人だな。

こうして『神隠しサイト』事件は終わった。
間違いなくMVPは長門、Sだな。

「ほら、キョン君!!
早く行こっ♪」

「少し待ってくれ」

「むう
『時は金なり』なんだよ」

「わかってるさ」

ちなみに、今は長門と約束通り遊びに行く所だ。
行き先は聞かなくてもわかるけどな。

「それじゃ〜レッツゴ〜!!
今日こそキョン君に勝ってみせる!!
わたしのダルシムで!!」

「なんでお前はいつつもダルシム使うんだ？」

「だって面白いじゃん☆
伸びたり火を吐いたり♪」

「そうか」

それじゃあ長門と思いつき遊びに行くからこの辺でな。

「昇竜拳を出しちゃうよ☆」

「それ違うキャラだから!!」

後日談 ミステリックサイン編終了（後書き）

海「今回は・・・」

佐「夏祭りの話でも書いてくれたまえ。」

ミステリックサイン編も終わったし良いだろう？」

海「まあ、良い案が浮かんだらな。」

とりあえずは日常編と中学生編を書くつもりだし」

佐「そうか、期待して待っているよ。くくく」

キ「ではまた次回もよろしくお願いします。」

・・・今回は台詞が少なかったな」

中学生編 その二(前書き)

海 「出来た・・・」

佐 「では早速本編だ」

中学生編 その二

1 一夏、二人、夏祭りにて。

い、いよいよだね。

ついに約束の日が来てしまった。

もちろん嫌な訳ではないさ。むしろ嬉しい。
キヨンと一緒に祭りを回れるなんてね。

ああ、今にも心臓が飛び出てしまいそうだよ。

「しかし、ある程度予想はしていたのだが人が多いね。

これは昨日待ち合わせ場所を決めていて正解だったようだ」

本当に良かった。

これでは大柄なキヨンはともかく、
小柄な僕を見つけるのはとても骨の折れる作業だっただろう。

待ち合わせ場所に指定したのは、

祭りの会場である神社に昔から有るという大きな二本の木だ。

この神社に来た事があるのなら誰もが知っているだろう。

もちろん僕とキヨンも知っている。

ついでに言うと、何の木なのかは誰も知らないらしいよ。

そう言えば、この木には何か言い伝えがあったような・・・

同じクラスの女子グループが話していたね。

すると、恋愛がらみかもしれないな。

まあ、僕にはあまり興味がないけど。

「しかし、遅いね。」

いつまで待たせるきなんだい？」

「・・・悪かったなそりゃ。」

まだ待ち合わせ時間十分前じゃねえか」

いつの間にか私服を着たキョンが後ろに立っていた。

「・・・いつから君はそこに居た」

「今着いたばかりだ」

「そうか・・・くくっ
なら良いさ。」

僕に何か奢ってくれるならこの件は不問としようじゃないか」

「だから今は十分前だろ・・・

まあ、最初からそのつもりだったがな」

「くくく、君は優しいね」

「う、うるせえ」

くくくく。

本当に君は良い・・・・・・何なんだろうね？

『友達』？ そんな軽い物じゃない。

『恋人』？ 告白はしたがあの様子じゃ聞こえてないだろう。

『親友』？ 今のところはこれが一番しっくり来るね。

じゃあ改めて、君は本当に良い『親友』だよ。キョン。

「ほら、行くぞ」

「くくく、そうだね行こうか」

夜も更けてきて良い頃合いだ。

「ところで、キョン。

そろそろ僕の格好に触れてくても良いんじゃないかい」

君に見せたくてお母さんに頼み込んで浴衣を着せて貰ったんだ。
リップサービスの一つでも欲しいね。

「うっ、やっぱり言わなきゃダメか？」

「……それはどう言う意味だい？

僕の浴衣姿が見苦しいとでも？」

確かに自分でも胸囲が足りないと思うけどさ！

浴衣って言うのは胸が小さい方が着映えるんだよ！！

それにまだ中学生だから今後成長だってする！！

多分……確証はないけど……

「い、いや、そうじゃなくてだな。

そのー、に、似合ってるぞ、浴衣姿。

正直見違えた」

「・・・え？」

い、今なんて言ったんだい？
もう一度言ってくれ」

「だから、似合ってるって。

こんな恥ずかしい事二回も言わすな」

・・・ありがとうお母さん。

あなたにここまで感謝をしたのは久しぶりです。

「さあキョン

祭りへ来たのだから思いっきり楽しもうじゃないか!!」

「・・・・・・・・一気に上機嫌になったな」

くくく、好意を寄せている人に褒められたら当然さ。

「キョン、射的があるよ。

やってみたらどうだい？」

「・・・何が欲しいんだ佐々木」

「・・・・・・・・あのぬいぐるみ」

流石だね。

僕の言いたいことをよくわかってる。

「あの熊のやつか？」

まあ、やってみるが期待するなよ」

そう言っつて銃を構えるキヨン。

「デカイのは端のほうを狙って・・・」

パン

残念ながら端の方には中たったのだが、少し後退しただけで落ちなかった。

残り4発。

「ダメか・・・ならここか？」

パン

先ほどとは違う所に中たったがまたもや落ちない。

残り3発。

「大丈夫だ、次は落とす」

そう言って3発目を打った。

パン

熊のぬいぐるみがグラグラしている。
落ちろ！！

コテン

「しゃあ！！」

「よくやった！キョン！！」

残り2発を残して成功した。
凄い腕だね。ぬいぐるみを落とすなんて。

「妹に頼まれてばっかでな、
いつの間にか得意になってたって訳だ」

「そうか、妹さんに」

こうして、熊のぬいぐるみを入手する事が出来た。
これは宝物にしよう。

ちなみに、ぬいぐるみを受け取るときに射的屋のおじさんが

「良いねー格好良い彼氏に取ってもらって。
大切にするんだよ」

と、言っていた。

キョンも僕も顔を赤くしただけで反論することが出来なかった。
僕としては嬉しい限りだったけど。

それと、大切にするのは当たり前だよおじさん。
なんたって他でもないキョンが取ってくれた物だからね。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、
もう祭りの終了時間になってしまった。

今、僕たちは待ち合わせた
大きな二本の木の下に居る。

「ふう、楽しかったね」

「ああ、そうだな。
とても楽しかった」

「君がそう思ってくれるのなら僕も誘った甲斐が有るね」

「もちろん感謝してるさ」

「くっくく」

ああ、本当に楽しかった。

『後の祭り』と言う言葉が有るけど、それをまさに痛感しているね。

「なあ、もしよかったら、

また二人で夏祭り来ようぜ」

「・・・くっく、

来年の僕たちは違う高校に居るかもしれないじゃないか」

『かも』じゃないね。絶対違う。

だって君と同じ高校なんかに行ってしまったら
今以上に僕は君に依存してしまう。
もう手遅れかもしれないけどね。

「そんなの関係無いだろ。

違う高校に居るってだけで
何も今後一切会えないって訳じゃない」

「・・・え？」

「俺たちは、その、『親友』、みたいなもんだろ・・・」

「は、はは、ははははは。

それもそうだね。

僕たちは『親友』だ。

確かにそんな些細なこと関係無い」

ははっ、やっぱり手遅れだったみたいだね。

僕は、いや、わたしはキョンに依存し過ぎてる。

彼の一言でこんなに簡単に心が揺れる。

でも、それで良いの。

自覚しちゃったからもう開き直るわ。

まあ、進路は変える気無いけど。

もう両親に言っちゃったし。

「そうだキョン。

この木の言い伝えを知っているかい？

僕も今思い出したのだが」

「知らんな。

聞いたこともない」

「その言い伝えはね、

この二本の木にそれぞれ名前を刻むとその二人は

どんな事があっても一緒に居られるらしいよ。

折角だし僕たちもやっていかないかい？

君とだったらずっと一緒に居たいし」

形はどうであれね。

「そうだな。

やってみるか」

僕たちが立ち去った後、

二本の木には僕とキヨンの名前が残った。

願わくば、言い伝え通りに

キヨンと僕がこの先何があっても一緒に居れますように。

出来れば『恋人』でね。

中学生編 その二（後書き）

佐「願いは一応叶っているね」

海「・・・早く登場させたからな・・・」

佐「何か言ったかい？」

海「いや、別に。」

えー、次回は日常編か番外編です」

佐「中学生編は？」

海「良いアイデアが浮かんだらな。

感想があれば送ってください。

読むとやる気がでます。

ではまた次回も、」

海・佐「「よろしくお願いします」」

日常編 その三（前書き）

海 「日常編も三つ目か」

キ 「相変わらず内容は無いけどな」

日常編 その三

1ーとある休日、先輩、図書館にて。

某日曜日。

折角の休日だというのに俺は図書館まで来ていた。
もちろん俺一人だけだ。

別に読書に目覚めた訳ではない。
長門からたまに借りるラノベで十分だ。

なら何故俺はここに居るのか。
それは妹に頼まれたからだ。

小学校の宿題では定番の読書感想文。
あれを書くために図書館から本を借りてきて
と、妹にこき使われ今に至る。

とにかく、さっさと借りていこう。

（児童図書コーナー）

さて、ここにあるらしいが・・・

児童図書って意外に冊数有るんだな。驚きだ。
これは思った以上に探すのが大変かもしれん。

「・・・手伝う?・・・」

・・・なんでこのコーナーに居るんですか。鶴屋さん。

「迷子」

「ここ図書館ですよ?」

「うん・・・」

いや、図書館で迷子って。
だが、丁度良いかもしれんな。

「えっと、悪いのですが手伝って貰っても良いですか?」

「・・・良い」

「助かります」

じゃ、探しますか。

あの後、五分ぐらいで目当ての本を見つけられた。
本当に鶴屋さんが居てくれて良かったな。
感謝の気持ちも込めて飲み物を奢らせて貰おう。

「何飲みます？」

「コーヒー・・・ブラック・・・」

「冷たいので良いですか？」

「・・・・・・・・」コクン

今俺達が居る図書館にある飲食スペースは
外に大きな音が漏れないように防音壁になっている。
話し込むのには最適の環境だ。

「今日は本当にありがとうございました。
おかげで思ったより早く本を見つけられましたし」

「・・・・・・・・気にしなくて良い・・・」

「そう言って貰えると嬉しいです」

「・・・・・・・・それに」

それに、何だ？

「・・・・・・・・友達を助けるのは当たり前・・・」

と、友達か。

後輩って言う方が正しいだろ。
だけど、

「ありがとうございます鶴屋さん」

悪い気はしないよな。

「……よろしく／＼／」

少し照れてる？

なんだか鶴屋さんとの距離が縮まったような気がした。

2—とある日、教室、五分休みにて。

こ、こんにちは、涼宮ハルヒです。

二回目ですが、す、凄く緊張しています。

今やっと四時間目が終わりました。
放課後まで後一時間を残すだけです。

早くSOS団に行きたいな～・・・
朝比奈さんのお茶を美味しいよね。
わたしも出来るかな。

今度やらせて貰おうかな。

そう言えば最近キョン君に構って貰ってないよ
寂しいよお

寂しいとウサギは死んじゃうって本当だと思うよ・・・
今だったらそう胸を張って言える。

キョン君ってば長門さんとよく話してるよね。
あと、古泉さん。

それに野球大会の時に会った佐々木さん。
ああいう人が好きなのかな・・・
で、でも、む、胸の大きさだったら

長門さんと佐々木さんには勝ってるよ。

古泉さんは同じくらいかな？
それにキョン君はポニーテールが好きみたいだし。
だから頑張って毎朝早く起きてセットしてるんだよ。

「ハルヒ」

今のところポニーにしているのはわたしだけだし、
ここは他のみんなよりリードしてるよ。

「おい、ハルヒ！」

朝比奈さんってどうなんだろう？
キョン君の事好きなのかな？
もしそうだったら大変だよ。
しっかり者だし、お茶を美味しく煎れられるし、
む、胸だってわたしより大きいし・・・

「おい!!」

「ひゃい!!」

き、キョン君!?

行き成り声掛けられたから変な声出ちゃったよお／／／

「いい加減立て」

「ほえ？」

周りを見渡すと、

みんな立っていました。

いつの間にか先生が来て居たようです。

考え事をしていて気がつきませんでした・・・

は、恥ずかしいよ／／／

「・・・・・・・・／／」 スッ

「・・・お願いします」

『お願いします』

「着席」

うう／／／

「何ぼーっとしてたんだ？」

「な、なんでもないっ／＼／」

特にキョン君には言えませんっ／＼／

日常編 その三（後書き）

海「よくあったよね」

気がついたら座ってるのが自分だけだったこと」

キ「ああ、ほとんどの人が経験有るはずだ。
お前はどうかだったんだ？」

海「もちろんあるよ。」

それで思いっきり笑われてさ・・・」

キ「そうか・・・」

海「コホン。」

では、感想が有れば送ってください」

キ「毎回楽しみに待っているからな」

海・キ「「では、また次回もよろしくお願いします」」

孤島編 第一章 前編（前書き）

海「孤島編だ！」

キ「夏休みに入ったな」

孤島編 第一章 前編

「な、夏だ！」

「海だ！！」

「合宿だー！！！！」

「こ、ここはフェリーの中なのでお静かにしてください」

「周りのお客様に迷惑をかけないでくださいね」

ついに始まった夏休み。

その初日に俺たちは孤島へと向かっていた。

理由は言わなくてもわかるだろう？

別に去年と同じ場所じゃなくても良いのだが、

あの別荘はそこら辺のリゾートホテル並みの設備が有る。

そこをタダで利用できるのだ。

こんな美味しい話を逃す手はない。

ちなみに、今回は妹の妨害行為及び密入国行為は無かった。

前回の反省を生かし合宿へ行くことを一切話していない。

もちろん、ちゃんと親には言っただぞ。

「あ、すまん。ついテンションが上がってな。

それで、あとどれくらいで港に着くんだ？」

「そうですね・・・あと二・三十分といったところでしょうか」

「まだちょっと有るね」

涼宮さんっ、お土産売り場見に行こっ☆」

「うん、良いよ」

じゃあ、ちょっと行ってくるねキョン君」

「気をつけてな」

楽しそうだなあの二人。

思えば今回の合宿を企画した時から目が輝いていたな。

「ふふっ、仲の良い姉妹に見えますね。

手まで繋いじゃって」

「そうですね。

俺達もあいつらに負けないぐらい楽しみたいです」

「ええ」

本当に楽しみだな。

古泉一座が何やらかすのか。

フェリーでの長い旅を終え、
港に降り立つとそこには執事とメイドがいた。
無論、新川さんと森さんの事だ。

そう言えば前回と違い新川さんとは何回か事前に会っている。
あの時は黒いスーツだった。

しかし、何故か執事服の方がこの人に似合う。
こっちが見慣れているからか？

「お久しぶりです。新川さん」

古泉がこう言ってるが嘘なんだろうな。

「森さんも。」

出迎えごくろうさまです。わざわざすみませんね」

こっちの世界の森さんには初めて会う。

「き、キョン君、執事さんとメイドさんだよ。
本当の職業でしている人を初めて見た」

「ああ、いるもんなんだな」

「うわゝすごい♪」

「・・・これが本物のメイドさんですか・・・」

・・・朝比奈さんがちょっと怪しい。

その後、古泉が新川さんと森さんの事をざっと説明し、俺達は孤島へと向かうクルーザーに乗りこんだ。

前も思ったことだが、ずいぶんと豪華なシロモノだ。

こっちの『機関』も資金は随分と有るみたいだな。

ただ閉鎖空間を観測してるだけだろ。

スポンサーなんて集まるのか？

「ええ、結構な数いますよ。

今は弱くてもいきなり強力になるかもしれませんから。

なってからでは手遅れです」

「確かに、ハルヒの力が強くなってから

すぐに資金を集めてちゃあ遅いな」

「そう言う事です」

とまあ、古泉と話していたらいつの間にか船が動き出していた。今回も操縦は新川さん。

この人は何個免許を持ってるんだろうな。

ここで船内をざっと見渡してみる。

朝比奈さんは森さんに何やら真剣な表情で質問をしていた。途切れ途切れの単語を聴きとると、

どうやらメイドの心得なるものを教わっているようだ。

ハルヒと長門は電車の窓から風景を見ている子供の様に座席で立膝をし仲良く並んで海を見ていた。ここからは見えないが二人とも目を輝かせているが容易にわかる。

古泉は少し離れた所でニコニコしている。普段より二割増しぐらい笑ってる表情だ。だからニヤニヤではなくニコニコと言う表現を使わせてもらった。

「・・・しかし、お久しぶりですな。いつも古泉がお世話になっております」

運転中の新川さんが話しかけてきた。

ちゃんと話すのはこの世界では初めてだな。

「いえ、こちらこそ。

今回の合宿も『機関』のお世話になりますし」

「この程度は。

あなたは普段からご活躍なさっていますので我々は喜んで力になりますゆえ」

「そう言ってもらえるとありがたいです」

「では、これからも古泉をよろしく頼みます」

「もちろんですよ」

新川さんは相変わらず良い人だな。

そして渋いな。

年をとったらこんな人になりたい。

「わっ！あれが別荘じゃない？」

「ホントだ！！あれか☆」

景色を見ていた二人が声を上げた。

もう着くのか、早かったな。

さて、今回の合宿はどうなるんだろうな？

そんな期待と不安を持ちながら孤島に目を向けた。

孤島編 第一章 前編（後書き）

海「とりあえずここまで書いてみた」

キ「で、別荘で何やるのか決まったのか？」

海「それがまだなんだよ。

殺人事件やる訳にもいかないし・・・」

キ「今回はハルヒに悪影響を及ぼしそうだからな。
出来るだけ平和なのが良いのか」

海「“龍”様からアドバイスは貰いましたが・・・」

キ「どうした？」

海「すみません！原作その巻は持ってません！！」

キ「あー・・・そう言う事・・・」

海「大体半分ぐらいしかまだ手元に無い・・・
てか、買う金が無い・・・
ゆっくり買っていくしかない・・・」

キ「・・・コホン

では、感想が有れば送ってください。
作者が随分と迷走してるので」

海・キ「「ではまた次回もよろしくお願いします」」

海「漫画も買った方が良いかな」

キ「原作だけで良いだろ。今のところは」

第一章 中編（前書き）

海「久しぶりの中編」

キ「おい」

長「わたしの時以来だね☆」

第一章 中編

しまった。

こうなる事をすっかり忘れていた。

「にやはは／＼／／／」

あゝ！キョン君が三人いるの／＼／／／」

「どうしても上の方はあんなに頭が固いんですか！／＼／／／
過去より未来の方が偉いんですか！？／／／／」

「わたしだって普通の学校生活って言うのを送りたいんですよ／

／
それなのに閉鎖空間が発生するたびに呼び出されて／／／
あんな物ほつといても良いでしょう！！／／／／」

「どうするよこれ・・・」

「あははは／＼・・・」

とりあえず回想という名の現実逃避を試してみるか。

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・

「とーちやく!!」

「結構掛かったね」

島に着いてもこの二人はテンションは相変わらず高いな。
いや、降り立ったからこそなのかもしれん。

「あれ？あちらから誰か来ますね」

「ああ、あの別荘の持ち主の弟さんです。
以前一度だけお会いしました」

「…………おい、それ嘘なんだろう」

「……………今は涼宮さんが居るので」

大変なんだなお前らも。

「キョン君、どうかしたの？」

「何でもないさ」

「やあ、一姫ちゃん。しばらくぶりだったね」

「裕さんも。わざわざお疲れ様です」

凄い演技力だよな。

将来は役者か声優か詐欺師になると良い。

……詐欺師は無いか。

そして古泉が裕さんにSOS団メンバーを各自紹介し始めた。
やはりと言うべきか、前回聞いたのと違う。

特に俺の件なんて暴走し、裕さんがどん引きしていたな。
詳しい内容は今回も割愛させていただく。

その後、裕さんが自己紹介をし
俺達と一緒に別荘へと向かった。

とりあえず入口まで来たのだが、
やっぱりデカイな。

金持ちが建てた別荘って感じだ。
まさかこれって俺達が来るから作った訳じゃないよな。

「いらっしやい」

っと、ボンヤリしてたら
いつの間にか多丸圭一さんが出てきていた。

ここはハルヒがやったように
団長である俺が挨拶した方が良いな。

「えっと、この度は招待していただきありがとうございます。
こんな立派な所に泊まれる機会なんて滅多に無いですから。

SOS団を代表してお礼申し上げます」

こんな感じで良いのか？

「キミが一姫ちゃんの行っていた『キヨン』君かい？
随分としっかりしているじゃないか。
これからも一姫ちゃんをよろしく頼むよ」

「け、圭一さん！！」

「ええ、まかせてください」

「き、キヨンさん！？／／／」

何で赤くなる。

「「じと〜」」

ハルヒ、長門。

お前らは何故睨む。

玄関での挨拶が済み、

圭一さんが部屋まで案内してくれた。

ちなみに部屋割りは、
ハルヒ・朝比奈さん組、長門・古泉組、俺一人。
俺は二人部屋なのに一人で使う事になった。
少し寂寥感がある。

で、今俺達は・・・

「「海だー！！」」

「お前ら、少しは落ち着け」

「ふふふ」

「随分とはしゃいでますね」

誰一人居ない海岸にいる。
って、誰も居ないのは当たり前か。

しかし、その、何だ、
この光景は目のやり場に困るな。
男としては嬉しい限りなのだが。

「行くよっ！！涼宮さん☆」

「うん！！」

朝比奈さんも一緒に・・・」

「ええ、行きましょうか」

早速ハルヒと長門が朝比奈さんを連れ海に入ってしまった。

凄く楽しそうだな三人とも。

「沖に行き過ぎるなよ!!」

「ふふっ、保護者のようですね」

「朝比奈さんは抜かすが

ハルヒと長門に関しては似たようなもんだろ」

「確かにそうかもしれませんが。

ところで、先ほどから遠くの方を見ているようですが何かあったのですか？」

お前も原因の一つだぞ。

こいつ意外とあるんだな・・・
ビキニタイプだから余計に・・・
ついダメだと思いつつもそこに目線が行ってしまう。

「・・・っ!!」
「そう言う事ですか」

「す、すまん・・・」

「・・・わ、わたしもあっち行ってきます」

「・・・あ、ああ」

古泉は他の奴らが居る所へ向かっていった。
手にはボールを持っている。遊ぶ気満々だな。

・・・俺、あの輪の中に入れるか？

とりあえず遊びに集中する事によって何とか乗り切った。
一番ビーチバレーがやばかった。

よりによって相手チームに朝比奈さんが居たからな・・・

そんな日が暮れるまで遊んだ俺達が別荘に帰り
各自の部屋で休んでいると夕食の時間になった。

席に座った俺達の目の前には豪華な料理が並んでいる。
どれもこれも美味そうだ。

「す、すごいね」

「これ全部食べて良いの！？☆」

「もちろんですよ。」

では、いただきますしうか」

なぜか正装している圭一さんの言葉により食事が始まった。

料理はすべて美味かった。

これらは新川さんと森さんが作ってるのか？
だったら凄すぎるだろあの二人。

「お飲み物はいかがですか？」

気がつけば給仕係の森さんが細い瓶を手に微笑んでいた。
確か中身はワインだったな・・・

「遠慮しておきます。」

まだ未成年なのでダメでしょ」

俺が苦笑でそう答えると、

「しかし、他の皆様はお飲みになっております」

・・・は？

「にゃあゝ／＼／

なゝんかポワポワするゝ／＼／

「これがワインですか・・・／＼／

「わたしも初めて飲みますね／＼／

おい！！お前らなに飲んでんだ！！

「ふゝん

こんな味なんだゝ♪」

やっぱりお前は酔わないんだな・・・

そして呆然としている俺を除くSOS団員が

次から次へとワインを飲んでいく。

俺が正気に戻った時には既に遅し、
酔っ払い三人組が出来てしまっていた。

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

はあ、やれやれ。

厄介な事になっちゃった。

第一章 中編（後書き）

海「キヨン。」

次も頑張れ！！」

キ「マジで・・・」

長「わ、わたしも協力するよ」

キ「すまないな長門」

海「では、次回はキヨン&長門が酔っ払いに絡まれる話です」

キ「はぁ・・・」

感想があれば送ってくれ」

長「まってるよ」

海・キ・長「「では、また次回もよろしくお願いします」」

第一章 後編（前書き）

海「後編。

キヨン頑張れ」

キ「ああ・・・」

長「わたしもいるよっ♪」

第一章 後編

さて、ミッションは単純。

酔っ払い三名の相手をする事。

援軍は長門ただ一人。

『機関』メンバーは笑ってこちらを見ている。

少しは手伝ってください・・・

「えへへ／＼／／／

きょ／＼／＼／／／／／

「引っ付くな」

先ほどからハルヒはやたらと密着してくる。

・・・・・・まあ、悪い気はしない。

「ですからね、もうちょっと融通を利かせても良いと思うんです

よ／＼／／

規制が厳しすぎます！！／／／もっと自由にさせてください！

！／／／／

「そうですか。

それは大変ですね」

朝比奈さんはひたすら上司へ対する愚痴を言い続けている。

この人の将来は大丈夫なのか？

朝比奈さん（大）に会った時間聞いてみよう。

「キョンさん、普通って何なんでしょうね／＼／／／

わたしは知りたいです／＼／

「それは俺も知りたいよ・・・」

古泉は他の二人に比べてまともだ。

だが、話を聞くとこいつも色々ため込んでるんだな。

「ぶ／＼／

きょくんはわたしのだよ／＼／

「俺は物じゃねえ・・・」

「そうですよ！／＼／

キョン君はわたしのです！！／＼／

「朝比奈さん！？」

「わ、わたしも／＼／

「古泉まで・・・」

お前ら何言ってるのか解って・・・無いな。
酔っ払いだし。

「へ／＼うらやましいね／

キョ・ン・く・ん・★」

長門の視線がかつて無いほどに冷たい。

「また長門さんばかりずるい／＼／

なんでわたしを見てくれないのかな。かな／／／

「それはちょっと怖いぞ」

カシャ

「部活のみんなで宴会／／／19..46UP／／／」

「何やってるんですか!?!」

「ブログ／／／」

やってたんですか・・・

「キョン君、キョン君」

「どうした長門?」

「古泉さん脱落☆」

「zzz／／／」

ようやく一人か。

意外と酒に弱いんだな。

「ってか、お前も手伝え」

「やってるよ」

アルコールがまわるのを早めてるんだ♪」

「そうか・・・」

残り二人は後どのくらいだ？」

「涼宮さんが1分58秒45

朝比奈さんが19秒だよ♪」

「えらく具体的だな」

「そう言ってる間に朝比奈さん脱落☆」

「zzz／／／」

二人目。

残るはハルヒか。

「にへへ／／／」

「もうちょっとファイトだよ！☆」

「マジで？」

「ねえねえきょんくん／／／
聞いて聞いて／／／」

はぁ・・・

あと少しだ、あと少し。

「ど、どうした？」

「テイルズに進出だよ／＼／＼」

「中の人がな!!」

「きょんくんだって出てたよね／＼／＼」

「それも中の人だ!!」

「わたしも出たいな☆」

「知らん!!」

「そして涼宮さんアウト♪」

「zzz／＼／＼」

いつの間に!?

そして少し早くないか?

「興奮状態で酔いが早く回ったんじゃない?」

なるほど。

そう言う事か。

しかし、飲み会では素面の人が一番苦労するって本当だな。
いつそのこと俺も飲んだ方が良かった。

「さて、部屋に運ぶか」

「お疲れ様です。

お手伝いいたしましょう」

「じゃあ、朝比奈さんを頼みます。

俺はハルヒ連れてくので」

「わたしは古泉さんね☆」

これでやっと終わりか。

前回よりも大変だったな。

で、酔いつぶれた三人を部屋に運び
完全にミッション完了だ。やれやれ。

第一章 後編（後書き）

海「こんな感じでお送りしました」

キ「大変だった・・・」

長「わたしは楽しかったな☆」

キ「俺はもう御免だ」

海「次は『第二章』

合宿二日目だな」

キ「あいつら二日酔いになってないか？」

長「その辺もばっちりフォローしといたよ♪

二日目も思いっきり遊びたい☆」

海「では、感想があれば送ってください」

長「更新速度が上がるかもね♪」

キ「・・・どうかな」

海・キ「「また次回もよろしく願いします」」

長「よろしくねー!!」

第二章 前編（前書き）

海「二日目だ」

キ「今回も嵐なのか」

海「あと、事件の代わりも入れといた」

キ「それ三日目じゃなかったか？」

海「良いじゃん別に」

第二章 前編

二日目の朝。

外は嵐になっていた。

「風が強いね」

「まあ、台風だからな」

朝食の後、俺の部屋に集まり
今日は何をするか話し合っている。

「この天候じゃ今日一日海は無理だな」

「じゃあゲームやろうよ!!」

「この別荘に有るのか？」

「いえ、聞いていませんが」

「ふっふん」

こんな事もあるかと家から持ってきたんだ☆
もちろんコントローラーも四つ♪」

そう言って自分のトランクからP S 2を取り出す長門。
やけにデカイと思ったらそんな物を入れてたのか。
ソフトも結構な数が入ってるし。

「P S Pもあるよ♪」

三つも有るのかよ・・・

「では、遊技室に大きなテレビが有ったので
そちらの方でしましようか」

ここまで来ておいてゲームか・・・
墮落しきってるな。もうちよつと何かあるだろ。

とりあえず遊技室と書かれた部屋まで来た。
中は結構広く出来ている。

「で、何をする？」

「やはりこの人数でしたら対戦ゲームでしょうか」

「ゴメン、そーゆーの無いんだ。
一人でやってもつまんないし」

「そりゃそうか」

「で、でも、協力プレイ出来るのだったら持ってきてるよ。
これとか☆」

長門がとあるゲームソフトを突き出してきた。
タイトルは・・・

「て、テイルズ、オブ、し、し・・・」

「シンフォニア♪」

「あ、それわたしも持ってる」

ハルヒも持ってるのか。

で、どんなゲームなんだ？

「ジャンルはRPG。

テイルズシリーズ第五作目です。

最大四人までプレイ可能。

ちなみに、この作品はPS2だけではなくGCでも発売されています」

RPGか。

今日は一日中暇だし丁度良いかもな。

「どこまで進んでるの？

わたしはトイズバレー鉱山の所だけど」

「結構進んでるよ」

確か今はラーセオン溪谷終わった所☆」

「も、もうそこまで」

ついて行けん・・・

「とにかくやってみるか」

始める前にじゃんけんで抜ける人を決めた結果
朝比奈さんになった。

今は隅の方で落ち込んでいる。

「キャラが8人も居るのか」

「多いよね」

でも続編じゃ最大14人なんだよ」

「凄いな・・・」

で、話し合いをした結果、

ロイド ↓ 長門

プレセア ↓ 俺

ジーニアス ↓ ハルヒ

リフィル ↓ 古泉

となった。

「じゃあ、その辺の敵で慣らしてから

『救いの塔』に行こっか」

（練習中）（『はゲーム中の台詞）

「こいつ通常攻撃二段までか」

「その分攻撃力が高いんだよ」

あっ、その敵お願い☆」

「ああ」

『地精陣!!』

「ん？」

「き、キョン君、それは防御技だよ・・・」

「しょうがないな」

『虎牙連斬!!』

バアン

「よしっ！！残り一体♪」

「お任せを」

『光よ。フォトン！！』

バン

『まずまずの勝利ね』

「おゝさっすが☆」

「いえ、この程度は」

「わたし詠唱途中だったのに・・・」

「・・・次があるさ」

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・

ゝ練習終了ゝ

少しやっただけだが面白いなこれ。
俺も後で買うか。

「じゃあ、そろそろ『救いの塔』とやらに行くか」

「「おー!!」」

長門情報だとラスボスが居るらしいな。
そこでは倒せないみたいだけど。
さて、気合い入れて行くか。

第二章 前編（後書き）

海「つと言う訳で二日目および三日目はゲームだ」

キ「殺人事件の代わりにゲームって・・・」

海「良いだろ『TOS』面白いし。」

テイルズシリーズでは一番好きだぞ」

キ「確かに面白いが」

海「だろ。グラフィックに問題が有るけど。」

・・・では、今回はこの辺で」

キ「やけに短いな」

海「早く続き書きたいんだよ。」

ではまた次回」

前回の補足説明的な物

海人です。

『テイルズオブシンフォニア』
を知らない人向けの補足説明をしたいと思います。

知ってる人はスルーしてください。

なお、説明はネタバレを避けるため大まかにしかしません。
キャラの外見はググってください。

『ロイド・アーヴィング』

CV：小西克幸

主人公

性別：男

17歳

武器：剣（二刀流）

熱血漢
頭は悪い

『コレット・ブルーネル』

CV..水樹奈々

シルバラント（世界の名前）の神子

性別..女

16歳

武器..チャクラム

ドジッ子

でも意志は強い

『ジーニアス・セイジ』

CV..折笠愛

魔術師

性別..男

12歳

武器..剣玉

ハーフェルフ

皮肉屋

『リフィル・セイジ』

CV…冬馬由美

教師

性別…女

23歳

武器…杖

ハーフエルフ

二重人格（笑）

『藤林しいな』

CV…岡村明美

召喚士

性別…女

19歳

武器…札

姉御肌
不幸

『ゼロス・ワイルダー』

CV..小野坂昌也

テセアラ（世界の名前）の神子

性別..男

22歳

武器..片手剣

魔剣士
軽薄

『プレセア・コンバティール』

CV..桑島法子

きこり？

性別..女

12歳（正確には28歳）

武器…斧・鎚

表情・感情に乏しい
作者が一番好きなキャラ

『リーガル・ブライアン』

CV…大塚明夫

囚人・大企業の会長

性別…男

33歳

武器…レガース（足に装着するあれ）

デフォルトで囚人服

絶対手錠を外さない（続編では外してる）

『クラトス・アウリオン』

CV…立木文彦

天使

性別…男

28歳（外見）

武器…片手剣

前半は仲間

後半は敵（場合によっては仲間）

ざくつと説明するとこんな感じです。

これ以上に詳しく知りたい方は
ウィキやら何やらで調べてから見てください。

では今回はこの辺で。

ハルヒ全く関係ねーな・・・

第二章 中編（前書き）

海「『TOS』未プレイの方は解り辛いと思いますが
最後まで見てください」

第二章 中編

「ここが『救いの塔』か・・・」

長門（1コンがフィールド移動を操作する）に導かれ俺達は目的地『救いの塔』に居る。

外見は頂上が見えないほど高い塔だ。

中に入ってみると道が一つしか無く、

先にはワープ装置らしき物がある。

「らしきじゃなくて本当にワープ装置だよ☆」

「で、何処に繋がってるんだ？」

「祭壇みたいな所」

「行けば解るよ☆」

「知ってるのか」

「一回入った事有るんだよ」

言いながらワープ装置を作動させる長門。
すると、確かに祭壇みたいな所に出た。

『コレット、大丈夫か？』

『ロイド・・・ここ、同じだよ』

・・・あの時の、あの場所だよ！』

『そんな、馬鹿な!』

「「ええゝ!?!?そゝなのゝ!?!?」」

ハルヒと長門のシンクロ。

随分と入り込んでるな。

俺はさっぱり解らんが。

「えつとゝ」

つまり一回目に入った『救いの塔』と
今居る『救いの塔』は同じって事だよ」

ハルヒにしては久しぶりの長台詞だな。

だが残念意味が伝わらない。

「一回目の救いの塔は今居る世界と違う世界に有るの♪」

「・・・つまり違う世界なのに同じ場所があったから驚いたのか
?」

「うゝん

まあ、大体そんな感じで合ってるよゝ」

そうなのか。

・・・ん? いつの間に誰か居るな。

「あつ、クラトスさんだゝ」

「あれ? このキャラクターは味方では無かったのですか?」

「最初の方だけだよ☆」

で、捕まってどこかへ転送された。

「っておい!!」

「これで良いんだよ」

ここにしかないアイテムを取りに来たんだから♪」

その後、

牢屋から脱獄

←

天使をだまし目的のアイテムゲット

←

情報端末を見つけたのでハッキング

←

近くの転送装置で脱出

この流れで三つぐらい犯罪を犯してるぞ。
良いのかお前ら・・・

「ゲームだし良いんじゃない♪」

はあ。

ようやく祭壇（仮）まで戻って来られた。

あの装置一気に戻ってくる物じゃなく、途中に無重力のエリアがあるダンジョンを経由しなければならなかった。

この無重力のエリアが難しくて三十分は掛かったな。

今はイベントシーンだ。

パーティーが祭壇（仮）に刺さってる剣を見て色々言っている。あ、ロイドが吹き飛ばされた。

『―無駄な事はやめるんだな』

何か新しいのが来た。

白いピチピチの服を着てる。

サイズもつと大きくしろよ・・・顔は良いのに・・・

「来たなくユグドラシル」

「誰だ？」

「こ、この人がラスボスだよ」

「こいつが!？」

「確かに羽が多いですね」

「判断基準そこですか・・・」

「ですが天使なのであなたが間違いないかもしれませんね」

「そうか？」

なんて話しているとガラスが割れるようなエフェクトと共にユグドラシルとの戦闘が始まった。
始まったのだが・・・

『くらえ』

ドオオオン

「何だあのデカイの！？」

「あれは『ユグドラシルレーザー』だよっ！！」

「ネーミングセンスねえ！！」

「しかし、以前の作品にも

『ダオスレーザー』と言う技を使うラスボスは居ましたよ。
おそらくそれから来てるのではないかと」

「んな情報どうでも良い！！」

『双月爆連舞！！』 ↑プレセア

『魔神連牙斬！！』 ↑ロイド

『水に吞まれろ！！スプレッド！！』↑ジーニアス

これでどうだ？

って、全然体力減ってねえ。

『光よ、ホーリーランス！！』↑リフィル

「ああ、古泉さん！それ効かない！！」

「そ、そうなのですか？

しかし、攻撃出来るのは光属性だけですよ」

「じゃあ、援護に徹してろ！！」

「わ、解りました！！」

『タイムストップ』

ユグドラシルが何か技を使った。
なにやら大きな時計が出ている。

「これはまずいな～・・・」

「なんでだ？」

「今に解るよ～」

長門がそう言った途端

画面が白黒になり操作出来なくなった。

「なんだ!？」

「これは短時間こっちの動きを止める技だよ
しかも敵しか使えないし・・・」

「ずるくないか。それ」

「う、うん。そうだよね」

で、動けない俺達を

パーティーメンバー

ユグドラシルレーザーが襲いあっさり敗北。

「ううゝ強いよゝ」

「はあ、またやり直しか・・・」

「え、でも、続いてますよ?」

「「「・・・え?」」」」

朝比奈さんの言う通り、

ゲームオーバーの画面は出ずまだ続いていた。

つまり、これは負けても大丈夫な勝負だったのか・・・
良かった。

で、イベントシーンを挟んで無事? 救いの塔から脱出できた。
次は『アルテスタ』って言うドワーフの家に行くらしい。

「だが、その前に昼飯だろ」

「え！？もうそんな時間！？」

「飯食ってから続きするぞ」

「「おー！！」」

サッサと食っちまうか。

第二章 中編（後書き）

海「次回は知ってる人ならわかると思います。

そう、『フラノールイベント』！！」

キ「なんだそれは？」

海「どうせ次回見るんだし

今は知らなくても良いんじゃない？」

キ「そ、そうか・・・」

海「誰にしようかな」。

と言う事で次回もよろしく願いします」

第二章 後編（前書き）

海「今回の途中に入っている

フラノールイベントの台詞は一部カットしています」

キ「そうなのか」

ハ・長「「えゝ!!」」

海「まともにやると凄く長いんだよ!!」

第二章 後編

昼食後。

俺達はゲーム依存者よろしく
駆け足で遊技室まで戻ってきた。

「早く続きつづき☆」

「わかってる」

～アルテストの家～

「なんと言いますか・・・
まさしくドワーフの家って感じですね」

「ほとんど洞窟みたいなものだしね♪」

俺は途中からやり始めたから詳しくは解らんが
コレットの病気を治すために来たらしい。

・・・アルテストって人は医者なのか？

「違うけど、この人じゃないと治せないんだよ」

・・・やっぱり最初からやってみたいな。
じゃないとついて行けない。
見た事無いキャラも居るし。

「『タバサ』と『ミトス』だね。

タバサさんは機械人形でミトスは孤児で良いのかな？」

「いや、俺に聞かれても」

その夜はアルテストの家で一晩過ごす事になったが、

『ユアン・・・！？』

『・・・ロイド。

父親に会いたくはないか？』

こいつ誰だ？

行き成り枕元に立ちやがって。

「『ユアン』さん☆

『レネゲード』って言う組織のリーダー」

「敵か？」

「今のところはどっちとも言えない」

「ですが、外に連れ出されたみたいですよ」

場所が変わって家の外になった。

ん？あいつは救いの塔に居た奴だな。

『クラトス！？』

「「クラトスさん！？」」

ああ、そんな名前だったな。

この流れで出てくるって事はこいつがロイドの父親なのか？

「いや、わたしも知らなかったよ・・・」

「そ、そうだったんだ・・・」

「どうやらお二人も知らなかったようですね。

わたし達にはその驚きがいまいち伝わらないのですが」

「だな」

ハルヒと長門は先ほどから画面を食い入るように見ている。
そこまでお前らにとっては衝撃的だったのか。

『「俺はコレットを助けるために、世界を見殺しにしない。

最後の最後まで、みんなが生きる道を探したい』

ロイドっていかにも主人公って感じだな。

熱血漢で理想論者だし。

『素晴らしく陳腐な演説をありがとう』

バン！！

「「「「え？」」」」

行き成りミトスが出てきたと思ったら
光の魔法？的な物で攻撃してきやがった。

『くそっ！ユグドラシル！

お前がどうしてここに・・・！』

『な、何っ・・・！？』

『ミトス君が・・・ユグドラシル！？』

衝撃の事実その二

ラスボスが凄く身近にいた。

「「・・・・・・」」

プレイヤー二人は言葉も出ないようだ。

フォン

また知らないのが出てきた。

これだから途中からやるとダメなんだよな。

そして、後から来た奴とミトスは消えていった。

代わりにゴスロリを着た天使が降りてきたが、サクッと倒せた。

「いやゝ凄い事になったねゝ・・・」

「そうだね・・・」

お前らは話を通じるから良いよな。

その後、攻撃を受け重傷のアルテスタさんを救うため『フラノール』と言う町に医者を手配しに来た。

「ここではイベントがあるんだけど、好感度によって相手が変わるんだよ」

「そうなのか・・・
誰が一番高いんだ？」

「全くわかんない☆
だからわたしも楽しみなんだ♪」

で、4..4に医者連れてく組とフラノールに居残り組に別れた。
ロイドを除く3人が好感度上位三人なんだろうな。

夜、ハルヒが言った通りイベントが発生した。

相手はプレセアだ。

「プレセアが一位か」

「予想と違ったのか？」

「ちょっとね」

でもベスト3には入ってると思ってたよ☆」

『アルテストさんは・・・』

まだ消えてしまいませんよね』

『プレセア・・・』

きっと大丈夫だ』

『・・・確率は100パーセント
ではないです。

安易にそんな言葉を・・・』

口にしないで下さい』

随分と暗いな。

「そ、そんな事言っても、こういうキャラクターだし」

『100パーセントなら』

大丈夫なんて言わないよ』

『そうでしょうか？』

大丈夫という言葉は

心配の必要を感じない場合に

使う言葉ですよね』

『この世の中に

絶対なんてないだろ。

だから、自分に

言い聞かせるんじゃないかな。

絶対出来る。絶対大丈夫って』

馬鹿かと思ったが、

良い事言うじゃねえか。流石は主人公だな。

『・・・そうかも知れません』

『ああ。だから大丈夫って言う。

言い続ける。そう信じる。

人の意志の力は強いんだ』

『ミトスにも・・・

意志の力で勝てると、思いますか？』

『・・・うん。勝つよ。

そう思わないと・・・

あいつとは戦えない』

『ロイドさん。

きっと・・・大丈夫です。

絶対に・・・勝てます』

『あ、安易な言葉、使ってる』

『はい。私の意志の力も
ロイドさんに預けます』

『・・・よし。預かった！』

「」「」「うう」「」

「どれだけ涙腺脆いんだお前ら」

確かにいい話だったが。

「・・・よし、救いの塔行くよっ！！
今だったらユグドラシルに勝てそう！！」

「おい長門、今のレベルは低すぎるって
救いの塔脱出した時に言ってたろ」

「そ、そうだった・・・」

「な、なら、レベル上げだよ！！」

「・・・地道にやるか」

この後、結局レベル上げをしたただけで
救いの塔まで行かなかった。

まあ、明日もあるからな。
なんて思っていた。

まさか、次の日にあんな事が起こるなんて

微塵も考えていなかった。

第二章 後編（後書き）

キ「なんか最後が気になるんだが・・・」

海「まあ、そこまでひどい事じゃないから
『大丈夫』だ」

キ「おい!!」

海「では、次回は殺人事件の代わりに
とある事件がSOS団を襲います」

キ「不安しかないんだが」

海「それではまた次回もよろしくお願いします」

キ「・・・お願いします」

第三章 前編（前書き）

海「はい！『第三章』です！！」

キ「テンション高いな」

ハ・長「わー！！」

キ「お前らもか・・・」

第三章 前編

「・・・どこだ、ここ」

目を覚ますといつの間にか森の中にいた・・・

って待て!!

どんな状況だよ!!

よし、落ち着け、落ち着くんだ俺。

昨日の夜の事を確認してみよう。

昨日はゲームが終わった後すぐに夕食になって、

食い終わったら部屋に付いている風呂に入って

眠くなったからすぐにベットで眠った。

それで光を感じて目を開けると森の中で寝転んでいる・・・

よけいに混乱してきた。

とりあえず手掛かりを探すために

立ち上がって周りを見回すと、

「・・・剣と服？」

何故か剣が二振り地面に刺さっていた。

しかも足下には赤い服もある。

どうしてこんな物があるんだ？

ふと違和感を感じて自分の体を見つみると

下着しか身につけていなかった。
だから服が用意されているのか・・・

他に着る服もないしこれを着ていくか。

で、着てみたが、これは・・・

「ロイドの服じゃねえか!!」

何でゲームキャラの服なんだよ。
コスプレか？コスプレなのか？

「てか、これって夢じゃねえよな。
もしそうだったら早く覚めて欲しいんだが」

とにかく森を出てみるか。
他の奴らも居るかもしれん。

・・・剣は持って行った方が良いよな。
扱える気がしないが念のためだ。

歩き始めて一・二分で森を抜ける事が出来た。

途中どこからか

『にやあああああああ！！』

と聞こえたがああの声はハルヒだった。

予測通り他の奴も居たな。

しかし、ハルヒがこの状況になってるってやばいんじゃないか？
あいつ自身の事もそうだが、何より世界の崩壊的な事も。

・・・まあ、それは無いか。

説得と言う名のごり押しで夢だと思わせれば問題ない。はずだ。

それはさておき。

森を抜けると村らしき物が見えた。

行く当てもないしあそこまで行ってみるか。

＼キョン（ロイドVer）移動中＼

「本当に村だったんだな」

たどり着いた村は看板によると『イセリア』と言うらしい。

しかし、誰も居ない。

家はあるが人の気配が全くしない。

これはおかしくないか？

そんな風に関を見回っていると

前方に人の姿が見えた。

・・・二人居るようだな。

その人影に近づいてみると

そこにいたのは長門と朝比奈さんだった。

「あつ！キョン君く！！こっちこっち！！」

「よお。お前らも居たんだな」

「ええ、

行き成り見知らぬ土地で驚きましたが

長門さんも近くに居たので」

「そうですか」

「ちなみにわたし達はこの村で目を覚ましたんだよ☆」

それはいいな。

こっちは随分と言う訳では無いが歩いたからな。

「・・・お前は『ゼロス』の衣装なんだな。」

白いバンドみたいな無いが」

「そだよ。」

「どうかな似合ってる？」

「ああそうだな。」

「キャラ的にも似合ってる」

「そうかな」

そうとしか言いようがないだろ。

長門の性格を考えてみてもこれ以上の適役は無いな。

「それで、朝比奈さんは『しいな』ですか」

「はい。」

ですがこの衣装は少し恥ずかしいですね／＼／

これで少しなんですか・・・

むしろ見ているこっちが恥ずかしくなってくる。

朝比奈さんに胸部分が大きく開いた衣装はヤバイ。

「それで、キョン君は『ロイド』か
似合ってるよっ♪」

「サンキュ。」

ところで長門、ここってもしかして・・・」

「うん。」

この格好でも解るけどここは

『テイルズオブシンフォニア』の世界だと思うよ」

「そうか・・・」

また厄介な事になったな。

原因は何だ？

「さっぱり解らない。

もしかしたら平行世界が近づいたのかもね」

いや、それは無いな。

前は殺人事件（演技）だった。

いくら修正力でもこんな異世界まで来る物じゃ無いだろ。

「みんなー！！」

「お！ハルヒと古泉も来たな」

ハルヒは『コレット』の、

古泉は『リフィル』の衣装だ。

ハルヒはキャラを意識してか髪を下ろしている。
こいつにもふさわしい衣装だよな。

古泉は・・・ちょっと違和感が・・・

「会いたかったよ」

「ええ本当に皆様に会えて良かったです」

「そんな大げさな・・・」

「だって、目を覚ますと砂漠だったんだよ!!」

「「「砂漠!?!」」」

お前らよく無事だったな。

と言うか、あのハルヒの声はどんだけ大きかったんだよ。

「き、聞こえてたの?／／／」

「ああ。森を歩いていた俺にもぼっちり」

「あううう／／／」

何はともあれ、

SOS団が全員そろった訳だが
これからどう動けば良いんだ?

「『マーテル教会聖堂』行ってみる?

ここから近いところにあるんだけど☆」

「・・・そうだな、とにかく行ってみるか。

何か有るかもしれん」

マーテル教会聖堂ね。

さて何が出てくるか。

・・・その前に剣でも振っておくか。

第三章 前編（後書き）

海「と言う事で、

・・・死ぬなよキョン」

キ「無理かも知れないな・・・

剣なんて持った事ねえよ。

しかも二本もあるし」

海「まあ、いざとなったら

長門（ゼロスVer）に丸投げすれば良いんじゃないかね？」

キ「・・・どうしようもなくなったらな」

海「今回の感想が有れば送って下さい。

来ると結構やる気が出ます」

キ「普段はどうなんだ？」

海「・・・・・・・・・・」

キ「おい!!」

海「冗談だ。普段から早い更新は心がけている」

キ「それなら良いんだが」

海・キ「「それではまた次回もよろしくお願いします」」

第三章 後編（前書き）

海「今回は何時もより長いです」

キ「根気強く見てやってくれ」

第三章 後編

「うおお!!^{ちりさめ}散沙雨!!」

ザザザザン!!

バァン!!

「『ま、こんなもんさ』だったか？」

「バッチリ☆」

ハア、随分と敵が多いな。

次から次へと来やがる。

「しかし、術技もそのまま使えるんですね。

これは驚きです」

「お前は後衛だから良いよな。

俺達なんて敵に突っ込んで行かなきゃならんし」

懸念していた戦闘に関しては今のところ問題ない。

自分が扮しているキャラが使える術技を頭に思い浮かべると
勝手に体が動き技を放つようになっていく。

しかし、TP消費量が高い技を使うとかなり疲れが来る。
まあ、当たり前っちゃ当たり前前の事だが。

「ちっ、また来やがったな」

さっきからウサギやら狼やら鷹やらが出てくる。

長門が言うところの雑魚敵らしいが、
こうも数が多いとうんざりしてくる。

「わたしとやろうっての？」

「やっぱその台詞は『俺様』の方が合うな」

「閃空衝裂破せんくうしょうれつぱ!!」

ザザザン!ザン!!

バァン!!

「あ、ゴメン!

一匹倒せなかった!!」

「ま、まかせて!!」

『聖なる翼よここに集いて神の御心を示さん』

いくよ!!エンジェルフェザー!!」

フアフアフアフアン！！

バン！！

「え、えつと・・・

『えへっ、グーだね』」

なにげにハルヒも大きな戦力となっている。
ありがたい事だ。

最初こそ混乱していたが、
俺達がほぼ洗脳に近い形で夢だと説得した。
だからなのか、目を輝かせて敵を倒している。
正直怖いぞ・・・ハルヒ・・・

「てか、羽まで再現されてるんだな」

「うん。出そうと思ったら出せるみたいだよ」

「・・・飛べるのか？」

「多分出来るんじゃないかな」

ちょっと見てみたいような気がする。

「あ、もしかしてあれじゃないですか

『マーテル教会聖堂』って」

「そ、そうですよ」

「やっと着いたか」

目的地である『マーテル教会聖堂』は
長い階段を上った先にひっそりと建っていた。

長門情報ではゲームを始めて一番最初のダンジョンらしい。
だから強い敵は居ないと言っていた。

さて、俺もなんだかんだでこの状況は面白いと思っている。
だからこれからどうなるか結構楽しみだったりする。
さあ、行くか。

「へー・・・」

何か本当に神聖な場所って感じたな。

で、これはどれを進めば良いんだ長門？」

聖堂の中に入ると行き成り三叉路に出た。

照明が壁の松明だけだから道の先は仄暗く見通せない。

「うーん、どうなんだろな」

とりあえずまっすぐ進んでみようよ☆」

「了解」

長門の言葉通りまっすぐ進んでみた。

すると目の前を

半円型のバリアみたいな物が道を塞いでいた。

「これは……」

進むには『ソーサラーリング』って言うアイテムが必要だね」

「それはどこに有るんですか？」

「たしか、ここの地下に有ったはずだよ」

「地下にはさっきの三叉路をどっちでも良いから
曲がって行くと階段が有るからそれを下るの」

じゃ、行きますか。

途中スライムみたいな奴や虫みたいな奴に出くわしたが
俺達の敵ではなかった。

「華麗に」

「あ、艶やかに」

「勝者はいつも」

「美しい・・・なんてねっ☆」

決まった。

ちなみに今の台詞の順番は、

俺（ロイド）

←

ハルヒ（コレット）

←

朝比奈さん（しいな）

←

長門（ゼロス）

と、なっている。

『TOS』を持ってる人は聞いた事有るかもな。

「うう・・・私だけはぶられました」

「まあ、その、元気出せ」

とにかく、俺達は地下に着いた。

それで、その『ソーサラーリング』ってのはどこに有るんだ？

「あそこに有るじゃん☆」

長門が指差す方を見ると、
確かに指輪のような物が有った。

しかし、そこに行く道の途中が途切れている。

「そこは・・・

あそこにゴーレム居るでしょ

あれを倒すと岩になるからそれを穴に落とす。

で、下に降りて落とした岩を使って道を作るんだ♪」

「・・・地道な作業だな」

「頑張れキョン君っ!!」

「はぁ・・・わかったよ」

（数分後）

「・・・ゼエ・・・ゼエ・・・ゼエ・・・

こ、これで、良い、のか？」

「き、キョン君!?!だ、大丈夫なの!?!」

「し、正直、スツゲエ、しんどい・・・」

「あつ、キヨン君。」

やらなくても良い所までやってるね」

・・・マジで!?

そうかやり過ぎか・・・

「で、でも、横の宝箱を取れるから
完全に無駄って訳じゃないよ」

「フオローありがとう長門。」

さて、サツサとあれを取って上に行くぞ」

「あ、キヨンさんは休んでいて下さい。」

わたし達で持ってきますので」

「サンキュウ、古泉」

てか、なんでこの作業俺だけだったんだよ。

誰か一人でも良いから手伝ってくれたって良かっただろ・・・

けどまあ、ゲームじゃないがレベルアップした感じがするな。

経験値独り占め状態だった訳だし。

「キヨンくくん!!」

持ってきたよ☆

これはリーダーのキヨン君が持ってた♪」

「ああ、わかった。」

このまま指にはめれば良いのか？」

「おそらくそれで良いと思います」

「・・・おお。」

サイズがピッタリだな」

「まあ、ゲームですからね」

それじゃあ、戻りますか。

「・・・ソーサリーリングを手に入れた訳だが、
どう使えば良いんだ？」

とりあえず先ほどの半円型バリアの前まで戻ってきたが、
肝心の使い方をまだ聞いてなかった？

「宝石みたいなのをあっちに向けて
ビューンって火みたいなのを飛ばせば良いんだよ☆」

「随分とアバウトだな！！」

まあ、やってみるが・・・」

火を出すったってどうやんだよ？

あー・・・火よ出ろ！！

ボオウ

本当に出た！？

ブウン・・・

「やった、消えたね」

「ああ、そうだな。

この先は・・・っと」

「あの転送装置へゴー！！」

あの、丸いやつだよな。
上に乗れば良いのか？

ヒュオン

「うお！変わった！！」

じゃなくて俺が転送されたのか。

俺達が飛ばされたのは円形の部屋だ。
中央にはなにやら祭壇らしき物が有る。

「ここで終わりか」

「うん、そうみたいだね」
他の祭壇だったら精霊が居るんだけど♪」

特に怪しい物はない。

ここまで来て収穫無しかよ。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

な、何だ！？地震か！？

「こ、これって・・・」

「何か知ってるのか」

「う、うん、精霊が出てくる時にこうなるんだよ」

「ここには居ないんだろ？」

「のはずなんだけど・・・」

ガアアアアアアアアア

!?

何か黒い龍が出てきたぞ!?
長門あの敵知ってるか?

「いや、わたしも見ただ事無いな」
あ、でも、外見はドラゴンに似てるね」

「そうか・・・」
とりあえず倒してみるか。何か起きるかも」

「だ、大丈夫かな・・・」

「やるしかないだろ」

向こうはやる気満々だしな。

「これは厳しい戦いですね」

「ああ、そうだな。
・・・行くぞ!!」

「」「「おおー!!」」「」

ブォン

尻尾!?

ガード出来るか!?

バチン

「・・・っ!!」

受け止められたが衝撃が凄い。
何回も出来ないな。こりやあ。

「キヨン君!?

むうよくもキヨン君をく
くろえ雷神剣らいじんけん!!」

ヒュン! ザクツ! ズドン!!

ああ、雷神剣ってのは
突きの後に雷が落ちるって技だ。

「『その御名のもとこの穢けがれた魂に裁きの光を降らせたまえ』
ジャッジメント!!」

ハルヒの放った技が俺達を避けるように
敵に向かって光の柱が降り注ぐ。

ガアアアアアア!!

よし、効いてるな。

「次はわたしですね。
さんりきせいふ
散力凄符!!!」

「防御力を下げるより
攻撃してくださいよ!!!」

「こ、攻撃技が少ないんだから仕方ないじゃ無いですか!!!」

・・・そうだったな。

しいなは精霊召喚が出来ないときついんだよな。

「なら。光よ! ホーリーランス!!!」

フアフアフアン! ファン!!!

光の槍が敵を襲う。

ガアアア・・・

そろそろとどめだ!!!
行くぞ古泉!!!

「はい!!」

「くうはしょう空破衝!!」

「光よ!ホーリーランス!!」

―ユニゾンアタック―

「貫け!光の槍!!」

これで終わりだ!!

「グングニル!!」

ドガアアアアアアアアアア!!

ガアアアアアアアアア!!

俺が『グングニル』をくらわせた瞬間、
龍が倒れ光輝いた。

「「「やった!!」」」

終わるか……ん?

光が収まらない?

てかだんだんと光量が強くなってきている。

目を開けていられなくなり閉じようとした刹那、
大きな狐を見た様な気がした。
そして俺の意識は暗闇に落ちていった・・・

第三章 後編（後書き）

海「後は、孤島編と退屈編全体のエピローグだけだな」

キ「退屈編は終わったろ？」

海「あれは、野球大会じゃん。

言いたいのは小説全体のタイトルとしての退屈って事だ」

キ「ああ、なるほど」

海「では、次回もよろしくお願いします。

『退屈編』終了し次第『夏休み編』に入ります」

キ「まあ、頑張って書けよ」

海「ああ」

孤島編・退屈編エピローグ（前書き）

海「エピソードです。」

特に内容は無いので飛ばしてしまっても良いです」

孤島編・退屈編エピローグ

「・・・君・き・
起・て・・ば」

・・・うん。

もう少し眠らせてくれ。

「キヨン君起きてってば!!」

「ぬおおお!!」

み、耳元で大声を出すな!!」

「キヨン君が起きないのが悪いんだよっ!!」

寝起きに長門の音波攻撃をくらった為か

頭がぐらぐらする・・・

「って、あの後どうなったんだ!？」

「だから涼宮さんが起きる前に説明しようかと思ってね☆
っと言ってもわたしもよく分かんないんだけど」

「とりあえず聞かせてくれ」

「うん。」

キヨン君が龍を倒した後ピッカって光って
わたしも目を瞑っちゃったんだ。

それで目を開けると戻ってきていたんだけど・・・」

「けどどうした？」

「もう夕方なんだよね」

なに！？

窓の外を見てみると太陽が水平線に沈もうとしている所だった。
そんなに長い時間向こうに居たか？

「多分けど・・・」

時間のずれが有ったんじゃないのかな？
そのくらいしか考えられないし」

「そうか・・・」

他の奴らは？」

「まだ眠ってるみたいだったよ☆」

「それは全員無事と捉えて良いのか？」

「もっちろん♪」

良かった・・・

「そう言えば今回の原因って何なんだ？」

「それが未だに不明って所だね」
少なくともおとくさん達じゃ無いみたいだよ」

「・・・案外白昼夢だったのかもな。
それか胡蝶の夢」

「もしそうだったら面白いね♪」

ここでふと視線が右手に行った。

そこには人差し指にはまった指輪が有った。
ソーサリーリングが。

ミンミンミン

「・・・」

ジーーーーーー

「・・・」

ツクツクボーシ

「だあ!!うるせー!!」

夏は好きだが蝉の声は鬱陶しいから嫌いだ。
と思っているほどイライラしてくる。

何か別な事考えるか・・・

『交響曲事件』（命名…長門）の後、

最後の一日を寝て過ごしてしまった事に気づき
ハルヒと長門は目に見えて落ち込んでしまっていた。
まあ、夕食の頃には二人とも復活していたが。

んで、もう一晩向こうに泊まってから
こっちに戻ってきたのが昨日だ。

帰り道。

今度は冬休みに合宿をする約束をした。
また雪山にすっかな。

で、今に至るって訳だ。

さて、折角の夏休み。

去年のハルヒ程ではないがSOS団で色々としたいな。
無限ループは勘弁して欲しいが。

その前に宿題を片付けるか。
二の舞を演じたくないからな。

孤島編・退屈編エピローグ（後書き）

海「次は夏休み編突入！！
頑張ってみます」

夏休み編 その一（前書き）

海 「はい、夏休み編第一弾です。
原作キャラ一人登場」

キ 「誰だ？」

海 「今のお前は名前知らないと思うから
言っても意味ないよ」

キ 「そうか・・・」

夏休み編 その一

1―晴れ、午後、公園にて。

よお、今回は俺だ。

まあ初回だしな主役としてもここを逃したら不味い。

さて、突然だが皆に一つ質問したい。

宿題はまだ終わってないが気分転換のために炎天下の中来た公園で地面に倒れ伏しているツインテールの誘拐犯を見つけたらどうする？

何を言ってるのか理解出来ないだろうが

大丈夫、俺も理解出来ない。

とりあえず見捨てるか・・・

「・・・み、水・・・誰か・・・水を・・・」

って、見捨てられるかー！！

こいつは何も悪くない、

悪いのは平行世界のこいつだ！！

「お、おい！大丈夫か！？」

「・・・あ、あの・・・み、水を・・・」

「ち、ちょっと待ってろ！！」

大至急近くの自動販売機で飲み物を買って『そいつ』に渡した。

「ほ、ほら、これでも飲め」

「・・・あ、ありがとう・・・ございます・・・」

コク

「グハ！・・・」

「ど、どうした？おい、目を覚ませ！？」

一体何が起こったんだ！？

もしかして飲めない物だったのか？

急いだから何を買ったか見てなかったが・・・

「・・・練乳・・・きなこ？」

なんで、なんでこんな物が有るんだ！？

ここはどこぞの『学園都市』じゃねえー！！？

「本当に申し訳ない」

「い、いえ、わたしは気にして無いですから。
こちらこそお礼を・・・」

あの後、自動販売機でちゃんとお茶を買い
それを流し込む事でこいつは一命を取り留めた。

「しかし、なんであんな所に倒れてたんだ？」

「そ、それが・・・
お財布を家に置いたまま出てきてしまったのです。
そのことに気づいたのは飲み物を買おうとした時だったの。
それで、のどの渇きが限界になって・・・」

「ぶっ倒れたと」

「はい・・・」

それは運がないな。

「つてか、熱中症になってんじゃねえのか？
気分が悪かったり頭がボーッとしたりしないか？」

「だ、大丈夫です！
全然問題ないのです！！
それよりも顔が近いですっ！！／／／」

「っと、スマン」

しまった。

こいつ何と言うか幼く見えるからな、妹やミヨキチの感覚で距離を間違えた。

「コホン・・・」

では改めて、今回はありがとうなのです」

「氣にするな。

俺も人並みの良心は持ってるつもりだからな」

「・・・人並みでは無いのです」

「そうか？」

「ええ。

あなたはとても優しい人だと思います！」

「そうか・・・ありがとうよ」

「ああ、そうなのです。

わたしの名前は『橘 京子』
よろしくね」

「こちらこそよろしく」

そう言えば名前を知らなかったな

『橘 京子』か。憶えておこう。

で、俺も暇だったから軽い自己紹介の後
日が暮れるまで話し込んじゃった。

話してみてわかったが

こいつは真面目で良い奴だ。

やはりあの誘拐犯とこいつは別人だ。
一緒にする事も憚れる。

「あ！もうこんな時間？」

そろそろ帰らないと怒られちゃうのです」

「ああー俺もそうだな。

残念ながら今回はここまでだな」

「はい。本当に残念」

「・・・んじゃ、連絡先でも交換するか？」

「え・・・ええ！？」

「い、良いの！？」

「ああ、俺は別に構わない。

お前が嫌なら強制はしないが」

「い、いえ！是非お願いします！！！！／／／／」

「んじゃ、携帯出せ。」

ああ、俺が送信する」

「ちょ、ちょっと待って下さい!!」

えっと、こうして、はい! 良いです」

「赤外線送信と・・・よし、これで良いな。」

後でメールくれよ。そのアドレスを登録するから」

「わかったのです」

「それじゃあ、気をつけて帰れよ」

「はい。」

『キョンさん』もお気を付けて」

・・・『キョンさん』か。

やっぱり俺は『キョン』と呼ばれる運命なのか?

その夜。

「お! メール来たか」

登録してないアドレスだから橘かな?

「・・・やっぱりか」

予想はビンゴ。橘からのメールだった。
電話番号まで載っている。

本文は・・・

『今日はお話し出来て楽しかったです。
また会ってお話してみたいです。
では、夜分遅くにすみませんでした。
おやすみなさい。橘 京子』

・・・夏休みは長いしまた会ってみるか。

こうして携帯に一人分のアドレスが増えた。

夏休み編 その一（後書き）

海「まだまだ夏休みは続きます」

キ「ネタは有るのか？」

海「ある程度はね。

では、これからもよろしくお願いします」

キ「短い・・・」

海「なあなあ、キョン」

キ「なんだ？」

海「もしかしたら

お前であってお前でない人を出すかも」

キ「どう言う意味だ」

海「まだ未定なんだけどね。」

その時が来たらよろしく」

キ「・・・・・・ハア」

夏休み編 その二(前書き)

海「今回はキヨンがちよつと壊れた」

キ「俺だつてやりたくてやってる訳じゃないさ」

夏休み編 その二

1 一晴れ、話し合い、喫茶店にて。

やっほゝ

今回はわたしでゝす♪

久しぶりの語り手だよ☆

わたし達は今喫茶店にいるんだ。

だけど何時もやってる探索じゃ無いみたい。

「今日集まって貰ったのは話したい事があるからだ」

隣に座っているキョン君がようやく口を開いてくれた。

席に座ってからずっと何か考えていたんだゝ

ちなみに、

喫茶店で席に座る時は何時もキョン君の右隣にいるんだゝ
そして逆側に涼宮さんが座ってるの♪

朝比奈さんと古泉さんは向かい側の席だよ☆

「何か有ったのですか？」

「いや、俺は何もないぞ。

ただ一学期に話すのを忘れた事があるだけだ」

「なにになに☆」

「ああ、それは・・・」

何なんだろうな

わざわざ呼び出すなんて結構大事な事だと思うけど。

「バンドやろうぜ!!」

「「「え?・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

い、今、キョン君はなんて言ったんだろ・・・
バンド? バンドって何だっけ?

手首とかに巻く物じゃ無いよね。

だったら楽器を演奏する集団としてのバンドか・・・

「って、なんで!?!」

「ほら、夏休み終わったらすぐ学園祭があるだろ?

俺達も学園祭で何かしたいと思ってな。

そこで俺が思いついたのがバンドって訳だ。

別にこれは俺の考えだから違うのでも良いんだが。

とにかく学園祭でSOS団も何かしたいって話しだ」

そっか、学園祭か

確かに早く決めておけば後で楽だもんね

「で、どうだ？」

「わたしは面白そうだから賛成☆」

「そうですね・・・」

興味が有りますので賛成です」

「わ、わたしも」

「・・・わたしが使える楽器はあるでしょうか？」

「多分大丈夫だと思いますよ。」

ダメだったらふりだけでも良いですから」

「そうですか？」

ならわたしもやってみたいです」

「じゃあ、全員賛成って事で

学園祭はバンドで参加に決定な」

バンドか

ギターとかやってみたいな

「ではわたしが練習場所を確保しましょうか？
ついでに楽器の方も」

「ああ頼む。

悪いな毎度毎度」

「気になさらないで下さい。

わたしが好きでしている事なので」

「本当に悪い」

「ねえキョン君」

楽器の担当とか決めなくて良いの？」

わたしは何でも出来るよ♪

「それもそうだな。

何か楽器やってたって奴居ないか？

朝比奈さん以外で」

「ないな・・・」

「わたしも特にこれと言っては・・・」

「り、リコーダーだったら・・・」

涼宮さん。

リコーダーは入れなくていいと思うよ。

「な、なら、やりたいのは有るか？」

「ギター!!」

これは譲れないよ☆

「それじゃ、長門はギターに決定な。」

「ではわたしはドラムでもやりましょうか？」

「そうだな。それで頼む。

ハルヒはどうする？」

「ほ、他には何が有ったっけ」

「そうだな・・・ベースぐらいか？」

「じ、じゃあベース頑張ってみる」

「あの、わたしは・・・」

「朝比奈さんはカスタネットでも叩いていて下さい」

「ええ!？」

カスタネットはひどいんじゃない。

他の楽器の音で消えると思うよ。

似合ってるけど・・・

「キョン君は何をやるの？」

「そうだな・・・

俺も長門と同じでギターにするかな」

キヨン君もギターか。

やっぱりバンドと言ったらギターだよね☆

「他の詳しい所はまた今度決めるか。」

さて、まだ時間も早いしこのまま探索行かないか？」

「賛成!!」

「構いません」

「わたしも良いですよ」

よし

キヨン君とペアになるぞ!!

〜おまけ〜

「なあ、ハルヒ」

「なに？」

「お前が歌詞書いてくれないか？」

「ふえ!？」

「頼むな」

「あ、あの・・・その・・・う、うん。
わかった。やってみる。
でも何でわたしなの？」

「・・・・・・・・『冒険でしょでしょ』」

「そ、それって」

「『ハレ晴レユカイ』」

「な、なんで!？」

「『最強パレパ』にやああああああ!？」
・・・・・・・・こう言う事だ」
「ど、どうしてキョン君が知ってるの!？」

「知ってるも何も
机の上に置いてあったぞ」

「あうう。

そう言えば仕舞い忘れた時があったよ」

「まっ、今度からは気をつけろよ」

「うん・・・」

夏休み編 その二（後書き）

海「ドラマCD『サウンドア라운드』と

『ライブアライブ』を混ぜようと思い、
今回の話が出来ました」

キ「じゃあ『ENOZ』の方々は・・・」

海「誰も怪我しないね」

キ「そうか。」

ハルヒの『God knows・・・』と『Lost my
music』

聞きたかったんだがな」

海「まあ、良いじゃん」

キ「・・・ハア」

海「ではまた次回も・・・」

海・キ「「よろしく願いします」」

夏休み編 その三(前書き)

海「ついに出しました・・・」

キ「誰をだ？」

海「口調が作者の中で安定していないキャラ」

夏休み編 その三

こんな言葉はご存じだろうか。

『世の中には似ている人が三人居る』

いつから言われているのかは解らないが、俺はそんな存在に会った事が無かった。

しかし、実際に出会ってしまった。
俺にそっくりな奴と。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁ」

夏休み中のある日。

俺は駅前で途方に暮れていた。

今日は集まる日だったのだが、俺以外の全員が突然来られなくなったのだ。

ハルヒは夏風邪。まあ、お大事に。

長門は来客が有るらしい。思念体か？

朝比奈さんは少しの間帰ってくるよう命令が有ったみたいだ。
何か問題が発生したのかもな。

古泉は緊急ミーティングだと。夏風邪のせいかな？

さて、これからどうしようか。

宿題は・・・もう八割は終わってるからな。
買いたい物は・・・無いな。

その時ふと映画館が目に入った。
そう言えば・・・

「あの映画今日公開だったな」

ちょっと興味も有ったし見に行くか。
時間も有る事だし。

とりあえず見たい映画のチケットを買ったが、
上演まで少し時間がある。
・・・飲み物も買っておくか。

「な！そんな突然・・・あたしだって・・・

はあ・・・わかった。それじゃ」

売店の前に電話をしている奴が居て通れない。
だが、話し終わったみたいだしすぐに退くだろ。

「やれやれ。・・・あつ、すみません」

「そんな、急いでる訳でもないし別に良いさ」

「・・・本当にすみません」

そう言い残し、

少し恥ずかしかったのか小走りで去っていった。

しかし、随分と美少女だったな。

SOS団女子メンバーと同じぐらいのレベルだぞ。
ポニーなのも良い。

それにしても・・・何だこの親近感。

友達を超えて家族みたいに感じたぞ・・・

・・・そんなのどうでも良いか。

「えっと、Iの13、Iの13は・・・ここか」

上演開始十分前。

俺は早めに入場しておくタイプだ。

このあまり人の居ない劇場が好きだったりする。
何でだろうな。自分でも解らん。

「・・・Iの12か・・・ここか・・・え？」

少し前に聞いた声がしたな・・・

「おっ、また会ったな」

「そうですね。」

全く・・・どんな偶然・・・」

こいつは額に手を当てて首を左右に振った。
・・・どこかで見た事有るぞその仕草。

「なあ、お前もドタキャンされたのか」

「ええ、そんな所です。」

お前もって事は・・・」

「俺もだ」

「散々ですね。お互い」

「ああ、そうだな」

「「やれやれ」」

ん？かぶった？

「「・・・ぷっ、くっ、はは、はははは」」

「うまく揃った。ははは」

「こんな事って有るんだな。はは」

「あたしは今まで無い。ははっ」

「俺だってそうだ。気が合うな俺達」

「かもね」

「「はははっ」」

結構面白い奴だな。

～上演中～

『よかったら・・・持っていてって』

「・・・」

『北高まで、全速力で!』

「・・・・・・・・」

『くそつたれと伝えろ』

「・・・・・・・・」

『―あの三日みたいに、

お前はいるが、あいつらなんぞはいない世界をな。

さぞかし失望するだろうぜ。

何が観察対象だ。知るか』

「・・・・・・・・」

『伝える。・・・ありがとう』

「・・・・・・・・おい」

「あー楽しかった」

「・・・・・・・・..はあ」

この映画は最後まで冷や汗が止まらなかった。
何でこんなに似てるんだよ・・・

「でも、なんで今は夏なのに
冬が舞台の話なんだ？」

それは、冬に起こった事件だからだ・・・

「まっ、いいか。

それじゃ、あたしはこれで」

「ああ、気をつけて帰れよ」

「わかってる」

あっ、結局名前聞いてねえ。

だが、もう会う事もないだろうし別に良いか。

次は・・・

CDショップにでも行ってみるか。

買いたいのは無いが見るだけだからな。

「「あっ・・・」」

映画館からほど近い所にある
行きつけの店に入ったのだが、
まさかの三回目となる『あいつ』がいた。

「・・・・・・・・・・」

俺達の間にあまの空気が流れている。
こんな早く再開するとは向こうも思ってただろう。
無論俺もだ。

「・・・・・・・・ん？」

「な、なんだ・・・」

「いや、そのお前が持つてるCDのグループ好きなんだよ」

「そうなのか？あたしもだ。
何となく見に来たら新曲出て、
どうせだから買おうと思って」

「新曲出てたのか？
俺も買っとくか・・・」

「じゃあ、はい」

「サンキュ」

これは来て良かったな。

会計を済まし俺達は店を出た。
今度こそ別れるかと思ったら・・・

「お前もこっちなのか・・・」

「な、なんだよ。文句有るのか？」

「別に・・・」

こういうのを奇縁って言うんだろうな。

「・・・なあ、名前聞いても良いか？」

ほ、ほら、ここまで来た奇縁って奴だし」

どうやら俺と同じ事を考えていたようだ。

「俺は――」

久々の自己紹介タイム。

合宿では古泉が俺の紹介したから、
自分するのは春以来か？

「――で、仲間内からは『キヨン』って呼ばれてるな」

「・・・『キヨン』・・・」

どうしたんだ？

行き成り渋い顔なんてして。

「・・・実はあたしも友達から

『キヨン』もしくは『キヨン子』って呼ばれててな・・・」

「・・・大変だな。お互い」

「だな・・・」

「ってか、名前はなんて言うんだ？」

「ん？ああ、あたしは『白石 鏡香』（しらいし きょうか）

最初の頃は『香』も『きょう』って読むから

少しふざけて『キヨンキヨン』なんて言われてて・・・
で、それを縮めて『キヨン』か『キヨン子』って訳」

「『キヨンキヨン』って・・・そんな有名人いたよな」

「言わないで・・・」

苦労してるんだなお前も・・・

「歳は多分同じ。」

あたしも一年生だから」

「そうか。」

ま、これからも会うかわからないがよろしくな」

「こちらこそよろしく」

って、こうして話しながら歩いてたら家の近くまで来てたぞ。
お前もこの辺なのか。」

「その角を曲がってすぐぐらいだ」

「俺もそうなんだが」

「ふーん・・・」

あ！見えた。あそこがあたしの家」

「・・・は！？」

「どうしたんだ？」

「・・・隣が俺の家だ・・・」

「・・・は！？」

あり得ないだろ！！

近所に住んでるんだったら見た事あるはずだし！！

「まって、今とても混乱してるんだけど、
あたし達って今日初めてあったんだよな・・・」

「ああ、そのはずだ」

「だけど近所だった・・・」

「そうだな・・・」

「「どうなってるんだああ！？」」

叫んだ後、ここに居ては通行の邪魔だと思い
それぞれの家の前で話している。

「後でお母さんに聞いておこう・・・」

「俺もそうする・・・」

「じゃ、今度こそ」

「ああ、またな『キョン子』」

「おい!!」

「冗談だ」

「ふん。」

ならあたしは『キョン』って呼ぶな」

「別に良いぞ」

「・・・マジで!?!」

「なんでそんなに驚く」

「いや、だって、そっちも『キヨン』ってあだ名呼ばれるの嫌じゃないのか？」

「・・・もう諦めた」

SOS団全員からも呼ばれてるからな・・・
もう今更って思えてきたんだよ。最近な。

「・・・そうなんだ」

「じゃあ、おれはお前の事『キヨウ』とでも呼ぶかな」

「まあ、『キヨン子』よりはましだ」

「そうか。」

それじゃあ改めて、またな『キヨウ』」

「ああ、それじゃあまた『キヨン』」

今日は面白い一日だったな。

あいつらのおかげって事で良いのか？

『キヨウ』か・・・

また会うだろうな。

その時は一回は『キヨン子』って呼んでみるか。
反応が面白いし。

夏休み編 その三（後書き）

海「・・・・・・・・」

キ「・・・・・・・・」

海「・・・感想があったら「待てえええええ!!」うお!?!」

キ「アレは何だ!?!」

鏡香（以後 鏡）「アレって・・・

あたしは『キヨン』なんだぞ!?!」

キ「お前は俺じゃねえ!?!」

鏡「それはそうだが・・・」

海「まあ、その辺はお前らで解決してくれ。

あと『キヨン子』改め『キヨウ』の口調は
今後安定させます」

鏡「出来るだけ早くな。

あたしの出番的な問題でもあるんだから」

海「・・・努力します。

それでは、感想が有れば送って下さい」

キ「『キヨウ』のアドバイスも出来れば頼む」

鏡「・・・本当をお願いします。

このままじゃあたし男と間違えられる・・・」

海「では、また次回もよろしくお願いします。」

キ・鏡「お願いします。」

夏休み編 その四（前書き）

鏡「皆様初めましてだな。白石鏡香ことキョウだ。

今回の語りはあたしが担当する。よろしく。

と言っても、前回のあたしサイドって事らしい。

決して新しい話ではないのでその辺はご容赦を」

夏休み編 その四

こんな言葉はご存じだろうか。

『世の中には似ている人が三人居る』

いつから言われているのかは解らないけど、
あたしはそんな存在に会った事が無かった。

しかし、実際に会ってしまった。
あたしにそっくりな人と。

今日は前々から見たいと思っていた映画の公開日だ。
もちろんそれを見るためあたしは映画館に来たのだが・・・

「な！そんな突然来られないって言われても。
ってか、親戚の家に行くって事前にわからなかったのか？」

『ゴメンね』
昨日行き成り帰るって言われてさ。
楽しみだったんだけどな・・・』

「あたしだってそうだったよ」

『そんな訳でホントにゴメンね!』

「はぁ・・・わかった。それじゃ」

『じゃあね』

ピッ

と言う訳で、友達が来られなくなりあたし一人だ・・・

「やれやれ」

まっ、映画は見てから帰るか。

あたしが見たいのだったのが幸いだな。

あれ?ここに居たら通行の邪魔になるんじゃないのか。あたし。丁度売店の前だし。

って、いつの間にか人がいる!

「あっ、すみません」

「そんな、急いでる訳でもないし別に良いさ」

「・・・本当にすみません」

あたしは急いで売店の前から立ち去った。

しかし、結構良い感じだったな。

顔はイケメンって程ではないが

何かこう内面的なかつこよさがあった。

それにしても・・・何だろうこの親近感。

友達を超えて家族みたいに感じた・・・

・・・まあ、そんなのどうでも良いか。

上演開始十分前。

あたしは早めに入場しておくタイプ。

このあまり人の居ない劇場が好きだ。

何でかは自分でも解らないけど。

「・・・Iの12は・・・ここか。・・・え？」

自分の指定された席まで行くと

隣にさっき会った人が座っていた。

「おっ、また会ったな」

「そうですね。」

全く・・・どんな偶然・・・」

あたしはつい何時もの癖で

額に手を当てて首を左右に振ってしまった。

これは相手に失礼だったな・・・

すると今度は向こうから話しかけて来た。

「なあ、お前もドタキャンされたのか」

電話の内容聞こえてたのか。

次からもう少し声を小さくして話そう。

「ええ、そんな所です。

お前もって事は・・・」

「俺もだ」

それは・・・

「散々ですね。お互い」

「ああ、そうだな」

「「やれやれ」」

えっ？ かぶった？

「「・・・ぷっ、くっ、はは、はははは」」

「うまく揃った。ははは」

「こんな事って有るんだな。はは」

「あたしは今まで無い。ははっ」

「俺だってそうだ。気が合うな俺達」

「かもね」

「「はははっ」「」」

面白い人だな。

〜上映中〜

「あー楽しかった」

あたし的には結構良かったと思う。
けど、隣をチラッと見ると・・・

「・・・はあ」

なにやら疲れ切った表情をしていた。
まるで自分が映ってるホームビデオを見せられた後みたいだ。

「でも、なんで今は夏なのに
冬が舞台の話なんだ？」

公開時期がおかしいような気もするが。

「まっ、いいか。」

それじゃ、あたしはこれで」

「ああ、気をつけて帰れよ」

「わかってる」

あっ、結局名前聞いてない。
だけでもう会う事も無いだろ。なら良いか。

次は・・・

CDショップにでも行ってみようかな。
買いたいのは無いから見るだけなんだけど。

映画館からほど近い所に

あたし行きつけのCDショップがある。

品揃えも良く、取り寄せサービスなども有るので
CDを買う時は大概この店だ。

「おっ！新曲出てる」

このグループのCDは絶対買っちゃうんだよな。
有るだろそう言う事って。

「さてと、新しいのあるか？」

あれ？この声は・・・

まさかと思いつつ声のした方に顔を向けると、

「「あっ・・・」」

三度目と成る『あの人』がいた。

「「・・・」」

あたし達の間に気まずい空気が流れている。

こ、こんな早く再会するなんて・・・

向こうも同じ事を思ってるんだろうな。

「・・・ん？」

「な、なんだ・・・」

「いや、そのお前が持つてるCDのグループ好きなんだよ」

「そうなのか？あたしもだ。」

何となく見に来たら新曲出て、
どうせだから買おうと思って」

「新曲出てたのか？」

俺も買っとくか・・・」

「じゃあ、はい」

「サンキュ」

趣向まで一緒って・・・

本当に誰かここまで一致する確率の統計取ってくれないかな。
あたし達は良いデータになると思うぞ。

だが、この後さらに驚く事が起こった。

「お前もこっちなのか・・・」

「な、なんだよ。文句有るのか？」

「別に・・・」

帰り道までも同じだった。

・・・そうだ、

「・・・なあ、名前聞いても良いか？

ほ、ほら、ここまで来た奇縁って奴だし」

って、あたしは何でどもってるんだよ！

その後お互い軽く自己紹介しあったが、
『キョン』と言うあだ名まで一緒だった。

なんて話をしている内に
いつの間にか家の近くまで来ていた。

「お前もこの辺なのか」

「その角を曲がってすぐぐらいだ」

「俺もそうなんだが」

「ふーん・・・」

いや、まさかね。

「あ！見えた。あそこがあたしの家」

「・・・は！？」

「どうしたんだ？」

「・・・隣が俺の家だ・・・」

「・・・は!？」

あり得ないでしょ!!

近所に住んでるんだったら見た事あるはずだし!!

「まって、今とても混乱してるんだけど、

あたし達って今日初めてあったんだよな・・・」

「ああ、そのはずだ」

「だけど近所だった・・・」

「そうだな・・・」

「「どうなってるんだああ!？」」

叫んだ後、ふと我に返りそれぞれの家の前に移動した。
こんなに近いのにな。今まで気がつかなかった。

「後でお母さんに聞いておこう・・・」

何か知ってるかも知れないし。

「俺もそうする・・・」

「じゃ、今度こそ」

「ああ、またな『キョン子』」

「おい!!」

「冗談だ」

冗談になってないんだよあたしにとっては!!
そっちがそう言うならこっちだって、

「ふん。」

ならあたしは『キョン』って呼ぶな」

「別に良いぞ」

「・・・マジで!?!」

あっさり返された・・・

「なんでそんなに驚く」

「いや、だって、そっちも『キョン』ってあだ名
呼ばれるの嫌じゃないのか?」

「・・・もう諦めた」

「・・・そうなんだ」

大変なんだな・・・えっと、『キヨン』も。

・・・自分のあだ名の一つを人に言うって凄く違和感があるな。

「じゃあ、おれはお前の事『キヨウ』とでも呼ぶかな」

『キヨウ』ね。

即興で考えたにしては良いな。

なんて、あたしが素直に言えるはずもなく、

「まあ、『キヨン子』よりはましだ」

なんて言ってしまったから後悔した。

『ましだ』なんてもんじゃないだろ。あたし。

今まで言われたあだ名の中では一番まともじゃん。

「そうか。」

それじゃあ改めて、またな『キヨウ』」

「ああ、それじゃあまた『キヨン』」

だけどもあ、今日は面白い一日だったな。

変な言い方だけど、ドタキャンした友達にありがとうと言いたい。

『キヨン』か・・・

近所なんだしまた会えるよな。

向こうも夏休み中だろうし。

その夜。

お母さんにキヨンの事を話したら、

「あんた何言ってるの。」

小っちゃい時よく一緒に遊んでたじゃない」

と、返された。

「え!! 本当に!？」

・・・全然憶えてない」

キヨンも憶えてなさそうだったし。

「ふふっ、鏡香ったら

『大きくなったら結婚しようね!』

なんて言った事もあるのよ」

「な、なな、ななな／＼／＼」

「でもわたしたち一度ここから引越しちゃったじゃない。

その時別れて以来ね。懐かしいわ」

お母さんにはこの前挨拶したんだけどその時いなかったから。
何でも部活動の合宿に行ってるとかで」

そ、そう言えば幼稚園ぐらいの時誰かと遊んでた記憶はあるけど。
ハッキリと顔まで覚えてないし。

と言うか『結婚しようね』って何を言ってるんだよ昔のあたし！

！／／／
たしかにいい人そうだけどさ！／／／

ぬああああ！！

次キョンに会う時どんな顔をすれば良いんだあああああ！？／
／／

夏休み編 その四（後書き）

鏡「どうしよう、どうしよう、どうしよう・・・」

海「・・・小さい時言った事なんだから
そこまで気にしなくて良いだろ」

鏡「・・・そうは言うけど、
あたしの気持ち的な問題なんだよこれは」

海「そうか。まあ、頑張れ」

鏡「何をだよ・・・」

海「知らん。
・・・えーと、感想が有れば送って下さい」

鏡「作者のやる気が上がるらしい。
本当なのか？」

海「当たり前だろ。
それでは・・・」

海・鏡「次回もよろしくお願いします」

鏡「次あたしが出るのはいつだ？」

海「まだ未定」

鏡「そうか・・・」

中学生編 その三(前書き)

佐 「僕の出番のようだね」

キ 「俺もだけどな」

中学生編 その三

1 一夏、風邪、自宅にて。

迂闊だ・・・

まさか夏風邪を拗らしてしまうなんて。

夏こそ体調管理をしっかりとしなければならぬのに。

しかも、外せない用事とやらで両親はいないし。

お昼はどうしようかな。

そう言えば出かける前に、

『一応キョン君に後で連絡しておくわね♪』

って、言っていたね。

・・・お母さん。

その気遣いは嬉しいのですが今の僕にはちょっと・・・

そもそもキョンだって忙しいと思う。

僕のためにわざわざ時間を割いて貰うのも悪し。

・・・まあ、来てくれたら嬉しいけど・・・

「・・・キョンの事考えてたら熱が上がるかも。
おとなしく寝てよう」

そう思い横になった。

くうゝ

おなかへった。

「・・・くうくうお腹がなりました」

「おい、黒くなるな・・・」

「んゝ？」

はれ？

誰かいるの？

「俺だ。」

お前の母さんから連絡があったんで来たんだが」

「・・・きょ・・・ん・・・？」

「ああ、そうだ。」

飯は俺が何とかするからお前は寝てろ」

来てくれたんだ・・・

ん？来てくれた？
一体誰が？キョンが。
どこに？わたしの家に。
つまりわたしの部屋に・・・

「え、ええええええ！？」

「ば、バカ！大声出すな！！」

くらっ

「あうう・・・」

「言わんこっちゃ無い。
ほら、横になってろ」

「ゴメン・・・」

「じゃ、俺は何か作ってくるが
お粥だったら食えるか？」

「うん、多分大丈夫」

「・・・女口調に凄い違和感があるんだが」

「し、仕方ないじゃない。
そこまでの余裕は無いのよ」

さつきからブーツとして頭がうまく回らない。
本当は普段通りに話したいんだけど無理・・・

「じゃ、台所借りるぞ」

「気をつけてね」

「わかつてる」

ボタン

行っちゃった・・・

キョンって料理出来るのかな？

調理実習じゃ男子はのけ者になってるもんね。
見た事無いな。

「・・・もうちょっと寝てよう」

コンコン

「佐々木、入るぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ん？」

出来たのかな？

「卵粥？ってのを作ってみたんだが。
味は保証しないぞ」

見た目は普通だけど・・・

パクッ

こ、これは、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「や、やっぱり、不味かったか？」

「負けた・・・」

「は？」

・・・後でお母さんに料理教えて貰おう。

「と、とにかく、口にあったようで良かった」

「どうしてこんなに料理が出来るの?・・・」

「親がどっちもない時は俺が料理してたからな。妹にやらせる訳にはいかないだろ」

「なるほど・・・」

「ほら、サッサと食っちゃえ。」

そして寝ろ。そうすれば治る」

「わかった」

やっぱりキョンは面倒見がいいよね。

「他にやって欲しい事とか有るか?」

「・・・ううん。特には無いよ」

今回はキョンの凄さを再確認出来た。
なんと家事全般を一流とは言えないけど
何でも人並みにこなせる事がわかった。

それを本人に言ってみただけど、

「ようは『器用貧乏』って事だ」

って返された。

そんな事無いと思うんだけどな。

「ねえキョン、

何時まで家にいられるの？」

「そうだな・・・

お前の親が帰ってくるまでだな」

「そっか。

じゃあ、お願いがあるんだけど・・・」

「なんだ？」

恥ずかしいけど、

少しくらい甘えても良いよね・・・

「帰るまでここにいて」

行き成りこんな事言われても困るよね。
わたしだったら困る。

けど、キョンは、

「・・・ああ、良いぞ」

そう言って頭を撫でてくれた。

「ふふっ、ありがとう」

なんか眠くなってきた・・・

「ん？眠そうだな。」

ゆっくり休んでろ。俺はここに居るから」

「うん。」

それじゃ、おやすみ」

「おやすみ」

その声でわたしの意識は暗闇に落ちていった・・・

目を覚ますと次の日の朝だった。

確か眠ったのって午後三時ぐらいだと思ったが。
随分と長い時間眠っていたようだ。

風邪は治っているな。

昨日はキョンに来て貰って正解だったようだ。

「おはようお母さん」

「おはよう。治ったようね。」

キヨン君には感謝しなきゃダメよ」

「わかってるわよ」

本当に感謝だね。

いつか返さなきゃならないな。

朝ご飯を食べた後、

僕は自分の部屋でくつろいでいたのだが・・・

プルルルルル

「電話か・・・」

両親とも仕事に行ったから僕が出なきゃダメなようだ。
ちよっと面倒くさい。

ガチャ

「もしもし、佐々木です。」

・・・・・・ええ？

本当ですか？

はい・・・・はい・・・・ええ、是非行かせて貰います」

くくく。

どうやらキヨンが風邪を引いたようだ。
僕のがうつったのかもね。

まさか、こんなにも早く機会が訪れるとは。

さあ、キヨン。

今日は僕が看病してあげるよ。

覚悟していてくれたまえ。くつくつく。

中学生編 その三（後書き）

佐 「感想があれば送ってくれたまえ。

ちなみに、キョンの看病の話は追々書くそうだよ」

夏休み編 その五（前書き）

海「バンドの話です」

キ「何にもしないけどな」

夏休み編 その五

「きくみは誰とキスをするく♪」

「わくたし♪」

「「それとも」」

「わくたしい♪」

行き成りで悪いが、ハルヒと長門の歌から始めてみた。
何を歌ってるかは・・・・・・・・解るよな？

二人が歌っているが

俺達はカラオケに来て居る訳ではない。

古泉が知り合い（機関）に借りたと言う楽器を持って
市民ホールの一室に居る。

つまり今回はバンドに関しての集まりだ。

ほら、学園祭でやろうとしているやつ。

「お二人とも上手ですね」

「ええ。」

しかし、伴奏がないとやはり寂しい気がします」

「同感だ。」

・・・おい、そろそろ練習始めるぞ」

「「は〜い」」

まあ一回目だし、今日は楽器に慣れるだけで良いよな。
長門は必要無いと思うが・・・

ああ、俺は一応経験者だから弾けるぞ。ギター。

ちなみに、朝比奈さんをキーボード担当にした。
頑張れば出来るかも？と本人が言ったからだ。

だが、やはり気になる。

少し見てみるか・・・

チラッ

~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪~~~~~

「えっと・・・ここは・・・」

~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪~~~~~

「こうですね！」

大丈夫そうだな。

さて、もう一人の心配な方は・・・

「ううゝ・・・難しいよゝ」

コードの練習してるみたいだな。

「・・・・・・・・・・こうかな？」

グキッ!!

「あうっ!!」

・・・もうちょっと頑張ろうか・・・

「ベースも大変そうですね。

ドラムもなかなかの物ですが」

「曲のリズムを取る事は重要だしな」

「・・・そうなんですよ。

なので早く曲が出来て欲しいですね」

「じゃないと練習し辛いからか」

「ええ、その通りです」

曲に関してはハルヒの持ってくる歌詞頼りだからな。
とは言え、

「あううゝ・・・」

歌詞を書く余裕はこいつに有るか？

「まっ、大丈夫か。」

所で長門、ここが解らないんだが・・・」

「ん？」

そこはね、こゝするんだよ☆」

「ああ、なるほど。・・・こうか？」

「そゝそゝ♪」

「サンキュウ」

さて、俺も頑張ってみるか。

ジャーン♪

「ふう、こんなもんか」

つい熱中してしまった。

ギターの弦をはじく手を止め
ふと時計を見てみる。

そろそろ部屋の返却時間だな。

片付けの時間を考えるともうやめた方が良いな。

「よし、撤収だ。

忘れ物無いようにな」

「・・・あれ？何でだろ？

頭に谷口君が浮かんできたよ・・・」

「・・・・・・・・その事は触れるなハルヒ」

確かにあいつはそんなイメージはあるが。

「・・・鍵は・・・閉まってますね。

戸締まり完了しました」

「スマンな」

「いえいえ」

「じゃ、みんなで帰ろっか☆」

そうだな。

帰り道。

「そう言えばキョン君。

グループ名は決めたんですか？」

あ、そうか。

そんな物も必要なのか。

「いえ、まだ決めてませんね」

「はい！じゃあさ！放課後「却下だ！！」・・・え」

それは不味いだろ。色々。

「だって、楽器も人数も同じなんだよ」

「それでもダメだ」

「なら、『FIRE BOMBER』！！」

「あんなに熱くないだろ。俺達」

「だったら・・・『地球防衛バンド』？」

「エヴァか。」

「ってボケにしても解りづらいな」

「え、えっと、あ、『アドリビトム』!!」

「もはやバンド名じゃねえ!?!
当然却下だ!?!」

「ぶ〜ぶ〜!」

やべえ、長門のふくれ顔可愛い・・・

「コホン・・・」

ではそのまま『SOS団』でよろしいかと」

「・・・そうだな。そうするか」

無難だしな。

「じゃ、バンド『SOS団』頑張るぞ!!」

「おー！！」

夏休み編 その五（後書き）

海「今回は場繋ぎだな」

キ「そうだったのか・・・」

海「では、次回もよろしくお願いします」

キ「え！もう終わりか！？」

・・・よ、よろしくお願いします」

夏休み編 その六 前編（前書き）

海「夏休み編初の前後編」

キ「なんで長い話しを・・・」

夏休み編 その六 前編

夏休み某日。

家に居た所、電話が掛かってきた。

ディスプレイを見ると『涼宮 ハルヒ』と表示されていた。

「・・・こっちのハルヒは大丈夫だよな・・・」

ピッ

「もしもし」

『あつ、キョン君？おはよう。』

突然だけど明日って時間開いてる？』

「ああ・・・今の所はな」

『・・・ちよつとお願いがあるんだけど』

「何だ？」

ハルヒから『お願い』なんて珍しいな。

『・・・アルバイトやってみない？』

「アルバイト？」

『う、うん』

何でこいつからこんな話しが？

『じ、実は・・・』

聞いた話を要約すると、

親戚が経営している店が書き入れ時なのに
バイトの人が全然集まっていない。

なので俺に協力して欲しいとの事だ。

『えっと・・・ダメ・・・かな？』

「いや、良いぞ。

俺も暇だったからな」

『あっ、ありがとう！！』

「ところで、どんな店なんだ？
そこまで難しい事は出来んぞ」

『それは大丈夫だと思うよ。』

お店って言っても海の家だから。
それに主に配膳のお手伝いらしいよ』

「そうか………って海! ?
てつきり普通にその辺だと思ってたんだが」

『電車に乗って行きやすい所だから大丈夫だよ』

「……まあ良いか」

ただ、妹にはれないようにしなければな。

「で? お前も手伝いに?」

『うん。そうだよ。』

後、わたしのお兄ちゃん』

「お、お兄ちゃん! ?」

ハルヒに兄貴が! ?

は、初めて知った……

『大学一年生なんだけど』

夏休みだからこっちに帰ってきたんだ』

「……と、とりあえず、

参加するのはお前ら兄妹と俺の三人で良いのか?」

『も、もう一人必要なんだけど……』

「他のSOS団員は？」

『みんなダメだって』

「・・・はあ。わかった。

残り一人は俺が何とかする」

『ホント！？

ありがとうキョン君！！』

「気にするな。

じゃ、そろそろ切るぞ」

『うん。また明日ね』

「ああ、また明日」

ピッ

さて・・・

とりあえず谷口と国木田に掛けてみるか。

『——ってな訳で無理だ。わりいなキョン』

「いや、別に良さ。

こっちこそ悪いな、こんな電話掛けて」

ピッ

カタン

友達は全員ダメか・・・

みんな色々と忙しいようだ。

ちなみに佐々木には掛けていない。

夏は塾やら何やらで忙しそうだからな。

せめて平日じゃなきゃ可能性はあったんだが。

・・・本当にどうするかな後一人。

橘にまで電話を掛けたんだがダメだったし。

いや、あいつだったら大丈夫かも。

・・・電話番号知らねえ。

仕方ない家に押しかけるか。

ピンポーン

「はい」

ガチャ

「どちら様で・・・」

「よお、キョン子。俺だ」

「き、キョン!？」

何であたしの家に来たんだ!？
ってかキョン子言うな!!!」

見事なツツコミだなキョウ。

「突然だが明日暇か？」

「あ、ああ。」

特に予定は無いぞ」

「じゃあ、良かったら海行かないか？」

・・・あれ？言い方ミスったか？

「そ、そそ、それって、で、デートの誘いってことか！？／＼／＼」

「だ、断じて違う！！／＼／
俺が言いたかったのは――」

（説明中）

「――って事だ解ったか？」

「・・・はあ。

まあ大体理解した。
そう言う事だったらあたしは構わないぞ」

「サンキュ。助かる」

とりあえず明日の事は何とかなったな。

「な、なあ、キョン。

ついでに家に上がってかないか。
ほら、お母さんも会いたがってたし・・・」

「お前の母さんに俺の事話したのか」

「ああ。

って言うか昔は何時も一緒に遊んでたらしいが
正直憶えてなかった」

「そうなのか？」

俺も憶えてないな・・・」

「そ、そうか・・・」 ホッ

おい、キョウ。

何でそんなにホッとした顔をしてるんだ？

「とにかく！おとなしく上がってけ」

「・・・それじゃ、邪魔するぞ」

「お、おう」

で、その後

暗くなるまで話し込んでから、家に帰った。
と言っても隣だが。

ついでにアドレスも交換した。

さて、明日はバイトか・・・
どんな人なんだろうな、ハルヒの兄貴って。

夏休み編 その六 前編（後書き）

海「次回は後編です」

鏡「なるべく早く更新しろよ。

数少ないあたしの出番なんだからな」

キ「俺的にはキョウよりもハルヒの兄貴が気になるんだが」

鏡「キョンは黙ってて!!」

キ「……やれやれ」

その六 後編（前書き）

海「お久しぶりです」

キ「全くだな」

海「残暑もとつくに過ぎたのに海の話しです」

鏡「肌寒いな。」

しかも次回も海の話しだろ？」

海「・・・すみません」

キ・鏡「「やれやれ」」

その六 後編

SIDE…キヨウ

（翌日）

ふああゝ……眠い……

何が悲しくて夏休みのしかも朝早くから駅前に居なきゃならんだ。

いつもだったらまだ家でゴロゴロしているって言うのに……

「そうぼやくな。」

まあ、俺もお前と同意見だな」

「……じゃあなんで引き受けた」

「あいつの頼み事は何故か断れないんだよ……」

「へー……まっ、どうでも良いけどさ」

確かにキヨンは意外と押しに弱いところがある。

それに基本いい人だからな。

なんだかんだ言って、結局引き受ける事が多そうだ。

「なあ」

「なんだ？」

「何時集合って言われたんだ？」

「九時」

「・・・・・・・・・・はあ！？九時！？」

あたしは近くにあった時計を見上げる。

針は丁度『午前七時』を示していた。

「あと二時間有るじゃねえか！！」

「いや、その点は問題ない」

「問題有りすぎだろ！！」

いくら何でも早いつて！！」

「そうでもないぞ。

ハルヒと言う奴は待ち合わせをすると

その時間の一・二時間前にはそこに居るぞ」

「・・・・嘘だろ？」

さ、流石にそれは冗談だよな？

そうだよな。そうであってくれ！！

「あっ！キヨン君！！！」

「言ってる傍から来たな」

「本当だった!？」

「ふえええ!! な、何がですか!？」

「あ、いや、何でもない・・・」

おっと、いけない。

第一印象は肝心だからな。

少し落ち着けあたし。

平常心、平常心。

「初めましてだな。

あたしの名前は白石鏡香。

キヨンからは「キヨン子」と呼ばれて・・・っておい!!」

「ふえ? き、キヨン子・・・さん?」

「ああ、違う! それやめて!! お願いだから!!」

早く誤解を解かないと大変な事になる!!

それからキヨン・・・

この恨み後で晴らしてやるからな・・・

S I D E .. キ ョ ン

やっぱりキョウは弄ると面白い。

普段はツツコミだが案外ボケの方が合ってるのかもな。

などと思いつつハルヒとキョウを見ていたら、

「なあ!! お前が『キョン』か?」

見知らぬ青年に話しかけられた。

「ええ、そうですが・・・」

「おっ! やっぱりそうか!!」

いつも妹が世話になってるな!!」

妹?

・・・・・・もしかして、

「ハルヒの・・・」

「兄貴だ。

名前は『晴彦』(はるひこ)。

よろしくな!!」

「よろしくお願いします」

涼宮さん・・・じゃ、ハルヒとかぶるか・・・
あー・・・晴彦さんで良いか。

晴彦さんはあっちのハルヒに近い性格のようだが大学生だからか、少し落ち着いた雰囲気もある。

身長は俺よりも有るな。
男の古泉と同じぐらいかもしれない。

そしてイケメンだ。
その辺のモデルよりも格好いい。
ってか実際やってそうだな。

あ・・・あれ。
頭に付けてるのよく見たら
カチューシャじゃなくてヘッドフォンだ。
ハルヒのイメージが有ったから見間違えた。

「ん？なんだ？
そんなにまじまじ見て。
俺に見惚れてたか？」

「・・・確かに格好いいとは思いますが
ソッチには全く興味ないんで」

「ハハッ！安心しろ。俺もないから」

全く・・・勘弁してくれ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そしてお前らはいつから聞き耳を立てていた？

こっちの事は良いからお前らはまだ言い争っておけ。

「・・・ハア。

晴彦さん、そろそろ行きませんか？」

「そうだな。

別に一本早い電車でも良いか。

それじゃ出発だ！俺に着いてこい！！」

そう言って走り出した・・・・・・・・走り出した！？

「おい！早く追うぞ！！」

「・・・ああ」

「えう！ち、ちょっと待ってよう！！」

あー！もう！！

あの人はあっちのハルヒと同じ接し方で言った方が良いな。

そう決意しながら俺達三人は

切符を買わずに改札に特攻した晴彦さんの後を追った。

S I D E .. キ ヨ ウ

「海だー!!」

「海だ」

電車に揺られる事約一時間。

あたし達とはある海水浴場に着いた。
ここに海の家があるらしいのだが。

「やっぱり兄妹なんだな」

「同時に同じ事叫ぶなんて・・・」

涼宮兄妹はテンションが上がり切っているみたいだ。
二人とも目が異常なまでに輝いている。

「ハルヒは合宿の時もこんな風だったぞ」

「そうだったのか」

「所で、そんな事言ってるお前もあいづらみたいな心境なんだろう？」

「うっ・・・な、何の事やら・・・」

「服の下にもう水着を着てるんだろ？」

「な!？」

何で解ったんだ!？

「それは簡単な事だ。

基本的に俺とお前の思考や行動は似てるだろ？」

「あ、ああ」

「・・・実は俺も水着を着てる」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

キョンも楽しみだったんだな・・・

「・・・なあ、あいつら本当は兄妹じゃ無いのか？」

「・・・ち、違うと思うよ。

キョン君は妹が居るみたいだけど小学生だって言ってたし」

バツチリ聞こえてるよ、涼宮兄妹。

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

無音。

だ、誰か喋ってくれ・・・

「・・・さ、さて、バイト先に行こうか!」

「そ、そうだねお兄ちゃん」

た、助かった。

「ほらボサツとしてたら置いてくぞキョウ」

「え、あ、ああ、悪い」

さて、来たからにはしっかりと働くか。
で、サッサと終わらせて海で遊ぼう。

その六 後編（後書き）

海「つて事でハルヒコの登場です。

大学生という設定上

長期休暇などの時にしか出せませんが」

晴彦（以後 晴）

「おい！！なんだそりゃ！？

じゃあ夏休み終わったら次の出番冬休みじゃねえか！！」

海「まあ良いじゃん」

晴「よくねえ！！」

海「・・・長門（平行）なんて

重要な役なのに不定期なんだよ。

橘もまだ一回しか出てないし。

藤原と九曜に至っては名前すら出てないんだよ」

晴「・・・出番が約束されているだけ

俺は良い扱いの方なんだな」

海「そう言う事だ」

晴「なら良い！」

海「どうも。

・・・えゝ、では感想などが有れば下さい。

今後の話しの参考になっています。

更に作者のやる気が約二倍になります」

晴「『約』なんだな」

海「それでは・・・」

海・晴「「また次回もよろしくお願いします」」

晴「宇宙人、未来人、異世界人、超能力者が居たら俺の所に来い。
以上」

海「・・・なんでここで？」

晴「いや、一度は言っところかなと」

夏休み編 その七（前書き）

キ「さてどんな事をするのやら」

鏡「そんな難しい事はしないうけど」

キ「作者はバイトの経験が無いからな。
逆に簡単すぎたりしてな」

海「そんな事は無いぞ。

バイトならした事がある。照明のだけど」

キ・鏡「ダメじゃん!!」

夏休み編 その七

「いやゝ来てくれてありがと。

とりあえず今日だけだからお願いね」

海の家に着いた俺達をハルヒの親戚の方が出迎えてくれた。
柔和な笑みを浮かべた温厚そうな人だ。

「おう！まかしとけ！！」

で、俺達は何をすれば良いんだ？」

「料理をしてくれれば嬉しいんだけどね」

料理・・・

海の家だから一般的に焼きそばとかだろうな。

「うゝん・・・

なあ、お前ら料理出来るか？」

「簡単なのだったら。

そう言う晴彦さんはどうなんですか？」

「もちろん出来るに決まってるだろ」

晴彦さんは得意げにしている。

ハルヒと同じく万能型なんだな。

「ハルヒは・・・聞くまでも無かったか」

調理実習で料理の腕は十分に知っている。

「えへへ。」

あつ、キョウさんはどう？」

「あー・・・あたしは・・・」

「・・・もしかしてダメなのか？」

「いや、どうだろう。」

あまり授業以外で料理しないからな」

「なるほど」

まあ、大丈夫そうだけだな。

「とりあえず、みんな料理担当で良いかな？」

「ああ、それで良いと思うぜ！」

「じゃあよろしくね」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

早速調理に取り掛かるために厨房までやって来たのだが・・・

「ね、ねえ、キヨン君・・・」

「なあキヨン・・・」

「ああ、これは・・・」

「流石に・・・」

この場にいる全員が同じ事を考えている。
それはつまり、

「「本当に俺達だけかよ！！」」

あ、晴彦さんとかぶった。

「いや、いくら何でもこれは無いだろ！
普段ここで調理している人は居ないのか！？」

「も、もしかして、接客の方に回したのかな？」

「こっちの方が重要だろ！！」

「あたし達だけって・・・」

はあ・・・やれやれだ。

とにかくやってみようぜ。
そろそろ客も来るだろうし。

「そうだな。」

じゃあお前ら、今日一日頑張っていくぞ!!」

「おー!」

「「おー・・・」」

大丈夫なのか?これで。

とりあえず俺達は

暑いからと折角着て来たからと言う理由で水着になっている。
まあ、更にTシャツも着ているが。

「何かこの格好してるだけでも海の家って感じだな!!」

「どんな感じですか・・・」

「で、具体的に何からやれば良いんだ?」

「そうだな・・・下ごしらえとか?」

「下ごしらえ？」

「あれを崩すとか」

そう言って俺はテーブルの一角に鎮座している段ボールの山を指差す。

「「「・・・・・・」」」

「たぶんあれは野菜やら何やらが入っているんだろうな。
・・・・やるしかないだろ」

「・・・・まず中身確認しとくか」

晴彦さんの言葉により手分けして段ボールを開けてみる事にした。

「これは全部中華麺だな」

「たくさん有るんだね」

「結構使うからな。」

ラーメン、焼きそば、冷やし中華ってところか」

「こっちはいろんな物が入ってるよ」

「卵に肉類。これは・・・・ソース？」

「うお！？野菜ばっか！！
こんなに使うんだな・・・・」

「やっぱり野菜の箱は多いな」

「発泡スチロールのも有るな。
中身は・・・魚介類か」

「みたいですな。
・・・ん？こいつは」

「どうしたキョン？」

「・・・小さなコイキング」

「「コイキング!？」」「」

あっ・・・これ鯛だった。

数分後。

全部の箱の中身を確認し終わった。

「さて・・・何から始める？」

「野菜切りとかですかね」

夏休み編 その七（後書き）

晴「いやゝ思ったよりも大変だな!!」

ハ「うん。そうだね」

晴「だが次回はもっと大変らしいぞ？」

ハ「あう! 本当なの海人さん？」

海「・・・多分」

ハ「だ、大丈夫かな」

晴「まっ、何とかなるさ!!」

それじゃ、感想があったら送ってくれ!」

海「作者の励みになります。

・・・って言う事逆だろ普通!!」

晴「気にするな!

では次回も——」

海・ハ・晴「「「よろしくお願いします!!」」」

ハ「そう言えばお兄ちゃん、
いつもどんな曲を聞いているの？」

晴「色々と聞くぞ。」

J-POPからアニソン・ゲーソンなんでもだ」

ハ「そうなんだ。」

じゃあ最近よく聞くのは何？」

晴「川村ゆみの『キミの記憶』だな」

海「P3は作者も好きだぞ」

晴「そうなのか。」

じゃあ・・・」

海「な、なんだ？」

晴「『ゴッドハンド』!!」

海「ゴフッ!・・・す、すい・・・水月に・・・」

ハ「か、海人さあああん!？」

夏休み編 その八（前書き）

海「・・・頑張れよ」

キ「その言葉は嫌な予感しかしないんだが」

鏡「あたしも同意見だ」

海「とにかく本編どうぞ」

夏休み編 その八

トントントントン

・
・
・

トントントントン

・
・
・
・
・
・

トントントントン

・
・
・
・
・
・
・

「ぬああ!! 静か過ぎんだろ!!
誰か何でも良いから喋れよ!!」

全員で野菜を切っていると
突然晴彦さんが叫んだ。

「行き成り何を言い出すんですか」

「何か話題の一つぐらいあんだろ！」

たとえば・・・こう・・・何だ？」

「いや、俺達に聞かれても・・・なあ」

そこであたしに振られても困るんだが。

「むう・・・なあキョン」

「はい」

「好きな人とか居ないのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」ピクッ

キョンの好きな人・・・

もの凄く興味が有る。誰だろう。

「好きな人は居ませんよ。今の所は」

「なんだ、つまんねえな」

「ご期待に添えないようですが事実です」

ふーん。

居ないのか。

「・・・なあ、涼宮さん」

「名前で良いよ。」

それで、どうしたの？」

「じゃあ、ハルヒさん。

キヨンの事好きだろ？」

「ふえ！？・・・うん／＼」

「他にキヨンの事が好きな人って周りに何人ぐらい居るんだ？」

「え？えつと・・・わたしが知っているのは三人かな？」

あ、でも朝比奈さんは・・・それに知らない人が居るかも」

「・・・そうか、ありがとう」

「・・・キヨウさんはキヨン君の事好きなの？」

な！？

「そ、そそ、そんな事無いぞ！／＼／
少し気になるが好きって程じゃ！／／／」

「むう・・・本当に？・・・」ジト

「いや・・・その・・・」

な、なんだこのプレッシャーは！？

早く何か言わないと。

・・・この場合何が正解なんだ！？

「開店時間になったよ」

お客さんが来るから料理よろしくね」

ナイスタイミングです!!

「ほ、ほら、お客さんが来るから準備しなきゃ」

「・・・うん」

た、助かった・・・

「キョウ、そこの皿取ってくれ」

「お、おう。・・・これか」

「サンキュウ」

現在時刻 11..00

開店と同時にお客さんが入ってきた。

早めの昼食を取る人、ただ涼みに来た人、
浮き輪を借りに来た人など様々など。

ハルヒさんはかき氷などを売る外の売店へ、
晴彦さんは貸し出しの方へ行ってしまった。

つまり厨房にはあたしとキヨンが居るが・・・

「・・・・・・・・」

ザクザクザク

「・・・・・・・・」

ジュージュー

「・・・・・・・・」

き、気まずい。

キヨンは料理に集中して必要最低限しか喋らないし、あたしはさっきハルヒさんと話していた事が尾を引いてどうもキヨンを意識してしまう。

「・・・ハア。ダメだな」

「何がだ？」

「な、何でもない！何でも！！」

「そうか・・・」

「・・・・・・」

うう、あたしも集中しなきゃな。

そもそもあたしは何でこんな風になってんだよ。
別にキヨンの事は何とも思っていないんだろ。
気の合う友達ってだけだ。・・・うん、そのはずだ。

「おい、キヨウ」

「!?!? な、何だ!?!?」

「お前、今から何しようとしてた?」

「焼きそばをかき混ぜようとしてるが?」

「・・・・包丁で?」

あたしは両手に持っている物を見た。
そこにはキヨンの言う通り二本の包丁があった。

「・・・・すまん。」

考え事してたらヘラと間違えた」

「しっかりしてくれ・・・・」

八割方の原因はキヨンなんだが。

なんて言えないよな・・・・

「ほら、俺達しか居ないんだからサッサとやるぞ」

「わかってるよ」

そして作業再開。

またしても厨房を静寂が包む。

「・・・・・・・・」

しかし、その空気はすぐに破られた。

「焼きそば4、ラーメン8、
カレー7、野菜炒め2お願いね」

この絶望的な言葉で。

時計を見るといつの間にか12時になっていた。
つまり丁度お昼時。

「キョン」

「ああ」

「「だ、誰でも良いから手伝いに来てくれ!!」」

これは二人で乗り切れるのか!?

夏休み編 その八（後書き）

海「キヨン・キョウコンビは忙しいので
涼宮兄妹に来て貰いました」

晴「これは来たって言うのか？」

ハ「本編とここは別世界みたいな物だし」

晴「あと番外編もな」

ハ「あ、あれは入れなくても良いんじゃない？」

海「えゝ、とにかく次回予告して行け」

ハ「次回予告って滅多にしないよね。」

え、えっと、今回は・・・お兄ちゃんお願い!!」

晴「しょうがねえな。」

次はキヨンとキョウが更に頑張る予定だ」

ハ「更に!？」

海「感想を下さると嬉しいです。」

では、次回もよろしくお願いします」

ハ・晴「お願いします!!」

夏休み編 その九（前書き）

海「海の家は今回で終わりです」

ハ「キヨン君達大丈夫かな？」

海「心配なら見に行けば良いだろ」

ハ「うん。そうするね。」

それじゃあ、本編どうぞ」

夏休み編 その九

「焼きそば5!!」

「はい!!」

「次、カレー3。焼きそば2。ラーメン1!急いで!!」

「わかりました!!」

お久しぶりです。涼宮ハルヒです。

わたしが担当している売店で

かき氷の氷が無くなってしまったので取りに来たのですが、キョン君とキョウさんがとても忙しそうにしています。声を掛ける事をためらってしまう程です。

お昼時だと当たり前の光景なのでしょうか?

ちなみにわたしの所は意外にもお昼は人があまり来ません。なのでここでキョン君達を見ているのも大丈夫だと思います。

「このソース切れてるぞ!!」

「そこに新しいの置いといた!!」

それにしても凄いです。

わたしだったらとてもじゃないけど出来ないな・・・

「キョウ!次は何だ!?!」

「えーと・・・マールカレー」

あれ？それってテイルズ・・・

「んなもん有るか！！」

とりあえず麻婆豆腐買ってきてカレーにぶち込んどけ！！」

「あと、はがくれ丼」

「巖戸台に行つてろ！！」

「ペタワックセット」

「それも巖戸台！！」

「・・・物体^{カレー}X」

「八十稲羽から戦車と女教皇連れてこい！！」

「って緑なの無いのか！？」

「今になって気づくな！！」

・・・とても息ぴったりだね。

やっぱり本当は兄妹じゃないのかな？

あ！そうだ、氷。

二人は忙しそうだから勝手に持って行っちゃおう。
冷蔵庫はすぐそこにあるし。

・・・それじゃあ、頑張っ
てね。
もう少しでお昼時終わると思
うから。

カーカーカー

結局、海の家のお手伝い
だけで一日が終わってしま
いました。
出来ればキョン君と海で遊
びたかったな

「今日はありがとね」
おかげで助かったよ！
それじゃあお疲れ様」

仕事終わりにそう言われ
てのし袋を渡されました。
中には一万円が入っていま
した。
お給料って事でしょうか？

「い、一万円ってもらい過
ぎじゃない？」

「一日で一万円とは良い仕
事だ。
しかも俺は浮き輪の貸し出
ししてただけだしな！！」

「・・・俺達はもつと貰っても良いと思うんだが・・・
その辺どう思う、キョウ」

「・・・確かにあたし達は働き過ぎだと思う。
なんだよあれ、もつと人来いよ」

キヨン君とキョウさんが肩を落としてうなだれてる。

どうしよう・・・

慰める

お兄ちゃんに話を振る

>どうでもいい

ピッ

きつとどうでもいい事だよね。

「さて、帰るか!」

「うん!」

あつ、キヨン君達を復活させないと。
えつと・・・こう言う時は・・・

「反魂香×2」

「「俺達（あたし達）は瀕死状態じゃねえ!!」
ってかなんでそんな物を持ってるんだ!」

「うお、ツツコミがそろった」

お、怒られちゃった。

ライフボトルの方が良かったのかな？

「「そう言う問題でも無い!!」」

「えう!？」

ち、違うの？

「ってかライフボトル持ってるのか？」

「何を言ってるんだキョウ。持ってる訳・・・・・・・・有るのか」

「マジで!？」

「ハルヒ・・・お前・・・」

「な、なに!？」

お、お兄ちゃんまで。

「「いや、別に」」

と、とにかく、キョン君達が復活しました。
なので今日はもう帰ります。

に、逃げたいわけではありません!!

で、では、さようなら!!

夏休み編 その九（後書き）

海「お疲れさん」

キ「ああ、全くだ。

それにしても俺達は一体どこに行っただよ。
かなり混沌とした注文ばかりだったぞ」

海「さあ？」

キ「さ、さあ？　ってお前が言うなよ」

海「とにかく次はどうしようかな」

キ「まだ夏休み編続けるのか？」

海「後一・二話ぐらいはな。

あいつとか出さなきゃいけないし」

キ「あいつ？」

橘「それはわたしですか？」

キ「うお！　橘！！

久しぶりだな」

橘「はい！　お久しぶりなのです」

海「と言う訳で次の話は橘メインだ」

橘「ありがとうございます海人さん。

所で・・・間が開きすぎじゃないですか？
前回わたしが出たのは夏休み編の最初なのです」

キ「確かに間がかなり開いてるな」

海「・・・・・・・・・・」

橘「ま、まさか、忘れて・・・」

海「感想が有れば送って下さい。

ではまた次回もよろしくお願いします」

橘「ま、待って！

本当に？本当に忘れていたんですか！？
それはあんまりなのです！！」

キ「橘・・・」

夏休み編 その十（前書き）

海「お久しぶりです」

橘「本当ですっ」

キ「今回は橘が主役だ。
では、本編どうぞ」

夏休み編 その十

八月下旬。

無事エンドレスな二週間に巻き込まれず迎えられた。ちゃんと長門にも確認を取ったから間違いない。

さて、先ほども言った通りもう八月の終わり。

もう少しで夏休みも終わってしまう。

だが、やるべき事はやったので去年までと違いのんびりとしていられる。これは素晴らしい事だ。

ちなみにバンド練習だが、

最近やっとハルヒが歌詞を完成させた。

と言っても『First Good-Bye』だけだ。

ステージ演奏は二曲なので後一曲分書かなければならない。頑張れハルヒ。

とまあ、どうでも良い話だったな。

で、俺はいま何をしているのかというと、

「き、キョンさん！先に進めませんよ！？」

「ああ、そこ面倒くさいよな。

・・・貸してみろ。やってやる」

「ありがとうございます！」

橘とテレビゲームをしている。

「――って、何でだよ!!」

「な、何がですか!？」

「いや、気にするな。こっちの話しだ・・・」

「は、はい・・・」

まあ、簡単にここまでの流れをまとめると、

暇だったので家でゲームしていると突然
我が家のチャイムが鳴った。

←

俺以外に人が居なかったので玄関まで出迎えた。

←

扉を開けるとそこに橘が立っていた。

←

とりあえず家に迎える。

←

一緒にゲームをする。

って感じに事が進んだ。

「だが、なんで俺の家に来たんだ？
と言うかよく場所わかったな」

「ふふっ、『組織』の力を使えば
家の場所の一つや二つ簡単に調べられるのです！」

「・・・職権乱用じゃないのか？」

「うっ・・・そ、それは・・・」

「プライバシーの侵害って言葉知ってるか？」

「あうっ！」

「・・・・・・・・・・ハア」

「ごめんなさい！ちょっとした出来心だったんです！！」

「まっ、今回だけだろうから許してやるよ。
そんな事より、全滅しかけてるぞ」

「ああっ！！ポーズ押すの忘れてたのです・・・」

「さっさと反撃しろ！」

「そ、そうですね」

ついでに言うtoプレイしてるのは『TOS』だ。
色々と思い入れがあるから・・・
ソーサリーリングは今でも持ち歩いてるぞ。
ひもを通して首に掛けてな。

「・・・先ほどの話しですが」

「ん？」

「ほら、『なんで俺の家に来たんだ？』って」

「それがどうした？」

「・・・キョンさんにはお話ししておきたいのです」

「・・・わかった、聞こう。」

なんか行き成り神妙になったな。

「その前にちゃんとポーズしとけよ」

「んっ！もう！

ちゃんと聞いて下さい！！」

「いや、スマン・・・」

どうも気になってしまっただけ・・・

「コホン・・・では、良いですか？」

「ああ、いつでも」

「・・・わたしは・・・その・・・
友達と呼べるような人が居ないのです・・・」

「以外だな」

「そうですか？

でも実際はイジメって程じゃないけど
なんと言うか・・・孤立しているのです」

「・・・・・・・・」

よ、予想外に重い話になってきたぞ・・・

「クラスの人と話すのも必要最低限だし

放課後は『組織』の仕事などがあるので部活も出来ません」

・・・『組織』ってそんなに忙しいのか？

『機関』は古泉を見る限りじゃ結構暇そうだが。

「ケータイの電話帳見ますか？

仕事関連以外だと両親とキョンさんしか入ってませんよ」

そう言って力無く笑う橘。

「なのでキョンさんの家しか行く所が無かったのです。

寂しいですよねわたし」

「・・・・・・・・」

「・・・・こ、この先の進み方教えて下さい」

「・・・・ああ」

「・・・・・・・・・・」

ハア・・・なんて声掛ければ良いんだよ。

結局、お互いに何も話せないまま時間が過ぎていった。

午後五時。

橘がそろそろ帰らなければならないと言ったので
玄関先まで見送りに出た。

「あの・・・今日は楽しかったのです」

「そうか・・・それは良かった」

「はい！」

あっ、けど・・・その・・・」

「どうした？」

「ご迷惑だったのもう来「なあ、橘」・・・はい？」

「また来いよ。歓迎するぜ」

「えっ、でも・・・」

何を言ってるんだこいつは。

「あのな、『友達』が家に来るのは迷惑な訳無いだろ。」

「と、友達・・・」

「違ったか？」

俺はお前の事を友達だと思ってたけどな」

「い、良いの？」

「当たり前だろ。」

だからまた遊びに来いよ」

「は、はいっ!!」

やっぱり笑った顔の方が良いよな。

くおまけく

「所で、『組織』って何だ？」

「そ、それは・・・えっと・・・
アルバイト先ですっ！！」

（古泉と同じ言い訳だな）

夏休み編 その十（後書き）

海「夏休み編はこれで終了です。

次は・・・『溜息』だっけ？」

キ「おい、作者!!」

海「冗談だって」

キ「ハア・・・やれやれ」

海「じゃ、ちゃんと・・・

今回は溜息編に突入します!!」

キ「どうせプロログただけだろ」

海「うっ!!・・・すぐに『第一話』書くよ」

キ「本当だな？」

海「・・・多分」

キ「うおおおい!!」

海「では、感想が有れば下さい。

橘の口調が未だ不安です」

キ「今更!？」

もう当分出ないだろあいつ!!」

海「あ・・・」

キ「どうした？・・・ん？」

橘「・・・・・・・・・・」↑涙目

キ「あー・・・・・・・・えっと・・・」

海「聞いてたみたいだな・・・」

橘「・・・・・・・・」ダッ！！↑凄い勢いで走り去った

キ「ま、待て、橘！！」

海「・・・で、では次回もよろしくお願いします」

橘「うううう・・・」

キ「ほ、ほら、元気出せ！

もしかしたら出られるかもしれないだろ」

海「・・・橘出そうかな」

鶴屋「・・・ジー・・・」

海「はっ！！　そう言えば鶴屋さん全然出してなかった！！」

溜息編プロローグ（前書き）

海「すみません！遅くなりましたああああ！！」

キ「全くだ。

もっと早く更新出来なかったのか？」

海「色々と立て込んでいて・・・」

キ「ハア・・・

とりあえずどうぞ」

溜息編プロローグ

「『ENOZ』の皆様ありがとうございました」

俺達の前のバンドが演奏し終わったようだ。

今回は誰一人欠けていないようで良かった。

「では、次で最後ですね」

司会の生徒がそう言うのと客席から不満の声が上がる。
冗談だとしても俺達の緊張感を煽る。

「き、きょんくん」

「やっぱりやめようよ」

「ここまで来てそれは無理だろ」

「そーだよ。」

「ここまで来ちゃったんだから」

「後は思いっきり楽しむだけだよ☆」

「おお、良い事言った長門。」

「そうですね。」

「沢山練習してきましたし、
大丈夫ですよ。絶対」

「ええ、その通りです」

「う、うん。そうだね。

よし！頑張ってみる！」

ハルヒの緊張も少しは和らいだみたいだな。

俺はそんなやりとりを見ながら

二期が始まってからここに至るまでを思い出していた。

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・

溜息編プロローグ（後書き）

海「溜息編って言うけど・・・」

キ「どうした？」

海「やること違うから

ほとんど名ばかりなんだよな」

キ「確かに。」

溜息編じゃなく

サウンドアラウンド編のほうが近いな」

海「それとも違う所が多いけどね」

キ「そりゃそうだ」

海「では、すぐに第一章を更新します。

実はもう出来ているので後は

前書きと後書きを書くだけですから」

溜息編 第一章（前書き）

海「第一章です」

キ「あまり期待はしないでくれ」

溜息編 第一章

九月一日。

とうとう二学期が始まってしまった。
学校なのだから当然の事だとは思うが、
どうも気落ちしてしまう。

そんな事よりも

そろそろ各クラスや部活が学園祭に向けて動き始める。
無論、我がSOS団も。

「と言う訳で、練習だ」

今回は幸運な事に音楽室を借りる事が出来た。

「き、キョン君……どこに向かって話しかけてるの？」

「……さて、準備するか」

「む、無視された……」

なにやらハルヒが『ズーン』と言う感じで落ち込んでるが、
まあ……どうでも良いだろ。

「うう……キョン君もしかして海の家のこと根に持ってるの？」

「……いい加減始めるぞ」

「二回目!？」

あのときの事を未だに根に持ってるなんて・・・そんな訳無いだろう？

ただ少しイラッとしたけど・・・

「さて、今日はとても大事な話がある」

ある程度あわせた所で演奏を切り上げて話し合いをする事にした。

俺自身、今の今まで忘れていた
バンド『S O S 団』にとってかなり重大な事を。

「えゝ？なにになに？」

「それはな・・・俺達の曲には一つだけ足りない物が有る。
なんだか解るか古泉？」

「えっ・・・足りない物ですか？
そうですね・・・解りませんね・・・」

「じゃあハルヒ！」

「ふえ!？」

え、えっと……「残念ながら時間切れだ」あう……」

「では朝比奈さん」

「……もしかして、ボーカルですか？」

「ええ、正解です」

流石は朝比奈さんだ。

普段存在感は薄いが頼りになる。

「わたしそう思われてたんですか……」

「いえ、他の面子の個性が強すぎるだけですよ」

まあ、俺も人の事言えないのかも知れないが。

「とにかくそう言う事だ。」

二曲目はまだ完成していないが

一曲目の『First Good-Bye』のボーカルは
今のうちに決めておいた方が良いだろ」

「確かにそうしたら良いかもね……」

二曲目の方も涼宮さんが歌詞を書き終わるのを待ってるだけだし」

「ってことで、今日は『第一回SOS団ボーカル決定戦』をする」

「・・・具体的には何をするんですか？」

「もうメロディーも歌詞も決まってるんだ。
一人ずつサビを歌って上手い奴を選べばいい」

「なるほど・・・では早速始めましょう。
皆さんよろしいですか？」

「「「おー!!!」」」

案外やる気有るんだなお前ら・・・

そしてどこからマイクとスピーカーを持ってきたんだ長門・・・

♪エントリーナンバー1 俺♪

あんまり歌は得意では無いんだが・・・

——♪——♪——♪・・・♪——♪——

俺終了。

「――どうだ？あんまり上手くないだろう？」

「そ、そんな事ないよ」

「ええ、お上手でしたよ」

まあ、褒められて悪い気はしないな。

「けどキョン君にこの曲は合わないんじゃないかな」

「ああ、俺もそう思う」

「高音出すの辛そうでしたよね」

じゃあ俺は却下だな。

「二曲目はどうだか解らないよ☆」

「出来れば歌いたく無いんだが」

♪エントリーナンバー2 長門♪

――♪♪♪♪♪・・・♪・・・♪――

長門終了。

「ねえねえ！どうだった？」

「ああ、流石だな」

ほぼ決定だろこれは。

今回は感情も込めて歌う事が出来てるからな。
前よりも歌が上手くなったように感じる。

「えへへ／＼／＼」

～エントリーナンバー3 ハルヒ～

——♪——♪——♪……♪……♪——

ハルヒ終了。

「……／＼／＼」

「上手かったが……ダメだな、この様子じゃ」

「ええ、そうですね。」

おそらく我々の前だから歌えたのだと思います」

「だな・・・」

く エントリーナンバー4 朝比奈さんく

歌唱力はお変わりないようだ・・・

く エントリーナンバー5 古泉く

——くくくくく・・・く・・・く——

古泉終了。

意外と歌うの上手かった。

「ですが・・・わたしはドラムですので・・・」

「無理そうか？」

「はい・・・」

残念だ。

「って事で長門、

一番までもだったおまえがボーカルだ」

「やった〜!!」

まあ、ボーカル出来そうなのが俺と長門だけだったしな。

「では、二曲目をキョンさんが歌われたらどうでしょう？」

「う、うん。キョン君上手だったからね」

「・・・歌詞を見て大丈夫そうだったらな」

「が、がんばってみる！」

そうしてくれ。

流石にH T Tみたいな曲は勘弁だ。

それにしても、『F i r s t G o o d - B y e』を長門が歌うのか。

結構楽しみだ。

溜息編 第一章（後書き）

海「・・・やっぱり結構原作と離れてるから
話しが作りづらい」

キ「自業自得だろ」

海「うつ・・・」

キ「ハア、やれやれ。
で次はどんな話しになるんだ？」

海「・・・特に決めてない」

キ「・・・おい」

海「ボンヤリと考えてるのは
衣装決めの話し入れようかな〜とか、
鶴屋さんと出来れば橘も出したいな〜とか」

キ「鶴屋さんは絶対出せよ。
あの人ただでさえ出番が少ないんだから。
それに原作の溜息にも出てるし」

海「では、感想が有れば下さると嬉しいです。
次回もよろしくお願いします」

キ「本当をお願いします」

第二章 前編（前書き）

海「この小説も結構な話数になったよな」

キ「そうだな。」

まあ、内容は薄いが」

海「うっ・・・」

キ「・・・ハア」

第二章 前編

学校生活において大半の生徒は楽しみにしている行事が一致する。学園祭もその中の一つだ。

クラスや部活の仲間と何かしらをすると言う事が良いのだろう。学校全体で雰囲気だんだんと変わってきた。

つまり、学園祭に向けた作業をしているのは俺達だけではないと言う事だ。

それはクラス内なのかも知れないし部活内かもしれない。

そして、作業する奴らが増えると・・・

『音楽室 吹奏楽部貸し出し中』

「「「「「・・・」」」」」

場所取りが困難になってくるのは当然の事だ。

「ど、どうしよう、キョン君」

「そうだな・・・」

古泉、市民ホールの貸部屋開いてると思うか？」

「先ほど連絡を入れましたが・・・」

「無いか」

「・・・はい」

まあ、学園祭シーズンだ。
北高生以外も利用するからな。

「じゃあ、今日はどうするの？」

「とりあえず部室戻るか」

何かする事が思い浮かぶかもしれないし。

で、戻ってきたが・・・

「何もする事無いですよね」

「ええ、そうですね」

「・・・お茶淹れましょうか？」

「・・・お願いします」

いそいそと朝比奈さんはコンロへと向かう。

その後ろ姿をボンヤリと見ながらこれから何をするか考える。

音楽室と貸部屋を借りられない以上は演奏は断念。

曲も『First Good-Bye』はボーカル長門が入り完成。もう一方は・・・早く歌詞を書き上げてくれハルヒ。

まあ、逆に言えば歌詞があれば完成って所まで出来ている。何かメンバー全員でする事って有ったか？

「あー・・・ダメだ、思い浮かばん」

「ここで演奏したらダメかな？」

「ダメだろ・・・」

「そ、そうだよね」

隣のコンピ研に迷惑をかけたくない。

今頃学園祭に展示するPCゲーム

『The Day of Sagittarius 3』の制作に忙しいのだろう。

「根を詰め過ぎてはいけませんよ。

お茶でも飲んでリラックスして下さい」

「ああ、すみません朝比奈さん」

ん？あれ？

いつの間にメイド服に着替えたんだ？

さっきまでは制服だったよな・・・

「朝比奈さんって何着ぐらい持ってるんですか？
そう言う服って」

「そうですね．．．解りません」

「は、把握出来ないくらい有るんですか．．．」

ハルヒの気持ちは痛いほどわかる。

この人はコスプレイヤー（真）だな。

ほら、長門と古泉もちょっと引いてる。

「ち、ちがいます！鶴屋さんと共有している物も多いので――」

「――「鶴屋さん！？」」――」

「ええ、アニメの服を多く持ってます。

わたしは職業の制服が多いですね」

相変わらず鶴屋さんはこっちでも謎の存在だな。

「まさか鶴屋さんもコスプレイヤーだったとは．．．」

「凄いですよ。

アニメの服を着るとそのキャラに成り切るんですよ」

「ってことは饒舌になったりするんですか？」

「ええ、そう言うキャラでしたら」

是非見てみたいな。

って饒舌だったら向こうの鶴屋さんだろ。

やっぱり俺は、もうこっちの世界が基準なんだな。

でも・・・コスプレか・・・

「・・・そうだ!」

「何か思いついたの?」

「学園祭って制服以外でも大丈夫だったよな」

「ええ、ちゃんと許可を取ればですが」

「なら良いな」

「なにになに?それがどうしたの?」

「いや、ステージ衣装とか決めないか。

どうせなんだ制服じゃないの着たいだろ?」

「おう、良いんじゃない。

面白そうだしわたしはさんせ☆」

「わたしもです!!」

うお!!

朝比奈さんの食付きが凄い。

「えう!?!あ、朝比奈さんみたいな格好するの?」

あー・・・ハルヒにはハードルが高いか?

「アニメの服でしたら平気なのも有るのではないですか？
制服などでしたら知らない人は違和感無いと思われそうですし」

「・・・そうだね・・・うん、それだったらわたしも良いよ」

「サンキュ。」

古泉は賛成で良いのか？」

「ええ。もちろんですよ」

・・・古泉の口から反対意見が出る事ってほとんど無いよな。
なんか、男の古泉よりイエスマンのような気が・・・
まあ・・・どうでもいい。

「じゃ、これから店行くか？」

「でしたら、鶴屋さんの家に行きませんか？

わたしから連絡しますので。

衣装を貸していただけたと思いますよ」

「そうですね・・・出来ればその方が嬉しいですが」

金とか結構使いそうだからな・・・

「でも、俺が着られそうなのあるんですか？」

「大丈夫ですよ。

男性キャラのもあるので。

わたしも執事服とか持ってますし」

それも着るんですか？朝比奈さん・・・

「では、電話掛けてみますね」

そう言えば鶴屋さんってこっちでも書道部なのか？

まあ・・・おそらくその辺は変わってないと思うが。

でも、何かしらの部活に所属しているなら

そこに向かって本人と話せば良いんじゃないのか？

「今日は書道部休みですね」

「・・・補足ありがとうございます古泉」

「――ありがとうございます。では、今からみんなで向かいますね」

ピッ

どうやら話しがついたようだ。

「どうでした？」

「ふふっ、歓迎するって言ってましたよ」

「そうですか。」

じゃ、帰る準備してから行こうぜ」

「う、うん。少し待ってね」

さて、こっちの鶴屋さん家は初めてだな。
外観はともかく、部屋の中は変わってそうだ。
具体的には簞笥の中とか。

第二章 前編（後書き）

海「って事で次回は鶴屋さん登場」

鶴「やっと出番？」

キ「良かったですね。鶴屋さん」

鶴「出番・・・久しぶり・・・」

キ「嬉しそうだな」

海「全然出せていなかったからな」

鶴「・・・誰のせい・・・」ジトー

海「すみませんでしたああああ!!」

キ「絶対零度の視線だな・・・」

鶴「・・・感想・・・有れば・・・下さい」

キ「い、行き成り締めを言い始めた」

海「やってみたかったんだろうな」

鶴「次回もよろしくお願いします・・・よろろ」

海・キ「「お、お願いします」」（最後に『によろ』って言った

!
?
)
)

第二章 中編（前書き）

キ「合うのは久しぶりだな。鶴屋さん」

海「あんまり出せなかったからねゝ
ただ・・・」

キ「？」

海「いや・・・本編見たら解る」

キ「お、おう。」

なんなんだ一体？」

第二章 中編

ピンポーン

「鶴屋さん？わたしです」

『・・・みくる？』

「はい。」

「少し早かったですか？」

『・・・大丈夫・・・今行く』

突然の押しかけだが、

どうやら歓迎して貰えるようだ。

「ねえねえ、キヨン君」

「なんだ？」

「反応薄いな〜って思って。」

「もしかして来た事有るの〜？」

「・・・そんな訳無いだろ」

「ハア・・・迂闊だったな。」

家を見た時何か感想を言った方が良かった。

もしくは、ハルヒや長門みたいに呆けるとか。

だが、もう見慣れすぎて何とも思わないんだよね・・・

ゴトン キィ

おっ、開いた。

「・・・いらっしやい・・・」

中から半纏のような物を着て鶴屋さんが出てきた。
以前見たのとは違うデザインだがよく似合っている。

「お邪魔しますね」

「・・・」

朝比奈さんが挨拶をしたのだが、
鶴屋さんは俺を見たまま動かない・・・

これは俺も何か言った方が良いのか？

「えっと・・・すみません、行き成りのお願いで」

「構わない」

・・・無表情だからどういった意味で言ったのか解らん。
だがまあ、おそらく怒ってはいないだろう。

「着いて来て」

「あ、はい」

こ、行動に移るのが早い。
せめて言葉にしてから動き始めてください。

「ふふっ」

「なんですか？朝比奈さん」

「いえ、鶴屋さんが嬉しそうなので」

嬉しそう？

とりあえず先行している背中を見るが・・・

「・・・・・・・・」スタスタ

どこが？

「何となく感じただけですけど。ふふっ」

はあ、そうですか・・・

で、現在鶴屋さんの部屋に居る。

ぱっと見大きく変わった所はない。

・・・と言いたかったが、そんな事は無い。

和風の部屋には不釣り合いな大きなクローゼットがある。

あの中にはおそらくここに来た目的の物があるのだろう。
一体何着入ってるんだ？

と言うか俺が着られそうな有るのか？

「・・・開ける」

「え？あ、ああ、お願いします」

さあ、ある意味緊張の一瞬だ。

ガラガラガラ

「「「「・・・」」」」

あー・・・これは・・・

あまりの多さに声が出せなくなってしまった。
ハルヒ・長門・古泉も同じような状態になっている。

だが、コスプレイヤー（真）の二人は・・・

「やっぱり鶴屋さんの方が多いですね。
あつ、もしかして少し増えました？」

「・・・五着くらい」

「やっぱりですか」

この二人にとってはこれは普通なのか！？

「・・・選んで」

「は、はぁ」

しかし、選べと言われても・・・

「何選んで良いか分かんないよねゝ
・・・あれ？これ何ゝ？」

「マントですね・・・

何のキャラクターでしょう？」

「結構多いんじゃないのか？」

魔法使いとか。

小物の所に杖がたくさんあるし。

「・・・貸して」

金長髪のカツラを持った鶴屋さんに声を掛けられた。
俺達を見かねてかどうやら実演してくれるようだ。

「あ、はい。どうぞ」

「・・・牙」

「ふえ？あ、はい。」

え、えっと・・・これ、ですか？」

牙？

「金色の長髪・・・マント・・・牙・・・あっ！」

「ん？解ったのか長門？」

「多分ね」

「ほう・・・私を知っているか」

・・・ん？

「なあ古泉」

「いえ、わたしではありませんが」

「わ、わたしでもないよ」

長門は俺と話してたから違うし、
朝比奈さんの声では確実になかった。

と、言う事は・・・

「」「鶴屋さん!？」」「」

「ふん!随分と間抜け面だな貴様ら」

声のした方に顔を向けると、
先ほど持っていた金長髪と牙を付けマントを着た鶴屋さんがいた。

しかも眉間にしわを寄せこちらを睨んでいる。
喋り方も偉ぶった口調だ。

「来る前にこうなる事は話しましたよね？」

いや、事前に知っていても驚きますよこれは。

「どうしたぼーや。」

驚きで声も出ないか？」

「え、ええ」

「そうかそうか。くくく」

あの無口無表情だった人がこんな風に・・・

だが、そんな事より・・・

「誰なんですか？それ」

「なに！！」

・・・ミスった？

「き、貴様、私を知らないと？

この『闇の福音』とまで言われた私を知らんのか！？」

「わ、分かんないです」

「なあ！？・・・」

あっ、項垂れた。

・・・落ち込み過ぎじゃないのか？

「おそらく、深い所まで真似しているの
自分の事のように感じてしまうのではないでしょうか」

「漫画の中では有名人（？）だからね」

「え、えっと・・・鶴屋さん？」

「・・・・・・・・・・」

全く反応しない。

「キヨンさん。」

キャラクターの名前で呼びかけてはどうでしょう？」

「・・・だからその名前を知らないんだよ。頼む古泉」

「わたしもうろ覚えなのですが・・・
えっと・・・確か・・・キティさん？」

古泉が声を掛けた途端に鶴屋さんは跳ね起き
首をつかみ凄い勢いで揺らし始めた。

「わ、私をその名で呼ぶな！！
それより貴様どこで知った！？
さっさと吐け！吐かんかぁ！！」

「いえ、あの！ちょー！！
だ、誰か助けて下さい！！」

あー・・・古泉が大変な事になりそうだな・・・

「って、鶴屋さんストップ！ストップ！！」

「こ、古泉さん！？」

「い、行け長門！！」

「う、うん！！」

その五分後、長門により鶴屋さん鎮圧。
幸い古泉は目が回った程度で救出された。

そんな騒ぎの間、朝比奈さんは笑ってるだけだった。

「ふふっ、鶴屋さんがあんなに楽しそう」

「・・・デジカメ？」

訂正・・・撮影しているだけだった。

第二章 中編（後書き）

キ「・・・鶴屋さん？」

海「まあ、違うよね。

中の人是一緒だけど・・・」

キ「大丈夫なのか？」

海「さあ？

でも次回はお前らだぞ」

キ「俺達もああなるのかよ」

海「いや、性格は変えないよ。

長門はふざけて真似するかもしれないけど」

キ「あー・・・ありそう」

海「では、感想くださると嬉しいです。

次回もよろしくお願いします」

キ「お願いします」

キ「なあ、次回俺は何を着るんだ？」

海「決まってるけど今は言わない」

キ「それもそうだな」

海「ああ、でも白夜叉ではないよ。
ギター弾きづらそうだし」

キ「・・・確かに」

第二章 後編（前書き）

海「更新遅れてすみませんでした！」

キ「ハア・・・何やってたんだ？」

海「・・・そろそろテスト期間じゃん？」

キ「あー・・・なるほど」

第二章 後編

数分後、何とか古泉を救出する事に成功した。
無駄に体力を使ったような気がする。

「ぜえぜえ・・・

いい加減本題に入るぞ貴様ら」

「い、いや、あれは鶴屋さんが――」

「どうした、ぼーや？」ギロツ

「何でもないです」

こええよ、おい！

「とにかく！さっさと済ますぞ！

このままでは日が暮れてしまう」

確かに鶴屋さんの言う通りだ。

遅くまでお邪魔する訳にもいかんしな。

さて、早速決めてくか。

「って、そうだ鶴屋さん、男物って何着ぐらい持ってるんですか？」

「ん？ そうだな・・・

全体の一割未満と言った所か。

本当に気に入った作品の衣装しか買わないからな」

「そうなんですか」

だが、一割未満と言っても

全体数が多いからそれなりの数有るな。

「あつ、これキョン君に似合いそう」

「どれだ？」

ハルヒが発見したのは黒いコート、茶色の長ズボン、

白いベルト、黒い手袋、西洋鎧の様なブーツがセットになった物だ。

コートはボタンが時計に成っていて黄色のラインが入っている。

・・・個人的には良いと思うぞ。それ。

「ほう、それか。

少し待て、小物も有る。

・・・確か・・・ほら、これも身に付けろ」

鶴屋さんから手渡されたのはボサボサの白い長髪、黄色の片眼鏡、タバコ（偽）、そして銃。

「銃は演奏の邪魔になるので要らないでしょう」

「・・・それもそうか。」

で、お前らは何か良いのあったのか？」

「そうですね・・・わたしはこれにしようと思っています」

古泉が手に持っている服は金の装飾が着いた白っぽいスーツ、赤いワイシャツ、そして黒いネクタイだ。

「・・・『復唱要求！』とか言われそうなんだが」

「ははは・・・」

まあ、こういう風な服はこいつに似合いそうだ。

「あつ、これ良いかも・・・」

ハルヒも良いの見つけたようだな。

「うん。」

これなんだけど・・・どうかな？」

ハルヒが選んだのは赤いセラー服の様なワンピースだ。

「えっと、鶴屋さん。」

この服にも小物有るんですか？」

「ああ、もちろんだ。」

・・・確かこれだったな」

「白いリボンと・・・えっ、ま、マイクもですか？」

なんかアイドルっぽいな。

「ぼいではなくアイドルですよ。

アニメの中では、ですが」

「そうですか・・・ってもう着替えてるんですね朝比奈さん」

やはりコスプレイヤー（真）は伊達じゃないな。

朝比奈さんの格好は・・・なんて言えば良いんだろう。

あれだ・・・『ナイトオブシックス』の服だ。

髪もちゃんと後ろで結んでいる。

「キーボードなのでマントを着けていても大丈夫ですよね？」

「・・・ええ、多分」

とにかく朝比奈さんも決定だな。

あと決めてないのは長門だけか。

「うゝ・・・」

「どうした？随分と悩んでいるようだが」

「なかなか良いなゝって思うのがなくてねゝ

・・・あつ、そうだ、キョン君が決めてよ♪」

「俺が!？」

「うん!」

あー・・・長門だから見た目重視でも良いよな。

情報操作があるから演奏し辛くなる事なんてことは無いだろうから。

ん?これは・・・

何故か解らんがこの服は似合いそうな気がする。

「これなんかどうだ？」

「え?そ、それは・・・」

「だ、ダメだったか？」

「流石だねキョン君!

『頂の座』有ったんだ!!

いやゝ見つけられなかったなゝ☆」

『頂の座』って誰だよ。

「だったら・・・」

鶴屋さん!帽子どこですか?

あと、『トライゴン』は!？」

「す、少し落ち着け!

・・・ほら、これだろう」

・・・あれは帽子か？
白い座布団に見えるぞ。

それとトライゴンってのは杖なんだな。

「アステル星よ・・・なんてねっ♪」

ノリが良いな長門・・・

「今日はありがとうございました」

「良い・・・楽しかった」

外に出るともう暗くなっていた。

秋冬は日が短いからな。

「でも本当に貰って良かったんですか？」

「多いから」

ちなみに各自の選んだ衣装は
鶴屋さんのご厚意によりタダで頂いた。

「じゃあ・・・気をつけて」

「はい。・・・では」

「あ、ありがとうございました！」

「ございました〜♪」

さてと・・・帰るか。

第二章 後編（後書き）

キ「なあ、俺達はそれぞれ何のキャラの衣装を選んだんだ？」

海「ああ、そうだな．．．一応書いておくと。

キヨン ↓ フリユージェル（hack／Link）

ハルヒ ↓ 森川 由綺（WHITE ALBUM）

長門 ↓ ヘカテ（灼眼のシャナ）

みくる ↓ アーニャ（コードギアス）

古泉 ↓ 右代宮 戦人（うみねこのなく頃に）

だな」

キ「へー．．．」

海「では、感想が有れば下さい。

また次回も．．．」

海・キ「「よろしくお願いします」」

第三章（前書き）

海「短くてすみません」

第三章

神無月はもう下旬。

学園祭がだんだんと近づいてきた今日この頃、皆様はいかがお過ごしだろうか。

我がSOS団は練習場所が確保出来ず部室で話し合いの最中だ。何故か俺も含めた全員が鶴屋さんから譲り受けた衣装を着ているが。

「・・・いちいち着替える必要性は無いだろ」

「えー、そこかな」

家とかじゃ着れないんだし良いじゃんっ♪」

にこやかに笑う長門。

その衣装では違和感が有りすぎるぞ・・・

「でも違和感って言ったら

右代・・・あっ、ごめんなさい・・・古泉さんもだよね」

「そうでしょうか。

わたし的には合ってると思ったのですが」

「森川・・・じゃなかった・・・

涼宮さんが言いたいのはキャラ的につて事だよ☆」

「そう言う事でしたか。

しかし、このキャラクターのことはあまり知らないですよ。アールス・・・失礼しました・・・朝比奈さんはご存じですか

「？」

「わたしもあまり・・・」

『ひぐらし』だったら多少は解るんですが。

そう言えばヘカ・・・コホン・・・長門さんが最近見たって言ってましたよ」

「面白かったよ」

今度アー・・・さ比奈さんに貸しますよ☆」

「お願いしますねヘカ・・・コホン——」

「混乱するんだったら今すぐ制服に戻れ！！」

全員、名前言い間違いそうになってるだろ！

「「「「えー・・・」」」」

「・・・そんなに不満なのかよ」

ハルヒや古泉まで声を上げるとは思わなかった。

「ハア・・・解った、ならそのままが良いぞ」

「「「「ありがとうございます団長さん！！」」」」

『団長』か・・・この格好でも違和感無いな。

「さて、いつも通りに駄弁ってしまったが再開するぞ」

と言っても話し合いとは名ばかりで、

実際は真面目な話し二割、雑談八割なんだがな。

「そう言えばハルヒ、

歌詞そろそろ完成したか？」

「う、うん。

もうほとんど完成したよ」

ハルヒが歌詞を書き留めているノートを渡してきた。
付箋を貼っている所だったよな・・・

『Alchemy』

見覚えのあるタイトルだが・・・まさかな・・・
とにかくサビをしてみるか。

『歩いてきた道振り返ると

イヤな事ばかりでもううんざりだよ

触れるものを輝かしてゆく

そんな道を生きてきたかったよ』

あー・・・間違いなくあの曲だな。

こっちの世界ではこのアニメは放送されていないはずだが・・・
流石だなハルヒ、世界の壁を越えやがった。

「え、えっと・・・どう、かな？」

「・・・良いんじゃないか？」

「へー、いいじゃん☆

わたしは好きだな〜♪」

うお！後ろに居たのか長門。

「それに、これだったらキョン君でも歌えそうだし☆」

「まあ、『First Good-Bye』よりはな」

それに、この曲なら何度か歌った事もある。

主に向こうの世界のSOS団でカラオケに行った時だが。

ハルヒがいつの間にか俺の番の時に勝手に入れやがってたんだ。

・・・ってか何で練習してる時に気づかなかったんだ？

歌詞がなくても演奏してんだから解ったはずだろ。俺。

「まあ、とにかく次の練習からは歌うか」

「そうですね。」

やはり歌が入らないと寂しいですから」

「と言うことで、もう少し頑張ってくれハルヒ」

「だ、大丈夫だよ。」

明日には完成させれるから」

「そうか。」

・・・で、他に話し合う事は・・・」

「特には無いですね」

「だな」

もうやる事と言ったらひたすら練習する事ぐらいなんだよな。
他にもやらなきゃいけない事もあるのかも知れんが、
今の所は思い当たらない。

「それじゃ、各自好きな事やって良いぞ」

「ではポーカ―でもしませんか団長様」

「おっ、良いな」

「わたしも参加するよっ！」

「ハルヒは・・・」

「うう・・・」

「歌詞書く邪魔しちゃ悪いな。」

朝比奈さんは参加しますか？」

「いえ、遠慮します。」

ルールとかいまいち解らないので」

「では、始めましょうか」

で、この日も時間いっぱいまで部室で過ごした。

俺達はポーカーに熱中し、朝比奈さんは微笑みながらこちらを見ていて、

ハルヒは自分の席でノート相手に唸っている。

そんな何時もと変わらない放課後だった。

だがまあ、これだけは言わせてくれ・・・

「シユールな光景だよな・・・」

「何が？」

「いや、独り言だ」

「ふん・・・」

って、キョン君の番だよ」

「ああ、スマン」

第三章（後書き）

海「祝！二曲目決定！！って話しでした」

キ「やっと決まったか」

海「こんなに悩むとは思ってなかったけどね」

キ「所で、バンド名を決める時に

長門が『ガルデモ』を候補に挙げなかったのって

海「アニメそのものが無いからだな。

だけど有ったとしてもキョンが居るから

ガールズでは無いだろ」

キ「それもそうか」

海「では、感想が有れば下さい」

キ「学園祭に向けての事でも良いです」

海・キ「それでは、次回もよろしくお願いします」

第四章（前書き）

海「そろそろ溜息編も終わりそうだな」

キ「後は本番ぐらいじゃないか？」

海「それは『ライブアライブ』でしょ」

キ「あー・・・そうだな」

第四章

さて、学園祭シーズンだからと言って
この世の中から日曜日が消える訳はない。

昨日、つまり土曜日に集まってバンド練習をしたので、
今日はフリーになっている。

本当のところは二日連続で練習でも良かったのだが
流石に場所を借りる事が出来なかった。

そんな事もあり、現在俺は大通りをぶらぶらしている。

・・・我ながら無駄な休日の過ごし方だな。

とりあえず目に付いた店に入り、コンビニで立ち読みし、
ナンパ中の谷口に出会い、付き合われている国木田に声援を送り、
キョウを見かけたが素通りし、妹に頼まれた漫画を買う。
そんな風にだらだらと午前中を過ごす。

去年の『俺』だったら素晴らしい時間だと思っている事だろう。
しかし、俺には物足りなく感じる。
どうしてなのかは分らない。

そして何故か俺は映画の撮影場所を次々と回っていた。

商店街の電気店・模型ショップ。

一番最初に撮影したのがCMだったんだよな。

計一時間掛けて来た森林公園。その近くにある神社。

『俺』と古泉がみくるビームで死ぬかと思ったな。

住宅地のほぼ真ん中にある池の畔。

朝比奈さんが谷口もろともこの池に投げ入れられた。

谷口はどうでも良いが朝比奈さんはかわいそうだ。

門の前までだが鶴屋さん宅。

『俺』はあの時初めてお邪魔した。

そして枯れ木ばかりの桜並木通り。

ハルヒのせいで秋なのに桜が満開になった。

正確に言えばこれは俺の記憶じゃない。
平行世界の『俺』の記憶だ。

けれど『俺』は俺だ
今までもこれからな。

だから何処を巡っても懐かしさを感じる。
忌々しいと思いつつどこか楽しんでいた、
そんなもう過ぎ去ってしまった時間に。

町中は自転車を使って移動していたとは言え
移動に時間が掛かり流石に日も暮れてきた。
だが、後一カ所だけ行ってない所がある。
家に着く頃には夜になっているだろうが、まあ大丈夫だろ。

最後に俺が来た場所は長門が住んでいるマンションだ。

だが今回は長門に会いに来た訳ではない。
用事があるのは今居る裏の方だ。
やはりここは野良猫が多い。

・・・『あいつ』を拾ったのもここだったんだよな。

「にゃあ」

噂をすれば何とやら、か。

目線を下に向けると、

俺の足下に一匹の雄の三毛猫がいた。

「よう、久しぶり・・・で良いのか？」

と言ってもお前には何の事かわかんねえだろうけどな」

理解出来るのは長門、sぐらいだろうな。
推測だけなら古泉でも出来そうだが。

「・・・もし良かったら家に来ないか。

寝床や食い物は約束するぞ。

その代わりお前は妹の相手をしてくれ。

どうだ、悪い話じゃないだろう？」

実は今年の春先——俺という存在が出来た時から
『こいつ』が居ない事に寂しさを感じていたりした。

俺自身は一度も会った事は無い。

しかし元になっている『俺』の記憶では『こいつ』も家族の一員だ。
だから出来る事なら家に来て欲しい。

「にゃあ」

そんな俺の思いを察してくれたのか
自転車の荷台に乗り丸くなる。

「ははっ、サンキュウ」

さて、さっさと帰って妹に紹介しよう。

『シャミセン』って名前だな。

第四章（後書き）

海「いや〜やっと思せた。

・・・実は半分ぐらい存在忘れてたけど」

キ「まあ、原作でも今の時期初登場だから

今まで忘れていても問題ないんだけどな。

こっから先も年越しの時ぐらいか？重要なのは」

海「まあ・・・基本妹とワンセットだからね」

キ「・・・だな」

海「では、感想が有れば下さい。

結構やる気が出ます」

キ「じゃ、また次回もよろしくな」

第五章 前編（前書き）

海「前編です。」

そしてぐだぐだです」

第五章 前編

とうとう来た文化祭前日。

各クラスおよび部活が最後の足掻きとばかりに活動している。やはり一日作業の時間に使えるのはありがたいだろう。

しかし、我がクラスだけは例外だ。

無気力アンケートなる

相も変わらずの発表と言うのも憚れる物なので、大多数が所属クラブの出し物準備の方に出向いている。

故に明日へ向けて教室作業しているのは

暇を持て余している俺とハルヒ、

そして押しつけられた谷口& amp; 国木田ペアだけだ。

「ってかよ、コレ言い出したの誰だよ・・・」

「そうばやくな谷口。」

誰も案を出さないからこんなになったんだろ」

「もう誰が言い出したのかも分かんないからね」

「そうだな・・・」

「そういやあキョン、お前らの・・・何だったか・・・」

「ああそうだ、SOS団の方は良いのかよ？」

「確かバンドやるんだよね」

「もう完成してるから大丈夫だ。」

まあ、そもそも音楽室を借りられないしな」

「あはは、それもそっか。」

吹奏楽部の人たちが使ってるもんね」

「後は俺達みたいにバンドをする奴らとか」

「あゝ毎年結構居るらしいからな。」

特に『ENOZ』だったか？

校外にもファンが多いって話した」

「だろうな。」

鶴屋さんも凄いつて褒めてたぞ」

俺もライブハウスで聞いた時上手いと思ったし。

「まっ、一応俺もお前らの演奏聞きに行ってやるよ」

「もちろん僕もね」

「・・・とりあえず期待には応えよう。」

なあ、ハルヒ」

「ふえ！？な、なにキョン君」

「いやだから・・・って、仕事が早いな」

「どうしたキョン・・・うお！！」

「あはは・・・凄いねゝ」

俺達の話に参加していないと思ったら

全体の八割ぐらいのアンケート結果を一人でまとめ終えていた。

「えっ、そ、そうかな・・・」

「ああ、その技能は誇って良いと思うぞ。

案外お前は秘書とか向いてるのかもな」

「えへへ／＼／＼キョン君に褒められた／＼／＼」

じゃっ、残りもさっさと片付けるか。

頼りにしてるぞハルヒ。

「う、うん！まかせてね／＼／」

「・・・国木田、コーヒー買ってこないか？」

「うん・・・ブラックだよな・・・」

その後、ハルヒの活躍で予想以上に作業が早く終わり

特にする事が無くなったので、とりあえず部室に来てみた。

「さて、オセロでもするか？」

将棋とかトランプでも良いが」

とにかく暇をつぶせるなら何でも良い。

「え、えっと・・・じゃあ、オセロで」

「それじゃ、やろうぜ」

って事で、対局を始めてみた訳だが・・・

「お前強いな・・・」

現在、三勝二敗。

勝ち越してはいるが毎回僅差で勝敗が着いている。

「キョン君も強いよ。」

何時も古泉さんと勝負してるからなの？」

「あいつは弱いから関係無いと思うんだが」

「そ、そうかな・・・」

「ああ。」

そうだ今度あいつとやってみろよ。

お前だったら連戦連勝だぞ」

「ははは・・・」

面白そうだから本当にやらせてみるか。

いっそのことSOS団でゲーム大会ってのも良いかもな。
他にも何人が誘ってさ。

「あつ、じゃあ、またみんなで『TOS』やろうよ」

「・・・ボードゲームのつもりで言ったんだがな。

それに、せめてRPGじゃなくて格ゲーにしないか？
ついでに角貫うぜ」

「あうう・・・三つ目だよ」

さて、これで四勝目確定かな。

くおまけく

ある日のVS. 古泉

「そう言えばキョンさん。

オセロの名前の由来をご存じですか？」

「いや・・・知らないな。ここ貫うぜ」

「おや、そう来ましたか・・・

——オセロと言うのは

シェイクスピアの悲劇『オセロ』から来ています」

「甘い・・・

——シェイクスピアってあれか？

四大悲劇だったかを作った人だろ」

「これはどうでしょう・・・

——『オセロ』はその四大悲劇の一つです」

「そうだったのか」

「これでどうですか・・・

——ええ、将軍と旗手が主役の話です。

by P4の授業」

「ゲームが情報元だったのか。

——そして、これでこの舞台も終わりだ」

「先手でも負けてしまいましたか。

『オセロ』さながらですね。

最後に黒人の将軍は自殺してしまいますから」

「まあ、冷たい言い方だが、『悲劇』だから当然なんだろうな」

「ええ、そうですね。

旗手は『嫉妬』によって将軍を騙してしまい

将軍は『嫉妬』によって最愛の人を殺してしまう・・・

まさしく『悲劇』でしょう。

キヨンさんも気をつけて下さいね。

もしかしたら、わたしに殺されてしまうかも知れませんよ」

「さらっと怖い事言うなよ」

「ふふっ、これは失礼いたしました」

第五章 前編（後書き）

海「後は後編とエピローグで溜息編は終わりだな」

キ「なあ」

海「どうした？」

キ「今回のおまけ・・・上手くやれば一話分になったよな」

海「まあ・・・うん・・・気にするな」

キ「・・・やれやれだ」

海「では、感想が有れば下さい」

キ「今回ばかりは無いような気がするのだが」

海「うつ・・・」

キ「ハア・・・」

とりあえず、また次回もよろしくな」

第五章 中編（前書き）

海「今頃に今年初の更新です」

キ「随分と遅かったな」

海「うっ！・・・すみませんでしたああああ！！！！」

キ「ハア・・・やれやれだ」

第五章 中編

現在時刻 11..15

「あー・・・負けたか」

「やったあ！」

えっと、これで六勝目かな？」

ハルヒとオセロを開始してから約一時間。
流石に飽きてきた・・・

「そうだよね・・・」

じゃあ、将棋に変える？」

「いや、それもすぐ飽きそうだな」

「それじゃあ・・・うーん・・・」

あっ、そうだ！

他のみんなの所に行ってみない？」

確かに、良い時間つぶしにはなりそうだ。

少なくとも此処でオセロをやり続けるよりはな。

「よし、そうするか。」

で、誰の所から行く？」

「えっと・・・一番近いのは朝比奈さんの教室だね」

「確か焼きそば売るんだったか？」

「うん、そう言ってたよ。」

でも一応分類は喫茶店なんだって」

「・・・焼きそばしか取り扱ってない喫茶店って有りなのか？」

「・・・え、えっと・・・わかんない」

「と、とりあえず行こうぜ」

「う、うん！」

教室練の二階。

一年の俺達は普段来る事がない場所だ。

そのため若干ハルヒが緊張している様に見える。

「なんだかわたし、すごく場違いな気が・・・」

「その台詞はネタか？素か？」

「えっ？」

「・・・いや、何でもない」

一瞬、某『超時空シンデレラ』が頭に浮かんだが・・・

「あっ、あの教室じゃないかな？」

「え？何処だ？」

「ほら、朝比奈さんが立ってるよ」

「おっ、本当だ」

見た感じ、飾り付けの最中だな。

異常に手際が良いが、ああ言う仕事は慣れてるのだろうか？

「そして、既にウェイトレスの格好してるんだな」

「い、衣装合わせとかじゃないかな？」

まあ、とにかく声掛けてみよう。

何だったら、飾り付けを手伝うか。

「「お疲れ様です」」

「あっ、お疲れ様です。
何か御用ですか？」

「特には無いんですが・・・
強いて言うなら暇つぶしです。

クラス発表の準備がハルヒの活躍ですぐ終わりました」

「そうなんですか。

凄いですね涼宮さん」

「えへへ」

「まあ、そんな訳で何もする事がないんです。
なので、もし良かったら仕事手伝いますよ」

「さ、三人でやれば早く終わると思います」

「いえ・・・流石にそれは悪いです・・・」

「何時ものお茶のお礼ってことで」

「です！」

「・・・すみません。お願いします」

さて、パパッと終わらせるか。

ハルヒと朝比奈さんが主力だろうがな。

「――つと、これで終わりですか？」

「はい。そうですね。」

お二人ともありますがとうございます」

元より飾りが少なかったためか、

予想よりも遙かに早く終わらせる事が出来た。

「あの、朝比奈さん。」

中での作業は良いんですか？」

「ええ、今の所は鶴屋さんが頑張ってくれているので」

鶴屋さんが、か・・・

「それって―――」みくるく！外の飾り付け終わったく？」

『性格変わってるんですか？』と続けたかったのだが

その前に本人が来て聞く必要が無くなったな。

「ややっ！そこに居るのはキョン君とハルにゃんじやないかつ何かみくるに用？それともこの鶴屋さんにな？」

うお・・・向こうの鶴屋さんっぽい。なんで？

「特に用事がある訳でもないんですが。
・・・あの、性格が――」

「いやー一応接客業だからっさ
こうした方が良いくなくって思ってたねっ！

もしかしてキョン君はこう言う性格の人は嫌いかい？」

「い、いえ。そんな事無いですけど・・・」

「アハハハハ！ちよつと意地悪な質問だったかな？」

何故だろう・・・

同じテンションの長門を相手するより疲れるんだが・・・

「ところでみくる！

ちよつと手伝ってくれないっかい？

このままじゃ間に合いそうに無いんだよ」

「ええ。良いですよ」

「本当かい！？助かるっさ」

「あの、人が足りないんですけどら
俺とハルヒも――」

「いやいや、そこまでして貰うのは悪いによる。

それに、キョン君達はそろそろ

長門ちゃんと古泉ちゃんの所に行った方が良いくじゃないかい

「？」

・・・やっぱりこの人は人の心を読めるんじゃないか？

実は鶴屋さんは超能力者だって言われても驚かないと思うぞ・・・

「じゃっ、そう言う事で、

あたしもキョン君とお別れするのは辛いけどこれでサヨナラだよ！

まだ沢山キャベツの山が有るからね！

それと学園祭当日はちゃんと来ておくれよ！

特別にサービスしてあげるからっさ！」

「は、はぁ。わかりました」

「それじゃあ、お願いねみくる！」

「ふふっ、まかせてください。

では、わたしもこれで」

そう俺達に残し、

朝比奈さんと鶴屋さんは教室の中に戻っていった・・・

「あ、嵐みたいだったな」

「う、うん・・・」

「さて、次は誰の所行こうか？」

「えっと・・・近いのは古泉さんだよ」

「演劇だったか」

「うん。」

詳しく内容は聞いてないけど主役なんだって。
凄いよね」

「だな」

もしかしたらリハーサルを見られるかもな。
って事で、俺達は古泉の居る一年七組へ向かい動き出した。

第五章 中編（後書き）

海「今回は古泉と長門の所だ」

キ「みんなやる事は変わってないんだな」

海「そりゃ、原作と変わってる人は

『北高では』SOS団と鶴屋さんだけだ。

で、クラス発表の内容は多数決で決まる。

だから大きな部分は変わんないだろ。

もつとも、細かい所は変わるかも知れないけど」

キ「なるほどな・・・

って、ちよつと待て、

『北高では』ってどう言う意味だ？」

海「・・・これは予定だけど・・・

『陰謀』初登場のキャラと

『分裂』初登場のキャラを変えようと思ってるんだが」

キ「俺は『分裂』を経験してないから

その初登場キャラと言うのがわからんのだが。

『陰謀』のは・・・あいつか・・・」

海「まっ、そう言う訳だ。

・・・では、今回はこの辺で。

また次回もよろしくお願いします」

キ「お願いします」

海「・・・あの二人、学園祭に出そうかな・・・」

キ「何をぶつぶつ言ってるんだ？」

海「いや、こっちの話」

第五章 後編（前書き）

海「気がつけばかなり間が開いたな・・・」

キ「そうだな。」

さっさと学園祭本番に入って貰いたい物だ」

海「・・・頑張ってるよ？」

キ「何故、疑問形・・・」

第五章 後編

朝比奈さん& a m p; 鶴屋さんの教室から歩く事数分
まあ、そこまで距離が離れてる訳じゃ無いが

『1―7』とプレートに書いてある教室にやって来た。

「こ、ここだよね？古泉さんの教室。
中が見えなくなっちゃってるけど」

「そりゃ、劇なんだから
暗幕をしていて当たり前だろ」

「・・・見学出来るかな？」

「休憩の時とかだったら入れるんじゃないか？
と言うか、その時ぐらいしか突入する勇気が無い」

って事で、ハルヒと二人
教室の前で不審者さながらに聞き耳を立てる事にした。

『――私を狂わせるのは――』

「あっ、この声は古泉さんだ」

『――月の光でもなく――』

「しかし、上手いもんだな・・・」

「そうだね」

やっぱりあいつは役者に向いてるんじゃないのか？
近い将来ドラマとかで古泉を見かけても多分驚かないな。

『――黄金の海でもない。
あなたのその瞳なのです』

「・・・なあ」

「ど、どうしたの？」

「この台詞どこかで聞き覚えが有るんだが」

「えっ？ そうなの？」

どこで聞いたんだったかな・・・

「だ、だけど、凄いよね」
声しか聞こえないけど、
クラスの人たちが協力してやってるのがわかるもん」

「確かにそうだな。」

「・・・それに比べて俺らのクラスは・・・ハア」

「あ、あははは・・・」

ガラッ

「ん？」

「あれ？」

「おや、お二人ともこんな所でどうかなされたのですか？」

＜教室前でハルヒと話し込んでいたら

詩人のような衣装を着た古泉に話しかけられた。

＜どうしよう・・・

返事を返す

無視する

「どうでもいい」ピッ

＜どうでもいいか・・・

「ちょっと待ってください！？」

普通が一番上の選択肢を選ぶでしょう！？」

「・・・考えてる事がわかるとは、

流石超能力者だな」

「・・・そんな能力は持ってません。
ですが、キヨンさんの事だったら大体はわかるんですよ」

うおおおお・・・

凄いゾクツとしたぞ、その台詞。

「話を戻しますが、

こんな所で何をしていたのですか？

まあ、おそらく

わたし達の劇を見学しに来たと言った所だと思いますが？」

「当たり前だ。

クラスの方も終わって暇だったからな」

「も、もしかして、お邪魔しちゃったかな？」

「いえ、わたし自身は構いませんが・・・

前日のリハーサルなのでクラスの方以外は・・・」

「立ち入り禁止ってどこか」

「はい・・・申し訳ありませんが」

「別に良いさ。

当然の事なんだから謝る必要もない」

どうせ学園祭だって演奏の時以外は暇なんだ
ちゃんと客として見に来れば良いだけの話だからな。

「ありがとうございます。」

・・・そろそろ休憩時間が終わりそうですね」

「ああ、頑張れよ」

「あ・・・は、はい！頑張ります！」

・・・劇の練習はやっぱり辛いのか？

少し声援を送っただけでも喜ばれるぐらいに・・・

「ちょ、ちょっと違うと思うよ・・・」

「そうか？」

「うん。」

きつとキョン君だったからだよ」

「？」

どう言う事だ？

「んじゃ、最後に長門だな」

「それって、その教室だよね。

『占い』って書いてある」

階段を挟んで隣だからな、
目視出来る距離だ。

「まさかとは思うが・・・

あいつステージ衣装でやってないよな？」

「さ、流石にそれは・・・」

六組に入ると、

教室の中にいくつものテントがあった。

おそらく一人一つで使っているんだろう。

さて、長門はどのテントだ？

「・・・キョン君、キョン君。

多分だけど長門さんあのテントに居るんじゃないかな？」

ハルヒが指差したのは
隅の方にある青色のテント。
その入り口に置いてある看板には
とても見やすく綺麗な字で・・・

『THE・長鼻』

と、書かれていた。

「間違いなくあれだな。
あいつの性格的にも
ここまでの流れるにも」

「・・・と、とりあえず入ってみようよ」

「そうだな」

俺達は恐る恐る長門のだと思われるテントの中を見た。
そこに居たのは、
水晶を置いたテーブルの向こうに座っている――

「おや？」

あなた様方でしたか
ようこそベルベツ・・・コホン
『THE・長鼻』へ」

「「なんでエリザベス!？」」

分厚い本を持った

最強のエレベーターガールだった。

「長門・・・だよな」

「はい、その通りでございます。

それと、この姿の理由としては、

本来であれば『姉』の方がよろしいのでしようが、

鶴屋様からお借りする事が出来ましたが

この不肖エリザベスの衣装だけでございましたので」

「鶴屋さんから借りたのか・・・」

「でも、わたしはこっちの方が似合ってると思うよ」

「お褒めの言葉ありがとうございます」

まあ、確かに長門にこの衣装は良い。

あの『頂の座』ばりに似合ってる。

しかし・・・

「話し方、戻したらどうだ？

結構無理してるだろ」

「・・・やっぱりわかる？

大変なんだよあ的口調って」

「だろうよ」

独特な喋り方だからな。

鶴屋さんだったら簡単にこなせそうだが。

「ところでさっ、

各自のテントは好きにして良いって言われたから
こんな感じにしてみただけど、
どうかな？何か変な所とか有る？」

「え？・・・うーんと・・・

特に無いんじゃないかな？

わたしはこのままで良いと思うけど」

「そっか」

キョン君は何か無い？」

「・・・内装の事じゃないが、

その衣装だったら水晶占いじゃなくて
タロット占いのの方が良いんじゃないのか？」

「・・・!？」

ど、どうした？

そんなに体をのけぞるほど驚いて。

「その発想は無かったよね。うん」

「無かったのか!？」

「よし、明日までにタロット占い憶えるぞ!!」

「ええっ!!む、無理じゃないかな」

いや、長門なら

明日と言わず二時間後ぐらいにマスターしてるだろうよ。

「・・・邪魔しちゃ悪い。」

そろそろ部室に戻ろうぜ。ハルヒ」

「う、うん。そうだね」

「あっ、そうだ、

本番もちゃんと来てね♪

優先的に占ってあげるよ」

「ははっ、サンキュー長門」

「では、またのご利用をお待ちしております」

最後はちゃんとエリザベスなんだな。

「みんな頑張ってたね」

「そりゃ今日が最後に準備出来る日だからな、俺達みたいな奴は滅多にいないだろ」

「うう・・・明後日のステージ演奏不安になってきたよ」

「大丈夫だ。

ちゃんと練習しただろ？

今まで通りにやれば良いだけだ」

「そ、そうだよね。

うん・・・大丈夫。絶対に成功させる！」

「ああ、その意気だ」

「えへへ／＼／＼」

「よしっ、部屋戻ったらまたオセロで勝負するか？」

「うん！負けないよっ」

「望む所だ」

文化祭前日。

それはとても忙しく

あちこちで準備に追われている生徒が居る日。

しかし、どうやら俺とハルヒには関係がないようだ。

第五章 後編（後書き）

海「次回はエピソードだな」

キ「ようやく『溜息編』も終わるのか」

ハ「そ、その次はライブだね」

キ「俺も歌うのか・・・ハア」

海「良いじゃん」

真面目に歌えば歌うまいと思うし」

キ「そ、そうか」

海「うん・・・中の人が」

キ・ハ「中の人？」

海「いや何でもない。

では、また次回もよろしく願いします」

長「メギドラオンでございます」

古「あの、長門さん？」

『塔』のタロットカードを持って
何をしていらっしゃるのですか？」

長「占いだよ」。

『恋愛』のカードの方が良かったかな？」

古「は、はぁ・・・」

占いは詳しく無いのですが

そのような物もあるのですね・・・」

溜息編エピソード（前書き）

海「今回は今までのエピソードの中で一番長いんじゃないかな？」

キ「あくまでこの作品の中では、だろ」

海「まあね・・・」

溜息編 エピローグ

ついに来た学園祭、その一日目。

普段見る事のない私服や他校の制服、

更には着ぐるみやメイド服、チャイナ服などを着ている人が
学校全体に店員として、もしくは客として存在している。

そんな非日常的な空間になっている我が学舎ので
俺は何をしているのかと言うと――

「ちょっと！わたしの話を聞いているの！？」

「――――」

「・・・いや、スマン。聞いてなかった」

「聞いてなかったって・・・」

ハア・・・これだから現地人は・・・」

「――ちゃんと――聞いてて？」

初対面の二人組に絡まれていた。

「・・・てか、お前ら誰だ？」

俺は名前すら教えて貰ってないんだが」

すると最初に話しかけてきた、

明らかにめんどくさそうな表情をしている少女が口を開く。

「名前なんてどうでも良いじゃない。

でも、一応は『藤原』と名乗っておくわ」

続いてもう一方の、

髪が凄い黒長髪の少女が微笑みながら、

「周防——九曜——だよ。

よろしく——ね」

と自己紹介してくれた。

俺の中でそれぞれの第一印象は、

藤原は少しむかつく。

それに、雰囲気朝比奈さんを誘拐した未来人に似てる気がする。

九曜は『こっちの長門十元の長門÷2』みたいな奴だな。

無口っぽいけど口調は砕けてて、表情も結構変わるからな。

「で、俺に何のようだ？」

「あんたは・・・えっと・・・

名前なんだっけ・・・」

「——」ゴニョゴニョ

「ああ、『キョン』だっけ」

「それは本名じゃねえ！」

「——あれ?——違った?——ごめんなさい」

いや、謝るほどでもないと思うんだが・・・

「まあ、そんな細かい事は良いのよ。
で？あんたはSOS団団長のキヨンで合ってるの？」

「あ、ああ。そうだが」

「ふーん・・・よく見ると結構いい男じゃん。
兄貴に面倒事を押し付けられたと思ったけど、
少しは感謝しても良いわね」

「何の話だ？」

「こっちの話。

・・・さて、あんたの顔を憶えたいし帰るわ。
周防、行くわよ」

「もうちょっと——見て回りたい——だめ？」

「また明日、一人で来たら良いじゃない」

「———そうする———」

「それじゃあね、キヨン。

今日の所は挨拶だけにしておくわ。
規定事項だから、また会う事になるでしょうけど」

「———またね———キヨン君」

そう言い残し二人は去っていった。
本当に何だったんだ？あいつら・・・

その後は特に変わった事も無く一日を終えた。

強いて上げるのならば、朝から姿を見ていなかったハルヒが
何故か古泉のクラスの劇に出演していた。

後で本人に聞いた所、

『古泉さんに会いに行ったら、

風邪で役者の人が来られなかったから

代役をお願いされちゃったんだ。

髪を下ろしてカチューシャ外したらその人と似てるからって』

との事だった。

いや、他に何か方法が有っただろ。

クラスの奴らテンパってたのか？

ハルヒも、よく上演開始前の30分で台詞を憶える事が出来たな。
少なくとも俺は無理だ。絶対に。

で、次の日。

つまりは学園祭二日目にして最終日。

ステージで演奏するのは午後からだ。

よって俺とハルヒを除くSOS団は今日もクラスの方へ出向いている。

って、それは当たり前か・・・

「き、キョン君・・・」

「どうした？」

「な、なんでもう衣装着てなきゃいけないの？」

「直前で着替えるより良いだろ？」

時間に余裕を持って、ってやつだ。

それにお前のはまだ私服に見えるから良いだろ？」

「た、確かにキョン君のよりはそうだけど・・・」

まあ、この会話からもわかる通り

俺達はステージ衣装を着て歩いている。

折角の学園祭だ、こんな服着て歩く事なんてそうそう無いからな。もつとも、ハルヒに説明したのも理由の一つだが。

「うう・・・」

・・・あれ？キョン君、あの人佐々木さんじゃないかな？」

「え？何処だ？」

「ほら、わたし達の教室の前。

見た事のない人が隣に居るけど。

お友達かな？

あつ、二人とも入っていったね」

「・・・橘だな。あいつら知り合いだったのか」

「キョン君の知ってる人？」

「まあな」

さて、声ぐらい掛けとくか。

「——これは・・・なんと言いますか・・・」

「随分と独創的な展示よね。

キョンらしいと言えばキョンらしいけど」

・・・おい佐々木に橘。

散々言ってくれてるようだが・・・

「俺が決めたんじゃないっの！」

「「きゃあ！！」」

なんともまあ、

可愛い悲鳴だな。

「き、キョンなのかい」

「ああ、こんな格好しちゃいるが俺だ」

やっぱりと言うかなんと言うか

カツラや片眼鏡を付けているからわからなかった様だな。

「・・・となると、そちらは涼宮さんかしら？」

その衣装あなたに似合ってるわね」

「は、はい。ありがとうございます／＼／＼」

ハルヒの奴、照れてるな。

「橘は・・・夏休みの終わり以来か？」

「ええ。そのくらいだったと思います」

「おや？ 君たちは知り合いだったのかい？」

「友達だ。」

俺はむしろお前らにつながりが有ったのが驚きだ」

「くくく、それは嫉妬かい？」

「そんなんじゃないよ」

そもそも、何に嫉妬すんだよ・・・

「あ、あの・・・」

「ああ、ごめんなさい。

わたしは橘京子なのです。
よろしくね」

「す、涼宮ハルヒ・・・です。

こちらこそ・・・よろしく、お願い、します・・・」

「悪いな橘。

こいつは見ての通り人見知りで」

「い、いえ、『組織』で調べた情報で知っていましたから。
大丈夫なのです」

「ふえ!？」

「た、橘さん、ちょっと!
キョン、少し待っていてくれ!」

「お、おい、お前ら!？」

なにやら口走った橘を慌てた様子で教室の外に連れ出した佐々木。

もしかして、佐々木も非日常的な事を知ってるのか？
元の世界で橘は古泉達と敵対してるみたいだったからな。
てか、『組織』とやらもハルヒの事を調べてるんだな。

「ね、ねえ。キョン君・・・」

「流石に俺も説明出来ないぞ」

お前の能力が完全に消えたら説明しても良いんだが・・・

「や、やっぱり？」

「・・・どうしょっか？」

「・・・よし、部室に戻ろう」

「ええー！！良いの！？」

「大丈夫だろ」

「・・・かな？」

佐々木と橘には悪いがな。

で、その後は全員が揃うまで
ハルヒとオセロをしていた。
そこ、暇人とか言うな。自分でもわかってるから。

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・

「――君。キョン君!!」

「ん？あ、ああ。ボーっとしてた」

「しっかりしてよ」

「スマン長門」

もう回想も済んだし大丈夫だ。
色々細かく思い出し過ぎたがな。

「それじゃ」

出て行く前に定番のやらない？」

そう言って右手を、甲を上にし差し出す長門。

「だな。やっておくか」

「う、うん」

「えっと・・・手を乗せれば良いんですか？」

「ええ、それで合っています」

全員で右手を重ねる。

これは俺が掛け声をかけるべきか。

「それじゃ、SOS団初の大舞台だ。」

全力で頑張るぞ!!」

「「「「おーーーーー!!」」」」

さて、気張って行くか!!

溜息編エピローグ（後書き）

キ「エピローグにも関わらず新キャラ出てきたな」

海「まあ、このタイミングしか無かったからね。

ちなみに言うと

今回出てきた『藤原』は原作の『藤原』の妹で、古泉みたいに性別が変わっている訳ではありません。あしからず」

キ「九曜も原作と少し違うんだが」

海「それは・・・

人見知りのハルヒと接触した時に無口無表情じゃ怖がらせて

円滑なコミュニケーションが取れないからだ。

だからちゃんと人間味があるんだ。

長門だってそうだろう？」

キ「そ、そうだったのか・・・」

海「まあ、ハルヒの願望による所も有るんだが」

キ「ってか、それが大部分だろう？」

海「まあね・・・

と言う事で、今回はこの辺で。

次回は『ライブアライブ 前編』です」

キ「長門が歌う話だな」

海「その次はキョンだけどね」

キ「ハア・・・そうだな」

海「では次回も——」

海・キ「「よろしくお願いします」」

長「あゝ♪————あゝ♪——あゝ♪」

ハ「長門さん頑張ってるな・・・」

長「おゝともなゝいせかいにゝまゝいおりゝたゝI
was
sn
owゝ♪」

ハ「キャラソン!？」

ライブアライブ 前編（前書き）

海「今回は長門視点です」

キ「そうなのか。

だが次は俺視点だろ」

海「もちろん」

キ「ハァ・・・不幸だ」

海「上条さん!？」

ライブアライブ 前編

す〜は〜・・・す〜は〜・・・よしっ！

さっきは裏で涼宮さんに色々言っただけど
わたしだって緊張してるんだよね〜

だって沢山の人の前で歌うんだよ!?

しかも一曲目だよ!?

クラスみんなが見に来るって言ってたんだよ!?

緊張するなって方が無理だよ!?

つとつと・・・

帽子が重いからよろめいちゃったよ。

前列のお客さんから心配そうな目を向けられちゃった。

「長門、大丈夫か？」

「も、ももももちろん」

「流石のお前もガチガチだな・・・」

「うう〜・・・」

キョン君はどうしてそんなに落ち着いていられるんだろう。

そ、そうだっ、

ぱぱっと始めた方が楽になるよね！きつとそうだよ！！
だから早く合図をだして古泉さん！！

「長門」

「な、なに？キョン君」

「マイクの位置、お前には高くないか？」

「えっ？・・・ああっ!？」

くすくすくす

「あうう・・・」

わ、笑われちゃった・・・

と、とにかくっ、スタンドを低くして、っと・・・

・・・ザワ・・・ザワ・・・ザワ

どうしよう、始める切っ掛けを逃したかも。

この空気を壊すために何か一言・・・一言・・・

「わたしの歌をきけえ!!」

「」「」「シェリル!？」」「」「」

わあああああ〜!!!

よしっ!

何も考えずに出た言葉だけど、
盛り上がったから結果オーライだよね!!!

そしてわたしたちの演奏が始まった。

♪♪♪♪♪♪♪♪

ふと、隣でギターを弾いてるキヨン君を見た。
やっぱり格好いいな・・・

「『もつと解り合えたなら

今、仲良くしてるあの子が私で

いつも帰り道 Paradise

アイスをなめながら なんでも話した?』」

ねえキヨン君。

わたしは人間じゃないんだよ。

こんな事実口にしたら
あなたに怒られちゃうよね。

『そんな事は無い』って断言してくれると思う。
それが嬉しかったりするんだけど。

「『バカな妄想なんて おしまいにしなさいよ
Da—Da—Da Da n—Da—Da n f o r g e t
消えるよ』」

でもね、無理なんだ・・・

わたしは情報統合思念体に作られた
対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェイス。
涼宮さんの監視のために作られた存在。

どんなに否定しても覆せない、絶対不変の事実なんだよ？
ちゃんとその事をわかってるの？キョン君。

「『だから言わなくて良かったんだよね
とても好きだと』」

だから、時々だけどう思っちゃう時があるんだ。
『このままキョン君の傍にいて良いのか？』ってね。

「『何も見てないフリで 背中見てた
つらくなって走り出す

I miss you, Baby

知った恋はジェラシーの悔しさだけ
おいて逃げていったけど

もう Good-bye, bye! first love』

」

わたしはあなたの事が好きだよ。

結構表に出しているんだけどあなたが気づかないだけで。
ホント鈍感だよね。

「『だって気持ちちが慣れてた
笑いのツボだっておんなじだったし

どうして私じゃないんだろう

繰り返すの飽きた

人生ムダ遣い』」

だけど、人間じゃないわたしと居てあなたは幸せになれるのかな？
涼宮さんの監視が終わったら
そのまま消えてしまうかもしれないわたしなんかと居て。

「『次に行かなくちゃ 始まりを受け入れて

B a — B a — B a B a n — B a — B a n r e s t a r t

ハレルヤ

薄れてしまうけど悲しくはならない

意外と元気!』」

あなたの事が好きなのはわたしだけじゃないんだよ?

涼宮さんや古泉さん、佐々木さんなんかは確実だし、
朝比奈さんや鶴屋さんだって少しは気が有るみたい。

ほら、この人達はわたしと違ってちゃんと人間だよ?

あなたと同じなんだよ?

「『心だって変わるなら 明日も変わる

振りかえってピースして

I g o , g o m y w a y

割と恋は不便だね 理屈じゃない

それが楽しめるまでは

G e t m a n y m a n y t i m e ! ! 』」

彼女達とだったらあなたも幸せになれると思うよ。

「『心だって変わるなら 明日も変わる
振り返ってピースして

I go, go my way
割と恋は不便だね 理屈じゃない
それが楽しめるまでは』」

それでも、あなたがわたしの事が好きだって言ってくれたらとても嬉しい。

『好き』の意味が違ってたって良い。

わたしの好きは『異性として』
あなたの好きは『友達として』

それだって構わない。

あなたがわたしを気に掛けてくれる。
たったそれだけの事で十分なんだ。

「『見つめたい見ていたい どうせムリだ
つらくなって走り出す

I miss you, Baby』」

それでも、願わくば、

あなたもわたしの事が好きでいて欲しい。
もちろん『異性として』ね☆

「『知った恋はジェラシーの悔しさだけ
おいて逃げていったけど

もう Good-bye, bye! first love

」

此処まで来たんだから絶対に諦めないよ。
わたしは一途で、しつこいよ!
だから覚悟しててね、キョン君!／／／



お、おわった．．．
ってあれ？反応が無いけど、ダメだったのかな．．．

パチパチパチパチパチパチッ！！

うわあ．．．

やったー！！拍手貰えたー！！

「みんなありがとう☆」

それじゃ、次はキョン君が歌う番だね！！

「だよなあ・・・」

代わってくれないか長門？」

「ええ」

わたしもキョン君の歌聞きたいし☆」

「ハア・・・わかったよ・・・」

頑張って歌ってね♪

ライブアライブ 前編（後書き）

長「こゝへんへ続くよ☆」

ライブアライブ 後編（前書き）

キ「後編だ。

ちなみに『俺』と表記されるのは
俺の元になった『俺』だ」

ライブアライブ 後編

「どうも始めまして。

『世界の面白いことを探す団』
略してSOS団です」

わあああああゝ!!

長門の歌のおかげで

場の雰囲気はほぐれてきたな。

おかげで喋りやすくなって良い。

「えっと、メンバー紹介をします。

ギター兼一曲目ボーカル、長門有希」

「よろしくね☆」

歌う前までガッチガチになってた奴には見えないな。

「ベース、涼宮ハルヒ」

「よ、よろしくおねがいしまひゅ！
・・・が、がんばってましゅ！」

噛み方が何時もより二割増しだな。

「あうっ！」

なんか、こいつ見てると
緊張してる俺がバカらしくなってくるな。

「キーボード、朝比奈みくる」

「よろしくお願いしますね」

柔らかに微笑む朝比奈さん。
最高の癒しです!!

「ドラム、古泉一姫」

「どうも」

古泉は声を出し一礼した。
表情は何時ものやけ面だ。

「最後に俺がギター兼
二曲目ボーカルの「キョン君だよ!!」って、おいっ!!」

ここは普通フルネームだろ!?
何で俺だけあだ名で紹介されんだよ!?

これで生徒の大半に『キョン』が浸透しちまうだろ・・・
まあ、今更どうでもいいんだけどな。

「・・・では、こうやって話すのは苦手なので
二曲目行きたいと思います」

さっさと歌い終わってしまおう。
そうすれば楽になる。

「では、聞いて下さい。

『Alchemy』」



『Alchemy』か・・・

俺はこの歌に関して色々思う所がある。
だから良く聞く歌の一つだった。

こっちの世界で初めて演奏するのは俺達だな。

「『無限に生きたい 無限に生きられたら 全て叶う

でもいろんなものがあたしを追い込んでく

生きる残り時間 夢の座標 行方

全部大事なもののな』」

『俺』は過去に何度も変わろうとしたことが有る。

向こうのハルヒみたいな事を言う様だが、

『俺』だってつまらねえ世の中にウンザリしてたから。

「『いいさこころでちよっと甘いもの食べていこ
そういう思考停止ばかり得意になった』」

だからあいつに声を掛けられた時
面倒だと思ふ気持ちと同じぐらいに
期待感もあったんだ。

こいつについて行けば何か変わるんじゃないかって・・・

実際とんでもないことに巻き込まれまくったがな。

「『歩いてきた道振り返ると

イヤなことばかりでもううんざりだよ

触れるものを輝かしてゆく

そんな道を生きてきたかったよ』」

だが、いつもどこかに虚無感があった。

『俺』が待ち望んでいた非日常に巻き込まれているのに
結局は今までと何も変わって無いんじゃないかって、な。

「『無性に生きたい 焦ってばかりの日々 全て消えそう
でもさぼってもみる だって疲れちゃうじゃない そんな矛盾
盾思考

あたし頭どっか知らないうち打ったみたいだ
いっかここらでちよっと病院へ行っところ

ずっと起きてられる薬は置いてませんか？」

なんでそんな風に感じてしまうのか、
どんだけ頭を使ってもわからなかった。

「『ぼさあと突っ立ってるだけでもう
化石になってしまいそうなんだよ
誰からも忘れられたような
くすんだ存在になってしまおうよ』」

だから『俺』はずっとこのままなんだろうなって思ってた。
この先何をやったって完全に満たされることは無いってな。

「『いいさこころでちよつと根性を見せてやる
自分で頬叩いて存在の証明へ』」

だが、それは違った。

ここに居る俺はその答えを得ることが出来た。

要は『変わろうとした』なんて大層なこと言ってたが、

今まで自分の意志で動いたことが一度も無かったただけだ。
結局、行動するのを他人に任せて、

『俺』は何もせずただ与えられるのを待っていただけ。
だから物足りなさを感じていたんだ。

「『歩いてきた道振り返らない

イヤなことばかりでも前へ進め』」

けど、この世界でSOS団の団長に・・・他人を引っ張って行く
立場になった。

自分で考えて行動しなければならなくなった。

そして、団員が、俺が楽しいことを自発的に探すようになった。

確かに元の世界と比べれば、
こっちでやって来たことは見劣ることばかりだろう。

野球大会は一回戦敗退。

七夕は小さい偽物の竹とささやかな輪飾りを飾っただけ。

孤島へ行ってもほとんどテレビゲームで終わったし、

夏休み最後の二週間がループする事も無かったからな。

それでも、充実感があった。

何をやっても楽しかった。

「『触れるものを輝かしてゆく』」

ハルヒが、長門が、朝比奈さんが、古泉が笑って付いてきてくれる。

それが嬉しくて次に何をしようか考え、それを実行する。

そしてまた全員で笑い合う。

その繰り返しは何事にも変えられない物のように感じる。

多分、向こうのハルヒもこんな気持ちだったんだろうな。

同じ立場になって、やっとあいつのことが少しわかった気がするぜ。

「『そんな存在になってみせるよ!』」

だから俺は前を向いて歩き続ける。

「『みせるよ!』」

『俺』とは違う存在になるために!

「『みせるよ!』」

人の心を動かせる存在になるために!

「『みせるよ!!』」

そして、『^{世界}目に映る景色』を変えるために!!



ジャジャーン

パチッ・・・パチパチ・・・パチパチパチパチッ！！

わあああああ！！

は、ははっ、ははははは！

よっしやあ！！

これは大成功って事で良いよな！

「ありがとうございましたあ！！」

って、しまった。

行き成り言い出したら合わせ——

「「「ありがとうございました！！」」「」」

——られるんだな。

お前ら全員読心術使えるのか？

まっ、んな訳ねえよな。

「『SOS団』の皆様ありがとうございました」

司会の生徒が俺達の出番が終了したことを告げる。
もう終わりか。

後一曲ぐらい演奏したい気分なんだがな。

何はともあれ、こうしてSOS団の学園祭は幕を閉じた。
気が早いが来年も楽しみだ。

ライブアライブ 後編（後書き）

海「学園祭終わったね」

キ「ああ、すげえ楽しかったぜ。
で？次はどうするんだ？」

海「とりあえず『日常編』とか『中学編』を挟んで
『射手座の日』かな？」

キ「コンピ研の皆様か」

海「あくまで予定だけだね・・・

それでは、今回はこの辺で。
また次回も」

キ「多分『日常編』だと思うが」

海・キ「「よろしくお願いします」」

鏡「学園祭編出られなかった・・・」

晴「同じく・・・」

海「あっ！

二人とも出すの忘れてた・・・」

日常編 その四（前書き）

海「久しぶりの投稿です」

キ「地震やら何やらで大変だったからな」

海「まあね・・・」

今回は『日常編』です」

日常編 その四

「よっしゃあ！やってやるぜ！！」

「ちょっと！うるさい！！」

もう少し落ち着いたらどうなの！？

・・・ねえお兄様♪」

「お前達・・・

任務中に無駄話をするな。

美しくない・・・」

「んだと！？」

「敵が目の前に居るのだぞ。

もっと集中しろ。

それと、今回のヘッドは私だ」

「ちえ・・・わかったよ・・・」

「ああ、お兄様と合体出来るなんて夢のようです！！

・・・余計なのが居るけど・・・」

「おい！聞こえてんぞ！！」

「いい加減にしろ！！」

「「・・・はい」」

「まったく・・・

フォーメーションMLS

『孤高の薔薇』」

「いきます。

・・・念心！」

「合体!!」

「ゴー! アクエリオン!」

「——って夢を見たんだが」

「・・・前世の記憶じゃない?」

「ってかさ・・・

その話を聞いてあたしはどうすれば良いんだ？
わざわざ家まで来て・・・」

「いや、単純に暇だったから来ただけだ」

「ハア・・・」

あっ、どうも。

キョウこと白石鏡香です。

・・・本名忘れてないよな？

とりあえず状況説明だけはしておこう。

読者の皆様方を配慮して。

・・・って、読者って誰だよ・・・あたし。

今日は月曜日。つまり平日。

本来であれば学校に行かなければならない。
しかし、我が校で少し問題が発生した。

なんと、インフルエンザが大流行し

あたしのクラスが学級閉鎖になったのだ。

聞く所によると、他のクラスも似たような状況で

もしかしたら学校閉鎖まで有るんじゃないか・・・と
そんな事が言われるぐらい酷い事になっているのである。

そんな訳であたしが家でゴロゴロ・・・もとい、
全力で休日を満喫していたら突然キョンが押しかけて来た。
そして、とりあえずリビングに上げたら
開口一番冒頭の夢の話を始めた。
っと、まあこんな所か。

「暇だったからって・・・
学校はどうしたんだ。学校は。」

「今日は学園祭の代休。
お前こそどうして家にいるんだ？」

「・・・押しかけて来た奴の台詞じゃないな。
とある事情により学級閉鎖してるんだよ」

「そうか、大変だな」

「そうでもないよ。
・・・ってか、ハルヒさんとかも休みなんだろう？
何であたしん家に来たんだ？」

「詳しくは聞かなかったが用事があるらしい。
SOS団のメンバー全員が・・・」

「そ、そうか・・・」

はぶられてるって事では無いだろうな・・・

本当に偶然都合が悪かったんだ・・・

ま、まあ、そう言う事だったら気晴らしに付き合ってやるか。
あたしも暇だったし。

「・・・所で、キョウ一人だったのか？」

「ん？ああ。

家は両親が共働きなんだ」

「そうなのか」

だからある程度騒いでも大丈夫だ。

「じゃあ・・・何する？」

「・・・さあ？」

「えっ？

まさか何の考えも無し」

「ああ」

「「・・・」」

「と、とりあえずテレビでもつけようか？」

「そ、そうだな」

これ以上無音はきつい。

それに何か番組から話しの切っ掛けがっ！

ピッ

『皆様・・・こんばんは。

“ハッテン、ボクの町！”のお時間どえす』

ピッ

「・・・」

「・・・見間違いだな」

「・・・そうであって欲しいけど」

「・・・」

も、もう一度つけてみよう・・・

ピッ

『今回は・・・性別の壁を越え、崇高な愛を求める
人々が集う、ある施設を紹介しまあす』

「よしっ・・・チャンネル変えろ」

「・・・うん」

ピッ

『逆ナンに挑戦してみたいと思います!』

ピッ

『えっとね、この言葉、聞いたことあるかなあ？
スウ・トオ・リイツ・プウー』

ピッ

『“世紀の大実験・ゲノムプロジェクト”
へようこそ』

ピッ

『——学校周辺を深夜徘徊していた学生たちが補導されました。』

全員が拳銃のような物を所持しており、
中には刃物を持っていた学生もいたようです。
彼らの証言によると

『まさか目の前の象徴化している人が
警察官だったとは思わなかった。』

今度からは影時間中に寮に戻るようにする』

と供述しているそうです』

「とりあえずニュースが一番まともだな」

「みたいだな・・・」

内容はまともじゃ無いような気がするが・・・

ああ！なんかもう、どこからツツコミを入れれば良いんだ！？

で、その後は、

暗くなるまでキヨンとテレビ番組にツツコンだり
漫画を見たり、ゲームをしました。

終わり。

「・・・って、今回の話の落ちは!?!」

「いや、日常の話にそういうの期待されても」

「おいっ!?!」

ハア・・・やれやれだ。

日常編 その四（後書き）

海「それでは続けて、
『中学編』です」

鏡「よろしくな」

中学生編 その四（前書き）

佐「これは、とある日の僕とキヨンの会話だ。
短いが見てくれたら嬉しいね」

中学生編 その四

「君はギリシャ神話に出てくる

オルフェウスと言う吟遊詩人の話を知っているかい？」

「・・・P3のだったら知っているが」

「・・・君って奴は・・・」

まあ、確かにゲームや小説、漫画などの創作物は神話を参考に行っている物も多くあるから入りとしては適切なのかもしれないけどね。

「で、そのオルフェウスって人がどうかしたのか？」

「ちょっとね・・・」

当然ながら僕だって唐突にこんな話を切り出さないさ。

「昨日、両親が喧嘩しているのを見てしまったんだ。

その言い争いの中でさ、お互いに相手の事を散々言っていたよ。

『何で結婚したんだろう』とか、『出会った事が失敗だった』とかね」

「まあ、あれだろ、お互いに熱が入り過ぎたんじゃねえのか？」

「そうなのかもしれない。」

だけど、日頃心の中で思っている事だとも思う。
互いに愛し合ってはいるけど、どうしても消えない部分」

「・・・・・・・・」

「僕はいつか君に『恋愛は精神病の一種』と言った。
実を言うと今はその心境が変わってしまったんだよ。
言葉そのものに変化はないけどね」

あの時、この言葉は『一時の気の迷い』って意味だった。
けど、君に・・・・その・・・・こ、恋をしてしまっただけは
違う考え方をするようになった。

「『恋愛』というのは簡単に人の心を変えてしまう。
今まで培ってきた概念ですら、意図もたやすくね。
・・・・それが今の僕の考え方だ」

そう、変わってしまう。
良くも悪くも。

だから普段は相手の悪い所を見て見ぬふりをする。
心の隅の方に寄せて。

ずっと一緒に居たいと思うからこそ本音を隠して。
けれど、それも喧嘩など感情が高ぶっている時には口に出してしま
う。

そして後で後悔する・・・

「・・・・そうか。」

それで、その事がオルフェウスとどう関係するんだ?」

「・・・いや、

彼も僕の両親と同じ様な考えをした事があるのか気になっただけさ」

もつとも、神話に出てくる仲の良い夫婦なら誰でも良かった。ただ真っ先に浮かんだのが彼だっただけだ。

「オルフェウスは妻をとて愛していた。

妻の名前はエウリュディケーと言うんだが、

彼女が毒蛇に噛まれて死んでしまった時なんて

取り戻そうと冥府——死者の国だね——に入っただよ」

「・・・すげえな、オルフェウス」

「だけど結局、彼は妻を取り返す事は出来なかったのさ」

「どうしてだ？」

「彼はハーデス——冥府の王だ——に妻を連れ帰っても良いが冥府を出るまで振り返ってはいけない、と言われたんだ。

けれど、後少して抜け出せたのに

オルフェウスは急に不安に駆られ後ろを振り向いてしまった。

そして彼は妻の姿を見たが、それが最後の別れになった」

本当にあと少しの所で『見るなのタブー』を犯してしまった。

彼はその時、どんな心境だったのだろう。

そして、どんな不安が有ったのだろうか・・・

「ちなみに日本にも同じような神話があるよ。

イザナギとイザナミの話だ」

「ああ、それは大体知ってる。

確か・・・イザナギが黄泉の国に行く話だよな」

「くくく、よく知っているね。

その通り、彼もまた妻を――イザナミを取り戻そうとしたんだ」

「で、イザナギは醜いイザナミの姿を見て逃げ出したんだよな」

「そして黄泉比良坂で追いつかれそうになったけど、地上側の出入り口を大岩で塞いで完全に離縁した」

「オルフェウスと同じ結果になったのか」

そうだね。

オルフェウスもイザナギも

この話に関しては同じような終焉だ。

「キヨン・・・君はどうだ？」

将来伴侶が出来たとして、

彼らと同じような行動は出来るかい？」

「・・・妻を取り返しに黄泉の国に行けるかって事か？」

「もちろんその部分を指したつもりだ」

「そうだな・・・その時になってみなきや分んねえだろうな。だが、まあ、その・・・」

「キョン？」

突然、視線を外しなにやら言いづらそうにしている。

どうしたんだろうと怪訝そうにキョンを見ていると、

急に僕の目を見て、苦笑しながら――でも、その目はとても真面目に・・・

「佐々木だったら、妻じゃなくても迷わず行ってやるよ。

黄泉の国だろうが、冥府だろうがな」

なんて、言ってくれた。

「あ、ありがとう・・・／＼／」

うう・・・不意打ちは卑怯だよキョン／＼／

「お、おう・・・／＼／」

言ってる本人も恥ずかしがってるじゃないか！／＼／

それにしても・・・くくく。

「・・・なに笑ってんだよ」

「まあ、そう勘ねないでくれたまえ。

別に君の事を笑ったのでは無いのだから」

「じゃあ、なんだよ？」

「くくっ、それは秘密さ」

「なんだそりゃ・・・」

ただ・・・

僕も君のためだったら彼らと同じ事をするだろうかと、
そんな事を思っただけだよ。

中学生編 その四（後書き）

海「キタロー!!」

キ「うお! いきなり叫んでどうした?」

海「いや、ちょっと・・・」

佐「彼は良い人だった・・・」

システム上仕方ないとはいえ
最大で六股をかけてしまう事以外は

海「それを考えると

P4のシステムは良かったな」

佐「最大数は多いが

『恋人』か『友達』かの選択
が出来るからね」

キ「・・・ともかく締め of 言葉を言え。作者」

海「そうだな・・・

では、また次回も——」

海・キ・佐「「「よろしくお願いします」」」

佐「次はどんな話にするつもりなんだい？」

海「まだ未定だね」

キ「『射手座の日』やれよ・・・」

射手座の日 前奏曲（プレリユード）（前書き）

長「もってっけ〜♪」

キ「何故？」

海「『射手座』だからじゃない？」

射手座の日 前奏曲（プレリユード）

ここはどこか遠い銀河。

我がSOS団は正体不明の敵と戦っている。

「チツ・・・不味いな・・・」

「き、キョン君！後ろ付かれてるよ！！」

「わかってる！！」

ハルヒの切羽詰まった声が届く。

が、それに応えている余裕は無い。

少しでも気を抜いたらいとも簡単に撃墜されてしまうだろう。
そのくらい現在俺の置かれている状況は悪い。

くそっ・・・戦艦は小回りがきかねえんだよ！

前線抜けられたら終わりだろうが！！

さっきからレッドアラートが鳴りっぱなしだ。

だが、この距離じゃ俺の砲撃はほとんど中たらないし・・・
損傷率もやばくなってきたな・・・

古泉！

お前の機体で狙撃出来ないか！？

「無理です！！距離が離れすぎてます！！」

「くっ・・・」

長門はどうだ!?!」

「わたしも後ろに二機付かれてるから
自分の事で手一杯だよ!?!」

二人とも無理か・・・

あれ? そう言えば朝比奈さんは?

「あれ?・・・ここはどこでしょう・・・」

「あ、朝比奈さん!?!」

迷っていた・・・

確かに宇宙空間は上下左右の区別がないので
思った方に進むのは難しいのだが、
目と鼻の先であるハルヒの機体にすらたどり着けてない。
もしかして全く動いてないんじゃない?!

「ハア・・・詰んだな・・・」

ピチュン

「」「」「あっ・・・」「」

「やっぱり・・・」

『自軍の戦艦を撃墜されました。 状況を終了します』

《You Lose》

名も無いオペレーターの淡々とした敗北宣言の後、
パソコンの画面に自軍が負けた事を知らせるメッセージが出る。
また勝てなかった・・・

「・・・すまん」

「ほ、ほら、これ練習じゃん！
慣れるためにやってるんだから
落ち込まなくても良いよっ！」

「そ、そうだよ！わたしも次はもっと頑張るから！！」

まあ、確かに本番で勝てば良いんだよな。
この勝負を持ちかけてきたコンピ研に。

つと、そろそろ何でこんな事をしてるのか
ちゃんと説明をした方が良いよな。

事の発端は昨日の放課後に遡る。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・

俺達が何時ものように部室でぐだぐだ・・・もとい、各自が思い思いの事をしていたら扉からノックの音がした。

その音を聞き一番近くに居た朝比奈さんが扉へ向かう。

「自分で言うのもなんだが、俺達に用事が有る奴なんて居るんだな？」

「あはは・・・」

ハルヒですら苦笑いだ。

「あっ、部長さんですか。いらっしゃい」

ん？『部長さん』って言う・・・

「やあ、お邪魔するよ」

「ああ、どうも。

お久しぶりです。

学園祭での展示は

大盛況だったそうじゃないですか。

生憎と俺は教室外から見ただけです」

「ははは、ありがとう」

SOS団にやって来たのは
コンピ研の部長氏だった。

「それで、今日はどういったご用件でしょうか？」

「実はね、君たちSOS団に少し協力して欲しいんだ」

「俺達に出来る事でしたら・・・」

こちらとしても断る理由は無いからな。

「本当かい？すまないね」

「いえ。」

それで、何をすれば良いんですか？」

「単純な事さ。」

僕たちと勝負して欲しいんだ——」

勝負って・・・

あー・・・もしかして『アレ』か？

タイミング的にも丁度良いし。

「——このゲームでね」

部長さんが懷から取り出したディスクを受け取る。

『The Day of Sagittarius 4』

・・・ん？『4』？

「それは僕たちコンピ研が作った
オリジナルゲームさ。

ジャンルは・・・そうだね・・・シミュレーションかな。
ウォーゲームとも言われるが」

「・・・どうしてコレで勝負するんですか？」

「ふむ。

もうすぐゲームの大会がある。

そこで我がコンピューター研究会は

その『The Day of Sagittarius 4』
を出品するんだ」

ゲームの大会・・・

ああ！ハルヒの命によりゲームを作った時の！

あれは大変だったな。

あいつが満足するまで一週間をループしたし。

何より最終的に・・・いや、思い出すのはやめておこう。

『アレ』の制作中は他のジャンルより精神的に辛かった・・・

「だが、それはまだ完成したばかりの
言わば『α版』だ。

・・・まあ、学園祭は仕方なくこのまま展示したが」
そうだったのか。

「そこでだ、君たちと勝負して
第三者によるこのゲームの感想を得ると同時に
改善出来る所を探したいんだ」

「なるほど・・・
そう言う事でしたら喜んで」

「なら、決まりだね。
行き成りじゃ大変だろうから
勝負は二日後で良いかい？」

「ええ、構いません」

「って事で、あの時と少し異なっているが
『SOS団』VS『コンピ研』となった。

「さて・・・まずは起動するか」
部長氏が立ち去った後、

早速起動してみる事にした。

今回は見るだけなので、

全員普段俺が使っているパソコンの前に集まっている。

・・・おい、長門。顔が近いぞ。

「むうう・・・反応うっすい・・・」

「・・・古泉で慣れたのかもしれないな」

つとまあ、そんな事は置いといて。

「一番下にチュートリアルがありますね」

「おっ、本当だ」

で、チュートリアルを見ているのだが。

「これは・・・『3』とは別物だな」

「へー・・・キョン君やった事有るんだ」

「あー・・・まあな」

『俺』がプレイしたんだから

まあ・・・いいよな・・・

「3Dになってるな」

なんかこう・・・背景の宇宙空間は凝っているが、

戦艦や機体のグラフィックは残念な感じが有る。
だがまあ、それでも凄い事だと思う。

さて、このチュートリアルは以外と長かったので、
俺なりに要点をまとめてみた。

戦闘システムに関しては、

『3』と同じくリアルタイム制を導入しているようだ。
キーボードで操作出来るか疑問だったが、
部長氏がゲームと一緒にコントローラーも人数分貸してくれた。
使えて事だろうな。

確かUSBの所に接続すれば良いんだったか。

あと、勝敗を決める条件も変わっていない。

その軍の総大将——今回は俺だ——を墜とせば勝ちとなる。

しかし、やはり変わっている所も有った。

まず些細な所では、

『3』では各自戦艦を用いて戦っていたが、

『4』で戦艦を使うのは総大将だけ。

他のメンバーは各隊の隊長って位置づけだ。

次に大きな所では、

その総大将以外のメンバーの機体だ。

コレは大まかに分けて二種類有る。

オーソドックスな戦闘機タイプと、

人型・・・つまりロボットみたいなタイプだ。

設定によると戦術機と言うらしい。

・・・『あいとゆうきのおとぎばなし』か？

まあ、俺も男だ。

ロボには少し憧れが有るよな。

部長さんもそうなのだろうか。

で、どっちか選んだ後は

100ポイントを『速度』『防御』『攻撃』にそれぞれ振り当てる。
此処は『3』と同じだな。

ちなみに各自が率いる部隊は

隊長の機体と同じ機体になる。

つまりロボを選べばロボ部隊が出来上がるって事だ。

ああ、それと、

マップが最初から全部表示されてるって所も変わってるな。

まあ、大まかにまとめるとこんな感じだ。

「さて、大体の事は解ったし明日から練習始めるか」

「おー！！」

「お、お〜！」

長門・・・野球大会の時と同じぐらいに輝いてるな。

それとハルヒ・・・無理して長門に合わせなくて良いぞ。

時間は飛んで次の日。つまり今日。

「それじゃ、まずは機体設定だな。
とりあえず各自やってみてくれ」

やってみたら解ると思うが
意外と振り分けて悩むんだよな。

〜十分後〜

予想通り結構時間がかかった。

「・・・これで・・・おっけ〜！！
わたしは出来たよ☆」

「わ、わたしも」

朝比奈さんと古泉はまだ考え中か。

それじゃ、俺とハルヒと長門の機体紹介でもするか。

ネーム .. キヨン

機種 .. 戦艦

スペック .. 『速度・40』 『防御・45』 『攻撃・15』

まあ・・・ネームの所は気にしないでくれ。

俺は総大将だから『速度』と『防御』を上げさせて貰った。

ネーム .. ハルヒ

機種 .. 戦闘機

スペック .. 『速度・35』 『防御・40』 『攻撃・25』

流石、手堅いな。

こいつは結構な確率で生き残れそうだ。

ネーム .. ユキリン

機種 .. 戦術機

スペック .. 『速度・40』 『防御・20』 『攻撃・40』

俺同様ネームは気にしないようにしよう。

こいつは攻撃中心だな。

おそらく動き回りながら戦う気だろうな。
確かに長門っぽいが。

「やっぱりこう言うのって
個人の性格が出るよな」

「あははゝ
そうかもね♪」

さてと、朝比奈さんと古泉。
そろそろ出来たか？

「そうです・・・ね。
はい、これで決定です」

「わたしも大丈夫です。
お待たせしてすみませんでした団長様」

「おい」

「ふふふ。冗談です」

まったく古泉の野郎。

・・・あつ、女だから『野郎』では無いか・・・

まあ、良い。

朝比奈さんと古泉の機体も紹介しておこう。

ネーム .. みくる

機種 .. 戦闘機

スペック .. 『速度・45』 『防御・45』 『攻撃・10』

朝比奈さんは俺と同じような振り分け方だ。
が・・・これは・・・
囃部隊決定かな？

ネーム .. イツキ

機種 .. 戦闘機

スペック .. 『速度・20』 『防御・40』 『攻撃・40』

古泉は戦闘機を選んだか・・・

んで、振り分けに関しては、
見た感じは固定砲台だな。

あんまり俺の近くから離さない方が良いかも。

って事で。

「全員の機体が出揃ったから
早速始めるか？」

「ですね」

「頑張るよー！！」

「よ、よしっ！やってみる」

「ふふふ」

と、まあ、威勢良く始めてみたが・・・

『自軍の戦艦を撃墜されました。 状況を終了します』

《You Lose》

「「「「「.....」」」」」

見事なまでに5連敗した・・・

「.....お前ら」

「「「「「.....」」」」」

「このまま負け越してたまるかあ!!
今日は勝つまで続けるぞ!!」

「「「Yes Sir!」」」

「声が小さい!!」

「「「Yes Sir!」」」

「Let's Party!」

「「「Yah! ha!」」」

・
・

・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・

こんな風に変なテンションでゲームをプレイし続けた結果、
ある意味見事な35連敗・・・

ハア・・・こんなんで明日大丈夫か？
激しく不安だ・・・

射手座の日 前奏曲（プレリユード）（後書き）

海「長かった・・・ガクッ」

キ「最後口で言うな。口で」

長「でも確かに長かったよね」

今回は説明回だから仕方ないのかもね☆」

キ「お前は相変わらず元気だな」

海「そだね・・・」

では、今回の後書きは書く事も無いからこの辺で」

長「もう終わりか」

キ「早すぎるだろ・・・」

海「では、次回も——」

海・キ・長「」「よろしくお願いします!!」「」

ハ「じ、人類を！」

長「嘗めるな!!」

キ「・・・何やってるんだ？お前ら」

射手座の日 協奏曲（コンチェルト）（前書き）

海「お久しぶりです」

キ「一ヶ月ちよいぶりだな」

海「ぐはっ!!」

キ「ハア・・・とりあえず本編どうぞ」

射手座の日 協奏曲（コンチェルト）

ついに来てしまったと言うべきであろう決戦当日。
未だNPCに一勝も出来ないままこの日を迎えた。

「開戦は四時からだったよな。
あと二十分か・・・」

「いよいよだね」

「全く勝てる気がしないけどな」

「あはは・・・」

コンピ研の皆様方は制作者だからな。
NPCよりも強いだろう。確実に。

対して俺達と言うと・・・

「・・・ハア」

「キョン君！

諦めたらそこで試合終了なんだよ！！」

「よく聞く励ましの言葉をありがとう。長門」

「むう」

「・・・よしっ、キョン君！コッチ見て」

「どうし——うお!!」

目の前にドアップの長門の顔が!?

「じゅ……」

「な、長門？」

あっ……なんかデジャヴ。

やってる奴は違うが。

あと、口で擬音を言うな。

「じゅ……」

「……」

いい加減恥ずかしくなってきた……

だが、ここで目を逸らしたら負けな気がする。

何に負けるのかはわからないが。

「じゅ……」

「……」

「じい……」

「……」

「じい……」

「・・・・・・・・・・」

「「・・・・・・・・コホン」」

「「はっ!?!」」

いつの間にか冷たい視線が三対も・・・

「・・・・・・・・キョン君・・・・・・・・長門さん・・・・・・・・」

「まもなく開始時間なので

お二人とも席に着いた方がよろしいかと」

うおお・・・・・・・・ハルヒと古泉の目が単色に・・・・

はっ!?!もしか!?!

コレが噂に聞く『魔王モード』なのか!?!?

O☆H A☆N A☆S H Iされてしまうのか!?!?

『・・・・・・・・少し、頭冷やそうか』

・・・・・・・・この事はもう触れないようにしよう。

いつぞやの巨大蛇のような末路は勘弁だからな・・・・

とにかく、今はゲームに集中だ。

驚くほどに勝つ確率は低いとは思いますが、俺にだって意地ぐらいある。

簡単に負けてやるつもりは無い。

「まもなくスタートですよ」

古泉の声を聞き、

パソコンのディスプレイに意識を向ける。

さあ、いよいよ開幕だ。

十六時00分

開戦のファンファールが鳴り響き、

マップ上にコンピ研の部隊を示すマーカーが現れた。

だいぶ距離があるので目視は出来ない。

しかしそれは向こうも同じだと思うので

たいした問題ではない。

移動すれば解決するしな。

まずは動く前に敵情報の閲覧から入る。

闇雲に突撃しても簡単に撃墜されてしまうからだ。
この辺はNPCと何度も戦ってる内に身についた。
もちろん他のメンバーにも必ずやるように指示している。

『情報は武器』と言う言葉もあるしな。

「もっとも、表示されるのは

ネームと機種の二つだけだが」

そう言えば前回説明し忘れていた事がある。

『機種による性能の違い』だ。

と、言ってもそこまでたいした事じゃ無い。

前回も説明した通り総大将は『戦艦』を
他の人が『戦術機』か『戦闘機』を選びポイントを振り分けて
機体の選択は終了する。

だが、個人が振り分けたポイントとは別に
各機体によってステータスが存在している。

ポイントと言うのはステータスに上乗せさせる、
言わば使いやすいように改造すると言う事だ。

各機種の基礎ステータスは

『戦艦』 .. 『速度20』 『防御50』 『攻撃30』

『戦術機』 .. 『速度30』 『防御20』 『攻撃50』

『戦闘機』・・『速度50』『防御30』『攻撃20』

となっている。

この基礎ステータスにポイントが加算されて最終的なステータスが出る。

つまり、同じポイントの振り分け方でも

『戦術機』は攻撃力が高い反面防御が薄く、

『戦闘機』は素早く動ける反面攻撃の威力が低い
と言う事になる。

なので敵情報に表示される機種の欄は結構重要だったりする。
相手の大まかなステータスを推測する事が出来るからな。

「・・・さて、俺が読者の皆様方に

大体の説明している間に閲覧し終わったか？お前ら」

「ど、読者の皆様方って何!？」

「さあ、な。

俺だってわからん」

こう言うのは気にしたら負けなんだよ。

「それにしてもさ」

わたし達のネームって適当だったんだな〜って思うよね」

「ん？ああ、そうだな。

ってか、向こうが凄いつてだけかもしれんぞ」

「あはは・・・そうかも」

コンピ研の皆様方は相も変わらず

どこをどう捻って出したのか解らないようなネームばかりだったが、それを見習おうとするつもりは微塵たりとも無い。

「さて、それじゃ全部隊速度を合わせて前進。

目標座標はJ6。

敵陣形右翼から攻めていこう」

「あいあいさ〜♪」

「う、うん！頑張る！」

「了解です」

「ふふっ」

さて、開始そうそう全滅なんて事態にはなってくれるなよ？

とまあ、そんな風に意気込んだ訳だが・・・

「今思えばフラグだったんだな」

「な、なにが？」

「いや、俺が進軍直前に考えた事は
世間一般的に言えば死亡フラグと呼ばれる物だと
今気づいただけだ」

おかげで今窮地に立たされてるじゃないか俺達は。

『コンピ研帝国』に戦闘を仕掛けて数分
我らが『SOS団連合』は敗北寸前になっていた。

どうしてこんな事態になってるかと言うと、
俺達が右翼から来る事を読んでいたかのように
と言うかそう誘導されたんだと思うが、
左翼にいた部隊が俺達の背後に回り込み、
思惑に気づいた時は既に手遅れで
コンピ研の部隊に360°完全包囲されてしまった。

「ちっ・・・」

向こうの攻撃は届いていないが

囲まれた状態じゃ何もできないか」

「ええ、そうですね。

敵部隊の進軍を留めるので手一杯です。
攻勢に転じるのは大変厳しいかと」

「はわわわわ．．．」

「す、涼宮さん落ち着いてください」

「キョン君！

損傷率が80%を超えちゃったよ！！」

まずいな．．．

何か良い策は無いか？

この状況を一発逆転出来るような．．．

いや、そこまでは望まない。

せめて部長氏に一矢を報いるような策は．．．

「．．．なあ、このゲームって結構リアルに作られてたよな」

「何がですか？」

「攻撃判定が」

「ええ、そうですね。

攻撃が中たった箇所で損傷率が変わったはずです」

「そうか．．．」

なら・・・いや、でもな・・・

「何か思いついたの？キョン君」

「・・・まあ、な」

だが、成功確率はかなり低いぞ。

「この際なんだって良いよ！

どうせこのままでも全滅なんだから！！」

「・・・それもそうか」

あまり思い出したくない相手だが、

朝倉も『やらないで後悔するより、やって後悔する方が良い』
って言ってたしな。

「俺が考えたのは

お世辞にも作戦と言えないようなものだが
それでも賭けてくれるか？」

「「「もちろん（だよ）（です）！！」」」

「サンキュ。

それじゃ説明するぞ——」

成功するかわからないが・・・

いや、そんな考えじゃダメだな。

絶対に成功させてみせるさ。

射手座の日 協奏曲（コンチェルト）（後書き）

海「『射手座の日』は次で終わりです」

キ「長かったな」

海「だね」

さて、今回はこの辺にしておこうか」

キ「随分と早いな」

海「遅れた分早急に次の話上げたいしね」

キ「そうか」

海「では、次回もまた・・・」

海・キ「「よろしくお願いします」

射手座の日 終曲（フィナーレ）（前書き）

海「後編です」

キ「やっと終わりか」

射手座の日 終曲（フィナーレ）

「―――つてのが俺の考えだ」

「き、キヨン君・・・それって」

「まあ、不可能では無いよね」

そう、俺が思いついた事は

長門も言った通り不可能では無い。

だが、そう簡単に出来る事ではない事も理解している。
今からやろうとしているのは一種の裏技のような物。

そうそう成功はしないだろうし、

途中で撃墜される確率の方が高いだろう。

しかし、それしか手段は思い浮かばない。

「お前らにもっと良い案が有るんだったら

これを実行しなくても良いんだがな」

「いえ・・・もう議論している時間ありません。

全体の損傷率が85%を超えました」

「くっ・・・なら、早速作戦開始だ」

実行する前に墜とされるなんて洒落にならんからな。

「名前どうする」

ほら、オペレーション〇〇みたいな」

名称なんてそんな物
作戦内容からいってふさわしいのは――

「『オペレーションカミカゼ』に決まってるだろ」
「それもそうだね♪」

まっ、どんな内容かは言わねえぞ。
どうせすぐに決行するし、
名前から想像した通りの事しかやらないからな。

「それじゃ全軍俺の周りに集まれ！」

俺の指示でこちらの全戦力が
戦艦の周りに集まった。

それを好機と見たのか

更に激しい攻撃をしてくるコンピ研。

だが、俺達の目標は部長氏の戦艦だけ。

そちらに構ってる時間も余裕もない。

「目標はほぼ無傷だ。

だから損傷率の高い部隊から

済まないが逝ってもらおう」

俺達は満身創痍と言うがふさわしい状態。

全体の損傷率は先ほども古泉が言った通り85%

各部隊の損傷率は一番酷い朝比奈さんが97%

次いでハルヒの95%

そして長門の93%、古泉の92%

最後に俺の87%だ。

この順番で撃墜されてく事になる。

「お前ら四人で最低でも半分は削る必要がある。
出来るか？」

「もちろんだよ☆」

「う、うん。

なるべく部長さんの艦隊にも攻撃すれば・・・」

「何とかなるかも知れませんね」

「では、号令をお願いします。団長様」

本当に、良い奴らだ。

こんな俺に付いてきてくれるなんてな。

「オーケー。」

それじゃ、『オペレーションカミカゼ』発動!!」

だから、このままやられっぱなしでたまるか!!」

「目標は総大将の戦艦『ディエス・イエラ』！
そこまでの突破口を開け!!」

「「「了解!!」「」」」

全軍で部長氏の戦艦へと突き進む。

もちろん途中にも敵部隊の攻撃が止む事は無い。

だが、先ほどと違い無理矢理にでも進んでいるからか、先ほどよりも中たっていない。

「目標、射程範囲内に入りました!」

「戦闘機だったらこの距離でもいけるよ!!」

これで第一段階はクリア。

次は目標の損傷率を半分にまで減らす!

「ハルヒ! 朝比奈さん!

二人から・・・」

「ええ、わかっています。

一足お先にいかせてもらいますね」

「が、頑張るよ!」

「長門と古泉は援護射撃!

二人をなんとかしてでも目標まで届かせろ!!」

「オツケ☆」

「ええ。お二人の邪魔はさせません」

本当はこんな事はしたくないし言いたくないが、
自業自得か。

俺がここまで戦局を悪化させてしまったんだからな。
こんな作戦しか取れないほどに・・・

「『ハルヒ』隊！及び『みくる』隊！突撃！！」

「了解！！」

ジェットの炎であろう

青い光の尾を引いて部長氏の戦艦に突撃していく二機。
それについて行く機体は二つの部隊を合わせても
片手で数えるほどしかない。

その数少ない機体も敵戦艦に近づくにつれ墜ちていく。

「はああああ！！」

だが二人は止まらない。

最高速のまま目標に突き進んでいく。

そしてその速度のまま

ハルヒの、少し遅れて朝比奈さんの戦闘機が
戦艦の左側面に当たり爆発した。

「っ！！・・・」

やっぱり見てて辛い物があるな・・・

「長門、目標の損傷率は？」

「良い所の中たったみたいで

30%減らせたよ！」

「よし！成功か！！」

思った通り自爆でも相手にダメージを与えられるようだ。

「続いて長門！古泉！」

「いつでもいいよ！！」

「わたしも同じく

いつでも構いません」

戦術機には自機を犠牲にして周囲の敵に大打撃を与える

自爆システムと言う物が搭載されている。

なので、長門と古泉は目標に近づいた後

自爆システムを起動すると言うやり方を取る。

「途中で撃墜されるなよ？」

「ふっふん

二人で行くからダイジョーブだよ！

ねっ、古泉さん☆」

「ええ、そうですね。

力を合わせて頑張りましょう」

この調子だったら本当に大丈夫そうだな。

「それじゃ、

『ユキリン』隊！及び『イツキ』隊！突撃！！」

「了解！！」

二機の戦術機が目標に向かう。
その後をそれぞれの隊機が追っていく。

「・・・さて、俺も速度上げて進むか」

何故かという、孤立した俺に部長氏以外の
コンピ研メンバーが俺に集中砲火を開始し始めたからだ。

まあ、当然か。

総大将が手薄になったんだからな。

「長門さん！右から来てます！！」

「ありがとう！！」

だから早くたどり着いてくれ！
近づきると爆発に巻き込まれるから
今以上の速度が出せない！！

「キョンさん！配置に就きました」

「わたしも就いたよ！！」

その報告を聞きマップを見ると
敵艦の右側後方に長門の、左側前方に古泉の
マーカ―が存在していた。

「よしっ！」

なら二人ともシステム起動!!」

「了解!!」」

「・・・悪いな・・・」

「そう思ってるんだったら絶対にキョン君も成功させてね」

「わかってるよ」

発案者の俺だけ失敗なんて

とてもじゃないが目も当てられないからな。

「ふふ・・・では、起動しますね」

「あっ、だったら同時にやろうよ」

「ええ、良いですよ」

「それじゃ・・・」

「「せーのっ!」」

起動させたであろうと同時に

大きな爆発音と橙色の球体が二つ現れた。

爆発が収まった後マップを見ると、

二人を示すマーカーが消えていた。

周囲にいた無数の敵機と共に・・・

「・・・敵戦艦損傷率74%。
十分すぎるな戦果だな・・・」

第二条件もクリア。

後は仕上げだけ。

さて、こんなにお膳立てして貰ったんだ、
俺も逝くかな。

「これより我が艦は敵総大将『ディエス・イエラ』に突撃する！
！」

この戦艦が出せる限界の速度で突き進んでいく。
全速力でも戦闘機はおろか戦術機にも劣るほど遅い。
が、これは『戦艦』だ！質量がある！！
相手の損傷率を26%削る事などたやすいぜ！！

「うおおおおお！！」

後ろから攻撃がとんでくる。
いくつかが当たり自艦の損傷率が増えていく。

だけどそんなの関係ねえ！
俺は前に突き進むだけだ！！

目標まで後100m・・・60m・・・20m！！

「くらえええええ！！」

そして敵艦に激突した。

《 D r a w 》

まっ、当然ながら結果は引き分け。
俺達としては一矢を報いただけで十分さ。

「なあ、お前ら」

「まゝねゝ☆」

「さ、最初からそう言う作戦だったし・・・」

「ふふふっ」

「これでも十分な結果ですね」

「じゃ、今日はこのまま解散な」

「はゝい！」

「「わかりました」」

さて、俺は隣に顔出してから帰るか。

「今回は本当にありがとう。

おかげで良いデータが取れたよ」

「・・・あんな戦いでも良かったんですか？」

「もちろんさ。

プログラム上出来る事なんだからね」

どうやら喜んで貰えたらしい。

「そうだ、大会が終わった後来てくれないか。
完成品を贈呈しようじゃないか」

「良いんですか？」

「ああ、もちろんだとも。

ふむ・・・そうだな・・・

だったら、コントローラーもそのままあげよう。
元々は余っていた物だしね」

「ど、どうもありがとうございます」

随分と気前良いな。

「その代わり・・・」

ん？・・・ああ、もしかして。

「もちろん協力は惜しみませんよ。

隣にいますから、何時でも声を掛けて下さい」

「ああ、その時はよろしく頼むよ」

うん、やっぱり良い人だ。

射手座の日 終曲（フィナーレ）（後書き）

海「いやゝ終わったね」

キ「だな。」

で？次はどうするんだ？」

海「そりゃ、二・三話くらい間に挟んだ後・・・」

キ「なんだ？」

海「『消失編』だ！！」

キ「あー・・・もうそこまで来たのか」

海「うん。早いよね」

キ「でもないだろ？」

もうすぐ一年だぜこの小説」

海「それもそっか」

キ「だが、消失か・・・」

海「やっぱり感慨深い？」

キ「ん・・・まあな」

海「ふん・・・」

まつ、なるべく早く書き上げるよ」

キ「そうか」

海「えーっと、今回もご覧頂きありがとうございました。

感想・ご意見などがありましたら下さい」

キ「作者のやる気が二乗されます・・・

って、『倍』じゃなく『乗』なんだな」

海「では、また次回も・・・」

海・キ「よろしくお願いします」

日常編？（前書き）

| Error |

| Error |

| Error |

| Error |

•
•
•
•

•
•
•

•
•

•

|
E
n
t
e
r
|

日常編？

とある日曜日。

わたし——長門有希——は駅前にある喫茶店にいる。
しかも一人ではなく、三人で。

「では、これより第32回！

北高・光陽園学院合同文芸部のミーティングを始めるわよ！！」

大きな声でわたし達がここに居る理由を話したのが涼宮さん。
光陽院学院の生徒でいつも元気にわたし達を引っ張ってくれる。
・・・部長はわたしなのに・・・うう・・・

「解りましたから席について下さい。

周りのお客さんの迷惑です」

この涼宮さんに注意した人は朝倉さん。
同じ北高に通っていて住んでいるマンションも同じ。
たまに料理をお裾分けしてくれる。
とても色んな事で頼れる人。

この二人にわたしを加えた三人は
涼宮さんも言った通り、文芸部部員と言う共通点を持っている。

後もう一人部員がいるんだけど・・・

「・・・涼宮さん」

「どうかしたの？有希？」

「古泉君は・・・」

「ん？・・・ああ、古泉君は用事があった
少し遅れるって言ってたわ。」

まったく、この集まりよりも大事なのかしらね！」

「まあまあ、落ち着いて下さい。涼宮さん」

「なによ、涼子。」

あたしはいつでも冷静よ？」

「では、そう言う事にしておきますね」

「むう・・・信じてないわね？」

「ふふっ」

「・・・っと、噂をすれば来たわね」

涼宮さんがお店の外を見ながら言う。

その方向にわたしも目を向けると

少し慌てた様子で古泉君が走ってくるのが見えた。

あっ・・・転んだ・・・

「はぁ・・・はぁ・・・すみません。

長らくお待たせしてしまったようですね」

「まったくね！

事前連絡が無かったら罰金にする所だったわよ！！」

「お心遣い感謝いたします」

息切れをしながらわたし達のテーブルに古泉君が来た。

涼宮さんと同じ光陽院学院の男子生徒。

笑顔以外の表情を見る事が少ない。

「じゃっ、全員集まった所で今日の議題を発表するわよ！」

涼宮さんは毎回『議題』を上げるけど、

最終的には関係が無くなってただのお茶会になる。

・・・古泉君の奢りで。

「そうね・・・それじゃあ・・・

『朝比奈さん勧誘作戦会議』なんてどう？」

「・・・あのね涼宮さん・・・
それ、毎回のように言ってるじゃない。
そろそろ諦めたらどうなの？」

涼宮さんが言う朝比奈さんとは、
北高の三年生である朝比奈みくるさん。
学校内にファンクラブがあるほど人気。

「軽い冗談よ、冗談。
そんな怖い顔しないでよ涼子」

・・・あの朝倉さんは涼宮さんでも怖いみたい。

「ハア・・・
あなたいつもよりおかしくない？
普段よりも落ち着きが無いって言うか・・・」

そう言われればそうかも。

「・・・ほらそろそろ『あの日』じゃない？
だから気落ちしちゃって、さ・・・」

「っ！・・・」

「・・・あれからもう、一年も経つのですね。
本当に、時が経つのは早いです」

そうだ・・・もうすぐ『あの日』・・・

『彼』が消えた日・・・

わたし達の記憶以外に何一つ残すことなく消えてしまった日・・・

どうしてわたしと涼宮さん、古泉君だけに

記憶が残っているのか解らない・・・

でも、安堵の気持ちだつてある。

わたし達三人が憶えているかぎり『彼』がここに居た証になるから。

「って、涼子は何の事かわからないか・・・

・・・ごめん。聞き流して」

「いえ、いいけど・・・」

朝倉さんは『彼』の事を『憶えてない』。

いや、『最初から知らない』。

『あの三日間』ではクラスメイトだったらしいけど、
朝倉さんのクラスには・・・この町には・・・

この世界には『彼』は最初から存在していない事になってる。

だから朝倉さんが『彼』の事を知らなくても当然。

・・・当然だけど・・・悲しい・・・

「「「「「「「」」」」」」」」

「・・・ねえ」

「何？」

「もしかしてこの集まりを作った事に関係するのかしら？」

「・・・ええ、そうね。」

「そうとも考えられるわ」

確かに、『彼』がいなかったらこの部活動は無かった。

『彼』と言う接点があったから涼宮さんと古泉君に会えた。
無かったら一生出会う事は無かったのかもしれない。

「『あいつ』に会えなかったらあたしは今頃

この世界に興味を持てないまま生きてたかもしれないわね」

「僕も『彼』とはもっと話してみたかったですね。

もしかしたら、友達になれていたのかもしれないし」

「ふうん・・・そんな人がいたんだ」

・・・今あなたは何をしているの？

あなたの世界の涼宮さんに振り回されてるの？

「おい、有希？」

・・・だめね、意識がどっかに飛んじゃってるわ」

「ふふっ、『彼』の事を思い出しているのではないでしょうか」

「ええ！？長門さんに好きな人が！？
わたし何も聞いてないわよ！？」

楽しい日々を送ってる？

大きな怪我とかしてない？

そっちのわたしと仲良くしてる？

「ちよっ！

落ち着いて涼子！！」

「・・・はっ！

ご、ごめんなさい・・・わたしったらつい」

「別に起こってる訳じゃないから良いわ」

出来る事ならあなたと会いたい・・・

「・・・あなたは今何してるの？
たまには会いに来なさいよね——」

本当の名も知らない『あなた』に・・・

「——『ジョン』・・・」

日常編？（後書き）

・

・

・

・

Error

Error

Error

Error

To
be
con-
tin-
ued.
.

消失編 プロローグ（前書き）

| Error |

| Error |

| Error |

| Error |

•
•
•
•

•
•
•

•
•

•

|
E
n
t
e
r
..
A
n
o
t
h
e
r

W
o
r
l
d

|

消失編 プロローグ

十二月に入ってもう三週間。

日に日に寒さを増していく町の中を

あたしと有希の二人は進んでいく。

「あの…ありがとう」

「ん？…ああ、別に良いわ。

あたしも基本的には放課後って暇だから」

有希と会ったのはホントに偶然。

たまたま下校時刻が一致しただけ。

一緒に帰ろうと声を掛けたのも単なる気まぐれ。

「…友達少ないの？」

「ぐう！！」

有希…あんた偶にさらっと酷い事言うわよね……」

決して！間違っても！！光陽院に友達がない訳では――

って、あれ？…本当にそう？

十分休みは…次の準備してるだけね。

昼休みに屋上で話してるのは……古泉君ね。

登下校の時一緒にいるのは……古泉君だけね。

……あれ？……もしかしくなくてもあたし友達居ない？

あっ、訂正……古泉君しか居ない？

えっ?……あたしって結構孤独な人?

学校外の有希達をカウントに入れても……友達三人だけ?

「予想以上に酷い!？」

「っ!？」

「あっ、ごめん有希。驚かせちゃった？」

「…大丈夫」

そんな目も口も大きく開けて

いかにも『わたし驚いてますよ』的な顔をされてもね、
全くと言っていいほど説得力がないわよ。

「……まっ、そんなの気にするほどでもないわ。

今はあたしの友達の少なさについての方が大事よ。
何でこんなに少ないのかしら？」

こんな才色兼備なあたしの何処に不満があるっての？

「あまり人に話しかけないから？」

「……そうね……自分でも驚くほど納得出来たわ」

やっぱり人付き合いに会話は重要なものね。

そりゃ友達が出来ない訳だわ。

で、でも、言い訳させて！

その辺にいるくだらない人間と話したって
何一つ面白く無いじゃない!!
普通そう思うでしょ!?

……って、こんな風だから駄目なのね……反省……。

「はあ…これじゃあいつに顔向け出来ないわね」

「……あの人に？」

「まあね。」

ジョンはあたしにとって、

……憧れで良いのかな?……みたいな物だし」

初めて会った時、あたしの事を肯定してくれた人。
そして再会した時、狭まった視野を一気に広げてくれた人。

あの七夕の夜と去年の今頃に見た姿。

あいつと同年になったのに並んだとは思えない。
あたしの中ではとても大きな存在のまま。

その事を去年再確認したわ。

だから……『憧れ』って言葉が一番近いはず。

決して…あの感情なんかじゃ……

「会いたい？」

「…そりゃあ、出来る事ならね。
有希だってそうでしょ？」

「うん」

あゝあ。

あたしにも…願望実現能力だっけ？…があれば良かったのに。
ずるいわよ！ジョンの世界のあたし！！

その力少しだけで良いから分けなさいよ！！

そうすればあいつに会えるし。

……も、もしかしたらだけど、

と、ととと友達にだってなってくれるかもしれないじゃない。

「あゝ…もう！！」

去年みたいにくらっとこっちに来なさいよ！！」

「す、涼宮さん。落ち着いて…」

この際、神様でも悪魔でもいいから力を貸しなさい！！
そしてあいつをこっちの世界に連れてきなさい！！

「彼に…会いたい？」

えっ、ゆ…き…？

声を聞いて後ろを向くとそこには、無表情で眼鏡が無いけど服装も背格好も全く同じな有希が微動だにせず存在していた。

なんで？おかしくない？

だって有希はあたしの隣で……

「……………」

絶句と呼ぶに相応しい状況になっている。

まあ…自分そっくりの存在が目の前にいて

あたし達をじっと見てるんだから仕方ないとは思うけど……

「……って待って、

あなた、もしかしてジョンの言っていた……」

「……………」

あたしの問いかけに正面の『長門有希』は

ほんの数ミリしか動いてないように見えたけど、

確かに首を縦に動かした。

「へへえ……あんたが…

それで？あたし達に何の用？」

「彼に……あなたがジョンと読んでいる彼に会いたい？」

「…………ええ！もちろんよ！！」

「そう…なら…」

ふふっ。

どうやらあたしの願いを叶えてくれるのは、
神様でも悪魔でも未来人でも超能力者でもあたし自身でもなく――

「わたしが何とかする」

――宇宙人だったみたいね。

消失編 プロローグ（後書き）

海「はい！」

と言う事で『消失編』始まります！！」

長「…わく…」

キ「長門、無理して合わせなくて良いんだぞ？
そして久しぶりだな。

『ミステリックサイン』以来か？」

長「そう…」

海「そう言うキョンも二話ぶりだね」

キ「まあ、本編には次話からだろう？」

海「だね。

…そう言えばさく」

キ「ん？どうした？」

海「『消失編』って再構成メンバーは
キョン以外出番が無いんだよね。
次話と最終話にしか」

キ「あー…なんと言うか…」

長「ご愁傷様」

海「では、感想などあれば下さい。
今後の励みとなります」

キ「今回はこの辺で締めるか」

長「……」こくっ

キ「じゃっ……これからも……」

海・キ・長「」「よろしくお願いします」「」

消失編 第一章（前書き）

ハ「『消失編』ですか…」

古「まあ、わたしたちには……」

み「あまり関係無いですからね」

長「観客って事で良いんじゃない？」

古「それでよろしいかと。」

では、『涼宮ハルヒの再構成 消失編』

四人「」「」「始まります!!」「」「」

消失編 第一章

「今年も寒いな…」

十二月に入り早三週間。

日に日に気温を下げていく町の中を歩く。
この分じゃ、近いうちに雪降るな……

「よっ、キヨン。」

なに朝っぱらからしけた面してんだ？」

「…谷口か」

相も変わらず騒がしい奴だ。

風邪でも引いて大人しくなりやがれ。

「ちよっ！何でそんなに恨みがましい目を！？」

「うるさい。ちよっと黙れ」

「ひどっ！！」

「…ったく、今日のお前はいつも以上に鬱陶しいな。
何か良い事でも有ったか？」

「おお！よくぞ聞いてくれた！！
実はな———」

……ん？

この会話、少し憶えてるぞ。
確かあん時は谷口が……

「聞いて驚け！なんと！！！」

こうY「光陽園女子とデートだったか？」……何で知ってんだ
よ！？」

「風の噂だ」

「……まあ、そう言う事にしといてやる。

ともかく、俺はクリスマススイブに予約が入ってんだ。

しかもデートで相手は光陽園のお嬢様！

なかなか良いと思わないか？」

「そうだな……」

しまった……クリスマスの事が頭からすっぽ抜けてたな。

谷口の予定には一切の興味は無いが、

聖夜を思い出させてくれた事だけは感謝しよう。

「んで、お前らは何かやるのか？」

「……何も考えて無いな。

だが、そうだな……鍋パーティーでもやるか」

「ははっ！なんだそりゃ」

笑うな。

アレでも結構楽しかったんだぞ。

「はあ…」

「んだよ、溜息なんかついて」

「……気にするな」

それにしても、もうそんな時期だったんだな。

『あの事件』から俺の主観で一年か……早いモンだ。

「……ん？」

おいキョン、靴紐切れてんぞ」

「まじか？」

谷口に言われて足下を見ると確かに
右足の靴の紐が切れていた。

「……嫌な予感がするんだが」

「……まあ、気にすんな……」

はあ……やれやれ。

「――と、言う事が朝にあってな」

「新しい靴紐を付けていると」

少し時間を飛ばして放課後。

場所は何時を通りSOS団部屋。

「でも、鍋パーティーか」

「とっても楽しそうだね」

「う、うん。わたしもそう思う」

とりあえずイブの事を話してみた所

メンバー全員の賛同を得る事が出来たので、正式にパーティーを開催する事が決定した。

「そう言えば、キョン君。

何鍋にするか決まってるんですか？」

「いえ、まだですね」

一般的に考えればスキ焼き、カニ鍋、寄せ鍋、闇鍋って所か？

って、あれ？……闇鍋は一般的なのか？

「あつ、だったらカニが良いな☆」

「……お前だったらカニ食っても黙らなそうだな」

「あはは……あり得そうですね」

「だろ？」

「むー、キョン君も古泉さんもひどーい！」

「でも、その光景が簡単に目に浮かびますね」

「朝比奈さんまで！？」

涼宮さんーみんながいじめるよおー」

「ごっ……ごめんな……ふっ……ふふっ」

「ガーン！！」

擬音を口で言う程ショックだったのか？

「……ううー、みんな、わーらーうーなー！！」

「悪かったって。……くくっ」

「また笑ったあ！？」

なんだかキョン君が冷たいよー……」

さて、長門を弄り倒したし、
今日はこの辺で解散しとくか？

「ですね。」

もう良い時間ですし」

「んじゃ、そうするか。
忘れ物無いようにな」

「では、お疲れ様でした」

「遊んでただけだと思うけど……」

それは何時もの事だろうハルヒ。

「…キョン君のバカ…キョン君のアフォ…キョン君のフラクラ…」

お前はいい加減戻ってこい、長門。

「じゃあ、また明日ねキョン君」

「ああ、気をつけて帰れよ」

「うん！」

ハルヒが部室を出て行った事により俺は一人になった。
一応、団長だからな。戸締まりやら何やらは俺の仕事だ。

「窓の鍵は良し。ガスの元栓も閉まってる。

パソコンの電源も落ちてるな」

最初の頃こそ慣れない作業だったが、
今では手慣れたもんだ。

「で、後は電気消して外に——」

カサッ

「——ん？」

何かが制服のポケットの中にある。
だが、此処に何かを入れた憶えはない。

取り出してみると四つ折りにされた紙のようだ。

いつの間に誰がこんな物を……

とりあえず紙を開いて

中に書いてある文に目を通す。

『団活終了後、屋上にて待つ』

……これは……あっちの長門か？

何かまた厄介事が起こる予感がひしひしとしてくる。

「はあ、やれやれ」

何はともあれ……行ってみるか。

キィ

屋上へ出る扉を開けるとそこには、

冬は空気が澄んでいるためかとても綺麗に見える星空を背に
直立不動で予想通りの人物が、並行世界の長門が佇んでいた。

「よお、今回はどんな用事だ？」

「……」

長門はじつとこちらを見たまま動かない。

いや、あれは口ごもっているんだな。

そんなに言い出しづらい事なのか？

「…貴方に協力して欲しい事がある」

協力？俺がか？

「……」

「まあ、何処まで力なれるかわからんが、
お前からの頼みを断る事はしねえよ」

「…ありがとう」

「それで？」

俺は何をすれば良いんだ？」

「行って欲しい世界がある」

「そうか…って、『世界』？」

「どう言う事だ？」

「……貴方の主観で去年の十二月十八日から二十一日の三日間
わたしが作り出した世界から派生した世界」

「ちょっと待て。」

あの世界は作り出した直後のお前を正気に戻したから
最初から存在していないことになったんじゃないのか？」

「だから派生した世界と言う表現をした」

「……つまり……」

「貴方が体験した世界のみ完全に消えずに
そのまま並行世界と言う形で今も存在している」

長門的には噛み砕いて説明してくれたのだろうが、
それでも俺の脳のキャパシティーを軽く超える不明さだ。

「無理に理解しないでも良い」

「……そうか。」

で、俺はその世界に行くだけで良いのか？」

「そう」

「理由を聞いても良いか？」

「……」

はぁ…それは言えないのか……

だが、思い当たる節も……一つだけ有るが。

「まさか、罪滅ぼしみたいなもんか？」

あの世界の長門への。

「…似たような物」

「そうか」

「…そう」

だいぶ人間らしくなったな、長門。

「所で、その世界に行くのは良いんだが、
どうして俺なんだ？」

お前の世界の『俺』だって良いだろ？」

「…今、彼は手が離せない状況になっている。
だから同じ存在である貴方に協力を仰いだ」

「はぁ…またハルヒ関連か？」

「……」

沈黙は肯定と受け取るぞ。

どんな状況になってるか知らんが、
頑張れよ『俺』。応援はしといてやる。

「…今日の午前零時。

貴方をあの世界に送る」

「了解だ」

「期間はあの時と同じく三日間。

その間こちらの世界では、

貴方は風邪で寝込んでいる事にする」

「そんな所まですまないな」

「…この要求はわたしのわがまま。

だからバックアップするのは当然の事」

「それでもだ」

「…いい」

この反応は照れ隠しだな。

おそらくは、だが。

「…今日はこの辺にした方が良い」

「だな。もう完全下校はとっくに過ぎてる」

「送っていく」

「いや、悪いからいい。」

「自転車だとすぐ着くしな」

「……」

「だからな……」

「……」

「その……」

「……」

「………はあ、さっさと行くぞ」

だから無言の圧力はやめてくれ。

「……乗せて」

「何にだよ」

「自転車の荷台」

「ん？ ああ、そう言う事か」

「良い？」

「別に構わないが」

「…そう」

さて、確か裏門に抜け道があったな。

警備員に見つかからないうちに早く出て行こう。

消失編 第一章（後書き）

キ「次回からあの世界か」

長「楽しみ？」

キ「まあ…少しは」

海「おっ！正直だねー少年」

キ「うるせえ。

ってかお前もまだ未成年だろ」

海「まあーねー。

……そう言う訳で『消失編』は次回から本格的に動き始めます」

長「わたしじゃないわたしが出る。

彼女の事もよろしく」

キ「まあ、同姓同名の人物って感じだよな。

区別のために『消失長門』なんて呼ばれてるが」

海「じゃあ、この小説の長門は…『再構成長門』？」

キ「長っ！！」

海「だな……」

長「呼びづらい」

海「と言った所で今回の後書きも終わりです」

キ「ばっさり話を変えたな……」

海「感想などが有れば下さると嬉しいです」

長「誤字脱字の指摘も歓迎」

海「では、次回もまた——」

海・キ・長「」「よろしくお願いします」「」

第二章 前編（前書き）

海 「『消失編』はシリアスにしなきゃいけないから大変だ〜」

キ 「お前の文才が無いだけだろ？」

海 「まあ、否定は出来ないよね」

キ 「はあ……やれやれ」

第二章 前編

「キョン君、朝だよー！」

……妹の声がする。

さっさと起きないと俺が被害に遭うであろう事は容易に想像出来る。

「起きないと、「起きたからやめなさい」…ぶー」

「そんなに頬を膨らませて怖くないぞ」

「えへへ」

早く下に来てね。ご飯出来てるよー」

そう言ってシャミセンを頭に乗せたまま駆け足で部屋を出て行く我が妹。埃がたつから走るなよ。

「ったく……」

さて、頭も動くようになってきた。まずは現状把握からだな。

長門の言う事を信じる限り、ここは『あの世界』なのだろう。

ブレザーの内ポケットを探り、学生証を取り出す。

そこには見慣れない、撮った覚えのない俺の写真が貼られていた。しかも、学年が二学年になっている。

「……一年後って事なのか？」

こう言う大事な事はちゃんと説明してくれよ。

ん？ポケットにまだ何か入ってる。

「メモ用紙？」

また長門からなのか？」

可能性としては一番高いだろう。

とりあえず目を通し「キョン君！ご・は・ん！………後にして
おこう。」

「早く来ないと片付けるよっってお母さんが」

「へいへい。今行くよ」

登校中にでも読むか。

時は跳び何時もの坂道。

長門からであろうメモを読みながら
のんびりと歩いている。

「……なるほど、な」

俺なりに書かれている内容をまとめると、

？俺の想像通り、ここは『あの世界』の一年後である。

？一年分の知識入れられたので勉強は何とかなりそう。

？『この世界』には俺は居なかった。

今は無理矢理存在をねじ込んでいる。
なので三日が限界らしい。

？しかし、この世界の長門・ハルヒ・古泉は
俺の事を憶えていた。……深く関わったからか？

？上記の三人には必ず会う事。

？最後に、長門でも予期せぬ
何らかのバグが発生してしまう確率が高いらしい。

とまあ、こんな感じの事が書いてあった。

「一年分の知識はありがたいな。

ただでさえ成績があまり良くないんだ。

何も無かったら一年後の授業に付いてなんて行けないぜ」

本当に助かった。

などと考えに耽っていたら、

後ろから見知った顔に話しかけられた。

「ん？よお、キョン。

風邪はもう良いのかよ」

「…ああ、谷口か」

風邪とはどう言う事だ？

……まあ、あらかたそう言う事になっていたとかだろう。
話を合わせた方が良いよな。

「ああ、この通り大丈夫だ。

要らん心配かけたな」

「別に心配なんてしてねえよ」

「へー、嘘は良くないんじゃない？

キョンが居なくてつまらないって言ってたじゃん」

「く、国木田！？」

お前いつの間に！！」

「おはようキョン。

健康そうで何よりだよ」

いつの間にか国木田が話に参加していた。

しかし、なんで俺と谷口の間にいるんだ？

狭いだろ、そこ。

「サンキュー。

お前も風邪引くなよ」

「あはは。気をつけるよ」

「お前ら、俺を無視すんじゃないやねえ！」

「うるさい、谷口」

「ひどっ！！」

変わらないな……こいつらは。

「ほら、さっさと行くぞ。

遅刻なんぞしたくないからな」

「そうだね。

谷口、おいでくよ」

「ちょっ！待てよ！！」

「……寒っ」

「真顔で引くなー！！」

「……貴方……誰？」

「は？」

朝のHRが始まる少し前。

俺は自分の席に着きボーっとしていると
朝倉が教室に入ってきた。

そして前の席の俺を見るなり、戸惑いと驚きが入り交じった表情を浮かべ質問してきた。

「何を言ってるの朝倉さん。
キヨンはキヨンだよ」

「おい、それじゃ伝わらんだろ。
そこは本名で呼ぶ所だ」

「……高橋君は？」

「そんな奴、知らんが」

「だって、谷口君!!」

わたしの前の席は高橋君だったわよね!？」

「いや、去年からずっとキヨンだったと思うぜ」

「…そんなはず…何で？」

「大丈夫? 朝倉さん。
体調が悪いなら保健室に行った方が」

「……そうね、HRが終わったら行ってみるわ」

この反応を見るに、朝倉は俺の事を知らないか。
あの時の俺みたいだな。
これが長門の書いたバグなのか?

「……ねえ」

「なんだ？」

「保健室…付いてきてくれない？」

つまり…事情を説明しろ、って事か。

「ああ、良いぜ。

もしかしたら一限サボれるかもしれないしな」

「むっ、ちゃんと授業は受けなきゃだめよ。

えっと…キヨン…君？」

「そんな事わかってるさ。

冗談だ、冗談」

「なら良いけど」

「あはは」

学級委員長の前で堂々とサボるなんて言えるのキヨンぐらいだよね」

「まったくだな。

俺だったら怖くて言えないぜ…文具飛んでくるし」

ブオン

「ぬお!!」

な、なんだ!?

目の前を何が通った!?

「さ、三角定規……」

壁に刺さってるぞ、おい。

「ふふふ…谷口君。

最後にぼそつと何を言ったのかな?」

今の朝倉はあの時並にヤバイ。

口元は笑みを浮かべているが目は単色で

何らかのオーラの的な物を全身に纏っている。

手に持っているのはナイフではなくホツチキスだが
それでも十二分に怖いぞ…朝倉。

「いえいえいえ!何も言っていないです朝倉様!」

「そお?なら良いわ」

よし、朝倉は絶対に怒らせないようにしよう。

「おゝい、お前ら席に着け」

担任岡部が入ってきた。

いつの間にチャイム鳴ったんだ?

「それじゃ、今日の予定から連絡するぞ——」

さて、俺はこの朝のHRはとても退屈な時間だと思っている。
君たちはどうだろうか。

そんな退屈な時間を潰す方法と言えば……

「眠るか」

どうせこの後すぐに疲れるような事が起きるんだ、
今のうちに英気を養っておいた方がいいだろうさ。

第二章 前編（後書き）

キ「後編に続く。

次も見てください」

第二章 後編（前書き）

海「後編です」

第二章 後編

コツコツコツ

「……………」

「……………」

朝のHRが終わり、
一限が始まるまでの十分ほどの余裕を使い
朝倉と共に保健室へと向かう。

「……………ねえ」

「ん？…なんだ？」

「……………いえ…何でもないわ」

「そうか…」

「ええ……………」

「……………」

「……………」

「……………はあ」

この場を文章で表したら、

間違はなく三点リーダーが乱立しているだろうな。
やれやれ。

永遠に続くと思われていたそんな空気も
保健室に入る事によって取り払われた。

「先生が居ないのは都合が良いわ」

我が校の保健室には滅多に人がいない。
一応、専属の先生は存在するのだが
大抵は職員室にいるらしい。

「そうだな。」

それで、何を聞きたいんだ？」

「全部よ、全部。」

貴方は何者なのか、何故ここに居るのか、

高橋君はどうなったのか、聞きたい事は沢山あるわ」

「だろうな」

「だから始めに、一番重要な質問からするわ。
貴方は何なの？」

「そうだな……」

まずは自己紹介からするか――」

友好的に物事を進めたいなら名乗りを上げる事がもっとも重要だ。
……と言っていたからな。誰の言葉かは忘れたが。

「ふーん……だからキョン君ね」

「ああ、そう言う事だ。

少し前まではそのあだ名は嫌だったんだが。

まあ、この世界では『ジョン』とも名乗ってるぜ」

「わたしはどっちで呼べば良いのかしら」

「別に、お前の好きなほうで。

俺的にはジョンの方が良いけどな」

「なら、『ジョン』と呼ばせてもらおうわね」

「んで、俺が何者か、つてのは……あー……そうだな、
簡単に言えば異世界人って所だな」

「……ええ！？ 異世界人！？」

まあ……当然の反応だな。

「いやっ！でも！！……ええ！？」

「少し落ち着け」

「出来る訳無いでしょう！？」

……でも、こんな状況になってる以上
一笑に付せる話では無いわね」

「結構、柔軟に考えられるんだな」

「まあ……友達付き合いの延長線上で……」

だが、朝倉が堅苦しい考え方をする奴じゃなくて良かったぜ。
説明がある程度楽になりそうだ。こっちのハルヒと話した時ぐらい
に。

「他に聞きたい事は？」

「なら、なんでここに居るのか聞いても良いかしら」

「友達からの頼まれ事だ。

ここで何をすれば良いのかまでは聞いて無かったが、
会わなきゃならん奴が三人ほどいるな」

「そう……」

「なら次に、高橋君はどうなったの？」

「正直、俺にその辺の事は解らない。

だがまあ、俺が消えれば元に戻ると思うぜ」

その辺は長門に一任だからな、

迂闊な事は言えないが大丈夫だろう。

……多分、きっと、Maybe…

「……大まかな事情はわかったわ。

聞きたい事も聞いたし」

「なら、そろそろ教室戻らないか？

一限遅れるぞ」

「そうね、そうしましょう」

「そう言えば、今日の放課後開いてるか？」

「え、ええ。何も無いけど……」

「じゃあ、ちょっと付き合ってくれ」

長い間会ってなかった人と会うのって意外と勇気いるよな。

だから長門と親しいであろう朝倉を道連れにして行こうと言う腹だ。

おい、そこ！へたれ言うな！！

「…って、本気で時間無いじゃない!!」

「なに!!」

時計を見る。

一限開始まで残り二分。

あっ……今、残り一分になった。

「は、走るぞ朝倉!!」

「廊下は走らない!!」

「んな事言ってる場合か!!」

「そ、それもそうね。」

じゃあ、学級委員長公認で……」

「ああ……」

「「全速力でダッシュ!!」」

……の皆無なく、結局二人そろって遅刻した。

第二章 後編（後書き）

朝倉（以後 朝）「わたしが遅刻するなんて……不覚……」

キ「何かすまん」

海「さて次は長門と、上手くいけばハルヒも出したいな」

キ「古泉は？」

海「……考えておく」

キ「そ、そうか……」

朝「さて、次回予告しましょうか」

キ「おっ、立ち直ったか」

朝「次回、ジョン君とわたしが文芸部に突入」

キ「『ジョン君』……新しい響きだ」

朝「長門さんに変な事したら：フッフ
解ってるわよね、ジョン君」

キ「Yes ma'am!!」

海（こええええ!!）

朝「感想、ご意見、ご要望などお待ちしています。

例えば、元の世界でもわたしを再構成して欲しい、とか」

キ「つまり、『消失編』が終わっても出番が欲しいんだな」

朝「……………うん」

海「えーっと……………で、では、今回はこの辺で。

また次回も——」

海・キ「よろしくお願いします」

朝「……………します」

キ「最後、朝倉スルーしたろ」

海「まあ、前向きに検討させて貰います」

キ「それって、茶を濁す時の言葉だよな」

第三章 前編（前書き）

海 「いよいよだね」

キ 「そうだな……」

朝 「では、前編をどうぞ」

第三章 前編

十二月十八日の十三時七分。

俺は絶体絶命の危機に立たされていた。

「……ああー……長門？」

そろそろ離れてくれると嬉しいんだが」

「……………」

「フフフ……ジョン君？」

どう言う事が説明してくれるわよね？」

どうした事が長門が抱きついたまま微動だにしない。

そして、そんな俺達を黒い笑顔で見る朝倉。

背中に死神を幻視してしまうほどのオーラを纏っている。

「……………」

「……………」

「フフフ………」

とりあえず、今まで通り現実逃避の手段としてここに至るまでの経緯を回想してみようか。

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・

短縮の授業だったおかげで

帰りのHRが十二時ちょい過ぎには終わった。

やはりと言うべきか、成績がクラスでも下位の方の俺ではたとえ知識が頭の中にダウンロードされていても一年先の授業について行くのは予想以上に大変だった。何度授業中に眠りかけた事だっただろう。

だが、眠ってしまうと長門に悪い気がして堪え忍んでいた。長門が授業を受けられるように手を回してくれたんだしな。

「でも、眠いもんは眠いよな」

「あら、ちゃんと受けようとする意志があってわたしは良かったと思っているわよ。

谷口君なんか三限目開始数分でダウンしてたし」

「まあ、俺も人の事言える立場ではないが赤点組の常連だからな。あいつは」

「ジョン君も元の世界で常連だったり？」

「いや、今の所は何とか一歩手前で頑張ってるぞ」

「ふふっ、そうなの」

とても今更だが、朝倉って良い奴なのかもしれんな。

俺にとって朝倉はトラウマの塊だったから

ちゃんと考察した事はなかったが、

才色兼備& a m p;文武両道で社交性も有り一般的な常識・良識も
持っている。

……あれ、完璧じゃないか？

確かこの世界の朝倉って一人暮らしだったよな。

だったら家事全般も出来そうだし。

「……」

「どうしたの？」

わたしの顔に何か付いてる？」

「一家に一人欲しいな」

「えっ？」

「ああ、いや何でもない。

聞き流してくれ」

「え、ええ、そう……」

つと、こいつと話してるのも楽しいが、

そろそろ本題の方に行くか。

「さて、それじゃ約束通り文芸部に付いてきてくれないか？」

「約束って……ああ、保健室の。
良いわよ。」

と言うか、何をしに文芸部に行くの？」

「頼まれ事だよ。」

言ったら？俺がここに居る理由だ」

現在時刻……十三時を過ぎたぐらいか？
ほとんどの生徒が帰宅しようとしている最中、
俺達はその流れに逆らい文芸部の前にいた。

予想はしていたが緊張か罪悪感か
はたまた全く別の何かによって、
ドアノブを握っている右手を回す事が出来ない。

「どうかしたの？」

……良かったらわたしが開ける？」

「……いや、大丈夫だ」

そうだ。何を戸惑う事が有るんだ。

俺は扉を開けて中に入り、

『よう、長門』とでも声をかければ良いだけじゃないか。

そう、それだけで良いんだ……

「よし！行くか！！」

キィ

老朽化により少し軋む音を立てながらドアが開く。

文芸部室の中はSOS団の部室よりは物が無いが、
一年前に見た時よりも色んな物がこの部屋には有った。

あまり使われていなさそうなハンガーラック。

一つ前の型式であろうストープ。

部屋の片隅に有る丸テーブル。その上のボードゲーム。

黒板の上には顔の付いた太陽に見える何か。

そして、この部屋にいた唯一の人間——長門。

窓際に置かれたパイプ椅子に座り

たった今入ってきた俺を驚愕の表情で見つめている。

ははっ、何そんなに驚いてるんだ？

「よう、ながグフウ！！」

俺が声を掛けようとした瞬間、

水月にいつの間にか接近していた長門のタックルをくらった。

「えええ！！ジョン君大丈夫！？

そして、何で長門さんはそんな事！？」

ナイスツツコミだ朝倉。

やっぱりボケだけじゃ成立しない事って沢山あるからな。
例えば今の状況とか。

「……やっど……会えた」

長門……そう言って貰えるのはありがたいんだが……
もう少し優しくできなかったのかなあ！？
マジで数秒間呼吸出来なかったんだが！？

「ごめんなさい」

「別にそこまで怒ってはいないが……

ところで、何時までそうしてるつもりだ？」

「……もう少しだけ」

はあ……まあ、一年ぶりの対面ってやつだ。
こいつの気の済むまで付き合ってやるか。

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

で、そんな事が起こってから約三分。

「……………」

「なあ……そろそろ本当に」

「フフフフ……」

いい加減離れてくれないと黒朝倉に刺されそうなんだが。
ほら、もう右手にはハサミがスタンバイされてる。
筆箱に入るような小さいやつじゃなくて普通サイズの。

「ねえ、ジョン君。

このハサミ買ったばかりなのよ。

だから、何か試し切りする物ないかしら」

本当に誰か……助けて下さい……

第三章 前編（後書き）

朝「後編へ続くわ。

次も見てくださいね。ふふっ」

第三章 後編（前書き）

O
g
s
u
m

C
o
g
i
t
o
,
e
r

—
R
e
n
?
D
e
s
c
a
r
t
e
s
—

第三章 後編

赤く染まる長い下り坂を三つの影が並んで歩いている。

まあ誰とは言わなくてもわかると思うが、俺と長門と朝倉の三人だ。日が落ちる前には帰りたいとの朝倉の要望により

あのカオス空間からの脱出が果たされた。

……言葉を発した当の本人は、まだ若干の黒いオーラが残っているが。

「――でね、長門さんったら最近はその本の事ばかり話して」

「そのくらい面白かったから……つい……」

「おかげ様で読んだ事無いのに内容を憶えちゃったわよ」

「そりゃ、なんつーか……凄いな。」

「そんなに事細かに話したのか？」

「う、うん。」

「面白い本は色んな人に教えたいから」

「でもそれって、

細かい内容まで話したら逆に読む気無くなるんじゃないか？」

「……っ!？」

「それは考えつかなかった」

「おいおい」

「以外と抜けてる所有りますからね。長門さんは」

「……うう」

部屋を出てから三人でずっと話し込んでいるのだが、なかなか話のネタが尽きない。

今の所、長門か朝倉関連の話だけで此処まで来ている。

「ところで、ジョン君の話も聞きたいんだけど良いかしら？
違う世界の話なんてとても気になるわ。

長門さんもそうでしょ？」

「うん……聞いてみたい」

俺の話か……

話す事自体は別に構わんが、

この場合『俺』の話をすれば良いのか？

「ああーっと……そうだな……」

「い、いや、無理にとは言わないわよ。

あくまで出来ればって事だから。

何か話しづらいだったら……」

無駄に朝倉を焦らせてしまってるな。

仕方ない、色々な事を経験してる『俺』の話でも……

「……涼宮さんと古泉さんだ」

ん？ハルヒに古泉だと？

「あつ、本当。」

下校時間が丁度良かったわね。」

長門と朝倉の声を聞き目線を正面に合わせるとそこには
光陽園学院の制服を着た二人組が居た。

一人は、長い黒髪を靡かせ腕組みをし立っている涼宮ハルヒ。
もう一方は、見慣れない黒の学ランを着た古泉一樹。

「あれ？なんであんなに呆けた顔してるのかしら？」

目と鼻の先まで来たってのに
俺を見て綺麗に固まってるな。

ははっ、二人とも長門と同じく変な顔してるな。

「あつ、ごめん。ジョン君は知らないか。」

この二人はね——」

「いや、知ってるぜ。」

長門以外に合わなきゃいけない奴らだからな」

「えっ？」

去年って言い方で良いのかわからんが、
その時は少しの間しか会ってないってのに憶えてくれたんだな。
……って、ハルヒは中1の七夕からだから当然か。

「よお、久しぶr「こん、ばかああああああ！！」ぐほあ！
」！

「ええ！？ 出会い頭のハイキック！？

な、なにやってるの涼宮さん！？

そして、ジョン君大丈夫！？

思いっきり地面に頭ぶつけたように見えたけど！？」

良いツツコミだぜ朝倉。もし資格が有ったら段を取れるレベルだ。
それとハルヒ、スカートでハイキックは……見える……ぞ……

「……悪かったわ」

あの後、意識を覚醒させる事に成功させ
立ち話も何だからと何時もの駅前の喫茶店に誘った。
ちなみに、会計はもちろん俺持ちだ。

「あの時は気が動転してたと言うか、

その……本当にゴメン!!」

しかし、いくら世界が違うとはいえ
あの傍若無人のハルヒに近い性格のこいつが
素直に自分の非を認めるとは……

「お前がちゃんと謝ってるから
俺は気にしねえよ」

と、ぐらいしか言いようがないじゃねえか。
だからそんな、親に悪戯がバレた子供みたいな顔でコッチ見るな。
色々と現在進行形で削れてってるから。主に理性とか。

「……所で、貴方はどうしてここにいらっしやるのでしょうか？
世界を移動するのは簡単では無いと思いますが。
もっとも、貴方には呼吸をするように出来るのかも知れませんが」

ナイスフォローだ古泉。
そして男のお前がとても懐かしく思えるぞ。

「おいおい、んな大層な事一般人である俺が出来る訳無いだろ。
確かにお前からから見れば俺は異世界人って括りになるだろうが
こちとら、なんの特殊技能も持ってないんでね」

「ふふっ、そうですか。
ではどうやって？」

「長門だよ。あいつの頼まれ事だな。
お前らに会ってくれって。」

詳しい理由までは聞けなかったが」

期限は三日とか書いてあったが、まさかの初日で全員と会えるとはラッキーだ。

「……むう……」

「どうしたの涼宮さん？」

「なんか……雰囲気違うくない？」

一年ぶりだからなのかも知れないけど……
なーんかそれだけじゃないわよね」

「そうなの？」

わたしは今日知り合ったばかりだから
その辺の事はよくわからないわね」

ぐっ、無駄に鋭いなハルヒ。

「さあ、ジョン。」

きりきり吐きなさい」

「……話すの前提かよ……まあ、良いけどさ。」

質問は最後に受け付けるから黙って聞いてくれよ」

別にこいつらに隠しておくほどの事でもないしな。

「まあ、なんだ、単純に言えばだな。」

俺はお前らが去年有った『俺』とは別な存在だ。
根本的な所は変わらないがな」

「――ってな訳で、ここに居る俺は
元になった『俺』のコピー、クローン、
レプリカ
みたいな存在だってこった。
って事で質問有る奴いるか？」

「「「「……………」」」」

静寂。

そんなに暗くなられても

俺はもう何とも思っていないんだがなあ……

「……………なんで」

「ん？」

「自分が誰か——まあ、あたしなんだけど——に作られたコピーだって知っててもそんな明るくいられるの？
あたしは無理。」

だって、それって自分を否定された様な物じゃない」

「って言われても……

確かに最初はショックを受けたさ。

けど、今は自分の立場を受け入れたからな。

それに、元の『俺』とは考え方も立場も変わった。

もう『俺』とは違う存在って言っても良いぐらいに。

だから俺は胸を張って言っさ。

『ここに居る俺は俺だ。

それ以外の何者でもない』

……なーんて、な」

うわぁ……我ながら背中が痒くなるような台詞だな。

俺も随分とハルヒやら長門やら佐々木やらに毒されたか？

「まっ、そう言う事だからそこまでお前らが気に病む必要は無いぞ」

「……それもそうよね。

ジョンがどんな存在かなんてどうでも良いだわ。

重要なのは、あたし達の事を憶えているかどうかだけだからね。
で、此処まで来てあたし達の事を知らないなんて……」

「有る訳無いだろ。」

ちゃんと記憶にだが、残ってるよ」

「なら良いわ。」

他に必要な物なんて無いし。

有希と古泉君だってそうでしょ?」

「うん……」

「もちろんですよ」

サンキュウ、お前ら……

「あれ?」

もしかしてわたし空気?」

俺達が喫茶店を出ると、完全に日も沈み空に星が瞬いていた。やっぱり、冬は暗くなるのが早いな。おまけに風も寒いし。

「気温も低くなってきて、そろそろ雪が降りそうですね。出来る事ならクリスマスに降って欲しいですが」

「ホワイトクリスマスってか？
一般的には望む人が多いだろうな」

「そう言う貴方はどうなんですか？」

「俺は一般的な思考の人間だ」

「ふふっ、なるほど」

何となく空を見上げる。
そこには星と月しかない。
雲がないんじゃ、雪は降らねえよな。

「ちよつと、ジョンと古泉君！
なに二人で盛り上がってるのよ！！
あたしも混ぜなさい！！」

「……こいつとそこまで話が弾んでる訳でも無いが。
ってか長門と朝倉は良いのか？」

「だったらこっち来ればいいじゃない。」

みんなで話した方が楽しいに決まってるわよ」

「まあ、それは同感だ」

「でしょ！」

人が集まると大概の事は楽しくなるよな。

SOS団もそのコンセプトで作られたような物だし。

「それにしても、クリスマスね……」

「バッチリ人の話聞いてんじゃねえか」

「羨ましいわキリスト。」

全世界を上げて誕生日を祝って貰えるなんて」

別に全世界ではないだろ、と思うのは俺だけか？

キリスト教以外の人たちだっている訳だし。

「でも、日本ではただ騒ぐための免罪符になってる所があるわよね。」

大晦日とか、元旦とか、ハロウィンとかも」

「それもそうだけど、コレは気分の問題よ。」

そんな正論を言われたい訳じゃ無いわ」

「しかたねえさ、なんたってこいつは真面目な学級委員長様だからな」

「ちょ、ちょっとジョン君。」

言い方にだいぶ棘があるように感じるんだけど」

「と・に・か・く！

あたしが言いたいのは神様になりたいってことよ」

……何言ってんだこいつは。

「飛躍しすぎ……」

「まあ、ハルヒだからな」

「ええ、涼宮さんですから」

「そうね、涼宮さんだもんね」

「何この空気……」

まさかのあたし超アウエー？」

そうだな。

やっとな。やっとな。

だが、ハルヒが神様ね……」

「古泉だったらやりそうだな。

自分を教祖にしてハルヒを崇める宗教起ち上げそうだな」

「さ、流石にそこまでは……」

「なにも、遠慮する事はないわよ古泉君！

その時は喜んで協力するわ。

こう……神様っぽい感じで！」

「いや、神様っぽくってどんな風にするのよ」

「えーっと……だから、その……」

目の付いた大きな帽子被って

『あーうー』とか言っていれば良いんじゃないの？」

「お前の神様像はそれなのか……」

今の時期冬眠してそうだな。

「……でも、明後日帰るって事は

クリスマスの時は居ないのよね」

「ああ、そうなるな」

「……残念」

「……あっ！！」

なら、一足早いけどジョンがコッチ居る間に
クリスマスパーティーやらない？このメンバーで！！」

「「えっ!?!」」

「はあ!?!」

クリスマスパーティー!?!?

この面子で、か？

そりゃ、楽しそうではあるが。

「それは妙案かと」

「でしょ！」

わかってるわね古泉君は。
有希と涼子は？」

「……わたしも賛成」

「長門さんまで？」

……なら、わたしも賛成するわ。
面白そうな話ではある事だし」

「ありがとう。」

っで、当然ジョンは……」

はあ、此処まで来たら答えは一つだけじゃねえか
俺のために開いてくれるって言ってるようなもんだし。
だから、答えは、

「賛成に決まってんだろ」

「当たり前よね!!」

たくっ、今から楽しみになったじゃねえか。

第三章 後編（後書き）

海「やっと初日が終わりました」

キ「男の古泉を久しぶりに見たな。
相変わらずのにやけ面だった」

海「いや、それは女の古泉も一緒だろ」

キ「まあ、それもそうだが。
………そういやあさ」

海「なんだ？」

キ「前書きの文、アレなんて書いてたんだ？」

海「ああ、あれは、上の段がラテン語で
『我思う、故に我有り』って書いていたんだ。
今回の話に合うかなーと思って」

キ「ほおー………なら下は？」

海「その言葉を残した人の名前。

『ルネ・デカルト』

ちなみに仏語で書かれています」

キ「なるほどな」

海「では、今回はこの辺で。

感想・ご意見・要望などがございましたら
送って頂けると嬉しいです」

キ「それじゃ、また次回も——」

海・キ「よろしくお願いします」

第四章（前書き）

海「長い期間空けてしまい大変申し訳ありませんでした。
次話以降からは以前のペースに戻したいと思います」

キ「じゃ、遅くなったが『消失編 第四章』だ。
ゆっくりしてってくれ」

第四章

「先人達は言いました、

入念な準備こそ成功の秘訣だと」

いや、誰の言葉だよ。

「って事で早速！各自の役割を決めるわよ！！」

はい、と言う訳で異世界滞在二日目の放課後。

場所は北高の文芸部室からお送りしている。

メンバーは俺、ハルヒ、長門、朝倉、古泉の五人に加え、書道部に所属してるはずの朝比奈さんと鶴屋さん。

「……なあ、ハルヒ。

このお二方はどうしてここに居るんだ？」

気がついたら本棚前に設置された椅子に座っていた。
いつ部室に入ってきたんだ？

「おっじゃましてるよ！」

「す、すみません……」

あなた方は三年生でしょうが。

今の時期は大変って聞くけど大丈夫なんですか？

「さあ？」

「お前が連れてきたんじゃないのか？」

「そんな訳無いじゃない」

じゃ、なんで朝比奈さんと鶴屋さんが？

「いやー、立ち聞きするつもりは無かったんだけど。
君たちがなにやら面白そうな事計画してる様だったからっさ！
あたしとみくるもご相伴にあずかろうと思ってね」

「は、はぁ、そうでしたか。」

……だとよ、どうするハルヒ？」

「うーん……二人分ねー。」

そうなると予算がちよっと……」

今回のクリパは俺達五人がそれぞれ出し合った資金で計画していた。

なのでハルヒの言う通り、朝比奈さんと鶴屋さんの二人を追加すると
ただでさえ予算ギリギリだったのが、完全にオーバーとなってしま
う。

「もうちろん、ただでは言わないよ。」

今回のパーティー費用、あたしが全額出すっさ！」

「「「「えっ！！」「」「」」

そ、その申し出は大変ありがたいのですが。

「……そこまでして貰うのは悪い気がします」

「え、ええ、わたしも長門さんと同じです。

流石に費用全額出して貰うのは……」

「いやいや、これくらいはやらせて欲しいによろよ。

無理言ってるのはこっちだからね。

だから長門ちゃんも朝倉ちゃんも気にしない気にしない」

「な、長門ちゃん？」

「久々に言われたわね。

親戚の叔父さん叔母さんくらいな物よ、そう呼ぶの」

微妙な表情の二人は置いとくとして、

鶴屋さんの言いたい事は解った。

あとは、ハルヒの判断で、だな。

「……そうね、お願いしようかしら。

正直な所、今の資金でもたいした事は出来なかったし。

どうせだったら思いっきり派手にやった方が楽しいわよね!!」

「おお、それじゃハルにゃん」

「ええ、我々『北高・光陽院合同文芸部』は

鶴屋さんと朝比奈さんのクリパ参加を歓迎するわ!」

そう言えば、この部活の正式名称を聞くのは初めてだな。
そんな長ったらしい名前だったのか。

「ちなみに略して『KKB』よ」

「そうなのか」

「もちろん嘘だけど」

「嘘かよ!!」

「嘘だ!!」

「ネタを入れるな!!」

はぁ、やれやれ。

「あ、あの……」

「ん？なに、朝比奈さん？」

「いえ、わたしも何かした方が良いですか？
と言っても、たいした事は出来ませんが」

「いえ、別に気にする必要は無いと思いますよ。
ですよね涼宮さん？」

「まあ、そうね。」

朝比奈さんは居るっただけで十分だと思うわよ」

「そ、そうですか」

だがまあ、ハルヒの手により何らかの被害を受けるのは目に見え

ているが。

俺的に一番高い確率なのは、サンタ服を着せられるだ。
そして二番目には、トナカイの着ぐるみを着せられるが来ている。

「と、話がまとまった所で本題に戻すわ」

本題? …… ああ、役割分担か。

「人はそれぞれ得て不得手があります。
ってことで、得意な事を言いなさい。
それを聞いて決めるから」

あ、あのハルヒが人の意見を聞く……だと……

「な、なによ、その意外な物を見たって顔は」

「いや、その通りなんだが」

「あ、あたしだってちゃんとする時はちゃんとやってるのよ!..?」

「ああ、わかってる。わかってはいるさ。

だがな、ちゃんと部長っぽい事やってるのを見ると……」

「……この部の部長は有希よ」

「「「えっ……」」」

え、ええーつと……マジか。

「お二方は……」

「いや、あたしも知らなかったによる」

「鶴屋さんに同じくです」

「ですよ」

確かに『文芸部』なら長門が部長の方が自然なんだよな。
あの時も一人で活動してたし。

「……………」

「ああ！長門さんが！！」

「ちよつ、有希！大丈夫！？」

「へ…………へい…き」

「と、とてもそうは見えませんが」

「だい…じょうぶ…………グス」

「す、すまん。俺が悪かった！
だから泣かないでくれ長門！！」

「ないて…………ない…………」

ど、どうすれば良いんだよ！！

「流石に外は寒い」

「本当ね。息が白くなるわ」

黄昏時の商店街。

歪に伸びた二つの影。

「にしても、結構買う物有るんだな」

「確かに、これは二人でも大変そうな量ね」

「たく、ナニカの罰ゲームかってんだ」

「ふふっ」

部室での一悶着の後、時間はかかったが各々の役割を決めた。
ハルヒと鶴屋さんが食材集め兼調理担当。

長門、朝比奈さん、古泉の三人は装飾班。

最後に、俺と朝倉がその他パーティーグッズ買い出し。

「クラッカーとトンガリ帽は定番だけど……」

「雪ってなんだよ」

「あつ、でも、横に小さく『綿で可』って書いてるわよ」

つまり、雪に見せる装飾のために綿買ってこいって事だろ。
だったら最初から綿って書けば良かったんじゃないのか？

「ほら、いつまでも愚痴ってないでサッサと行動する。
明日に間に合わせないといけないんだから」

「へいへい……ん？」

「どうしたの？」

「ジョン君の知ってる人でも居た？」

ああ、そうだな。

俺がよく知ってる奴が目の前に佇んでいる。

「朝倉、ちょっと時間良いか？」

「ええ、手短にね」

「サンキュ」

平行世界…パラレルワールド。

読んで字の如し、平行して存在する世界。
類似語は並列世界。

「よう、久しぶりだな」

『もしも…だったら』と言う考えによって派生した世界。
その数は幾千幾万と、とても数え切れないほど存在するらしい。
この世界もその数多ある平行世界の一つ。

「君は……」

「ん？俺の事忘れちゃったか？」

『もしも毎朝通る交差点を右に曲がった世界』

『もしも登校途中氷を踏んで転ばなかった世界』

『もしも一限の授業で指名されなかった世界』

『もしも——』

「……そうだね。

僕は少なくとも、初対面の相手に対して馴れ馴れしく話しかける
大変軟派な知人を持ったつもりは無いのだけれども」

「なっ……」

『もしも中学時代に佐々木に出会わなかった世界』

「それで？」

初対面のはずの僕を知ってる君は何者だい？」

「佐々木……？」

そんな世界の存在を俺達は否定する事が出来ない。

平行世界…並列世界には、何が有ってもおかしくは無いのだから。

第四章（後書き）

キ「……………はあ」

朝「ちょ、ちよっと、大丈夫なのジョン君」

海「かなりショックだったんだな。

口から魂的な物が出てくる位に」

朝「気を確かに、としかかける言葉は無いわね」

海「では、今話の感想やご意見をお待ちしています。

また次回もどうぞよろしくお願いします」

朝「あっ、お願いします」

海「次話はなるべく早く投稿出来るよう全力を尽くします」

第四章 裏（前書き）

佐「些細なことで大きく未来は変わってしまう。

ほんの少し踏み外しただけで元には戻れない。

日常は小さな奇跡の積み重ねで形成される。

キョンに出会わなければ、僕もこうなっていたのかも知れない
ね」

第四章 裏

つまらない。

この世の中を一言で表すならこの一言に尽きる。

くだらない。

人付き合いなんて、友達なんて何の得もない。

だから話しかけないで。愛想笑いしなくちゃいけないから。

煩わしい。

そんなに騒ぐ事なの？

自分には関わりのない過去の人の命日なのに。

どうでもいい。

いつもわたしは一人つきり。

別に何とも思わない。何とも思えない。

「ねえねえ、佐々木さんってクリスマスに予定有る？
もし都合が良かったらわたしたちのクリパに参加しない」

「誘ってくれるのは嬉しいけど、
家の方でちょっと用事があるのよ。
ごめんなさいね」

ああ、本当に……

「そっかあ、ざんねん。
じゃ、また明日ね」

「ええ、また明日」

つまらない・くだらない・煩わしい。

「どうでもいい」

大禍時。逢お魔が時。おうまがとき。

大きな災いが起きると言われた、夕方の薄暗い時間帯。
もう少しで完全にこの世界は闇に吞まれる。

「……寒い」

わたしは一人商店街を歩く。

今までも変わらない。これからも変わらない。
隣に他人なんて要らない。

わたしはこの世界が嫌いだ。

その事を自覚したのは中学に上がった時。

両親は成績しか見ない。 わたしを見ない。

先生は生活態度しか見ない。 わたしを見ない。

男子は異性としか見ない。 わたしを見ない。

女子は同性としか見ない。 わたしを見ない。

他人はわたしを知らない。 わたしを見ない。

誰も『わたし』をわたしとして見てくれない。

だからわたしは男子に対して『僕』という一人称を使い始めた。

だからわたしは長かった髪を短く切って中性的にしてみた。

だからわたしは回りくどい喋り方をくせにした。

だからわたしは『変人』として目立とうとした。

でも、結局みんなが見てくれたのは本質の『わたし』じゃなくて、
後から作り出された仮面の『わたし』。

それを理解した。

理解してしまった。

その日からこの世界が色褪せた。

何をやってもつまらない。

人との繋がりがなんてくだらない。

周りに溢れる音が煩わしい。

全ての事がどうでもいい。

時が過ぎ、中学最後の学年である三年生になってもそれは変わる事はなかった。

親から勧められた塾も通ってるふりで、
実際は半分以上サボっていた。

幸いと物覚えの良かった方なので、
学校の成績が変わる事はなく両親にはばれなかった。

そして、気がつけば卒業式。

別れを惜しんで泣いている生徒が多い中、
わたしは心に何の感情も湧いてこなかった。

それもそうだ、だってわたしにとって卒業でさえ、

『どうでもいい』ことなのだから。

中学校を卒業した約一ヶ月後、
県でも有数の進学校に入ったわたしを待っていたのは、
中学の時とんなら変わらない色褪せた世界だった。

そんな事はわかっていた。

わかつてはいたのだがそれでも、
高校に入ればなにかが変化するんじゃないかと期待もしていた。
けど、そんなに都合の良い話は無い。
そんな事が起こるのは本の中の世界だけだ。

「当たり前だよね。」

現実じゃ有り得ない体験をしたいから小説を読む。
逆に言えば、小説みたいな事は現実には起こらない」

そうちゃんと理解してたはずなんだけどな……
どうしてだろう、今からナニカが起こりそうな気がする。
まだこんな幻想を持ってたんだ……わたしは。

「よう、久しぶりだな」

突然北高の男子制服を着た人に話しかけられた。
物思いに耽っていたら足を止めてボーっとしていたみたい。
我ながら集中力が足りないね。

「君は……」

でも、本当に誰だろう。
わたしの表面上の知り合いにはいないし……

「ん？俺の事忘れちゃったか？」

誰かと勘違いしてるのかな。
なら無視してもいいか。

……でも、なんでだろう。

この人に深く関わりたい気持ちになってる。
自分自身の事なのによくわからないわ。

「……そうだね。

僕は少なくとも、初対面の相手に対して馴れ馴れしく話しかける
大変軟派な知人を持ったつもりは無いのだけれども」

「なっ……」

これで後戻りは出来ないわね。
まあ、後悔なんてしないけど。

「それで？」

初対面のはずの僕を知ってる君は何者だい？」

「佐々木……？」

ねえ、貴方は……

『わたし』を見てくれる？

第四章 裏（後書き）

佐「コレはあくまでも『i f』の世界。

今、キヨンがいる世界の僕だ。

でもとても共感出来るね。

キヨンは僕にとって……いや、この話はやめよう。

追々本編でもやっていくだろうからね。

それじゃ、また逢おう」

第五章（前書き）

キ「まだ二日目の放課後なんだよな。
なんだか長く感じる」

海「小説だから仕方ないさ」

第五章

「ふむ……もしかして聞き逃したのかい？

ならばもう一度だけ言わせて貰うよ。

今度はしっかりと側頭葉に焼き付けてくれ」

佐々木が俺を知らない？

一体どうなってやがんだ……

この世界の俺は中学時代に塾に行ってなかったのか？

佐々木が塾に通わないって言うのはあまり考えられんし。

それか、俺が塾でこいつに話しかけなかった。

とかもあり得るよな。

あの時だって、実はかなり悩んだ上での決断だったからな。

もっと教室内の人が少なかったら声は掛けてなかっただろうし。

……もしかして中学校そのものが違うのかもしれない。

だが都会ならまだしも、中学校なんて小学校からの流れで入るよな。
よっぽど向上心の強い奴じゃ無い限り、

各地区ごとで決まる公立の中学校に行くはずだ。

まあ、佐々木が私立の中学に入る可能性だって当然あるわけだが。

……とにかく話をしてみるか。

何か手掛かりを聞き出せるかもしれん。

そのために、まずは……

「そ、そく……なんちゃら、ってなんだ？」

“側頭葉”。

大脳半球の側面にある部分で、

聴覚・言語・記憶などと関係している領域。

つまり僕は君に対して、『ちゃんと記憶してくれ』と言ったわけだ。

……理解できたかい？」

「ああ、何となくだが」

まどろっこしい言い方は相変わらずだな。

この世界でも男にだけなのだろうか。

「まず、君が何処の誰なのか。

そして、何の目的を持って僕に声を掛けたのか。

この二点を知りたいのだが、答えてもらえるだろうか」

「あー……そうだな、

俺は「ジョン君の知り合いだった？」って、朝倉……」

「あら、まだ早かったかしら」

ああ、そうだな。

もう少し時間を……

……いや、まてよ。

事情を話した朝倉を入れれば
俺についての説明がしやすいかもしれん。

「むしろ、丁度良いタイミングだな」

「そう？なら良かったけど」

さて、何処まで話せば良いんだろうな。

全部は……無理そうだな。

へたすりゃ病院に連れて行かれるかもしれん。

「なあ、お前としてはやっぱり

さっきの質問の答えは詳しい所まで聞きたいのか？」

「そうだね……僕としては、

すぐにまた疑問が浮かび上がる表面上の回答よりも、

僕自身のキャパシティーを越える物でもいいから

君の真実を知りたいと思ってるよ」

「だよなあ……」

やっぱり世界を越えようと佐々木は佐々木か。

嬉しいと言えば嬉しいが、この場合はそれが厄介だな。

「だけど……」

「なんだ？」

「こんな事を思うのは君だけだよ。

なぜだか理解出来ないが、僕は君の事をとても知りたいんだ。

……どうしてなんだろうね。

他の物に対する興味なんて完全に消え失せたと思っていたのに。
どうして君だけに……」

佐々木……やれやれ。

そんな寂しそうな顔されたら

話さないなんて選択肢が無くなるだろ。

「とりあえずどっかの店にでも入ろうぜ。

結構長くなる話だからな」

「えっ……？ ジョン君話すの！？」

「ああ、そのつもりだ。

それと、朝倉も一緒に来てくれ。

その方が話を進めやすい」

「……わかったわ。

ジョン君が良いって言うんだったら」

「ふむ……では、僕が良く訪れる喫茶店が近くにある。
そこではどうだい？」

「いいぜ、何処だつてな。
じゃ、案内頼む」

「実は、そこにある店なんだけどね」

そう言って佐々木は俺達が立っている場所から
道路を挟んで向かいを指差した。

本当に近かったな。

「くっくっ、さあ行こうか」

へいへい。仰せのままに。

「平行世界の住人、か……

それが本当であれば実に興味深いね。

本来で有れば交わる事のない人物と今こうやって話ができる。
くくっ、傑作じゃないか」

結局全て話す事となってしまうた。

無論、俺がクローンのような物だと言う事は省いてるがな。

「その反応を見るに、半信半疑って所か？」

「まあ、そうだね。

行き成り異世界人云々話されても、

大多数の人間はこんな感じだと思うよ。君自身もそうなるだろう？」

「当たり前だろ。

宇宙人や未来人や超能力者と知り合いだが、

初めの頃は微塵たりとも信じていなかったからな。

そんな話を鵜呑みにするのはハルヒかそこの馬鹿ぐらいだろうよ」

「ちょっ！ジョン君！？」

流石に馬鹿は酷くない！？

そ、それにわたしだって最初聞いた時は疑ってたわよ。

……二割位は」

つまり八割も信じてたって事だろ。

「……少し良いだろうか？

先ほどから気になっていたんだが、

ジョンと言うのは君のあだ名で間違いないだろうか。

まさか本名と言う訳じゃ無いだろ？」

「そりゃそうだ。

まあ、詳しい事は省くが

とある事情により『ジョン・スミス』と名乗った事があってな、

この世界で言えば去年の今頃にハルヒと再会した時に

俺の事を思い出させるために名乗ったんだ」

「ハルヒ……涼宮ハルヒかい？

彼女の噂は僕の学校まで届いているよ」

「……仕方ないわよね。

だって涼宮さんなんだから」

……やはりこっちでも有名人のようだな。ハルヒ。

少しは自重って言葉を覚えろ。

確かに、元の世界のお前よりは大人し目だがさ。

「ところで、今の話でいくつか気になった点があるのだが……
質問しても良いだろうか」

「俺に答えられる範囲だったら何でも答えるぜ」

「またわたしが空気になる予兆がするわ。
……あつ、すみません。」

「チョコレートパフェ一つお願いします」

俺と佐々木が当初の話題から外れて
昨日テレビで放送していた面白かった映画の話をしていたら
佐々木が窓の外を見て声をあげた。

あと朝倉、パフェ三個目は危ないか？色々と。

「———おや？」

どうやら結構な時間話し込んでしまったようだね。
完全に日が落ちているとは。

さて、塾もそろそろ終わる頃かな？」

「もしかして最初からそのために……」

「さて、ね。くっくっ」

さ、佐々木がグレてる……

「ああ!!」

「ど、どうした朝倉!？」

そして口元にチョコ付いてるぞ!」

「えっ、嘘!？」

「ちょっとタイム!!」

もうちょい右だ。

あー、そっちじゃない。俺から見て右だ。
そうそう、そっち。その辺だ。

……おう、大丈夫。

「……こ、こほん。
お待たせしました」

「よし。じゃ、もう一回いくぞ。

ど、どうした朝倉!？」

「結局買い出ししてないじゃない!」

「あっ……忘れてた……」

こ、これはやばい。

ハルヒに半殺しにされるかもしれん。

「こうなったら自前で持ってくるしかないな」

「それしかないわね。」

……これと、これと、これだったら持ってこれるわよ。
確か部屋に有ったはず」

「俺は……こんくらいかな。

探せば有るのかもしれないが、確実にって言えるのはこんだけだ」

まずいな……

クラッカーやスプレーなんて特殊な物は流石に無理か。

「……ふむ。

先ほど話してたパーティーに関係する事かい？」

「え、ええ。そうよ。

明日の夕方からだから急げば揃えられるかもしれないけど、
それだと大変だと思うし」

「なら、わたしも手伝うわ。

それがジョン君のためになるのならね」

「佐々木……」

「くっくっ、まあ今日の礼だと思ってくれ。

久しぶりに大変有意義な時間を過ごせたのだからね。

ああもつとも、こんな事をするのは君だからだ。

違う人だったら何時ものように

わたしにとってはどうでもいい事だって切り捨ててただろう。

つまりこれは僕も君のいるパーティーに参加したいからと言う
とても打算的な考えがあつての事だから礼は要らないよジョン」

おおー、ワンプレスで言い切った。

「んー……よし。」

別に一人ぐらい増えても大丈夫か。

むしろハルヒだったら大歓迎するだろうな」

「涼宮さんってお祭り騒ぎ好きだもんね」

「それじゃ、悪いがいくつか頼めるか？」

「ああ、任されたよ。くくっ。」

明日の放課後でいいんだよね」

「そうだな。」

校門前で待っていてくれ迎えに行くからさ。
一人じゃきついだろ」

「くくっ、ちゃんとエスコートしてくれよ」

「へいへい……」

「それじゃ、そろそろ解散しましょうか」

「その方が良いな。」

連絡入れて無いから親に怒られるかもしれん……」

「くくっ、大変だね。」

僕は親が放任主義のようで楽してるよ」

「放任って……まあ良い。

そうだ、番号交換しとくか？

その方が色々と楽だろ」

「えっ……」

「あー……その、なんだ。
嫌だったら別に」

「お、お願いします!!」

「ぬお!!」

耳元でデカイ声出すな!

あと、何故に敬語!?

「たっく……ほら携帯出せ」

「ちよっ、ちよっと待って。

……ええと……あ、あった。

ここをこうするんだったかな……よし。
準備完了だ。何時でも来たまえ!」

「テンション可笑しくないか?
……よし、送ったぞ。

それじゃ、夜にでも連絡くれ。そのアドレス登録するから」

「くっくっ、了解した。

楽しみに待っていてくれ。

……ふふっ」

あっ、登録名どうすれば良いんだ？

あっちの佐々木と同じだったら手間が省けるんだがな。

「ふふふ……わたしがいる意味って、なに？

良いわよ、どーせわたしなんてこの小説じゃ

某禁書の吸血鬼殺しと同じ立ち位置なのよ……ふっふっふ」

おーい、朝倉？

お前は何処に電波飛ばしてるんだ？

第五章（後書き）

海「……はい！

と言う事で『消失編 第五章』いかがだったでしょうか」

キ「なんで佐々木に続いて

お前までもがテンション上がってるんだ？」

海「いやゝさ、消失編を書いていると

段々と心がダークサイドに傾いてって……」

キ「作者がシリアス書くのはきつって事か」

海「基本グダグダした話ばかりだったから。

急に暗い要素が入ると大変だねゝ」

キ「グダグダな空気は相変わらず出てると思うが」

海「それは言わないで！

作者も自覚してるから！！」

キ「はあ、やれやれ。

……あつ、今話の感想や今後の要望があれば
何時ものように感想欄に頼む」

海「それでは、今回はこの辺で。

次回もまた……」

海・キ「「よろしくお願いします」」

第六章（前書き）

海「ついに来ました90話目！！」

びゃっははははは！ ツエーイ☆

キヨオオオンくウウウウウウウンよオ」

キ「某学園都市の第一位みたいになってるぞ。

まあ、俺もテンション上がっているけどな。

しかし、後10話で100行くんだよな」

海「正直、始めた時は此処まで続けられると思って無かったけどね」

キ「それに関しては同意しておこう」

海「さて前置きはこのくらいにしておいて、

『消失編 第六章』どうぞ」

第六章

「ただいまー、っと」

商店街で二人と別れた後、
自転車で全力疾走した甲斐有ってか
何時も帰宅する時間より少し遅い程度で家に着いた。

当然の事だが、いつも以上の疲労感に体が襲われている。
特に足腰がマッハでヤバイ。
まるで体育の長距離走を走った後の様だ。

「あ、おかえり。今日は遅いな。
妹ちゃんが心配してたぞ」

「ん、そうか？
そりゃ悪い事しちゃったか」

「それと、叔母さんと叔父さんは同窓会だから遅いつてさ。
朝言い忘れてたからキョンが帰ってきたら伝えてくれって」

「えっ、マジか。
それ聞いてたらもう少し帰宅に余裕が出来たかもしれんのに」

「おいおい」

おっ、飯が出来てる。

妹な訳無いだろうから、キョウが作ったのか？

普通に美味そうだ。

やっぱり冬はシチュー食いたくなるよな。

「……ん？」

「どうしたキョン？」

「いや……何か重要な事を見逃している気が……」

「うーん……あっ、もしかして晩飯カレーの方が良かったか？
一応、賞味期限が近かったからシチューにしたんだけど」

「いや、そこは問題ない。

出された物に文句は言わん。

……そうじゃなくて、もっと根本的な」

「……？まあ、そこまで気にする程じゃ無いんじゃないか？
すぐに思い出せないんだったらそう言う事だ」

「だと良いんだがなあ」

どうしてだか、今無性にツツコミたくなった。

別にキョウが目の前にいるってだけで

それ以外は何時も見ているリビングの風景と変わらないはず……

「って、お前かぁ!!」

「ぬおお!!いい、行き成りなんだよ!!
人の耳元で叫ぶんじゃない!!」

そうだよ、なんで自然に受け入れてたんだよ。

こいつが俺の家にこんなな馴染んでるのは可笑しい事だろ。

自分家の中に料理を作って待っている同い年のお隣さんがいるって

……

一体どんなシチュエーションだよ。なんと言うギャルゲ。

「たつく……何混乱してるのか知らないが、

いい加減料理が冷めちゃうだろ。

妹ちゃん呼んできてくれ。部屋にいるつってたから。

多分シャミがえらい目に遭ってるんだらうけど」

「お、おう……」

まあ、確かに腹も減ってるし。

食いながらもそれとなく聞き出せば良い事だな。

正直そこまで重要な事ではないし。

「うゝ、キョンくゝん」

「ちゃんと自分で食べなさい。
大きくなれないぞ」

「うゝ」

まったく、野菜ぐらい食え。

そんなだから、小6にもなるのに低学年みたいなんだよ。
ミヨキチを見習え、ミヨキチを。

……いや、アレはアレで行き過ぎな気もするが。

「けど、ホント悪いな。」

こんな美味いモン作ってくれて」

「べ、別に、このくらいなら何時でも……」

「いやいや、すげー助かったよ。」

俺とこいつとじゃ碌な物食えなかっただろうしな。
ほら、ちゃんとお礼言ったか？」

「うん！ありがとうキョウちゃん！！」

「お、おう」

「こらっ、お姉ちゃんだろ。」

……それと少しだったらブロッコリー食べてやる」

「ホントー！？

大好きキョン君！！」

「ほら、俺の気が変わらんうちにさっさと寄越せ」

はあ、我ながら甘いな。

もしかして家の妹がこうなったのは俺が原因なのかな。
今度からはもっと厳しく……出来るか？俺。

「……本当に兄妹で仲良いな」

「ん、まあ悪くはないわな」

「えへへ」

実際、朝こそ恨みはすれど

基本的にはそれなりに兄貴として接してるつもりだ。

確かに幾度となく妹には甘い的な発言を関係者一同より貰っているが、

それでも度を超す程のと言う訳でも無いぞ……多分。うん。

に、しても本当……

「……改めてありがとな。

お前がいなかったら冷凍オンリーの食卓だっただろうな」

料理は出来ない事は無いのだが、

正直疲れていたからパパッと食える物だけで済ましてただろうからな。

こんな美味しい物にありつけたんだ。キョウ様様だな。

「うっ……そ、そう何度も言うなよ。

たっく、今日のお前なんか変だぞ？変な物でも食ったか？」

「シチューを食ってるが」

「それはあたしが作ったのだろ！変なのじゃねえ！！

ああーもう！！やっぱり何時ものお前だ！！前言撤回する

！！

……はあ、少しは意識してるのかなーとか思ったあたしが馬鹿だった。

こいつはそう言う奴だ。ああ、そうさ、だから何時も何時も。今日だって頑張って用意したってのに……」

あれ？えーっと、キヨウさん？

……ダメだな声がまったく届いちゃいねえ。

こうなった奴はほっとくのが一番だ。俺は今までそうしてきた。

「ねえ、キヨンくん。キヨウちゃんどうしたの？
頭から煙みたいなのが出てるけど大丈夫？」

「ああ、きつと大丈夫だと思うぞ。

キヨウはこの世の儚さを嘆いてるだけだ」

「ふうん、そーなのかー。

よくわかんない！」

「我が妹よ、今はそれで良い。

その穢れの無いまま成長して行ってくれ。

いつの日か自然とわかる日が来るだろうさ」

「はーい!!」

「って、おとおおい!!」

妹ちゃんに変な事吹き込んでるんじゃないやねえ!!」

「ちっ、復活したか」

結構早い方だったな。

ハルヒや古泉の二人だったらもう少しかかってたんだが。

「まさかの舌打ち!？」

ああ、もう! お前はあたしに何を望んでんだよ!!」

「いや、特に何も」

「だと思ったよ!!」

「よし、何時ものキョウに戻ったな」

「な〜♪」

「ツツコミで何時も通りって言われても嬉しくない!
そして妹ちゃんも乗らない!!」

「えへへ〜」

♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~

「ん? 電話……悪いちょっと」

「ああ、了解。

冷めない内に戻って来いよ」

「へいへい」

……って、あれ？登録外の番号だな。

誰だ？……まあ、一人ばかり心当たりがいるが……

「……もしもし」

『……………』

「ん？……もしもし？」

まさかのイタ電か？

「誰だか知らんが、切るぞ」

『……ちょ、ちょっと待ってくれたまえ。

操作に手間取っているんだ。なにせ携帯は使い慣れて無くてね。
佐々木、と言ったらわかってもらえるかい？』

「なんだ、お前か」

『なんだとはご挨拶だねえ。

僕としては此処に至までに数え切れない程の葛藤が有ったのだが。

そんな時間をバツサリと切ってしまうなんて流石だね。くつく
つく』

「なんだそりゃ。

ってかメールでも良かったのに何でわざわざ電話なんだ？」

『そ、それは……その、だね……』

電話越しの佐々木は何かを言い淀んでいる様だ。

軽い気持ちで聞いたんだが何か有るのか？

『すうー……はぁー……よし。』

こ、今夜、この後に会えないかい？少し話がしたくて……』

「えっ、この後か？

……あーっと、少し待ってろ」

今は……19時40分。

まあ、大丈夫か？

キョウに親への伝言頼んで日が変わる前に戻ってくれば良いだろ。

どうせ明後日以降は俺には関係無いんだからな。

少しぐらい説教が有っても我慢しよう。

「……待たせた。

俺は全然構わないぜ」

『そうか。それは良かったよ』

「それで、何処に行けば良いんだ？」

『ふむ、では我らが懐かしの母校の校門前ではどうだろうか。

正確に言えば君にとっては違うのだろうか、

今現在君があゝの学校に通っていたと言う歴史があるのだろうか？

ならばこの表現でも正しいはずだ。

そして、「おーい、全力で脱線してるぞ」うつ、すまない……』

「ともかく、中学の校門前に行けば良いんだな。

今から出てたら……八時ぐらいに着くと思うが」

『そうか、なら楽しみに待っているよ。

ああ、それとなるべく早く来てくれたまえ。

一人では寒さをしのぐ事は困難でね』

「……なあ、まさかお前、もう既に校門前にいるんじゃない？」

『くくっ、当たり前だよジョン。

だから早く来てくれると助かるね。

それじゃ、約20分後に会おう』

「おっ、おい、佐々木!？」

……切れてやがる」

はあ、やれやれ。

あいつは何をやってるんだ。

さて、佐々木の形をした氷像が完成しない内に着かないとな。

……チャリで行くか。

「すまんキヨウ、留守番頼む。

ちよつと出かけなきゃいけなくなった」

「お、おう……って、ええ！？

こんな時間に何処行くんだよ」

「少しな……

日付が変わるまでには帰ってくるからさ。

親にそう言っておいてくれ」

「……はあ、了解」

「お前も大人しく留守番してろよ。

キヨウにあまり迷惑かけないようにな」

「はーい！

お土産買ってきてね」

「寝言は寝てから言え。

じゃ、行ってくる」

「おう、気を付けてな」

現在時刻、19時45分。

目標は十分以内での到着だな。

さて、急ぐか。

残り時間

2
8
..
1
4
..
5
3

第六章（後書き）

キ「なあ、海人」

海「どうした？」

キ「前書きでも触れたが、
そろそろ100話に到達する訳だ。
何か予定してないのか？」

海「つまり100話目で何か記念回みたいなのをやろう。
って事か？」

キ「まあ、そう言う事だ。
大概何らかの記念回ってのを設ける作者の皆様方が多いだろ。
だから俺らでも何かやった方が良くないかねえか？」

海「まだ、そう言うのは決めてないな。
でも近いうちに何らかの事は思いつくかもね」

キ「まあ、こんな作者だ。
何も思いつかない可能性も有が大目にみてやってくれ」

海「さて、今回はこの辺で。
ご意見・ご要望・気になる点などがございましたら
書き込んで頂けると幸いです。
では、また次回もよろしくお願いします」

キ「します」

第六章 裏（前書き）

海「『裏』なのに『表』より長いです。……何故だ!？」

佐「それは、僕のターンだからさ。くっくくく」

第六章 裏

『明日まで帰りません。留守番お願い。』

PS 晩ご飯はレンジの中にあります』

「……………」

家に帰ると誰も居なかった。

このくらい何時もの事。

だから、今更なんとも思えない。

ドウデモイイ。

一度部屋に行き私服に着替えてからキッチンに戻る。

そして、電子レンジの中を確認。

当然の事ながら、わたしにも食欲が存在する。

いい加減お腹がすいた。

そう思いレンジの扉を開けると小さい鍋が置いてあった。

「シチュー……………か」

まあ、秋・冬に食べると美味しいよね。

さて、このままコンロで温めればいいかな。

まったく……………メンドクサイ。

いっそのまま食べ……………れるけど不味いわよね。

まあ、元々そこまで美味しい物では無いだろうけど。

しょうがない、多少の手間は我慢しよう。
外は寒いし、温かいの食べたいから。

「ごちそうさまでした」

食器、片付けなきゃ。
やりたくないなー。

でも、あの人達主観だと
わたしは出来の良い自慢の娘らしいからね。

このくらい当然やってなきゃダメなんでしょ？
じゃないと帰ってきてからグチグチ言うんだあの人達は。

「はあ、やれやれ」

なんか久しぶりに出た。この口癖。

まだこの世界に色が有った頃はよく言ってたのに。
いつからだろう言わなくなったのは。

……なんて、クダラナイ事ね。

こんなの考えてる暇が有ったら手を動かさない、わたし。
もつとも、早く終わった所で何もする事は無いけど。

で、案の定時間を持て余している。

どうしようかな……

彼に頼まれた物は家中を探してかき集めたし。

勉強は必要分は終わったからやりたくない。

小説は読む気にならない。

テレビは何時もおまらない。ニュースだけ放送してれば良いのに。

友達はある訳無い。

い、いや、もしかしたら一人出来る、かも……

「……と、とりあえず、外に出ようかな」

やる事が無ければ深夜徘徊。基本だよな。
今は深夜じゃないけど言葉の綾だよ。

そうと決まったら準備しよう。
さて、ちゃんと寒くない格好しなきゃ。

まずは、ピンクのマフラーを着けてから、
膝まで隠れる長さの白いロングダウンコートを羽織る。
うわぁ……雪降ってる。ちゃんとコートの前を留めよう。

耳当ても着けて行こっかな。最近買った白いモコモコが付いたやつ。
後は、手袋かな。毛糸で出来たシンプルな白い手袋。
これはわたしが自分で本を見ながら編んだ自信作だ。
あつ、流石にミニスカのままじゃ寒いかな。

でも着替えるのもなー……そうだ、ストッキング穿けばいいか。
学校指定の黒いやつ。

洗濯に出したの穿きたく無いし新しいの取ってこよう。
靴はまだそんなに雪は積もってないからスニーカーでも良いかな。

……さてっと、こんな感じ？

一応、玄関にある全身鏡でチェック。
うん、大丈夫。おかしい所はないね。

まあ有った所でどうでもいいんだけどね。
他人の目にどう映ろうがわたしにはカンケイナイ。

「よし、行こう」

特に当てもなくフラフラと夜の町を歩く。
やはり町中がクリスマススムード一色になってる。
まだその日になってないのにね。クダラナイ。

「でも……居心地悪い」

腕時計に視線を落とす。

二つの針は19時23分を示していた。
家を出てからまだ10分も経っていないんだ。

何処に行こうかな……

やっぱり人がいなくて静かな所が良いよね。
そして出来れば近場。

この条件に当てはまるのは……
久々に中学校でも行ってみようかな。
ここからすぐだし。

月明かりが照らすかつての通学路を一人で歩く。
今も昔もわたしは何も変わって無いわね。
中学校に通ってた頃もこうして一人で登下校をしていた。
誘う人は居たけど、唯々ワズラワシイだけだったから。

「ふう、久しぶりね。

正直もう来る事は無いと思っていたけど」

当然の事だけど校門は閉まっていた。
どうせだったら入りたかったけど。

「さて、来たは良いけど……何しよう」

本当に考え無しだったから何して良いのか判らない。
こんな時こそ彼が居れば良いのに。
彼と話すのはとても面白かった。

その時だけはこの世界に色が戻った様な気がした。
彼の傍がこの世界でわたしの唯一の居場所だと感じた。

彼は自分の世界のわたしを重ねて見ているのかもしれない。
けど、それだけじゃない気がした。
ちゃんとここに居るわたしも肯定して接してくれてるんだと思った。
彼だったら……ジョンだったら、私を……

「ジョン……」

明日の真夜中。

彼がこの世界から消える。
もう一度二人っきりで話したいな。
……あれ？もう一人居たっけ？
まあ、そんな事ドウデモイイ。

今は、19時37分か。
電話かけても良いかな？
め、迷惑じゃ、ないよね……

「よ、よしっ、かけてみよう。
頑張れわたし。やれば出来る子。
ふあ、ふあいとー……おー！」

確か、電話帳を開くんだよね。
えーっと……お、おかしいな？彼の名前が無いんだけど。

って、そ、そっか、ジョンって偽名。

………あった!!

後はボタンを押して……これで繋がるはず。

うう、緊張してきた。なんて話すれば良いんだろ。

わたしが言いたいのは会いたいって事。

今はまずそれだけで良い。それしか言えないと思う。

とっ、とにかく、話してれば何か切っ掛けが……

『———』

あれ？何も聞こえない？

って、耳当てしてたの忘れてたー!!

『———知らんが、切るぞ』

ええー!?!そ、そんな!?!

早く、早く何か言いなさいわたし。

言葉使いを忘れずに!!

「………ちょ、ちょっと待ってくれたまえ。

操作に手間取っているんだ。なにせ携帯は使い慣れて無くてね。

佐々木、と言ったらわかってもらえるかい?」

とっさに言葉にしたけど、これは嘘じゃなかったりする。
実際、携帯なんて片手で数える程しか使っていない。

『なんだ、お前か』

「なんだとはご挨拶だねえ。」

僕としては此処に至までに数え切れない程の葛藤が有ったのだが。

そんな時間をバツサリと切ってしまうなんて流石だね。くつくく」

本当にね。

テストの時以上に頭の回転数を上げていたと思うわ。

『なんだそりゃ。

ってかメールでも良かったのに何でわざわざ電話なんだ？』

「そ、それは……その、だね……」

貴方の声を聞きたかったから……なんだけど……

そ、そんな恥ずかしい事言えるわけないわよ!!

ああ!もう!!

こうなったら勢いで用件も言っちゃおう!!

はい、深呼吸。吸ってー、吐いてー。

「すうー……はぁー……よし。

こ、今夜、この後に会えないかい？少し話がしたくて……」

い、言った。言っちゃった。

これで大丈夫だよな。ちゃんと伝わったよね。
文法おかしくなかったよね。

『えっ、この後か？

……あーっと、少し待ってろ』

彼の声が遠くなる。

ううー、どうだろ？都合悪かったりしないかな？

『……待たせた。

俺は全然構わないぜ』

本当に！？よ、良かったー。

……っとまだ気を緩めちゃダメダメ。
しっかりしなさいわたし。

「そうか。それは良かったよ」

『それで、何処に行けば良いんだ？』

「ふむ、では我らが懐かしの母校の校門前ではどうだろうか。
正確に言えば君にとっては違うのだろうが、
今現在君があゝの学校に通っていたと言う歴史があるのだろうか？
ならばこの表現でも正しいはずだ。
そして、『おーい、全力で脱線してるぞ』うつ、すまない……」

う、嬉しくて浮かれすぎた……
恥ずかしい……穴があつたら入りたい……
あつ、丁度良い所にマンホールが……

『ともかく、中学の校門前に行けば良いんだな。
今から出てたら……八時ぐらいに着くと思うが』

つと、反省は後にしなきゃ。
今は彼と話してるんだから。

「そうか、なら楽しみに待っているよ。
ああ、それとなるべく早く来てくれたまえ。
一人では寒さをしのぐ事は困難だね」

『……なあ、まさかお前、もう既に校門前にいるんじゃない……』

「くくつ、当たり前だよジョン」

ふふふ、流石だなー。
わたしの事をちゃんと判ってくれるんだ。
とてもウレシイ……

「だから早く来てくれると助かるね。
それじゃ、約20分後に会おう」

『おっ、おい、佐々木!?!』

ピッ ツー ツー ツー……

……ふうー、凄く緊張した。

でも、来てくれるんだ。
今からとてもタノシミ。

彼に話したい事は沢山有る。
彼のいろんな表情を見てみたい。
彼の話をモット聞いてみたい。
カレの事ヲもつとシリタイ。

だから———

ハヤクキテネ

第六章 裏（後書き）

佐「アア、ホントウニタノシミニシテルヨ。フフツ」

第七章（前書き）

キ「そろそろリアルでも冬になるな」

海「雪国は大変だよ。雪かきとか。
湿った雪は強敵だね」

キ「だろうな」

海「では、『消失編 第七章』
楽しんで貰えると幸いです」

第七章

雪降る夜、かつて通った中学へ続く道を自転車で駆け抜ける。
この寒さを耐えながら待っている佐々木の元へ。

何故俺を呼び出したのか判らないが、

気まぐれだとしたら文句の一つくらいは言わせて貰おう。

……ホント、風が冷てえ。

さて、そこを曲がれば到着だ。意外と早く来られたな。

おっ……あの小柄な影は佐々木だ。

はぁ、肩に雪が積もってんじゃねえか。

出来ればもう少し早く来たかったな。

「おーい!! 待たせたなあ!!」

「くくっ、ようやく来たね。

……って、ジョン、ダメ!! 止まって!!

そこ凍ってる!!」

「ああ? なんつつた? ……って、ぬおおおお!!?」

佐々木の言葉を理解したが、時すでに遅し。

とっさにブレーキを掛けて止まろうとしたが、

滑って速度を全く落とせない。

「じよ、ジョン！前に電柱！！ぶつかる！！」

「んなこと言われても止まれねえんだよ！！」

……ふっ、避けられないZE☆

ガッシャーン！！

「きゃあああああ！？」

ててて……くそつ、えらい目に遭った。

「だ、大丈夫かい？」

「なんとかな。」

「これでも少し頑丈に出来てんだぜ」

「なら良いのだが……」

実際、ハルヒに関わってから色々と耐性が付いたと思う。
肉体的な意味でも精神的な意味でもな。

「それで、どうして俺を此处に？」

「ああ、理由かい？」

率直に言っと、話をしたかったからだ。

もちろん、電話越しではなくこうして実際に会ってね。

君は明日の真夜中に帰ってしまうんだろう？

だから、ゆっくり話せるのは今しかないと思ったんだよ」

そりゃ、また。対応に困るな。

一大事って訳じゃないけど、文句言う程でもなしに。

「出来る事なら校内に入ってみたかったけども、
どうやら門に鍵が掛かってるみたいだね。それは諦めたよ」

「そりゃ、この時間は普通なら閉まってるだろ。そもそも、それって不法侵入じゃないか？」

「そうだね。そう言う事になる。でも、要はバレなきゃ良いだけだろう？」

そう言い人差し指を唇に当て、片目を閉じニヤリという効果音が似合う笑みを浮かべる。その表情はとても様になっていて、なんかすげー格好いいじゃないか。
男として少し悔しい。

「たっく……中に入ってみるか？」

「えっ、出来るのかい？」

「代々男子のみに受け継がれる秘密の抜け道が有るんだよ。こっちでもそこを使えるか判らないが、多分いけると思うぜ」

「ふむ、そんな物が存在するのか。」

そこを通れば校内に侵入出来る……と。

よし、ならばそこに行ってみようではないか」

佐々木の目が心なしに輝いてる気がする。
やっぱ『秘密の』ってのは男女問わず惹かれるよな。
俺も小学生だった頃は良く秘密基地を作って遊んでたもんだぜ。

「さてジョン、早速だがその道までエスコートしてくれたまえ」

「へいへい。」

では、参りましょうかお姫様」

佐々木の言葉に乗っかり、

右手を前に出し冗談混じりにそう答える。

顔には、古泉クラスには及ばないものの

自分の中では最上級に爽やかであろう笑顔を貼り付ける。

普段使わない表情筋を動かしてるせいか、顔が痛くなってきた。

「えっ……ええええ!？」

な、なんだ? そんな大声出して。

なにも変な事は……言ったな。

あの台詞、流石に寒すぎたのか?

「ちょ、きつ、ばっ………ばか………」

「なっ、バカは無いだろ。バカは」

「ふふふ、ばーか。ふふっ」

ぐっ……自分でも思い当たる節は多々あるが、
そう何度も言うんじゃないよ。

「ほ、ほら、付いてこい。置いてくぞ」

「ふふっ、りょーかい」

ガサッ
ガサッ

「……つと、出た出た。」

やっぱりこっちでも通れるな」

「ほう、プール近くの茂みに出るのか。」

確かにこの道は普通じゃわからないね」

「俺も初めて知った時は驚いた。」

ほら、立てるか？手貸すぜ」

「ああ、すまない」

凄い久しぶりに感じるな。

この道を通ったのも、この風景を見るのも。

俺主観だと二年ぶりになるのか。懐かしい。

「ふう……そう言えばこんな眺めだったね」

「おいおい、まるで忘れてたみてえな言い方だな。」

俺でもまだハッキリと記憶してたってのに」

「……………ドウデモイイコトダシ」

「ん、何か言ったか？」

「あつ、いや、何でもないよジョン。」

君には関係の無いクダラナイ事だからね。くくっ」

そうか？

一瞬、朝倉の如く黒いオーラを感じたんだが。
俺の気のせいって事にしよう。

「ところで、だ、ジョン。

夕方の続きを聞かせてくれないかい」

「もっと詳しい所までって事か。

良いぜ。どんな事聞きたい？」

「君の作ったSOS団の話が良いね」

「オーケー。

どうせだったら最初から話すか。

俺が二度目の北高入学式を経験した時から」

「ああ、頼むよ。

くっくっく、楽しみだ」

「全ての始まりは『俺』とハルヒの何気ない会話だった――」

そうして俺は佐々木に語りだした。

俺が経験してきた全ての事を。

「くっくっく、君は文字通り世界を股に掛けてるんだね」

「まったくだ。位相空間に始まり、次はゲームの世界。
極めつけは平行世界。
もちろん、この世界の事な」

「そして、まだどこかの世界に行く可能性がある」と

「そうなんだよな。やれやれ」

世界移動と時間逆行を経験してる奴なんてそうそう居ないぞ。
ってか、そこら辺にぽんぽん居てたまるか。

「くっく。」

やはり君と話すのはとても楽しいね。
電話をして正解だったよ」

「お褒めに預かり恐悦至極、ってか。

まっ、俺だったから良かったけど、
普通は来ないからな。あまりやるなよ」

「君以外にはやらないさ。

やる必要性が全く見いだせないからね。
ジョンは僕にとって特別だからだよ」

「そ、そうか。ありがとう」

「くっくっく」

そう言われて悪い気はしない。
むしろ嬉しい。

「まあ、俺にとってもお前は特別かな？

少なくとも、あんな呼び出しに応じるぐらいは」

だから、すこしぐらい本音出してみるか。

「えっ……僕が特別って……

ど、どうしてだい？

理由を聞かせて貰っても良い？」

「いや、ほら、アレだ……」

最初はこの世界の佐々木だからって事だったけど」

「けど？」

「今は、その……何とかしてやりたいって思ってる。
なんつーか、寂しそうに見えるんだよな」

ってか、『俺』みたいに。

つまらない世の中にウンザリしていて。

そんな世界を打破する切っ掛けが欲しいけど何処にも無くて。
何も変わらないのが一番良いつて自分に嘘をついて。

そんな姿に見えた。

だから、俺はこの佐々木がほっとけないんだ。
どうしても気に掛かるんだ。

「……なにそれ。」

つまり、君は僕を通して『君』を見てるって事？」

「いや、それとも違うんだけどな」

「……何処が違うって言うのさ。」

僕からすれば同じ事だと思うけど」

「俺自身良くわからねえけどよ、それは違うって事だけは言っとくぜ」

「……はぁ……もう良いよ」

「いや、だからな……」

「だから良いってば!!」

「ちよつとは聞けって」

「やだ!! 聞きたくない!!」

あぁ、もう!!

「いいから聞け!! 佐々木!!」

「っ!………」

はぁ……やれやれ。

何そんなに意地になってるんだよ。

「あのな、一回ちゃんと言わせてくれ」

「……………」

「ああ言った後だから言い訳に聞こえるかもしれないが、お前を通して誰かを見てるなんて事は無いぞ」

「……ホント？」

「当然だ。そんなの誰に限らず失礼な行為だろ。んな事しねえっての。」

確かに比較として名前を出す事は有るさ。けど、そいつ自身を否定する様な考えは絶対にしない」

「ジョン……」

「それにな、佐々木。」

お前は『俺』でも無いし、俺の世界の佐々木でも無い。当たり前前の事だろ？」

「う、うん」

「誰が何と言おうが、お前はお前だよ。紛れもなく、この世界に生きてる佐々木だ」

「僕は……わたしは、わたし……」

「ははっ、我ながら恥ずかしい台詞だよな」

でも、昔と比べると抵抗が無くなってきてる様な気がする。良い事なのか悪い事なのか。

「ううん。そんな事は無いよ。

ありがとう、ジョン。

やっぱり君は……うん、良い人だね」

「お、おう。

どういたしまして？」

「くくっ、なんで疑問形なんだい？」

「さて、な。

強いて言うなら……何となく？」

「なんだい、それ？」

「さあ？俺にもわからん」

「「……くくっ」」

「「あはははははははははは！！」」

「なっ、なんで笑ってんだよお前は……ははっ」

「そっ、そう言う君こそ……あははっ」

「「……くっ、あはははははははははは！！」」

雪降る校庭で俺と佐々木の笑い声がずっと響いていた。

その後何分間笑っていたか判らないが、
確かに言えるのは、現在進行形でもの凄く腹筋が痛い。

「はあはあ、笑いすぎた……」

「ぼ、僕も此処まで笑ったのは久しぶりだよ……
小学校以来かな?……」

お互いに息絶え絶えだ。

まあ、仕方ないだろ。酸欠なんだ。

「はあ……はあ……」

……ねえ、ジョン。ちょっと良い？」

急に佐々木が真面目な表情になった。

その目は真っ直ぐに正面の俺を見据えている。
どうかしたのか？

「貴方はちゃんと本心を言ってくれた。

でも、このままじゃ不公平だね。

だから、わたしの話を聞いてくれる？」

「もちろん良いぜ。

お前の話興味があるし」

「そう、ありがとう。

……それと、一つだけ約束してくれる？」

「ああ、良いぜ」

あれ、少し可笑しくないか？

若干ながら素の性格が出て来てる。

「わたしに好意を持ってくれなくて良い。

そんなの嘘だろって呆れても良いから……」

「佐々木？」

なんで……どうしてお前は、
そんな今にも泣き出しそうな顔してるんだよ。

「だから……」

「わたしノ事を嫌イニナらないデ下サイ」

第七章（後書き）

残り時間 26..
47..
96

第八章（前書き）

海「えーと、時間が開きましたが『消失編 第八章』です」

キ「何とかクリスマス前までには『消失編』完結させろよ？
残り一ヶ月ちょいだが頑張れ」

第八章

「……………」

「……………」

佐々木の話聞き終わってからどれだけの時間が経過したのだろうか。

衝撃的すぎて久々に放心状態になっている。

まさか俺が居ないってだけでこんなに変わってるとは思わなかった。正直、凄い罪悪感を感じる。この世界に俺が存在しない事に対して。

「ねえ、ジョン。」

君は自分の事を責めてる？

何となくだけどそんな顔してるよ」

「……………まあ、な」

そりゃ、もしもこの世界に俺が居たら

今の佐々木みたいにならないで済んだかもしれないじゃねえか。

世の中がツマラナイとか、全ての物が色褪せて見えるとか、

そんな風にならなかったかもしれないじゃねえか。

「ふふっ、君は優しいね。」

君は悪くないのに罪悪感を抱いてくれている。
……本当に悪いのはわたし一人なのに」

「佐々木……」

「自分勝手に期待を持って、自分勝手に裏切られたって思っ
て。一方的に何かを求めて、何も得られず一方的に絶望して。
的外れな主張をして、誰も理解出来ないんだって他人を見下し
て。」

自分の周りに壁を作って、わたしは孤独だって思い込んで。
結局はわたしの独り善がりな言動」

佐々木は淡々と、まるで自分の事では無いように語る。
けど、言葉の端々に悲しみがにじみ出てる様に感じた。

「どう、ジョン？」

これが此処に居るわたし。幻滅したでしょ」

……はあ、やれやれ。

「だからどうしたんだ？」

「……え？」

「人間なんてのはそう言うのが絶対に有るんだと思うぜ。
なんつーか、マイナスの面ってやつが。」

お前は他の人よりもちょっとばかり強いみたいだけどな」

俺だって数え切れない程、自分の嫌な所は有るさ。

あまり人に見せたくない部分だって多い。

でも、それは当たり前の事だろ。

聖人だろうが悪人だろうが凡人だろうが誰でも持っている物だ。

だから……

「だから、折り合いを付けて生きてるんだよ。

完全に否定したり、腹を括って受け入れたり、

人に見られないように隠蔽しようとしたりしてな。

そいつ自身のやり方で何とかしてんだ」

俺は……まあ、受け入れる様に努力してるな。

「だから、お前を幻滅なんてしねえよ。出来る訳がねえ。

むしろ俺が幻滅されないか心配するぐらいだ」

本当にな。

もしお前に引かれたら……当分立ち直れないな。

最悪ロープを持って樹海に消えるかもしれん。

「……くくっ、くっくっく、あははははは！

そうかい、それは良かった。

君に拒絶されたら僕は今度こそ死んでいたかもしれない。

ああ、安心してくれ。全て未遂で終わっている。

それと、僕が君を幻滅するなんてことはアリエナイよ。

安心してくれたまえ」

「……なんかサラッと凄い事言わなかったかお前。

間違っても俺がこの世界から居なくなった後に

リストカットなんてするなよ？心配なんだが」

「くつくつく、そうだねえ。

君がするなと言うなら今後そう言った物はやめよう。

幸いと僕の手首はまだ無傷だからね」

ふう、元気になったようで何よりだ。

もつとも、俺としては未遂云々の所を深く掘り下げたい所なのだが。
本当に大丈夫なのかこいつは。

残り時間わずかの所だが何とかしてやりたいな……

「でも、君は……」

「ん？どうした」

「君はもう少しで消えてしまっただね。

この世界から跡形もなく、僕の目の前から消える」

「ああ、そうだな。そう言う約束だったし。

俺にも戻らなきゃいけない所が有るしな」

「……SOS団の事かい？」

「ってか、世界そのものだな」

「そうか……そうだね。」

ずっと此処に残って欲しいって思うのは僕の我が儘か。
この世界から見れば、君が居るのはイレギュラーな事。

……理解はしているんだけどね。辛いよ」

そう言って顔を伏せる佐々木に俺はどう言ってやるのが正解なのか、

どう動けば正解なのか判らなかった。

だから俺は自分が最善だと思ふ方法をとる。

間違っても構わない、俺がそうしたいからするんだ。

それによって引き起こるであろう結果はどうであれ受け入れる。…

…様にする。

少なくとも、こんな状態の佐々木に何もしないなんて事は出来ない。

そして、俺は一人覚悟を決め佐々木の頭を自分の胸に押し当てた。
昔は妹にもこうやってた。こいつに効果があるか判らないがな。

「!?!?……じ、ジョン？」

「……………」

「な、なんとか言ってくれないかい」

「……………」

んなこと言われても、
自分でやった事だが恥ずかしくて色々と気を回せねえんだよ。

「……………」

「……………つくく」

「……………んだよ？」

「いや、何でもないよ」

「そうかい」

「ただ……………ありがとうジョン」

「お、おう」

たつく……………まあ、良いか。

こいつが悲しんでるのは見たくねえしな。

ひらひらと雪が舞い降りる月夜。

とても風流だと思わないか？

そこに顔を真っ赤にしている一組の男女が居なければ、だけどな。

ああー……なんつーか、さっきまでは変なテンションだったんだよ。
で、我に返った途端……なあ、わかるだろ？

「く、くくっ……お、おかげ様で調子が良くなった、よ／＼／」

「無理して笑ってるのが丸わかりだぞ／＼／」

「ぼ、僕だって人並みの羞恥心は有るのさ／＼／」

何とも言えない空気が俺と佐々木の間に流れている。
くっ……久しぶりだなこの感じ。どうすれば良いんだか。

「と、ともかく、今夜は君に会えて良かったよ。
本当に……ありがとう。」

君には一生をかけても返しきれない恩が出来たね。くっくっく」

「そこまで大げさな事はしてないぜ。」

そもそも、見返りなんて端から求めてねえっての」

何かの漫画だかアニメだかの台詞で、

『利用し合うのが仲間。無償で助け合うのが友達』ってのがあった。
佐々木は俺の友達だからな。

たとえば俺が損しようが何しようが、無償で力を貸す。

当たり前前の事だろ？

「はあ、やれやれ。」

君の隣に並ぶのはハードルが高い様な気がしてきたよ。

少なくとも、今の僕のままじゃ到底飛び越えられそうに無いね」

「そうでもないだろ？

お前だったら背面跳びで軽々クリア出来る程だぞ」

「くっくっく、それじゃ競技が変わって高跳びになるじゃないか」

「ん、そうか、そうだな。」

まあ、雰囲気伝われば良いんだよ」

って、結構時間経ってたんだな。

校舎の時計を見たら日付が変わってから五分ほど経っていた。全く気づかなかった。ってか時間経つの早いな。

「楽しい時間は早く過ぎると言うけれど、これはあまりにも短すぎる様な気がするよ」

「同じく、だな」

「くくっ、それじゃ君を寝不足にさせるのも心苦しいし、何より君も色々忙しい身だろう？
今宵はこの辺でお開きとしようじゃないか」

「その意見に賛成する。
何をするかわからんがハルヒの事だ、
とんでもない事をしでかす気だろうからな」

「くっくっく、僕も学校が終わったらすぐに向かうよ」

「ああ、そうしてくれ。
……さてと、帰るか。
チャリの後ろ乗ってくか？」

「えっ、良いのかい？」

「もちろんだ。ほら、行くぞ」

「……うん!!」

間違っても転けないように慎重に行こう。

中学の時の大クラッシュは三度起こさないように……

「……なぜだろう。」

とてつもない不安感が襲ってくるんだけど」

「そうか？ 気のせいだろ」

相変わらず勘の鋭い奴だ。

第八章（後書き）

残り時間 2
3
..
5
3
..
4
1

第九章 前編（前書き）

海「いよいよ最終日。

挨拶回りは重要だぞ」

キ「ゲームでも最後は挨拶回りなのが多いよな。

そしてエンディング、見たいな流れな」

海「この小説のエンディングはだいぶ先だけどね」

キ「原作はまだ完結してないからな」

第九章 前編

目覚まし時計が鳴っている。

しかし、それを止める程の気力が出ない。

瞼を開けるのも億劫だ。

このまま二度寝でも……………

「キョン君くおきろく」

「ぐはっ!？」

ぐおおおおお!…………い、妹よ、お前は兄を殺す気か?

毎度毎度朝一でダイビングプレスはきついぞ。

今はまだ軽いから良いが、もっと成長してきたら自重して貰わんと

……

「おはようっ!キョン君!」

「…ああ、おはよう。

言いたい事は色々とあるが、起こしてくれてありがとな」

「えへへ」

……そう言えば俺が消えた後ってどうなるんだろうな。
こいつはこの家の一人娘って事になるのか?

はあ、なんか心配だな。

キヨウも居るからあいつに期待するしかないな。

にしても……

「……………」

「あれ？どうしたのキヨン君？

あなかいたいの？」

「いや、そう言うわけじゃないが。

……なあ、もしもだ、もしも俺がいなくなったらどうする？」

「えっ！キヨン君どこ行っちゃうの……？」

「いや、もしもの話だ。

そこまで深い意味はない」

元の世界に戻ったら、この世界から俺と言う存在は消える。

一部を除いて、人の記憶からも消える。それこそ跡形もなく。

だから、この質問に意味はない。

俺がいなくなってもこいつの記憶から俺の存在自体が消えるわけだから

何とも思わず日常を過ごすんだろう。

それでも、聞いてみたかった。

俺は今この時に兄として確かに存在しているから。

「……ヤダ。絶対ヤダ!!」

「っ!」

「ちゃんと宿題もするし、

お父さんとお母さんの言う事聞かし、

野菜も残さないで食べるから、

だから、いなくならないでよお……」

「……そうか」

はぁ、しくったな。

好奇心で質問なんかしなきゃ良かったぜ。

こんなに沈んでいる妹なんてそうそう見ないぞ。

「キョン君……」

「ははっ、悪い。変な事聞いちゃって。

大丈夫だ。俺はいなくならねえよ」

「ホントだよね?」

「ああ、もちろんだ」

「約束だよ!!」

「へいへい。わかってるよ」

……俺は大嘘つきだな。
守る事も出来ない約束なんかして。
消える事は絶対なのに居なくならないって言って。
ホント……最低な野郎だ。

食卓で朝食をとり、洗面所で歯を磨く。
部屋に戻り制服に着替え、鞆を持ち妹と共に家を出る。
なんてこと無い、良くある日常。けど、この世界では最後の光景。
少し感慨深い物がある。明日この家に俺は居ない。
それがこの世界では日常。この三日間が非日常。

もう少しでここに俺の居場所は無くなる。

そんな事を考えていたからか、

俺は自然と足を止めて振り返り我が家を見ていた。

よく見慣れた風景のはずなのに、俺の記憶に深く刻み込まれた。

「キョン君忘れ物？」

「あつ、いや、ちよつとな。

何となく見てただけだ。ほら行くぞ」

「はい」

「つて、どうして腕を組む？」

「ん？ なんとなく」

「そうかい」

「えへへ」

こいつの笑顔を見ると心苦しいな。

まったく……何で朝っぱらからあんな事聞いたんだか。
バカだろ俺。

「うーす、キョン。

今日は特に妹ちゃんがベツタリだな」

「あっ！キョウちゃんだ。おはよう！！」

「ん？お前か、おはようさん」

なかなか良いタイミングで隣の家からキョウが出て来た。おかげさんで急下降していたテンションを取り戻せそうだ。それに最後だったし会っておきたかったんだよな。

深い話が出来ないのは残念だが、今朝の二の舞を演じたくないしな。

「チャリじゃ無いなんて珍しいな。

妹ちゃんと一緒だからか？」

「まあ、な。それもある。

おかげでこんな早い時間に出発だ。

歩きで北高に行くのは時間が掛かるからな」

「そっか、ちゃんとお兄ちゃんやってるようで何よりだ」

「ありがとよ。

そう言う、お前もこの時間に家を出るんだな」

「まあ、今日はちょっと出るの早いけどな。

何時もはもう少し遅いぞ。

ほら、あたしの学校こっから近いし」

「そ、そうだったな」

「……なあキョン。

昨日からなんか可笑しくないか？

こう、具体的には言えないんだがな」

「きつとお前の気のせいだ」

「そうか？」

「そうだ」

「まっ、お前がそう言うんだったら信じてやるか。
あたしは懐が広いからな」

「なんでそう、上から目線なんだよ。
寛大な所は認めるが」

どうしてこう、俺の周りは勘の良い奴らばかりなんだろうな。
なかなか隠し事をするのが大変なんだが。

……いや、俺が隠し事自体をやめれば良いんだけなんだけどさ。

「むう……キョン君！学校に遅れるよ！！」

「うお！！なんだ行き成り」

「ははっ、あたしとぼっかり話してるから
妹ちゃんは妬いちゃってるんじゃないか？」

「うう」

「ほら、あたしの事はほつといて良いから。
早く一緒に行ってあげなきゃ。なあ、お兄ちゃん」

「まったく……お前は……
じゃ、いい加減行くか？」

「うん!!」

「それじゃ、引き留めて悪かったなキョウ。またな」

「いってきまうす!」

「おう、二人ともいってらっしゃい。
気を付けろよ?」

「わかってる、っての」

その言葉を最後に俺と妹は歩き出す。

そうだな。明日になればキョウの記憶から俺は消える。

だから俺が今ここでなんと言おうが意味なんて無い。

けど、それでも、相手に伝わらなくても言いたい事は言っておこう。
朝倉も言ってたが、やらないで後悔するよりやって後悔した方が
いい。

だから、俺は後ろを振り向きキョウに向かって叫ぶ。

「ありがとうよ! 楽しかったぜ!」

「……はあ!? 何言ってるんだ!」

「なんでもねえよ!!」

キョウは俺の言葉を聞き不思議そうに首をかしげながら、恐らく自分の通う学校が有るであろう方角へ歩いて行く。

そうだ、最後だしアレも言っとくか。

再度後ろを向き、少し遠くに見えるあいつの背中に声を掛ける。

叫ぶ程の音量ではなく、ただ単に自己満足に伝えるだけの大きさで願わくば俺が記憶のほんの片隅にでも、一ミクロン程度にでも残るように。

「世界を大いに盛り上げるジョン・スミスをよろしく」

第九章 前編（後書き）

キ「後編へ続く。そしてお疲れさんキョウ」

鏡「出番少なかったな。まあ、良いけど。

元々あたしもあの世界ではイレギュラーだし」

キ「佐々木の出番は多いけどな」

鏡「……ぐふっ」

キ「まあ……強く生きろ」

第九章 後編（前書き）

ハ・長・佐 「「……………」」 （霸氣的なやつ発生中）

キ 「お、おい……あれなんだ？」

海 「ああ、あれ？」

今回の最後の方を見ればわかるよ。

では、『第九章 後編』 始まります」

第九章 後編

「忘れ物しないように確認してから帰るように。」

それじゃ、また明日」

『ありがとうございました』

や、やつと、放課後か。

今日で終わりと思って授業を真面目に受けたのが失策だった。
昨日、一昨日と同じく適当に聞き流せば良かったな。

「真っ白に燃え尽きてるわねー。」

ジョン君この後大丈夫？

男の子だから力仕事やらされると言うわよ。飾り付けとか」

「ん？ああ、朝倉か。この位はまだ大丈夫だ。」

本当にヤバイ時ってのは半透明になるもんだぜ」

「限界越えると消えるの！？」

……さて、気力が少し回復したし、そろそろ部室行くか。

今頃長門が独りポツンと佇んで本を読んでいるだろうからな。

その情景が瞼の裏に浮かぶようだ。

窓辺にパイプ椅子を置き、その上に座ってハードカバーのページをめくる。

物静かな部屋の中、窓の外は雪が降っている。
この世界の長門にはピッタリなシチュエーションだ。

雪、無音、窓辺にて。……どっかで聞いた事あるな。

「でもまあ、実際に長門と雪って似合うよな。

お前もそう思わないか？」

「えっ、なんの話？」

「そして朝倉は血の付いたナイフが似合うよな。

それを手に持って満面の笑みを浮かべてるのがお似合いだ。

もちろん此処に居るお前は違う人物だとわかってるんだが、

未だ俺の中で春と冬に起きたアレはトラウマとして残ってるんだよ。

おかげでお前が傍に居ると脇腹がジクジク痛みを発しやがる」

「お、おーい、ジョンクーん？」

「さて、急ぐか」

「また……また無視されるのね……」

ふふっ、ふふふ。

もうこの扱いにも慣れてきたわ」

出来ればハルヒ・古泉ペアや佐々木や先輩、Sよりも先に着きてえな。

こう、誠意的な意味で早く部屋に居たほうが良いだろ。

決して、間違っても、遠足前日の眠れない子供達の心境のように、
パーティーが楽しみでそわそわして落ち着かないって訳では無いぞ。
ああ、きっとそうさ。そんな事は無い。と、思いたい。

等々と、思案しながらも足取り軽く文芸部部室に向かったのだが
……

どうしてこうなった……

俺は何処を間違えたんだ？

少し前までの選択肢をクイックロード出来ないのか？

やれる物なら今すぐ実行する勢いだぞ。

……いや何処まで戻れば良いか判らんから、結局諦めるしかないか。

「むう……」

「……………」

「ふふっ……」

ハルヒ、長門、佐々木が睨み合いをしている。

三人は異様なプレッシャーを発していて、

とてもじゃないがこの中の誰かに話しかける事は出来そうにない。

そして、他のメンバーはと言うと。

「こ、これは大変な事態が発生してしまった様ですね」

「あっはっは、がんばるっさ少年！」

「はわわわわわ」

「ジョン君……いつか刺されるわよ」

古泉は苦笑いで、鶴屋さんは大笑い。

朝比奈さんは見るからに動揺している。

そして朝倉。それはお前が言うと言落にならん。

さて、今回どの様にこのカオス空間が生れたかと言うと、俺もよくわかっていない。

なので、俺と朝倉が部室に着いてからの流れを説明しようかと思う。それを見て原因を推測して頂けると幸いである。ついでに、俺にも教えて貰えるとありがたい。

じゃ、最初から話すぞ。

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・

まず、俺達が文芸部部室につくと予想通り長門が本を読んで待っていた。

ちなみに読んでいた本は世界的に有名なファンタジー作品で、本屋に行けば必ず見かけるタイトルの本だった。

次に、長門と話していると北高先輩二人組が登場。

鶴屋さんは開口一番、調理室に食材を置いてきたと言った。少し張り切りすぎたとも言っていたので、

もしかしたら食材で山が出来ているかもしれない。

ああ、俺と朝倉の分の荷物は部室の片隅に置いてるぞ。

これが今日チャリを使わなかった理由だ。
意外と荷物が重くてフラフラしそうだったからな。
雪も積もってるし、流石にスリップ事故は起こしたくない。

そして、光陽院ペアが勢いよく扉を開け入ってきた。

正確に言えば、ハルヒがドアを壊さんばかりに開けて入室し、
その後に古泉が続いて入りドアを閉める。

熟練された一連の動きだ。

これを見ただけで古泉の苦労を垣間見た気がした。

俺に変わってフォロ役をしてるんだな。

頑張れよ。俺にはそれしか言えない。

……どうでも良い事だが、ハルヒの髪型はポニテになってる。

まあ、一応ありがとうとだけ言っておこう。

と、まあこの辺までは良かったはずだ。

少なくとも、この時までは部室を和気藹々とした空気が包んでいた。
だから、俺が考えるには問題はその後だと思う。

「さて、全員揃ったわね。

それじゃ早速！準備始めるわよ！！」

「ああー、ハルヒ。

すまんがもう少し待ってくれないか？

もう一人来る予定なんだよ」

「ええ、別に良いわよ。

人数は多い方が楽しいだろうし。

それで、いつ来るの？」

「学校終わったらすぐ向かうとか言ってたから、そろそろじゃ——」

と、此処で都合良く電話の着信音が鳴る。

その音源は俺の携帯だ。そして相手はもちろん……

「よう、着いたか？」

『ああ、だから電話したのだよ。』

出来れば早く校門まで迎えに来てくれないかな？

流石の僕でも他校に制服のまま一人で進入するのは無理だ。

もう長く好機の視線に晒されてるのでね、大至急で来てくれ。待っているよ。くっくくく」

「へいへい、了解しましたよ」

俺はその電話を受けハルヒに断ってから迎えに行った。なるべく早くたどり着けるように早歩きで。

途中生活指導の教員に見つかりかけたが、何とかやり過ぎ事に成功。

下手すればパーティー中止だからな。危なかった。

でまあ、その後は何事もなく合流し、

二人で話ながら部室へと向かった。

此処までは普通だよな？きつと……

そして、部屋に戻り佐々木をみんなに紹介した。
うん、なにもおかしくは無いな。

あー……ただ、その紹介の時に佐々木が、

「ジョンと会ってからまだ一日しか経ってないけど……

絶対に貴女たちには負けないわ。

でも、とりあえずは仲良くしましょう。

今日はわたしも楽しむために此処に来たから。

それで良いかしら、涼宮さんに長門さん？」

こんな事を言ってた。

それを聞いて二人が佐々木を睨み始めたんだよな。

・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

もしかしくなくても、あの一言が原因か？

そうだとしか思えないよな。

肝心の言葉の意味まではわからないが。

「むむむ……」

「……………」

「ふふふ………」

とにかく、誰でも良いから助けてくれ。

これ以上この空間にいたらストレスで胃に穴が開くかもしれん。

はぁ……やれやれ

第九章 後編（後書き）

残り時間 9 .. 28 .. 36

第十章（前書き）

海「今回は『再構成』初の回です」

キ「何がだ？」

海「今話に登場するのが男だけ。

正確に言えばキヨンと古泉だけです」

キ「ああ、そう言えば今まで無かったよな。
主要人物で男は俺だけだったから」

海「では、『消失編 第十章』始まります」

第十章

このスプレー、直で窓に吹き掛けて良いのか？
後でちゃんと落ちるんだろうな？

もし、ずっと窓に残る様だったらえらい事態だぞ。
だがまあ、とりあえずやってみない事には何事も始まらないか。
少し振ってから……ん？ までよ……

「なあ、古泉。

今からスプレーで窓に『M e r r y X - m a s』と書くんだ
が、

中から見て正しく読める字が良いのだろうか。
外から見て正しく読める字がいいのだろうか。
この場合はどっちだと思う？」

「そうですね……

今回は部屋の中に居る僕たちへ向けてのメッセージなので、
そのまま普通に文字を書いてもよろしいかと。

……ああ、済みません。そのリースを取って頂けませんか？」

「これだよな？ ほらよ」

「ありがとうございます」

「……そこのスキマ開きすぎだな。
間に何かそこに付けたらどうだ？」

「ふむ……確かに寂しいですね。」

ですが、これ以上装飾を施すと見栄えが悪くなりますし。
こう、ゴチャゴチャしすぎると言いますか」

「なら二つの間を詰めたらどうだ？」

「なるほど。そうすれば良いですね」

とまあ上記の文でわかったと思うが、
俺と古泉の男組は部室の中の装飾作業をしている。
ハルヒ曰く、力仕事はいつの世も男がやる事らしい。

ちなみに、女性陣は料理室に向かった。
全員えらく張り切っていたな。

まあ、料理の出来に関してあまり心配して無い。
ハルヒと鶴屋さんの料理の腕はよく知っているし、
朝倉は長門に晩飯のお裾分けをしてるらしいから大丈夫だと思う。
長門と朝比奈さんは手伝い係になってそうだな……
佐々木は普通に上手いぞ。こっちではどうだかわからないが。

「それにしても、良かったですね。

男子班、女子班で分かれての作業で。

でなければ、今頃想像するのも恐ろしい事となっていたでし
ょう」

「まったくだな。本当に良かった。

鶴屋さんぐらいだぞ。

あんな空気の中大笑い出来るのは」

「ええ、あの方は本当に凄い人物ですよね。

お三方を止めに入っただのも鶴屋さんですし」

そう、古泉の言った通り、

なんと鶴屋さんはあの混沌とした空間を打ち壊したのだ。やっぱりどの世界でも、絶対に頭の上がらない人だな。俺も後輩が出来たらああ言う風な先輩になりたい。

すると古泉は今の話で何か思い至ったのか、少し真面目な表情で窓の外に視線を向けこう言った。

「しかし、料理室は大丈夫でしょうか？」

刃物も多いですし……」

「おいおい、なに物騒な事考えてんだ。

そう言う事しそうな奴らに見えるか？朝倉以外」

確かに此処の調理室は包丁を保管する所に鍵は掛かってないけどよ。

ってか、よく考えなくてもそれは危ないよな。

どうなってるんだこの学校の安全管理は。

今回はそのおかげで調理が出来る訳だけどよ。

それに、簡単に刃物を手に出来るからって

あの中の誰かが殺傷事件を起こすとは思えないぞ。朝倉以外。だからお前の心配は無用なんじゃないか？

「ふふふ、ですが『事実』は小説より奇なり』ですよ。我々には予想だにしない事が起きてしまう事がある。僕にとっては貴方もそうなのですがね」

「まあ確かに、俺はお前から見れば『奇』だよな」

「なので、今頃どなたかが刃物を持って暴れていてもそれは可笑しい事では無いですね。

むしろ、貴方が絡むと必然になる様な気がしますよ」

必然ってなんだよ。必然って。

そんなに俺は誰かに刺されそうな人間に見えるか？
実際危ない目には多々遭っているが。

「さてと、そろそろ無駄話やめて真面目にやるぞ。
とっとと終わらせたいからな」

「はい、仰せのままに」

俺と古泉は黙々と作業し続けた。

時計も見ずに自分に与えられた仕事に没頭し続ける。

窓に文字を書き、部屋の上部に装飾を施し、

床には所々に雪に見立てた綿を敷き、

最後に今回一番重要であろうクリスマスツリーを設置した。

全ての作業が終わり、確認のためざっと部室内を見渡すと、

いつもとは異なる空間がそこに存在していた。

よくもまあ、たった二人で此処までやったもんだな。

よし、これでは料理組の到着を待つだけだ。

「でしたら、時間潰しに一局いかがですか？

都合良くオセロを持ってきましたので。」

「都合良く、ね。本当か？」

「ははっ、まさか。」

一応こうなる事を予想して持ってきたんですよ。

涼宮さんは張り切っていましたから。
調理に時間がかかりそうだと思ったので」

「なるほどな」

どの世界だろうが、どんな古泉だろうが、
こいつとなんらかのゲームをする事は絶対らしい。
もはや運命と言っても過言では無いな。
無論、どんな物でもこいつに負ける事は無いと思うが。

古泉は自分の鞆からオセロ一式を取り出すと、
長机の上に手際よくセットした。

周りに色々と季節感溢れる装飾が施されているが、
机上だけを見れば何時もとなんら変わらない放課後の風景だ。
放課後と言うには遅すぎる時間だな。

「んじゃ、お前が黒で良いぞ。
ちよっとしたハンデだ」

「ありがとうございます」

俺から見れば、もう何度目かわからない古泉との対局。
古泉から見れば、一回目の俺との対局。

こう考えてみると面白いな。
俺にとってはこの光景は見飽きる程見ている。

けど、古泉にとっては初めて見る光景。

「お前の癖は知っている。

もう何回も勝負してるからな」

「ですが、僕は貴方の癖を知りません。

今回が初の対局なので」

「なんと言うか……面白いよな。

互いの認識にズレが生じている」

「ええ、そうですね。

これも貴方と関わった人にしか体感出来ません。

本当に貴重な経験ですよ」

貴重ね……

確かに異世界人と接触する機会なんて普通に生きてりやこれっぽちも有りはしないな。

お前や他の文芸部メンバーが俺と会ったのも、

ハルヒが普通の生き方をしてなかったからかもしれないぜ。

「そうかもしれませんね。

涼宮さんは普通がお嫌いですから」

「ああ、『俺』もよく振り回されてたからな」

「ふふっ」

話している間にもゲームは進み、
今や盤上は白の駒が圧倒的な数存在している。
相変わらず弱いな。

結局、白黒の比率は最後まで覆ることなく、
この勝負は俺の圧勝で幕を閉じた。
白駒が四隅を取った時点で勝敗は決していただろうが、
それでも最後まで抗った黒駒に敬意を表そう。

「おやおや、お強いですね」

「まさか。お前が弱いだけだ」

「ふふふ、そうですか。」

「続けてもう一勝負いかがです？」

「ああ、良いぜ。」

「まだあいつらは来ないようだしな」

「では、早速始めましょう」

そうして第二回戦が始まったのだが、
先ほどと同じ展開になってきている。
もちろん黒は古泉で白が俺だ。

「……ふむ、これはこれは。
厳しい状態ですね」

「それは最初からだろ」

「おや、これは手厳しい」

「まったく。」

お前って本当は手を抜いてるんじゃないだろうな。
そう思っても仕方ないぐらいだぞ」

「ふふっ、まさか。」

ちゃんと真剣にやっていますよ」

「でも、勝てなきゃ楽しく無いか？」

「いえ、それでも無いですよ。」

誰かとゲームをする事事態が楽しいのですから」

「成る程な。」

その考えだったら少しはわかるぜ。

友達とだと何やっても楽しく感じるよな」

野球大会出場したり、狭い部室なのに七夕に笹を飾ったり、
無人島に出かけたり、バンド組んで演奏したりと色々やったが、
どれもこれも楽しかったよな。

帰ったら今度は鍋食う予定だし。

本当、一人じゃどれもつまんなかっただろうな。

あのメンバーだったからあそこまで楽しめたんだと、そう思う。

「……不躰な質問かもしれませんが、
貴方にとって僕たちとはなんなのでしょうか？
出会ってから実質四日なのですが
我々の事をどう思っているか少し気になるのです」

「ん？なんだ。そんな事か。
どう思ってるってお前。そんなの決まってるだろ」

俺はそんなにお人好しじゃない。
嫌な事だったらハッキリと断る人間だ。
逆に、好きな事には肯定的だ。

結局、何が言いたいかと言うと……

「俺は嫌いな奴と一緒に居る程人間出来てねえんだよ。
基本は好意的な奴とつるむ人間だ。
んで、俺は今此処に居る。つまりはそう言う事だ」

嫌いだったり何とも思って無い奴等の為に世界を渡る訳無いだろ。
ちゃんと会って話がしたいからこの世界に来たんだ。

そして、昨日・一昨日でお前らが悪い奴らじゃないと思った。
『俺』の記憶と照らし合わせて再確認した。

「俺はお前らの事を友達だと思ってる。」

……まあ一方的に思ってる事だからさ、嫌だったら嫌って言うてくれ」

『友達』 ってのは強制する物じゃ無いだろ？
互いに思ってなきや成り立たない。
だから、お前が拒否したら仕方ないと諦めるさ。

「い、いえっ、嫌な訳有りません。

むしろそう言って頂き大変嬉しいですよ。

きつと涼宮さんや長門さんも喜んで貰えるかと」

「そうか？だと良いんだが」

「絶対に大丈夫ですよ。僕が保証しましょう」

俺よりも長くあの二人と居る古泉のお墨付きだ。
少しは自信を持ってみるか。
俺はあいつ等と友達だってな。

ん？勝負結果か？

そんなもん火を見るよりも明らかだろ。
盤上を白一色にしてやったさ。

第十章（後書き）

残り時間 5 .. 3
8 .. 2
2

第十一章（前書き）

海「今回は今まで書いた中で一番長いです」

キ「そもそも、『消失編』自体がかなり長いよな。

『憂鬱編』よりも文字数も話数も多くなってるし」

海「では、『消失編 第十一章』です。どうぞ」

キ「……な、なぜだか寒気がしてきた」

海「ふっふっふ……」

第十一章

《17..03》

「ハッピー・メリー・クリスマス!!」

ちよつと早いけどおめでとー!!

さあ、みんな、最後まで盛り上がっていくわよ!!」

この少し早いクリスマスパーティーはハルヒの一言により開始された。

ところで、頭にハッピーを付ける物だっただろうか。

古泉との三回目の対局を終えた所で

女子班が出来たての料理と共に部室へ戻ってきた。

和洋中と種類が豊富な上に、一皿一皿の量が多い。

八人居るからって、全部食いきれるのか?

そんな俺の危惧を尻目に、

ハルヒは次々と料理を白い布が掛かった長机の上に置いていく。

料理を全て並べ終わると今度はどこからともなく三角帽を取り出し配り始めた。

この時期良く雑貨屋などで見かけるシンプルなデザインのやつだ。

それを全員で頭に被るだけで一気に気分が高まる。

そして最後に飲み物が行き渡り準備は完了した。

手に持っているのはもちろんワイン……に見立てたグレープジュースだ。

この辺も雰囲気的大事にしての事らしい。

んで、先ほどのハルヒの開会宣言により今に至る、と。

大まかに説明するとこんな感じだな。

「くっくく、本当に彼女の行動力は凄まじいの一言に尽きる。

僕にはとてもじゃないが真似出来そうにない。

だが、自分を変えるためにはあの位が丁度良いのかもね」

「やめてくれ。

あんなのが増えるとか疲れるだけだ」

佐々木が『思いついた!!』とか『罰金よ。罰金!!』とか、

そんな台詞を言う事自体想像出来ない。

しかもあの性格になるなんて………

地球に隕石がぶち当たるってくらい有り得ないし恐ろしい事だ。頼むからあいっだけは参考にしないでくれ。

「ちよっと、ジョン!聞こえてるわよ!!」

あたしの何処が疲れるって言いたいの?」

「全部だ全部。特にその行動力そのものだ。

振り回される方の身にもなって考えてみる」

「……別に大丈夫じゃないの?ねえ、涼子」

「え、ええーっと……そのー……」

「ゆ、有希？」

「……………」

「こ、古泉君!？」

「あはははは……」

「うう……やっぱりあたしと居ると疲れるの？」

哀れハルヒ。見事に全員が言葉を濁す。

約一名、言葉すら発せず視線を逸らした奴もいたが。

あつ、ハルヒが端の方で影を背負って丸くなった。

周りに人魂を幻視するレベルの落ち込みようだ。

流石に悪い事したな。事の発端は俺の訳だし。

フォローの一つでもしておくか。

「まあ、なんだ。

確かにお前のペースに合わせると疲れるが、

別にこいつ等がお前の事を嫌いって訳じゃないんだからさ。

元気だせて。元凶の俺が言うのもなんだけど」

「じ、ジョン……」

「でも、わたしはそう言う行動をしてる人と一緒に居たくないわ。今は良くてもその内みんな離れて行っちゃうんじゃないかしら。そうなる前に性格の改善を頑張ってみたら？
もっとも、涼宮さんだと成功する確率はかなり低いと思うけどね」

「あう……」

佐々木いーーーーー!?

お前は何で追い打ちかけたんだよ!?
ほら見ろ、さっきより人魂の数が多くなっただろうが!!
ハルヒ、しっかりしろ! まだ傷は浅いぞ!!

「くっくっく、すまない。」

口から本音が出てしまったよ」

「そ、それはフォローとは言わないわよ佐々木さん」

《17..31》

その後、ハルヒが何とか立ち直った。

他の文芸部メンバーが全力で慰めたからだろう。

今はもうすっかり元気になって佐々木となにやら口論している。

かく言う俺は少し離れた場所、

本棚の近くでゆっくりとピラフを食べている。

これがなかなか上手い。誰が作ったんだろうな。

「少年、ちょっと良いかい？」

声を掛けられ右方向に視線を向けると、

麻婆豆腐が乗った皿を持っている鶴屋さんが居た。

なぜ、クリパで麻婆……？

「ええ構いませんよ」

「それじゃ、お隣失礼するよろ」

そう言い、近くに立てかけてあったパイプ椅子を開きその上に座った。

近くもなく遠くもなく、話をするのに丁度良い距離感だ。この人事だからわかっててやったんだろうな。たまたまって事は有り得ないと思う。

それにしても、なんの用だろうか。

思い当たる節が一つもないんだが。

ともかく、本人に聞くのが一番手っ取り早い。

「それで、何か御用ですか？」

「あっはっは。そう大した事じゃ無いつさ。

君と一度ちゃんと話してみたかっただけによろよ」

「はぁ、そうですか」

確かにこっちの鶴屋さんとはまともに話した事なかったな。

去年、って言い方をするが、

その時は朝比奈さんの悪質なファンと思われたみたいだし。

今回は本当に少し話した程度だからな。

こうやってゆっくりと、ってのは初めてだ。

「ジョン君は今日が終わったらどこか遠い所に行っちゃうのかい？」

「……どうしてそう思ったんですか？」

「んー、何となくだねえ。」

「本当に何となくそう思っただけだよ」

「勘ですか……」

「それに、ハルにゃんや長門ちゃんが寂しそうだったからねっ。こりゃジョン君に何か有るのかもっ！っと思っただけだよ」

「なるほど、流石に鋭いですね。」

「確かに俺は戻らなければ行けない所が有るんですよ。」

「それも、普通の人じゃ行けない様な遠い所へ」

「それが何処かは聞いちゃいダメっぽいね」

「ええ、済みませんが答えられませんか」

「流石に異世界です。とは言えないよな。」

「何よりもまず頭の心配をされるのが落ちだ。」

「だから、申し訳ないがこればかりは答えられない。」

「それにしても、これを観察眼って言うんだろうか。」

「この人だったら何でも見抜いてしまえそうだ。」

「俺もいつか身に付けたいもんだぜ。」

「資格みたいに持っておいて損はない物だからな。」

「それで、もう一つ聞きたいんだけど良いかい？」

「俺が答えられる範囲であれば何でもどうぞ」

「可笑しな事を言うようだけど、君は……」

「鶴屋さん。お話終わりましたか？」

鶴屋さんが二つ目の質問をしようとした矢先、朝比奈さんがこちらに近づいてきた。

少し待っててくれとでも言われていたのであろう。

「うーん、来るのちょっと早かったねみくる。」

もう少し話したいんだけど」

「あっ、そうでしたか。すみません。」

わたしに構わずお話を続けて貰っても結構ですよ」

「いや、もともと重要な事じゃなかったからね。」

ジョン君も色々あるようだし聞くのやめておくっさ」

「は、はあ、そうですか」

「それじゃ、料理取りに行こっかみくる」

「はい、良いですよ」

一体何を言いかけていたのだろう。

重要な事じゃないと言ったが。本当だろうか。

そんなスツキリとしない気持ちで居ると、

自分の座っていた椅子をたたんで壁に立てかけた後
朝比奈さんに聞こえない程度の音量で、

「本当に重要な事じゃ無いっさ。

ただ、君って突然この学校に現れた気がしたからね。
それを聞きたかっただけによるよ」

……ははっ、本当に敵わないな、あの先輩には。

《22..58》

パーティーはまだ続いている。

ハルヒ曰く俺の消えるその瞬間までやるそうだ。

それにしても、開始してからテンションが衰えてないとは。
凄まじいパワーだな。

普通此処まで長いと段々とだれてくるものなんだけどな。

「まったく、明日も学校だろうが。

電池切れするんじゃないかねえか？この勢いのままだと」

「涼宮さんはそんな事気にしない人だもんね。

なんて言えばいいのかしら。無尽蔵の体力みたいな」

「凄い人だと思う……」

黒板の前で古泉がトナカイの着ぐるみを着て何かをやっている。

恐らく俺もやらされたアレ。一発芸だろう。

それを見てハルヒと鶴屋さんは爆笑している。

朝比奈さんはいつの間にかサント服を着せられていた。

犯人はハルヒで間違いない。
佐々木はなにやら時計を見ながら考えているようだ。
あいつも何かするつもりか？

「で、俺は朝倉と長門の二人と会話中つと」

「なにぶつぶつ言ってるの？」

「いや、現状確認してるだけだ」

ちなみに、料理は既に完食済み。
多分、一番食ってたのは長門かもしれない。
この世界でも大食いだったのは以外だった。

「……後、一時間」

「えっ？」

「ああ、十一時になってる。
随分と早いもんだな」

本当に早い。
この世界に居られるのも後一時間か。
たった三日間だったからな。
俺ももう少し居たいが、無理だな。

「貴方には貴方の帰らなくちゃいけない場所がある」

「そうだ。その通りだ長門。」

どんなにこっちに未練が有ってもあつちに戻らなきゃダメだ。
そもそも、この世界に俺が居る事が可笑しい事だからな」

「……また、会える？」

「そう、だな。」

お前等が望めばお前じゃない長門が何とかしてくれるかもよ。
今回みたいに」

「……うん。」

ずっと願ってみる。貴方に会えますように、って」

「そうか」

もしかしたら、また一年後こっちに来られるかもな。
季節外れだが、織り姫と彦星みたいにさ。

「……………」

《23..57》

先ほどまで騒がしかった部室内も、今はシーンとしている。
ハルヒ、長門、古泉、朝倉、佐々木の五人は顔を俯かせ表情は見えない。

鶴屋さんと朝比奈さんもこの空気に吞まれてか、一言も発しない。
俺は俺で、寂寥感から何も言えないで居た。

残り三分。

言葉にすればそれだけの事。

けど、これは別れを意味する数字。

俺が此処に存在してられる残り時間。

「ジョン……もうすぐね」

ハルヒが話しかける。

声は平静を装うとしてるのだろうが、全く震えを隠しきれていない。それに同調するように体全体が震えていた。

「そうだな」

「あたしはね、ジョンに行って欲しくない。
多分他のみんなもそうだと思う」

「ああ」

「けど、それは無理なんですよ」

「ああ」

「あたし達はずっと待ってるから。
またジョンに会える日を」

「……ああ」

「だから、元気でね」

「お前も、体調崩すなよ。」

まあそんな事は有り得ないと思うがな。
それでも、せいぜい気を付けろ」

「……うん!!」

ふう……さてと。

後は消えるのを待つだけだな。
なかなか楽しかったぜこの世界。

《23..59..26》

「……あっそうだジョン。ちよつと良いかい？」

「ん？ 佐々木、どうした？」

《23..
59..
32》

「最後に僕からのプレゼントだ」

「えっ、別にそんなのいらねえのに」

《23..59..47》

「良いから遠慮しないで貰ってくれ」

「わかった、お前がそこまで言うなら。
ありがたく受け取ろう」

《23
∴59
∴53
》

ド
ス
ッ

「えっ……？」

「フ
フ
ッ」

《23..59..56》

な…にが…

「ワタシの事、忘れちゃダメだよ」

ああ、そうか…この感触…

俺は…こいつに…

「ジョン!？」

「……っ!！」

「なっ!！」

《23..
59..
52》

佐々木に……刺されたんだ……

「マタアオウネ、ジョン」

《24..00..00》

佐々木の言葉とハルヒ達の慌てた声を最後に

俺の意識は消失した。

第十一章（後書き）

T
I
M
E

U
P

第十一章 裏（前書き）

海「えー……楽屋でキョンが震えて丸まっています。

どうやら前回の新たなトラウマになったようです」

佐「くっくっく。

キョンに怪我を負わせたなんて、

これは大変許し難い事だよ。平行世界の僕？

しかもトラウマにさせるなんて……万死に値するね」

海「目がまったく笑ってない……」

第十一章 裏

はあ……

わたし何やってるんだろ？

何でわざわざ他校にまで来て料理作ってるんだろ？

どうしてこの人達の言う通りにしてるんだろ？

わたしは彼と話したいのに。

一人ぐらい居ても居なくても変わらないじゃない。

わいわいと話しながら料理してる他の人達のテーブルの横で
わたしは一人黙々と中華鍋を振るう。

普段は使わない物だから腕が痛くなってきた。
結構重いよね、これ。

……それにしても、隣うるさいなあ。
喋ってる暇があったら腕を動かしてよ。
さっさと終わらせて彼に会いたいんだから。

それと、なんでクリスマスで麻婆豆腐なの？
もっと相応しい料理が有るはずでしょ。
鶴屋さんが作ってる蕎麦もおかしいと思うけど。
よく一から出来るわね。どこで憶えたのかしら。

「はいっ、完成。

次は……ピラフ、ね」

やっと中華鍋から解放される……
明日、筋肉痛になってなければ良いけど。

「どう、佐々木さん？ 順調かしら」

隣のテーブルから朝倉さんが来た。
少し疲れた顔をしている。
わたしと同じで騒がしいのは苦手なのかな。

この人は、まあ、嫌いでは無い。
思ったより話安かったから。
もちろん、彼とは天と地の差だけど。

「ええ、今の所はね。貴女は？」

「もう少しで終わりって所かしら」

朝倉さんが指した方を見ると、
少し離れたテーブルに長門さんが料理を運んでいた。
そして長門さんは助手なのね。

「作るの早いのね。」

貴女の分ほとんど終わりじゃない」

「ま、まあ、気合いが入り過ぎちゃって。

自分でも驚く程早く出来たわ」

……へえ、そーなんだ。

気合いが入りすぎた……ねえ。

もしかして朝倉さんもそうなの？

涼宮さんと長門さんと同じなの？

貴女は違うよね？

パーティーだから頑張ったんだよね？

彼にそんな感情持つてる訳じゃ無いよね？

わたしの邪魔はしないよね？

ねえ……アサクラサン？

「っ！…！突然寒気が……」

「ナラ、家ニ帰ッテ休ンダ方ガ良インジャナイ？」

「い、いえ、大丈夫よ。そこまで酷くないから」

「ソウ？良カッタネ。フフツ」

万が一に備えて見張っておこうかな。
だから、変な気起こさないでね？

「じ、じゃあ、わたしは戻るわね」

「ええ、最後まで頑張って」

さて、朝倉さんも行ったし。
わたしも自分の分を終わらせよう。
もちろん手は抜かないよ。

彼に美味しい物を食べて欲しいから。

褒めてくれるかな……えへへ。

よしっ、やる気出た!!

さて、シンプルなピラフで良いか。
色々やろうとすると失敗するし。

まずは野菜を微塵切りにする。

そしてバターで炒めてからスープを加える。
後はそれでお米を炊けば大丈夫だったはず。
海老とかアサリとか入れても良いかも。

スープは固形コンソメをお湯に溶かした物。
手っ取り早いうえに下手にやるより美味しい。

トントントン……とリズム良く包丁を動かす。
入れる食材は人参・玉葱・パプリカ。
あっ、そうだ。マッシュルームも必要だね。

「……………」

この、何かを切る感覚がわたしは好きだ。
段々と心が静かになっていく。
色々と考え事をするにはうってつけ。

「……………」

そう言えば、彼って料理作れるのかな？
あまりイメージ出来ないんだけど。
でも妹が居るって言ってたし、
簡単なのだったら出来るのかも。

「……………」

結構話をしたつもりだったけど、
まだまだ知らない事の方が多いなあ。
しょうがないのかもしれないんだけど。

それに、彼にわたしの事はほとんど話していない。
まあ、話せる程の思い出も無いんだけど。
ずっと一人だったし。

「……………」

一人、か……

明日からまたそうなんだよね。
彼が居なくなったらわたしはまた一人になるんだ。

「……………」

でも大丈夫。

彼の事を思えば一人でも生きていける。

この世界をツマラナイと思わなくなる。

人とのつきあいをクダラナイと思わなくなる。

聞こえてくる音をワズラワシイと思わなくなる。

全ての事をドウデモイイと思わなくなる。

たとい世界が違ったって、

此処に居るわたしを肯定してくれた人が居る。

たったそれだけでこんなに世界が変わって見えるんだ。

「……………」

……でも、彼は？

わたしは絶対に忘れる事は無い。

大きな声で断言したって良いよ。

だけど、彼はどうなの？

彼は友達が多い。

わたしもその中に入っている。

大勢いる中のたった一人。

彼は出会いが多い。

いろんな人を引きつける魅力を持ってる。

これからも知り合いが増えると思う。

そして何より、

彼の世界にも『わたし』が居る。

中学校からずっと友達だと言う『わたし』が。

「……………」

彼はわたしを忘れてしまうかもしれない。

今は憶えてくれていても、

いずれは記憶の中に埋もれてしまうかもしれない。
深く、深く、思い出せないほど深く。

そんな所に埋もれてしまうかもしれない。

「……………」

どうしよう。

どうやったら彼に憶えていてもらえる？

どうしよう。

どうしたら思い出の中に消えない？

どうしよう。

ドウスレバイインダロウ

どーうしー。どーうしー。どーうしー。どーうしー。どーうしー。
どーうしー。どーうしー。どーうしー。どーうしー。どーうしー。
どーうしー。どーうしー。どーうしー。どーうしー。どーうしー。
どーうしー。どーうしー。どーうしー。どーうしー。どーうしー。
どーうしー。どーうしー。どーうしー。どーうしー。どーうしー。

「……………っ!」

痛い……うう。

間違えて指切っちゃった。

こんなミスするなんて。

やっぱり料理するの久しぶりだからかな。

それとも思考に気が取られすぎたのかも。

傷跡にならないと良いけど……………あれ？

「傷跡……」

大きな傷跡ってずっと残るよね。

消えずに体に残るよね。

それ見る度に状況を思い出せるよね。

忘れる事なんてほとんど無いよね。

「……ははっ」

そうか……そうだよね……

なんで気がつかなかったんだろう。

こんなにも単純な事なのに。

どうして思い浮かばなかったんだろう。

彼ニ傷跡ヲ付ケレバ良インダ

そうすればわたしの事が記憶に刻まれる。

強く強く刻まれる。

わたしが彼に刻み込まれる。

「本当に不用心だよねこの学校。」

包丁の保管場所に鍵が無いなんて。
誰かが勝手に持ち出すかもしれないのに」

例えばわたしとかね。

さあ、絶対消えないように刻まなきゃ。

いつまでもいつまでも残り続ける傷跡を。

それを見て彼がわたしを思い出してくれるように。

それはきっと、最高に素晴らしい事だから。

貴方モ嬉シイデシヨ？

——…あっそうだジョン。ちよつと良いかい？

——最後に僕からのプレゼントだ

第十一章 裏（後書き）

バイバイ。

また会おうね。

それと、ありがとう。

消失編 エピローグ（前書き）

キ「とうとう終わったか」

海「そうだね。」

随分長くやってた様に感じるな」

キ「いや、実際長かったぞ。」

プロローグあげたのが5月だからな。

途中一ヶ月近く開く事もあったし」

海「本当に更新頻度が遅くてすみませんでした。」

では、『消失編 エピローグ』どうぞ」

消失編 エピローグ

「ぬあああああ!!」

はっ、はっ、はっ……………はぁ…………

戻ってきた……………のか？

「よ、よし、まずは落ち着こう。

Coolになるんだ俺」

呼吸を整えてから周りを確認する。

ここは俺の部屋だな。

着てる物はいつもの寝間着。

時計を見ると長針・短針共に真上に向いていた。

そして、肝心の日付は…………

「よし、問題ないな」

長門の頼み事を聞いた日から四日後。
当初の予定通りだ。

進まず戻らずで良かったぜ。
そう何度も時を渡るのは勘弁だからな。

と、ここで額に違和感。

何かが貼られている。

手を伸ばし触れてみると、それは冷えピタだった。
こっちでも、風邪で寝込んでだって事にしてるのか？
それが一番都合の良いごまかし方なのかもな。

それにしても、ちゃんと貼られていないのは何故だ。
斜めに大きくずれていて、

まるで小学生が親の見よう見まねで貼った様になっている。

……………いや、まさかな。

あいつがわざわざ俺の為にやったってか？
お袋に言われて渋々って方が説得力有るぜ。
恐らく事実は後者だろう。そう思っておこう。

「だが、今の俺は健康体。

こんなのただ単に冷たいだけだ。

むしろこれで頭が痛くなるっての」

これを貼ってくれたであろう妹にはに悪いが、
そろそろ剥がそう。

これが原因で風邪引きそうならい寒くなってきた。

別に大丈夫だよな。

あいつは何とも思わないっての。

『えっ！キョン君どこか行っちゃうの……？』

何とも思わな………

『約束だよ！！』

………

『えへへ』

ま、まあ、どうせ朝までだし。
少し我慢すれば良いだけだし。

だから、このままにしておこう。
妹がしてくれた事だ。
兄貴として無下には出来ないよな。
うん、そうだ。きっとそう言う事だ。

さて……とりあえず眠るか。
何もする事無いしな。
どうせ朝になったら色々有るんだろう。
俺の勘がそう告げている。

「キョンくん、おっきろー!!」

「ぐふっ!!」

ほらな。

朝一で事件が発生だ。

そして、妹よ……

仮病のような物だが病み上がりの人間に対して
行き成りボディープレスは無いと思うぞ。

いきなり時も所も変わり、ここは放課後のSOS団部室。

ハルヒと古泉による将棋の対局を見ながら平和な時間を謳歌している。

むっ、そこに桂馬は悪手だぞ古泉。

ほら見ろ、角取られちまったじゃねえか。

「お茶どうぞ」

「あっ、ありがとうございます」

やはり朝比奈さんのお茶は良い。

疲弊した心が癒されていく。

特に消える寸前の………い、いや、止めておこう。

今はまだあの恐怖を克服する事が出来そうにない。

生々しい傷跡が脇腹に残ってるため、

そう簡単に今回の事を乗り越えるのは難しそうだが。

まったく、なんで最後にあいつはこんな事を……

「ん？キョン君大丈夫？

なんだか難しい顔してるけど。

わたしで良かったら相談乗るよ？」

「……あ、いや、何でもない。

そんなに大した事じゃねえから」

脇腹に残った傷跡に目線を落としていると、

珍しく真面目な表情の長門が心配そうに話しかけてきた。

自分で思ってたよりも暗い顔をしていたらしい。

けど、こればかりは人に言いたくねえんだよな。

そもそも信じて貰えるかどうか。

世界違いの友達に刺されましたなんて笑い話にもなりやしない。

しかも相手は佐々木。理性が服を着て歩いている様な奴だ。

正直、俺もあの出来事は未だ夢だったんじゃないかと思ってるさ。

だが事実として傷跡はここに残っている。

はあ……本当にあいつは何がしたかったんだろうな。

まあ、今はまだ答えが出なくても良いか。

いつか判る日が来るかもしれないからな。

「本当に大丈夫だからさ。

悪いな、いらん気使わせて」

「そう？ならいいけど……」

何か困った事があつたら力になるから、

その時はちゃんと言ってね♪

キョン君の為なら何だってするからねっ☆」

「へいへい、頼りにしてるよ」

さて、と……

過ぎた事は後から考えるとして、

今は間近に迫ったクリスマスの事でも話し合うか。

具体的な所は決まっていなかったからな。

そして絶対に調理室は使わせないようにしよう。

……いや、それは無理か。

「それじゃ、久々のSOS団会議始めるぞ。

今回の議題はクリスマスに開催するパーティーの事だ。

具体的には――」

まるで空が燃え上がっている様な夕焼け。
冬は空気が澄んでいる為、

他の季節よりも綺麗に見えるらしい。
又聞きだから間違っているかもしれないがな。

「パーティー楽しみだねキヨン君」

「ああ、そうだな」

久々にハルヒと二人で下校している。
他の連中は各々の用事があるらしく、
一緒には帰れないとの事だった。

「ねえ、キヨン君。

すき焼きに卵は絶対だよね」

「んな力強く確認する事か？

確かに我が家でも卵は使うが。

そんなの人それぞれだろ」

そうそう、パーティーの主役である鍋はすき焼きに決まった。定番だし作りやすいだろうと言う何とも単純な意見により、賛成多数……ってか満場一致での決定だ。

ちなみに、その時に何故か鶴屋さんも投票に参加していた。扉が開いた音がしなかったので、本当にいつから本棚の影にいたのか判らない。

そして、手を下ろしたら無言で俺の顔を見つめてくる。

最初はまったく意味が分らなかったが

もしかと思いパーティーに参加しますかと聞いた所、首が取れんじゃないかと思う程頷き肯定の意を伝えてきた。

なんで鶴屋さんを誘うのを忘れていたんだろうな。

学園祭でお世話になったってのに。

「でも、鶴屋さんっていつ入ってきてたんだろうね。

わたし全く気がつかなかったよ」

「さあな。俺もわからん。

あの人は謎な部分が多すぎる。

もしかしたら人間じゃ無いのかもしれないぞ」

「ま、まさか」

いや、流石に冗談だからな。

「あつ……もう此処まで来ちゃってたんだ」

ハルヒと話しこんでいたら分かれ道に着いた。

進む道は、俺が左でハルヒは右。

つまり此処でお別れって事だ

偶に俺が遠回りでハルヒの家の前まで行く時もあるけどな。

「なんか早く感じるな。

……それじゃ、暗くならん内に家に着けよ」

「だ、大丈夫だよ。

キョン君も気を付けてね」

「わかってる。

んじゃ、また明日学校で」

「うん！また明日！」

ハルヒの言葉を背に、あいつとは逆の方向へ歩いて行く。

……歩き出そうとした時に背後で小さい悲鳴が聞こえたような気がしたが、

きっと気のせいだろう。おそらく。

ポニーテールで黄色いリボンを着けた内気な北高女子が、

見事に滑って転んで半泣きになってるなんて事は無いはずだ。

とまあ、そんなこんなで俺の長い三日間の出来事は、
今話をもって終幕とさせていたたく。

まだ聞きたい事があるのなら、

いづれ話をさせて貰う機会が有るかもしれん。

だが、今の所はこれでおしまいだ。

めでたしめでたし……って訳じゃないがな。

ああ、クリスマスパーティーの事はまた後日。

何処から聞きつけたのかキョウや佐々木や橘が乱入してきたり、
いつの間にか全員コスプレしてたり、

晴彦さんがサンタの格好で窓から突入してきたりと、

色々な事が起きすぎたからそれなりに話せる内容だと思おうからよ。

そんじゃ、また次回も会おうぜ。

雪……か…

とうとう降ってきやがった。

明日積もってなけりゃ良いな。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪

ん、電話か……

「もしもし？」

今思うと、なんで俺は相手の名前を確認しなかったんだろうな。
何時もならまず最初に確認する所なんだが。
そこまで頭が回らないほどに疲れたんだろう、きっと。

『えっ………』

「どうした……？」

『う、うそっ………そんな………』

向こう側で困惑したような声が聞こえる。
どうして電話をかけてきた方が混乱してんだよ。

「……その声、もしかして佐々木か？」

『う、うん。そうだけど。』

どうして貴方の声が……』

流石に様子がおかしいと思い始めた時。

俺にとって衝撃的な一言が電話口から放たれた。

『なんで……ジョンとつながるの？』

「はあ!？」

やれやれ……

どうやら、あの世界との繋がりはまだ続くようだな。

消失編 エピローグ（後書き）

海「次はいよいよ100話目です」

キ「最後丸投げだなあ、おい」

海「あれはちゃんと日常編で続けるよ」

キ「で、パーティーもやるんだろ？

まっ、頑張れよ。

俺達はやりたいうにやるだけだからな」

海「少しは自重してくれよ。

書きづらくなるから」

キ「長門に言っとくよ。

まあ、無理だと思うがな」

海「さて、今回はこの辺で。

また次回もよろしくお願いします」

キ「よろしくな」

クリスマス編（前書き）

海「今話で100話ですが、

クリスマスなのでパーティーやります」

キ「お前は参加出来ないけどな」

クリスマス編

12月25日。

言わずと知れた聖キリストの誕生日。

つまりクリスマス。

町中は恋人達で溢れ、独り身にはとても辛い日。
って事になってるらしい。

そんな日に俺達は部室に集まっている。

目的は、そう、パーティーだ。

と言っても、規模の小さい簡単な物だけどさ。

参加者はSOS団＋鶴屋さん。

それと、今朝キョウを誘ってみたが来るかどうか判らん。

あいつの性格上他校に入るってのは難しそうだからな。

ちなみに、俺は谷口から『リア充、爆発しろ!!』

と言うお言葉を頂いたが、どう言う意味なんだろうな。

なんで楽しく鍋食おうとしてるだけで爆発せにゃならんのだ。
不条理だろ。

「お肉Get!!」

「な、長門さん早いよ」

「ふっふん。」

此処は戦場だよ涼宮さん♪」

「確かにその表現は的を射てますね」

「古泉さん!？」

ああゝわたしの白滝がゝ」

「お肉取っているのですから良いじゃないですか」

「ううゝひどいゝ」

「……因果応報……だよ」

「つ、鶴屋さんにまで取られた!？」

あっちは戦場だな。

流石にあそこに飛び込む気は起きない。

俺はゆっくりと此処で見学しよう。

何も食い物はすき焼きだけじゃ無いからな。

「キョン君、これどうぞ。

おいしいですよ」

「あつ、どうもありがとうございます。
すみませんわざわざ」

ああ…平和だ…

コン
コン

ん？

のんびりと四人の鍋争奪戦を眺めていると、

部室のドアがノックされた。

ちなみに今の所鶴屋さんが優勢のようだ。

それにしても、誰が来た？

可能性としてはキョウが一番高いか。

「へいへい、どちらさんで——」

「やあキヨン。」

なにやら面白い事をしてるみたいじゃないか。
僕達も参加して良いかい？」

って、佐々木！？

「わたしも居るのです！！」

「い、一応あたしも来たぞ」

橘にキョウまで……

一体何処から情報を仕入れたんだ？

「ふっふっふ、『組織』の情報網に死角は無いのです」

「またお前か！！」

二度目の職権乱用か……
なんだかねでこいつも随分はっちゃけてるよな。

「あつ、キョウさんだ」

ハルヒがこちらの輪の中に入ってきた。
その手には真っ二つに折れた割り箸が。
すき焼きは諦めたようだな。
お前にしては今まで良くやったと思うぞ。

「久々だなハルヒさん。
夏休み以来か？」

「多分そのくらいだと思います。
それと、佐々木さんと橘さんもお久しぶりです」

「ふふっ、そうね。」

「元氣そうで良かったわ」

「えへへ」

ハルヒと佐々木が和やかに話をしている。
まだ会うのは二回目の筈だが、随分と仲良くなるのが早いな。
これもハルヒの仁徳のなせる技か。

三国志で言うと劉備みたいな。

「あ、あの、キヨン君？

こちらの方々は知り合いですか？」

……ああ、そうか。

SOS団でキヨウと橘を知ってるのはハルヒだけなんだな。
佐々木も野球大会の時紹介して以来か？

そりゃ、朝比奈さんも対応に困るっての。

ああ、他の奴等は知らん。

鍋に夢中で人が入ってきた事に気づいてすらいないだろうな。

とりあえず俺の方から三人を紹介。

朝比奈さんの事も佐々木達に紹介。

そしてそれが終了すると、

キヨウはそのままハルヒと話し始め、橘は鍋争奪戦に乱入し、
佐々木は朝比奈さんとこっちのテーブルにある料理を食べている。

かなり長く多く喋ったためか口の中が乾いて仕方ない。

気のせいかもしれないがあごも痛いように感じる。

「はあ……本当に疲れた……」

だがこれで漸く落ち着ける。

と思った矢先、突然あの人出现在了。

ガラガラガラ……

ん？窓が勝手に開いた？

外の冷たい空気が部屋に流れ込んでくる。
鍵締めたはずなんだがな……

何が起こるってんだ……？

全員で窓に注目。

激しい攻防を繰り返していた鍋組もこの時は箸を止めている。
見ず知らずの箸の橘が違和感無く混じってるのも凄いが。

すると……

「メリークリスマス!!
盛り上がってるかー! お前等!!」

何故かサンタの格好をした晴彦さんが突入してきた。
しつかりと袋まで担いでいる。

だが、晴彦さん。

「「「「……誰!？」」「」「」」

「?」

「お兄ちゃん!？」

「「やれやれ……」」

俺とハルヒとキョウしか貴方の事知りませんから。
行き成り来られてもこう言う空気になりますって。

さて、そうして今回の登場人物が全員揃った訳だが、
此処で一つ大きな問題が発生した。

あの後俺が間に入り全員で挨拶。
晴彦さん持参の袋に入っていたサンタ服をみんなで着る事となった。
この時、朝比奈さんと鶴屋さんの目が輝いていたのは言うまでもない。
と、此処までは良かったな。

しかし、その後すぐ事件は起こった……………らしい。

S I D E .. キ ョ ウ

さて、まずは突然の語り手変更を謝らせて欲しい。

何せキョンの奴が晴彦さんと共にどっか行っちゃまったんだよ。

恐らくは、まあ、トイレか何かだと思うが。

けど、二人が居ない数分間でちょっとした事件が起きてしまった。
正直あたし一人じゃどうしようもない。

それは……

「くーれんかー!」

ハルヒさんが大剣のようなナニかを振り回し、

「ているぼーん!」

古泉さんが手首に紐を巻き付けそれを鞭のように振るい、

「あははははははははっ!!」

長門さんと佐々木さんは二人を見て大笑いしている。

そして、他の面子は床に仰向けに倒れ幸せそうな顔で夢の中。
特に橘さんなんて涎まで垂らしている始末。

……何このカオス。

この空間で、あたしと長門さん以外の人たちはみんな顔が赤い。そして明らかにおかしいハルヒさん・古泉さん・佐々木さんのテンション。

少し目線を下に向けると見事なまでに潰れている面々。

あっ、そう言えば。

さっき長門さんが美味しいからって、何やら瓶に入った飲み物をそれぞれのコップに配ってた様な……あたしも注いで貰ったけど飲んで無かったやつ。

あれって…まさか……お酒だった？

ぱっと見ブドウジュースだったけど、もしかして、本当はワイン？

で、それを飲んだって事は……

みんな酔っ払ってる！？（＊あたしと長門さんを除く）

いやいやいやー！

これはいくら何でも不味いつて！
バレたら軽く停学処分になるレベルの大事件だって！！

ってか、現在進行形で大いに騒いでいる四人が居るんですけど！？
このままじゃ、誰か来るのも時間の問題だ！
許可取ってたってこの惨状は完全にアウトになるだろ！！

ど、どうすればいい？

考えろ、考えるんだあたし。

そうすればきつと天啓が得られる……

『潔く諦めれば良いと思うよっ☆』

天のバカ野郎おおおおお！！

それが出来ないから頼ってんだろうが！！

けど、少しはあたしの願いが届いたのかもしれない。

「……によろゝん」

「「あっ……」」

寝ぼけた鶴屋さんが暴れてた二人の足を掴んだ。

それによりバランスを崩しハルヒさんと古泉さんが前に倒れる。
具体的に言うと、笑い続けている長門さんと佐々木さんの方へ。

ゴチン

「「「あう!?!」」」

結果、見事なまでの頭突きが決まった。

鈍い音がハッキリと聞こえる程のクリーンヒット。

そして四人仲良くぶっ倒れる。

いっそ見事なまでのKO劇だった。

「はぁ……やれやれ」

た、助かった……のか？

少なくとも見つかる可能性は減った。

後の事はキヨンと晴彦さんが戻って来たら考えよう。

あぁー……たった数分間の出来事のはずなのにすげー疲れた。
しかも、なんだか頭まで痛くなってきた。

「明日、二日酔いとか勘弁してくれよ？
飲んでないんだけどさ」

ガチャ

「ただいま——うお！？何が有った？」

「これは酷いな……」

あつ、お帰りキョン。晴彦さん。

流石にこの状況は驚くよね。

大丈夫、それが普通の反応だと思うから。

それと、説明は出来ないよ。

あたしも何が起きたのかよく理解出来てないからさ。

真相

「……で長門がこれを勧めていた、と」

「ああ、確かにそれだったな。」

それを飲んだみんながこうなったんだ」

「これワインか？」

「ん？それ、俺が持ってきた普通のジュースだぞ。
アルコールなんて入ってないはずだ」

「えっ？」

「じゃあ何でこうなってんだ？」

「さあ？」

「わかんねえな」

「」「……………」

「あつ、もしかして……」

「どうしました？晴彦さん」

「こいつら……ただの場酔いじゃね？」

「……………あり得る」

酒は二十歳になってから飲んでくれ。
お姉さんとの約束だぞ。

b y 鏡香

クリスマス編（後書き）

鏡「ああー……疲れた」

キ「本当、酔っ払いの相手は疲れるよな。
俺も夏に経験したからわかる」

鏡「まっ、そう言う訳で、

当分あたしは休ませて貰うな。

キヨンは次回も有るが頑張れよ」

キ「わかってるよ」

日常編 その五 前編（前書き）

海「今回は『伝助No. 32』様の意見を参考に作らせて頂いた話です。

アイデアありがとうございます」

キ「本当にありがとうございます。

わざわざこんな作者に」

海「更に、現在平行して構成・作成している話は

『極神』様からのアイデアを参考とさせて頂いています。
本当にお二方に感謝しか有りません」

キ「ってな訳で、読者の皆様方少しでも楽しんで貰えるよう、
久々の『日常編』スタートだ」

日常編 その五 前編

ここは隣町のとある喫茶店。

ログハウス風の佇まいで店内も意外と広く、木の温もりを感じられて良い雰囲気だ。

しかし、全座席数はかなり少ない。なんでもお客さんにゆっくりとした時間を過ごして欲しいからなのだとか。

店長にとって回転率なんてのはどうでもいい事らしい。

更にこれにはもう一つ大きな理由が有る。

それは、お客さん一グループに店員一人が専属で接客するって事だ。

出迎えた店員がそのお客のテーブルのみ接客業を行う。

つまり、一つのテーブルに付き一人ずつ店員が縛られるので、なかなか座席数を多くする事が出来ないのだとか。

さらに聞く所によると此処で出される料理もかなり評判で、わざわざ遠方から通う常連さんも居るのだとか。

まあ、だから今までやってこられたんだろうけどな。

回転率を無視するなんて普通は店が潰れてる所だぞ。
それでもリピーターが多いからなんとか経営出来てるんだろうな。

ちなみに、立地はかなり良く、
最寄り駅から徒歩で四分チヨイって感じだな。

さて、一通り喫茶店の事を紹介したが、
そんな店で俺が何をやっているのかと言うと……

カラン コロン

「いらっしやい。君一人か？」

「あ…は、はいっ」

「そんじゃ、俺の後に付いて来てくれ」

ウェイターとして働いている。

ちなみに、言葉使いが砕けているのは仕様だ。

今着ている服に関係しているんだが、詳しい事は後々わかると思う。

ああ、店長さんからはちゃんと許可を頂いているぞ。

なんでも、鶴屋さんが全力で説得したらしい。

それにしても、接客業って意外と疲れるんだな。

海の家ですつと料理作ってたのと良い勝負だ。

……もちろん冗談だぞ。

あん時の方がこれの数倍きつかったっての。

しかも、キョウと二人だったのによ。

「メニュー持ってくるから、

大人しく座って待っててくれ」

「わ、わかりました」

さて、読者の皆様方には大変申し訳ないが、
少し接客の方に集中させてくれ。

肉体的にはそうでも無いが精神的に疲れる仕事なんだな。

その間、回想でもして説明と時間潰しをさせて貰う。

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・

文化祭もコンピ研との対決も終わり、

一気に寒さが襲いかかってきた冬一步手前と言うべき季節。

俺達SOS団は何時も通り部室に集まりのんびりと過ごしていた。

長門は窓際の指定席に座りラノベ食い入るように読み、

俺と古泉による将棋の対局をハルヒが応援付きで観戦している。

朝比奈さんは相変わらずのメイド姿でコンロ周りを動き回り、

全員のお茶を用意している真っ最中。

どうやら昨日、良い茶葉が手に入っらしい。

部室に入るなりドヤ顔の朝比奈さんが説明してきた。

……正直ウザかった。

とまあ、何も変わらない日常の光景。

だが、この日は少し違った。

突然として部室内に鳴り響く、

とてもシンプルな携帯電話の着信音。

携帯の持ち主は初期設定のまま使い続けているようだ。

「あつ、もしもし鶴屋さんですか？」

って、朝比奈さんかよ!!

てっきり長門だとばかり思ってた。

こう、雰囲気的にな。

「……ええ、そうですか。

それは大変ですね」

どうやら、鶴屋さんはなにやら困り事があり

それを相談したくて朝比奈さんにかけてきた様だ。

真面目な顔で話をしている所からもそこそこ重大な事みたいだな。

すると、朝比奈さんが俺に自分の携帯を差し出してきた。
なんでも鶴屋さんが俺と話したい事があるらしい。

「はい。電話変わりました」

『キヨン君……?』

「ええ、そうですけど」

『……お願い……ある』

へえ、随分と珍しい事も有るんだな。
鶴屋さんから俺達に頼み事なんて。
何時もこっちが迷惑かけてばっかなのに。

『みんなの…力を貸して欲しい……』

「ええ、それは良いですけど。
もう少し詳しく説明して頂けませんか?」

『うん……実は——』

鶴屋さんからの依頼を解読中。

言葉を断片的に話す人だから大変だった。

「つまり大まかにまとめると、

鶴屋さんと朝比奈さんが働いている店で風邪が大流行。
フロアの店員が足りなくて困っている。

そこでSOS団に明日だけで良いから働いて欲しい。
で、合ってますか？」

『うん』

「そのくらいならおやすい御用ですよ。
いつもお世話になってますからね」

幸いと明日は土曜日。一日中だって働く所存だ。

探索の代わりにもなるし丁度良いな。

視線のみでの確認だが、団員全員も首を縦に振って肯定の意を示している。

これで正式に決定って事で良いな。

「それでは、そのお話受けさせて貰います」

『……ありがとう……嬉しい』

って事で、やって来ました隣町の喫茶店。

ちなみに現在時刻8…30。

開店時間は10…00からなのだが、お客さんが来る前に清掃やら料理の仕込みやらが有るので、この時間までに集まるよう鶴屋さんから言われたのだ。しかも、今日限りとは言えこの店で働くんだ。憶えなきゃならん事が山の様に有る。

等々の理由により、こんな早くから出勤してきたって訳だ。

「……って事ぐらいですね。

後は実際に働きながら憶えていけば良いです。

それと、判らない事があつたらすぐ誰かに聞くように。わたしか今まで働いていた人だったら答えられると思いますので。

では、今日一日ですが頑張りましょう」

「「「「はい!!」「」「」」

おっと、ボーっとしてる内に朝礼が終わってたようだ。

ああ、今話していた男性がこの店の店長さん。見た感じ20代後半から30代前半って所だな。

「さてつと、そいじゃ制服配るによろよ。
一応サイズは合うと思うよっ」

ん?……制服か。

仕事内容にばかり気取られて忘れてたな。
そりゃ、そんな物も有るに決まってるか。

接客業モードの鶴屋さんが左から順に制服を渡していく。

最初は全部同じ物なのかと思ったが、色がそれぞれ違っている。
デザインは共通で、ヴィクトリアンメイドと呼ばれる物らしい。
簡単に言えば、丈が長く装飾が少ないタイプのメイド服だそうだ。

ついでにそれぞれの服の色を紹介しておくと、

ハルヒが緋色、長門が秘色ひやく、古泉が深紫ふかむらさき。

朝比奈さんは梔子色くちなしいろで鶴屋さんは翠色。

各々に合った配色だと思う。

そして何故か俺の制服だけ渡されてないんだが。

いや、流石にメイド服は着ねえけどな。

「さあ、女の子はあっちの女子更衣室で着替えてね」

着方が判らないだろうから、みくる手伝ってくれるかい？」

「はい、構いませんよ」

「んっ…お願いするっさ」

「それでは皆さん、行きましようか」

「「は〜い」」

「では、行って参りますキョンさん」

キィ ガチャ

SOS団女子メンバーが扉の向こうに消えていく。

良く判らないが、着るのに結構時間が掛かりそうな感じだ。
いくら朝比奈さんの助けが有るとは言えども、

今まで着た事無い物だから当たり前なんだろうな。

で、結局俺の制服は？

「さあて、キョン君。

君だけ制服が配られていないのは見ての通りだけど、
実はちょっとした理由があるにしろよ」

「は、はあ。理由ですか」

そんな俺の考えがお見通しだったのだろう。

鶴屋さんが説明して下さるようだ。これはありがたい。

「この店は元々、フロア担当の男性従業員が少ないんさ。

しかも全員がちよっと小柄な人たちなんだよね」

「へえ、そうなんですか」

「キヨン君って大柄な方でしょ？

だから君に合うサイズが無いんだよ」

なるほど、そう言う事だったのか。

確かに、一日しか働かない奴のために特注の制服は無理か。

しかも昨日急に決まった話だしな。

そりゃ、発注する時間すらも無いっての。

けど、そしたら俺はどうすれば良いんだ？

「そこで、わたしがこの喫茶店の雰囲気合った服を持って来た
による。

ゲームキャラクターの衣装だけど大丈夫！

キョン君に似合うし、絶対この店に溶け込めるはずっさ！！」

「はあああああ！？」

いやいやいやいやいや！！

俺だけゲームキャラのコスプレっておかしいだろ！？

しかも、それで働くとか！？

それで良いのか店長さん！？

って言うか、本当に溶け込めるんだろうな！？

浮きまくらないかなり不安なんだが！？

「と言う事だから、早速これに着替えておくれ」

目の前にはとても眩しい笑顔で紙袋を突き出す鶴屋さん。

後ろを振り向くと苦笑いの店長& a m p , 厨房班。

ああ……此処に味方は居ないようだ。

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

「また、時間が有ったら来てくれ。
歓迎するぜ」

「はいっ！」

「んじゃ、ありがとーございました、つてな」

カラン コロン

……お客様一名お帰りです、っと。

で、何処まで見た？

ん……ああ、この服を渡された所までか。

まあ、結果から言うとそのを着て働いてるぞ。

幸いと本当に店に馴染む様な衣装だったからな。
腹括って着てみると案外平気だった。

ちよっと奇抜なスーツって事で納得している。

まあ、唯一気になるのがマフラーみたいな飾りぐらいだな。

「はあ……」

「お疲れ様です、キヨンさん」

「お前もな古泉」

ああー……表情筋が痛え。

笑いっぱなしってのも疲れる事なんだな。

こいつは普段からにやけ面だから平気だろうけどさ。

……と、此処で何故か隣から強い視線を感じた。

ふと顔を横に向けると、古泉が俺の事をガン見している。

「……………」

「んだよ、古泉……」

「い、いえ。」

その髪型も似合うなー、と思ひまして」

「そうか？」

「ええ、そうです」

鶴屋さんが髪型までちゃんと合わせるようにって事で、ワックスを使い髪を掻き上げ後ろに流した形で固定している。簡単に言えばオールバックみたいな髪型だな。

この髪を固定している時の引っ張られる感じが慣れない。今後こう言う髪型はあまりやらないかもしれん。

カラン コロン

お客さん三名様、全員女性客つと。
歳は若いな。俺等と同じぐらいか？

それじゃ、ここは……

「俺が行った方が良さだろうな」

「はい、お願いします」

さあ、仕事だ仕事。

キャラに成り切って、接客用に頭を切り換えて……

「いらっしやい。良く来てくれたな」

日常編 その五 前編（後書き）

キ「後編へ続く。」

ちなみに俺がコスプレしてるキャラは、
『テイルズオブエクシリア』のアルヴェインだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4787/>

涼宮ハルヒの再構成

2012年1月10日01時50分発行